

オレは彼女と出会って人生が変わった

チャキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中学に入った八幡は友達欲しくて作ろうとしたら、できず落ち込んでいた。そんな時ある1人の少女が八幡に話しかけ友達になった。

目次

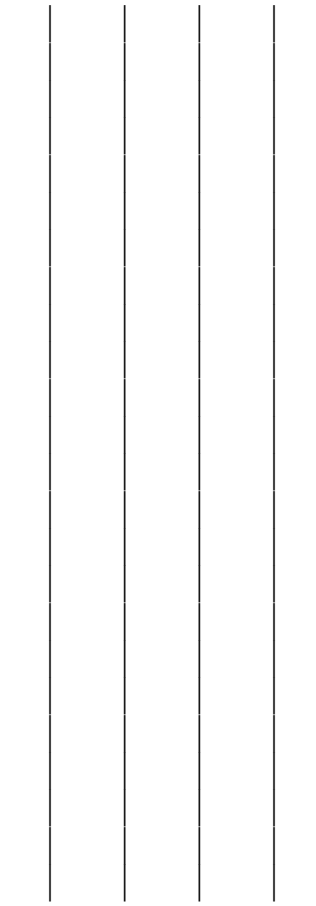
第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
292	282	272	258	246	232	217	208	196	177	167	156	145	134	123	108	95	82	67	55	41	27	13	1

第
2
8
話

第
2
7
話

第
2
6
話

第
2
5
話



351 340 319 308

第1話

八幡 side

中学に入ったオレは友達欲しかった。小学生の時はできなかったので欲しかった。だから頑張ってクラスの人に話しかけたが、みんな揃って『目が気持ち悪い』だの『なんか嫌だ』だの色々言われた。けど、オレは諦めずに他の事で頑張ってみたスポーツや勉強など色々頑張った。が、全然ダメだった。ハア：やっぱりオレに友達なんて、できないのかな。いや、それよりもオレなんか友達を作ったらいけないのかな。公園のベンチに座りながらそんな事ばかり考えてしまう。すると、オレに近づいてきた1人の女の子が話しかけてきた。

??? 「えつと：比企谷君：だよね」

八幡 「え？：あ、そうだけど：」

その話しかけてきた女の子はロングヘアでスタイルの良い美少女だった。そんな子がなんでオレに話しかけてきたんだ？

??? 「私ね比企谷君の事、いつも見てたんだよ」
見てた？何を？

八幡 「：何を？」

??? 「比企谷君が色々頑張ってたの知ってたよ。頑張って友達を作ろうとしてたの」

八幡 「え？」

??? 「そんな比企谷君の事、気になって話しかけたって言うわけ」

八幡 「そうなんだ：で、なんで話しかけたの？」

??? 「実は言うど。私、比企谷君と友達になりたくて話しかけたの」
八幡 「え？」

初めてだった。そんな事言われたの。オレが色々頑張って友達を作ろうとしてた事、この子は全部見てくれてたんだと思ったら、すごく嬉しかった。

??? 「どうかな？」

八幡 「こんな：オレと友達になってくれるのか」

??? 「うん！私は比企谷君と友達になりたいの」

や、やっべえ、スゲエ嬉しい。

??? 「どうかな？」

八幡「…オレと友達になってください！」

オレは立ち上がり頭を下げ、手を前に出しそう言った。

??? 「にやはは、なんだかその体勢、告白みたいだね」

八幡「うえ!？」

??? 「あはは、うえだつて…ふふふ」

八幡「う…」

??? 「あ、ごめんごめん。ちよつと面白くて」

八幡「あのな…」

??? 「もう、ごめんつてば。それよりもよろしくね！」

女の子はそう言つてオレの手を握つてきた。初めて家族以外の異性に手を握られた。

八幡「お、おう…よろしく」

??? 「あ、そういえば自己紹介まだだったね。私の名前は一之瀬帆波よろしくね」

八幡「ひ、比企谷八幡」

帆波「うん、よろしくね比企谷君」

八幡「よ、よろしく…一之瀬」

こうしてオレは中学校生活初めて…いや、人生初めての友達ができ

た。

帆波「あれ？もしかして照れてる？」

八幡「で、照れてねえよ！ど、どつちかと言うと緊張と恥ずかしさがあるだけだ」

何オレは口走ってんだろう。

帆波「緊張と恥ずかしさ？」

八幡「お、おう。じ、人生で初めて友達ができたんだ。緊張もするだろ」

帆波「へえ、初めてなんだ。じゃあ私が比企谷君の初めてをもちよつたというわけか」

ちよつと！そんな言い方したら変な誤解生むからやめようね。

帆波「あ、そうだ。比企谷君、連絡先交換しよ」

八幡「え？」

帆波「友達になったんだから、ほら携帯出して」

八幡「お、おう：でもオレやり方知らねえんだけど」

帆波「そうなんだ。じゃあ携帯貸して代わりにやってあげる」

八幡「そ、そうか？じゃ頼む」

オレはスっと一之瀬に自分の携帯を渡す。携帯を受け取った一之瀬は慣れた手つきで自分とオレの連絡先を交換した。

帆波「はい、できたよ」

八幡「お、おう。あ、ありがとう」

一之瀬から自分の携帯を受け取り、画面に表示されてる連絡先の中に新しく『一之瀬帆波』と登録されていた。ホントに交換したんだ。

帆波「じゃあまた明日ね比企谷君」

八幡「お、おう。また明日」

オレは一之瀬が見えなくなるまで、見守った後自分の家に帰った。そして翌日、いつも通り学校に行くため家を出て通学路を歩いていると：

帆波「おーい、比企谷君」

八幡「ん？」

呼ばれた方を見るとそこには一之瀬と他にも知らない女の子が2人いた。すると一之瀬達はこっちに近づいてきた。

帆波「おはよう比企谷君」

八幡「お、おう。おはよう一之瀬」

帆波「なんだか元氣無いね。大丈夫？」

八幡「これがオレのデフォルトだ」

帆波「あ、そうなんだ」

???「ねえねえ、帆波。この人がさつき言ってた新しい友達？」

帆波「うん、そうだよ」

???「へえ〜」

2人の視線がオレに集中する。え？なに？オレなんかした？

帆波「ほら、2人共自己紹介しないと」

「あ、そうだね。私は折本かおり」

「私は仲町千佳」

八幡「ひ、比企谷八幡でしゅ
やっべえ、噛んじやった。

かおり「ぷっ…クククツ…でしゅって…でしゅって…」

折本はそう言いながら肩を震わせている。いや、笑うなよ…

千佳「ちよつとかおり、やめなよ…」

仲町さんは止めに入ったが、仲町さんも肩を震わせている。

帆波「ちよつと止めてあげなよ。ちよつと噛んだだけじゃん」

かおり「そ、そうだね…ごめん比企谷」

千佳「ごめんね比企谷君」

折本は未だ肩を震わせている。

八幡「いや、大丈夫だ。いつもの事だから」

帆波「いつもって…何されるの」

八幡「まあ、こんな見た目だからな」

かおり「ちよつと悲しすぎない？」

帆波「初めて話しかけた時も自分の事下に見すぎてない？」

千佳「あー、それ思った」

八幡「そんな事無いぞ」

帆波「いや、あるよ。友達なんだし、それに比企谷君はすごい頑張つ
てる所見てるんだから」

八幡「そ、そうか」

千佳「それより、早く学校行こっ！遅刻しちゃう」

かおり「うそ?! やっば?! 早く行こ！帆波、千佳、比企谷」

オレも入れてくれるのね。

帆波「ホントだ行くよ比企谷君！」

一之瀬はそう言つてオレの手を引つ張る。

八幡「ちよつ…引つ張るなよ。行くから」

そんなこんなでオレ達は遅刻せずに済んだ。そして時間は進み、昼
休み。いつも通り1人で食べようとした時……

帆波「比企谷君、一緒にご飯食べよう」

と一之瀬達がオレの席までやってきた。

八幡「え？」

帆波「いや、え？って言われても友達なんだしいいでしょ当然でしよう？」

八幡「い、いいのか？」

帆波「うん、いいよ。かおりと千佳もいいでしょ？」

かおり「うん、いいよ」

千佳「私も」

帆波「ほらね」

八幡「わ、わかった」

オレ達は机をくっ付けて弁当を広げる。人生初めて友達と一緒にご飯を食べる。今までそんな体験したこと無かったからちよつと嬉しい。

かおり「あ、そうだ比企谷」

八幡「ん？どうした？」

かおり「連絡先、交換しようよ」

八幡「は？」

千佳「あ、私もいい？」

八幡「ひ？」

帆波「あ、いいじゃん。交換したら？」

八幡「ふ？」

かおり「じゃあ早速携帯出して」

八幡「へ？」

千佳「ほら早く」

八幡「ほ？」

帆波「ほら、比企谷君。出しなよ」

八幡「い、いや…いいのか？オレと連絡先、交換してよ」

かおり「いいよ。だって私達友達じゃん」

千佳「そうそう」

え？オレいつの間に2人と友達になったの？

かおり「なんでって顔してるけど、私も比企谷と友達になりたいと

思ってからね」

千佳「私もだよ」

八幡「ま、マジで？」

かおり「マジマジ」

帆波「私が比企谷君の事話したら、2人揃って友達になりたいって言い出したんだよ」

八幡「そ、そうなのか…あ、ありがとうな」

かおり「だからほら、携帯出して」

八幡「あ、ああ。でも、交換のやり方知らないから代わりにやってくれねえか？」

かおり「あ、そうなの？わかった、じゃあ貸して」

八幡「お、おう」

オレは折本に携帯を渡し、オレの代わりに連絡交換してもらう。

かおり「はい、次千佳」

千佳「うん、わかった」

次に仲町さんも連絡交換してもらった。

千佳「はい、できたよ比企谷君」

折本と仲町さんに入れてもらって追加した連絡先は『折本かおり』に『仲町千佳』と表示されていた。

八幡「お、おう。ありがとうな折本、仲町さん」

千佳「あ、さん付け無しね」

八幡「え？」

千佳「だって帆波とかおりは普通に呼んで、私だけさん付けだもん。友達なんだし呼び捨てで呼ぶ事！わかった？」

八幡「わ、わかった…仲町さ…仲町」

千佳「うん、よろしい」

な、なんだこれ？いや、確かに初めつから仲町の事、さん付けで呼んでたけどそんなに嫌だったのかな？でも、オレの事、比企谷君って呼んでくれるんだ。

帆波「よし、一先ずご飯食べようか」

千佳「そうだね」

かおり「だね」

八幡「ああ、そうだな」

こうして毎日、昼休みになると一之瀬達と一緒にお昼食食べることに
なった。初めは戸惑ったがだんだん慣れてきた。一之瀬達とは色んな
話をした。勉強の事や趣味の事など色々話した。一之瀬達と話し
ているとなんだか心地が良い。他の人らはオレの事目が気持ち悪い
とか言ってたけど、一之瀬達はそんな事言わずにオレなんかと友達に
なってくれた。その事がマジで嬉しい。でも、ホントは、オレなんか
と一緒にいると一之瀬達まで悪い事言われるか心配だった。でも、一
之瀬達は『そんな事気にして無い』と言ってくれた。言いたいやつは
言わせとけば良いとも言ってくれた。その言葉を聞いてオレは一層
一之瀬達の事信用する事ができた。それから一緒に買い物したりし
て遊んだ。下校もいつも一緒にしている。それに一之瀬と話すのが
何よりも楽しい。

それから2ヶ月が経過した。

八幡 side out

帆波 side

かおり「あー、やっぱり比企谷といるとなんだか楽しいわ」

帆波「うん、そうだね」

千佳「私もそう思うよ」

私は今、かおりと千佳と一緒に比企谷君の事で話している。比企谷
君は今は御手洗に行ってる。比企谷君と友達になって2ヶ月経過し
た。

帆波「いやー、ホントあの時比企谷君に話しかけて良かったよ」

かおり「帆波の勇氣ある行動のおかげって事ね」

帆波「でしよ」

ホント比企谷君に話しかけて良かった。あんなに頑張つて友達を
作ろうとしているのに、みんなは揃って『目が気持ち悪い』と言つて
るのを聞いた。人を見た目で判断するなんて酷いと思った。私はそ
んな比企谷君の事助けたいと思った。でも、どうしたらって思いかお
り達に相談したら、友達になれば良いって言われた。なるほど、それ

はいいい案だと思ひ私は比企谷君と友達になる為に話しかけた。比企谷君は初めは少し疑つてたけど、だんだん私達のこと信用してくれるようになってくれた。信用してくれるまで、私達は頑張つた。多分他の人達に言われたことを気にしてたんだろうと思つた。それに比企谷君は時々不器用な優しさがある。前だつて私達が悪く言われた時、みんなの前で『オレがコイツらを脅して、無理やり友達にさせた』と言うつもりだつたみたい。そんな事したら比企谷君がいじめられると思つた。だから私達は、比企谷君に怒つた。私達は気にしてない事と伝えた後、自分を犠牲にしようとした事を怒つた。私達を助ける為とはいえ自分を犠牲にするのが嫌だつた。比企谷君だけが傷つくのが嫌だつた。すると、私達の気持ち伝わつたのか比企谷君は自分を犠牲にしようとしなかつた。そして今まで通り一緒に過ごした。でも最近、比企谷君の事ばかり考えてしまふ……なんでだろう。

そんな時だつた、私達の席に近づくと人達がいた。

男子1「ねえ、一之瀬さん達ちよつといい？」

帆波「ん？何？」

男子1「一之瀬さん達さ、あの目つきが悪いやつと一緒にいるじゃん」

あ、もしかしてこの人比企谷君のこと言ってるのかな？もし、そうだとしたらどうしようかな…

帆波「目つきが悪いやつ？誰それ？かおり、千佳、わかる？」

かおり「ううん知らなあい」

千佳「私も」

男子2「ほら、アイツだよ。いつも一緒にご飯食べてるやつ」

帆波「あー、もしかして比企谷君のこと？」

男子1「そうそうヒキタニだよ」

かおり「ちよつとさつき帆波が言つたこと聞いてた？ヒキタニじゃなくて比企谷だよ」

千佳「そうだよ。もしかしてワザと間違えてる？そうだとしたら相当頭悪いね」

男子達「うっ…」

ホント人の名前を間違えるだなんて…しかもワザと間違えてる様子だったし、腹が立つなく。なんで比企谷君の事悪く言うのかな。

帆波「で、比企谷君がどうしたの?」

男子1「い、いや。あのヒキタニと関わるのはやめた方が良いつて」

帆波「なんで?」

男子2「なんでって…アイツはやっぱ無いだろ。目つきも悪いしさ」

かおり「だから?」

男子1「いや、だからあんな奴と関わったら一之瀬さん達の印象悪くなるよ」

千佳「別にそんなの気にしてないし」

かおり「そうそう。友達と一緒にご飯食べようがあんた達に関係無くない?」

男子1「そ、そうだけど…でもさ」

帆波「あゝ、もうしつこいな」

男子達「!?!」

帆波「ねえ、なんでそんなに比企谷君の事悪く言うの?」

男子1「い、いや…:…:そ、それは…:」

帆波「比企谷君が何かした?なんかしたなら良いけどなんもしてないんでしょ?なのになんでそんなに悪く言うの?」

男子2「え、えーつと…:」

男子達は何故か何も言わなくなった。なんでだろう?ま、いっか。比企谷君を悪く言う人は私が許さない。

帆波「もういいや。もう、これ以上私の大切な人を悪く言うのなら、私絶対に許さないから…覚えといてね」

男子達「!?!」

かおり「私も許さないかな、だって友達を悪く言われるの嫌だもん。ね?千佳」

千佳「うん、そうだね」

かおり「と言うかももう良い?私達あんた達と話すのもう嫌だから、関わってこないでね」

そうかおりが言うのと男子2人は去っていった。

帆波「ハア：なんでこんなにも比企谷君の事、悪く言う人いるのかな」

かおり「腹が立つよね」

千佳「そうだね」

ハア：なんだか疲れたなく。こんなにも怒ったの初めてじゃないかな。でも、当たり前だよ、友達を悪く言われて怒らない人はいないもん。

かおり「それよりも帆波」

帆波「ん？何？」

かおり「さつきさく、あの男子達を怒る時にさ、言ってたよね」

帆波「え？何が？何か言った？」

私何か言った？確かに怒ってたけど、何か変な事言ったかな？

かおり「何って：ねえ、千佳」

千佳「うんうん、帆波ったら結構大胆な事言ってたよ」

帆波「え？何？私何言ったの？」

ホントに何言っちゃったの私？

かおり「何も分かってない帆波に特別に教えてあげる。さつき帆波はこう言ったの：『これ以上私の大切な人を悪く言うのなら、私絶対に許さないから：覚えといてね』って言ってたんだよ」

帆波「にや!?!／／／」

え？うそ！私そんな事言ったの!?!なんで私そんな事言っちゃったのかな：そりやあ比企谷君の事は友達だと思ってるよ。でも、最近比企谷君の事ばかり考えてしまうけど：も、もしかして私：比企谷君の事：：：うう／／／

私は思わず両手で顔を隠す。や、ヤバイ：顔が熱くなってきた。

わ、私：比企谷君の事：

かおり「あ、やっと気づいた？」

帆波「え？」

かおり「だから比企谷の事好きだって事よ」

帆波「に、にや!?!」

帆波「は、はい」

ここは放課後の教室。この場には私、かおり、千佳…そして比企谷君だけが残っている。他の人達は残ってないこの教室で…

八幡「あなたの事が好きです。付き合ってください」

もう我慢なんて出来ない。私の中の想いと同じように目からたくさん涙が溢れてきた。私の目の前で頭を下げ、手を差し出してきた想い人。

かおり「ほら、帆波。いつまでも黙ってたなら比企谷に悪いでしょ」

千佳「もく、かおり。そう言うのは割り込んだらダメだよ」

かおり「だってく、いつまでも黙ってる帆波が悪いんじゃない」

千佳「そういうとこだよ、かおり」

八幡「…この2人はほつといて…：返事…聞かせて欲しいんですが…」

そう言って不安そうに見てくる比企谷君。私はこの気持ちに嘘をつきたくない。だから…私は比企谷君の手を握り

帆波「わ、私も比企谷君の事が好きです。付き合ってください」

八幡「オレで良ければ」

私はその言葉に我慢出来なくなり握っていた手を引き比企谷君を抱き締める。比企谷君の体温を感じる…すごい幸福感…。すると比企谷君の方からも抱きしめてくれた。優しく包み込むように。

こうして私は比企谷君…ううん…八幡と恋人同士になった。

第2話

八幡 side

一之瀬：いや、帆波と恋人同士になれた。この関係が壊れてしまうかもしれないが、帆波はオレの気持ちを受け取ってくれた。嬉しくて、そしてこの手を離したくないという気持ちも込み上げてきた。これからは帆波の事をもっと大切にしなくちゃいけないと思った。もちろん、折本と仲町も友達として大切にしなくちゃいけない。この関係が壊れなくてホントに良かった。

翌日：いつものように帆波達と一緒に登校するために待ち合わせ場所まで向かう。もうそこには帆波達は着いており、どうやらオレが最後らしい。

帆波「あ、八幡」

オレに気づいた帆波は手を大きく振ってくる。あ、かわいいな。そんなことを考えながら、帆波達の所へ近づく。

帆波「おはよう八幡！」

八幡「おう、おはよう帆波」

かおり「おはよう比企谷」

千佳「おはよう比企谷君」

八幡「ああ、おはよう折本、仲町」

かおり「よし、じゃあ皆揃ったところで行こっか」

千佳「そうだね」

帆波「じゃあ早速」

帆波はそう言ってオレの手を握ってくる。

八幡「ちよっ…帆波？」

帆波「何？」

え？そんな何かした？みたいにキョトンと首を傾げてるの？オレ、何か変なこと言った？

八幡「い、いや…なんで手…握ってるの？」

帆波「なんでって…そりや恋人なんだから普通でしょ？」

おおく、スゲエ真顔で言うじゃん帆波さん。

かおり「帆波帆波。比企谷はきつと恥ずかしいんだよ」

八幡「は!?!ちよっ!折本…お前…」

千佳「あく、なるほど。恥ずかしいんだ比企谷君」

八幡「な、仲町まで…」

いや、恥ずかしいとかそんなんじゃないやねえし。妹の小町や母ちゃん以外と手繋いだことねえだけだよ…:はい、実は言うのと恥ずかしいです。なんで折本と仲町は止めないの?それに帆波は帆波で、なんで折本と仲町の前で平気で手繋げるの?

帆波「あく、そつかそつか。恥ずかしいんだ八幡」

八幡「うっ…:そ、そうだよ恥ずかしいんだよ」

帆波「そつか…:でもやめてあげない!ほら、早く行かないと遅刻するよ」

八幡「あ、おい…:い、行くから引つ張るなって…」

帆波「かおりと千佳も早く行くよ。でないと置いて行くよ」

かおり「え、ちよっ…:待ってよ」

千佳「置いていかないで」

オレは帆波に手を握られ、後ろからは折本と仲町が歩く形となつて、学校へ向かった。学校に着いたら手離してくれると思いきや、離さないように腕まで組んできた。すると周りの女子達はキヤーカー、言ってる。男子達からはすごい視線が集中して痛い。後ろの2人はスゲエニヤニヤしながら見てくる。腹立つなく、その顔。

八幡「ちよっ…:帆波。なんで腕まで組むんだよ。しかも学校で」

帆波「いいじゃん。八幡は私のものだって事を証明しないといけなからね」

八幡「っ!／／／」

かおり「ヒュ」

折本は後ろで口笛を吹いてるし、仲町も未だニヤニヤしてるし、周りの視線も痛いし…

そんな視線が集中しながら教室に向かった。そして時間が進み昼休み。いつものように一緒に弁当を食べるのだが

八幡「ハア〜」

帆波「どうしたの八幡？なんか疲れてない？」

八幡「あのなく…朝からスゲー視線が痛くて疲れてんだよ」

帆波「なんで？」

八幡「いや、なんでって…そりゃあ帆波が学校でオレの腕を組んでいたら、誰だって見るだろ？」

かおり「あはははは、確かにあれから視線が比企谷にすごい集まってたね〜、ウケる」

八幡「ウケねえよ」

千佳「お疲れ比企谷君」

八幡「ああ〜、マトモな奴は仲町だけかよ」

帆波「ちよつと八幡！それはないよ〜。私だって普通だよ。というか八幡も普通じゃないよ」

八幡「え？」

帆波「だって、八幡って結構捻くれてるでしょ？」

かおり「それある！」

帆波の言ったことに同意したのか親指を立てて折本はそう言う。いや、何がそれあるだよ。訳わかんねえよ。

八幡「…それより早く食べようぜ。時間が無くなる」

帆波「あ、ホントだ。早く食べよう」

そう言って弁当の蓋を開ける。今は母ちゃんが弁当を作ってくれてる。まあ、当然なのか栄養のバランスも考えており、とても美味しい。そうだ。

帆波「あ、八幡のお弁当美味しそう」

かおり「お、ほんとだ」

千佳「もしかして比企谷君のお母さんが作ってるの？」

八幡「ん？ああ、母ちゃんが作ってくれてるよ」

帆波「へ〜、あ、この玉子焼き美味しそう。1つ貰っていい？その代わり私の1つあげるから」

八幡「え？ああ、まあ良いけど…ほれ」

オレは帆波に弁当箱を近づけて取りやすくしたが、帆波は箸を置

き、口を開けて…

帆波「あゝ」

八幡「はっ!?ちよつとそれは…」

帆波「えゝ、いいじゃん」

八幡「か、勘弁してくれ…頼む」

帆波「むゝ、しょうがないなく。わかったよ、今日はやめてあげる」

八幡「さ、サンキュ…」

帆波「でも、いつかはしてよ」

八幡「ぜ、善処します」

帆波「じゃあ貰うね」

八幡「おう」

「帆波はオレの弁当から玉子焼きを1つ取り、口の中に入れる。

帆波「んゝ、美味しい」

八幡「そうか?それは良かった」

帆波「うん、とつても美味しいよ。いつもこの味なの?」

八幡「ああ、そうだな。いつもこの味で食べてるからな。もう慣れた」

帆波「そうなんだ(この味覚えとこ)」

八幡「んで、そつちは何くれるんだ?」

帆波「なんでもいいよ。あ、じゃあ私も玉子焼きをあげる。はい、あーん」

八幡「なっ!?それはやめたんじやなかったのか?」

帆波「え?それは、八幡からはやめたけど、私からはやめるとは言つてないよ?」

ぐつ…確かに言つてないけど、ホントにやるのか?そ、そんな事したら…

帆波「どうしたの八幡?あ、もしかしてまた恥ずかしいんだゝ」

八幡「い、いや…ま、まあ確かに恥ずかしいが…」

帆波「いいじゃんいいじゃん。ほれほれゝ」

そう言つて箸で搦んだ玉子焼きをさらに近づけさせる。

かおり「あゝ、帆波。比企谷は恥ずかしいもあるけど、他にも理由

があるよ」

帆波「え？なに？」

かおり「え？わからないの？」

帆波「え？わからないの？って何が？」

かおり「へえ、分からないんだ。どう思う千佳」

千佳「うくん、しょうがないんじゃない」

どうやら折本と仲町はわかっているようだ。なのになんで帆波は分からないんだよ。

帆波「え？かおりと千佳はわかるの？」

かおり「そりゃね」

千佳「うん」

帆波「教えてよ」

かおり「しょうがないなく。じゃあ教えてあげる。比企谷がなんで恥ずかしいのか…それは…」

帆波「それは…」

かおり「関接キスになるからだよ」

帆波「え？…ええええ！か、かかか関接キス!?／＼／＼」

そう言われて帆波もようやく気づいたらしい。すると顔を真っ赤にして、オロオロしている。かわいい…じゃなくて！

八幡「ま、まあ…そういうことだ」

帆波「そ、そっか…八幡はそれで恥ずかしかったんだね」

八幡「そういうことだ」

帆波「う…よしっ！でもそんな事、言ったらずっとできないよ！今は出来ないけど…でも、いつかはできるようにお互い頑張ろうね！」

八幡「お、おう」

帆波「じゃあはい。玉子焼きどうぞ」

八幡「お、おう…いただきます」

オレは差し出された帆波の弁当の中にある玉子焼きを1つ取り口の中に入れる。

帆波「ど、どう？」

八幡「…うまい」

帆波「え？ほ、ホントに!？」

八幡「ああ、スゲエうまい。これって帆波のお母さんが作ったのか？」

帆波「う、ううん！私が作ったの」

八幡「へえ、いつも？」

帆波「うん」

八幡「へえ、スゲエな」

帆波「そんなことないよ。私がやりたいからやってるだけ」

八幡「そっか」

帆波「そうだ。八幡にも言っとくね。私の家、実は母子家庭なんだ。だからお母さんを少しでも楽しませようとしたらと思ったから、自分でお弁当を作ってるんだ」

八幡「そうだったのか」

帆波「それに2つ下の妹もいてね。それがまたかわいいのよ」

八幡「へえ、帆波は妹いたんだな。オレにも2つ下の妹がいるんだ」

帆波「へえ、八幡にも妹さんいたんだ」

かおり「へえ、比企谷の妹ね…」

千佳「比企谷君の妹…」

八幡「何想像してるか知らんが、うちの妹は血が繋がってるはずなのに、オレとはまったく似てないからな。特に目な」

かおり「べ、別にそんなこと想像してないよ。ね？千佳」

千佳「う、うん。そうそう」

ホントか？にしてはかなりの慌てぶりだけど。

八幡「まあ、そういう事にしとくわ」

かおり「ちよつと信じてよ!」

八幡「信じてる信じてる。ちよーしんじてる」

千佳「なんか適当すぎない!？」

そんな会話をしながら弁当を食べ終わる。午後の授業も何も無く受けることができたが…今は放課後で、オレは体育館裏にいます。え

？何？告白？そんなんじゃねえよ。相手は男共だ。言つとくけどオレはホモではない。まあ、世の中には男が男を好きって言う人はいるけど、オレは違う。

男1「おい、てめえ一体どういうつもりだよ」

八幡「どういうつもりとは一体何でしょ？」

いきなりそんなこと言われてもわからねえよ。ちゃんと主語言えよ。小学校で習っただろ。

男2「とぼけんな！なんでお前みたいな根暗で目つき悪い奴が、一之瀬さんと付き合ってたんだよ！」

八幡「そりゃあ、お互い好きって伝えて、付き合うことになっただけだが？」

男3「そんな訳ねえだろ！どうせお前が脅して一之瀬さんと付き合つて、しかも折本さんや仲町さんまでも脅してんだろ！」

八幡「んなわけねえだろ」

男1「ふざけんな！一之瀬さん達はな男女問わず人気者なのに、お前みたいなクズが関わられるはずがねえだろ！」

その言葉で他の男共は頷いている。こんな状況だけど、君達仲良いね。息ピツタリだよ。それよりどうしようかなこの状況。帆波達にはトイレに行くって言ってトイレに行つて、帰ろうとしたらここに連れてこられたからな。言う暇もなかったし。

男1「おい！聞いてんのか！ヒキタニ！」

オレの名前はヒキタニって読むんじゃなくてヒキガヤって読むんだけどな。読めねえのか？

男2「クツソ！もうやっちまおうぜ！」

え？もしかしてオレ、今から犯される？いや、それはないよね！向こうもその気は絶対じゃないし、気持ち悪いだけだし。

八幡「ハア：なあ帆波達待たせてるんだ。行つていいか？」

男3「コイツ！今、一之瀬さんの事名前で呼んだぞ！」

男2「くっ！オレ達も呼んだとないのに！」

あゝ、これは火に油を注いじまったかな？

男1「もう我慢できねえ！皆コイツをやっちま「はーいストップ

！っ！」

ここで帆波達の登場。え？なんでここにいるの？

帆波「八幡大丈夫？何かされてない？」

八幡「あ、ああ。大丈夫だなんとも無い」

帆波「そっか…良かった」

八幡「でも、どうしてここに？」

千佳「それはね比企谷君。教室で比企谷君の事待ってたら、クラスの女の子に比企谷君が、その男子達にここへ連れていかれるのを見たって伝えてくれてね」

おおく、マジか。その女の子に感謝しねえとな。

八幡「そうだったのか」

かおり「いや、比企谷が無事で良かったわ」

帆波「そうだね…でも、今は…」

帆波はそう言ってオレの前にいる男共に視線を移す。するとこの空間が凍り付いたような張りつめた空気が漂い始めた。

帆波「ねえ、今八幡に何しようとしたの？まさかイジメ？」

男1「い、イジメだなんて…そんな事してたわけじゃなくて…」

かおり「あ、実はさっきの会話録音してるから」

男共「「っ!?!」」

千佳「私は録画してるから」

え？待って…録音と録画してるってことは、前からその場にいたというわけだよな。なんで早く助けしてくれないの？

帆波「ごめんね八幡。証拠が欲しかったから助けるの遅れちゃった」

なるほど。

八幡「ああ、別にかまわない。ケガもしてないからな」

帆波「ありがとう…それでここに証拠はあるけど…まだ言い訳するの？」

男2「…一之瀬さん達はコイツに騙されてるんだ！」

男3「そ、そうだ！どうせコイツが一之瀬さんを騙して恋人にしたんだ！」

男1「ああ、そうだ！だから俺達は一之瀬さん達を助けよう」と…
帆波・かおり・千佳「「は？」」

うおっ!? 3人ともスゲエ低い声だ。びっくりするぐらい低い声だった。

帆波「ねえ…私達が助けを求めた？ 求めてないよね？ というか私達は何一つ八幡に騙されてないんだけど。…ねえ…どうして…」

うお、怖え。え？ 帆波って怒るとこんなにも怖くなるの？ オレ、気をつけないといけないな。

男1「そ、それは…」

帆波「もういいや。八幡帰ろう。あと帰りにどっか寄って行かない？」

八幡「お、おう…それは別に良いが…」

帆波「よしっ！ 決まり！ かおり、千佳行くよ！」

かおり「そうだね」

千佳「早く行こ！ 時間無くなっちゃうよ」

とかいのかこの状況。しかも帆波はオレの手を握って引つ張っていく。オレはそれに対抗せず、大人しく引つ張られる。すると…

男1「ま、待って！ まだ話は…」

帆波「じゃあハッキリ言うね。私は、イジメとかする人達と関わりたくないの。だからもう私達に関わらないでね。もし、また八幡に何かしようとするのなら…私何するか分からないから」

男共「「……」」

男共は最後の帆波の言葉で何も言い返しては来なくなった。というか顔が青染めてる。オレは少しだけ冷や汗をかいている。そして、また帆波はオレの手を引き、体育館裏から出る。あれ？ というよりオレのカバン教室じゃね？

千佳「あ、言うの忘れてたけど比企谷君のカバンここにあるよ」

八幡「おお…マジか。サンキュ」

千佳「どういたしまして」

そう言っって仲町はオレにカバンを渡してきたので、それを受け取

る。

帆波「よしっ！じゃあ早速行こつか」

八幡「えっと…帆波さん？一体これからどこに行くつもりで？」

帆波「フッフッフツツ。それはね〜」

一体なんだよ。というか何その笑顔。ちよつと怖いんですけど。

帆波「あの男子達が言つてたけど八幡つて目の事で悪く言われてたじゃん」

八幡「あゝ、そういえばそうだな」

帆波「それを言わせないために、八幡をイメチェンさせようという話になって、今からしにいこうというわけ」

八幡「お、おう。なるほど？」

かおり「なんで疑問形？ウケる」

八幡「ウケねえよ…まあ、所謂買いもんだろ？」

帆波「まあ、そんな感じ。あ、でも、八幡は拒否権ないよ」

八幡「え？」

千佳「そりやそうじゃん。だつて比企谷君をイメチェンされるんだから本人がいないとダメじゃん」

うっ…た、確かにそうだな。

八幡「まあ、イメチェンとかは良いが…オレそういう知識ねえんだけど」

帆波「大丈夫大丈夫！私達に任せといて！八幡をさらにカツコよくされるから！」

八幡「お、おう」

帆波「よし、まずはアソコだね」

かおり「だね」

千佳「うん」

一体…オレはどこに連れていかれるのだろうか？オレは大人しく帆波達の後をついて行く…というより帆波に手を握られてるから逃げる事はできないし、逃げようとも思わない。

そして、連れてこられた場所はメガネ屋だった。

八幡「なんでメガネ屋？オレ目悪くねえんだけど」

帆波「度が着いているメガネじゃなくて伊達メガネとかブルーライ
トカットメガネとかだよ」

八幡「ほう」

へえ、今はそういうのがあるんだな。わざわざオレのために調べ
てくれたのかな？なんだか嬉しいな。

八幡「で？どれにするんだ？」

帆波「ん、そうだな…どれがいいかな？」

千佳「私とかおりが選んでもいいけど、やっぱりこういうのは彼女で
ある帆波が選んだ方がいいんじゃない？」

かおり「それある！」

帆波「そ、そう？」

かおり「そう」

帆波「そつか…じゃあ…これ」

帆波はそう言って選んだのは黒いフレームの伊達メガネだった。

帆波「八幡、これつけてみて」

八幡「わかった」

オレはメガネを受け取り、かけてみる。

八幡「どうだ？」

帆波達に確認しようとする、何やら帆波達は固まっていた。あれ
？どうしたの？まさかそんなに変か？

八幡「お、おい。お前らどうしたんだよ」

帆波「はっ！も、もしかして八幡！」

八幡「お、おうそうだけど…え？何？そんなに変か？」

帆波「う、ううん！変じゃないよ！むしろすごく似合ってる！」

八幡「そ、そんなにか？」

かおり「うん、すごい似合ってる。一瞬誰かわからなかった」

千佳「私も」

帆波「はい、鏡」

帆波は持っていた手鏡でオレを写す。その手鏡を覗いてみると、そ
こには目の濁りが無くなったオレの顔が写っていた。

八幡「え？これ、ホントにオレ？」

帆波「そうだよ」

八幡「マジか…」

かおり「これで少しは比企谷の印象変わるね」

千佳「そうだね」

帆波「ど、どうする？買う？」

八幡「そうだな…帆波が選んでくれたし、オレ自身も気に入ったし、買うよ」

帆波「そ、そっか。じゃあ待ってるね」

八幡「おう」

八幡 side out

八幡が会計に行ってる間女子達は…

帆波 side

かおり「まさか比企谷がメガネかけたらあんなにも印象変わるだ
なってるね」

千佳「だね。それに帆波は見惚れてたみたいだし」

帆波「にや!?!／／べ、別にそんなんじや…」

見惚れてたというかなんというか…その…

かおり「じゃあなんなのよ。ほれほれく言ってみな」

千佳「そうそう。お姉さん達に言っでごらん」

なんか2人のキャラ変わりすぎてない？千佳なんてお姉さんって

…

帆波「そ、それは…八幡があんなにカッコよくなるなんて思っ
てな
かくて…」

かおり「あく、惚れ直したんだ」

千佳「あく、なるほど」

帆波「にやにや!?!／／」

かおり「でも、あんな比企谷見たら他の子達も好きになっちゃうか
もね」

帆波「えっ!?!」

それってどういう事？

千佳「そうだね」

帆波「ど、どうして？」

かおり「比企谷つて後輩に人気だよ」

帆波「え!?!嘘…」

八幡が後輩に人気? そんな…

千佳「ホントホント。この前偶々見たんだけどさ、比企谷君後輩の女の子が階段から落ちそうになったところを助けてるの見たよ」

何それ! 夢のようなシチュエーション。そんなことされたら好きになっちゃうかもしれない。

かおり「あく、私も見た。まあ、それで比企谷を狙ってる子とかいるかもね。でも、今は帆波の彼氏だからそんなことないと思うけど、一応気をつけた方がいいよ」

帆波「うう、そんな」

ど、どうしよう。そ、そんな事になったら私…

かおり「でも、まあ、大丈夫でしょ」

帆波「ど、どうして？」

かおり「どうしてって? ねえ、千佳」

千佳「うん、そうだね。帆波、後ろ」

帆波「え?」

千佳にそう言われて後ろを振り向いて見ると、そこには会計を終わらした八幡がいた。若干顔が赤いような…

帆波「は、八幡?! いつからいたの!」

八幡「ちよつと前ぐらいかな…」

帆波「そ、そうなんだ」

も、もしかして聞かれたの!?!ど、どうしよう。

八幡「ま、まあ、オレは帆波が好きだし、帆波一筋だから安心してくれ」

帆波「う、うん…」

八幡「…」

そ、そっか。八幡は私一筋なんだ。そう言われると嫌じゃないかな。でも、さつきから顔が熱いよ。

かおり「ちよつとお二人さん。私と千佳の事忘れてない?」

千佳「そうそう。2人だけの世界に入らないで」

帆波「ご、ごめん」

八幡「わ、悪い」

かおり「そういうのは2人っきりの時にしてね」

帆波「う、うん」

かおり「よしっ！じゃあ次行こ！」

八幡「え？まだ行くの？」

かおり「あつたりまえでしょ？ほら帆波、比企谷が逃げないようにしないとダメだよ」

帆波「う、うん。わかった」

私は八幡が逃げないように腕を組む。さっきの話でちよつと恥ずかしいけど、逃げないようにするため。

かおり「よしっ！ほら、行くよ！」

帆波「うん、ほら八幡行こ？」

八幡「…わーったよ。行くから腕離してくれない？」

帆波「ん、ダメ」

八幡「さいですか」

帆波「うん！だから今日も付き合っつてね」

八幡「はいよ」

そしてその後も色んなところを回って八幡のイメチェンさせた。でも、最終的にメガネが1番いいということになった。

第3話

八幡 side

帆波達と買い物というよりオレをイメチェンさせるための買い物
が終わり、今は家に帰ってきたところだ。

八幡「たでーま」

???「あら八幡おかえり」

玄関でオレにそう声をかけた人物。それは、オレと妹の小町の母親
である。

八幡「おお、母ちゃん。今日は早いんだな」

母「ええ、早く仕事が終わったからね。それより八幡」

八幡「なんだよ」

母「なんでメガネかけてるの？視力悪いの？」

八幡「あく、違う違う。これは伊達メガネだ」

母「伊達メガネ？でもどうして付けてるの？」

八幡「それは、彼女に勧められたから」

母「へえく、そうなん？八幡今なんって言った？」

八幡「勧められた」

母「その前」

八幡「それは」

母「違う。そのふたつの間」

八幡「…彼女」

母「八幡、あんた彼女できたの!？」

そう言っ母ちゃんはオレとの距離を詰める。近い近い。

八幡「…あ、ああ。ちよつと前にできた」

母「それならなんで早く言わないのよ」

八幡「言うタイミングが無かったんだよ」

母「…そう、まあいいわ。八幡、その彼女私に会わせなさい」

八幡「…は？」

思わずマヌケな声が出てしまった。え？なんで？なんで帆波を母
ちゃんに会わせないといけないの？八幡意味わかんない。

八幡「えつと…理由は？」

母「それは息子子である八幡の彼女がどんな彼女か知るためよ」

八幡「お、おう…な、なるほど？」

母「だから今度の日曜日連れてきなさい」

八幡「ちよつ…ちよつと待てよ！いくらなんでも急すぎるだろ！帆布にも用事もあるだし」

母「へえ、彼女の名前、帆布ちゃんって言うんだ」

八幡「あ…まあ、そのうち分かる事だから良いけど…わかった。ちよつと聞いてみる」

母「お願いね」

ハア…まあ、遅かれ早かれ紹介することになってたし、丁度いい機会かもな。オレはそう思いながら帆布に電話をする。

帆布『もしもし、どうしたの八幡』

八幡「急に悪いな。今いいか？」

帆布『うん、いいけど、どうしたの？』

八幡「実はウチの母ちゃんに帆布の事話さなきゃいけない状況になつてさ」

帆布『うん』

八幡「したら母ちゃん、帆布に会わせろって言うんだ」

帆布『え？八幡のお母さんが？』

八幡「ああ、それでさ…今度の日曜日に会わせろって言うんだ。空いてるか？」

帆布『うん、空いてるよ』

八幡「そつか、良かった」

帆布『私からもいい？』

八幡「ん？なんだ？」

帆布『私もお母さんに八幡の事話さなきゃいけない状況になつたの』

八幡「え？帆布も？」

帆布『うん、したらウチのお母さんも八幡に会わせろって言うの』

八幡「おお、マジか…」

マジかよ。帆波の方もそういう話になってしまったのか。まあ、オレも帆波の家にはいつかは挨拶しなきゃいけないかったもんな。でも、まさかこのタイミングか：マジか…。

八幡「それで、オレはいついけばいいんだ？」

帆波『えつと、こっちは今度の土曜日に連れてきてつて言われて』
土曜日かよ!?!え？てことは土曜日に帆波の家に行つて、日曜日はウチに帆波が来るというわけか。忙しくなりそうだな。

帆波『どうかな？その日空いてるかな？』

八幡「あ、ああ。空いてるぞ」

帆波『そつか：じやあ土曜日に八幡が私の家に来て、日曜日に私が八幡の家に行けばいいんだね』

八幡「そうなるな」

帆波『にやははは、これはちよつと大変な休日になるね』

八幡「ああ、まったくだな」

ホント休む日で休日なのに、休めない。

帆波『あ、そういえば八幡は私の家どこにあるか知らないよね？』

八幡「ああ、そういえばそうだな」

帆波『そうだな：○○公園つて知ってる？』

八幡「ああ、あそこな。時々通るから知ってるぞ」

帆波『ホント？じやあその公園に10時頃に来てくれる？案内するか』

八幡「その公園に10時頃なわかった」

帆波『うん、それで日曜日はどうする？』

八幡「そうだな。日曜もさつきと同じでいいんじゃないか？」

帆波『うん、わかった』

八幡「おう」

帆波『えつと：じやあまた明日』

八幡「おう、また明日」

そう言つて電話を切る。ハア：ホント大変な事になったな。次の土日でお互いの親に会いに行くんだろ。マジで大変じゃん。

八幡「母ちゃん」

母「あら？終わったの？」

八幡「ああ、母ちゃんの言う通り日曜に連れてくるから」

母「そう、ありがとう」

八幡「それと…」

母「どうしたの？」

八幡「その前の土曜に向こうの家に行くことになった」

母「え？そ、そうなの？」

八幡「おう、向こうもオレに会わせろって言ってきて、それで行くことになった」

母「なるほど…失礼のないようにしなさいよ」

八幡「わかってる」

ハア：ホントどうしよう。なんだか今から緊張してきたな。ホント、どうなるんだろオレ……

そして土曜日

待ち合わせの公園で帆波を待つこと数分…

帆波「八幡く、おまたせく」

八幡「いや、大丈夫だ。さつき着いたところだ」

あれ？なんだかこの状況まるで待ち合わせをするカップルみたいだな。

帆波「よし、じゃあ早速行こっか」

八幡「お、おう。よろしく頼む」

帆波「うん」

オレは帆波の後を着いていき帆波の家まで行く。

帆波「ここだよ」

八幡「ここか…」

着いた場所には、言ってしまったら悪いが普通の家があった。

帆波「ほら、行くよ。お母さん達が待ってるから」

八幡「あ、ああ」

そうだった。オレは帆波の親に会わせてくれって言われて来たん

だった。やべえ、さつきより緊張してきた。そして帆波の家に入る。そういえば帆波が前に言ってたな。母子家庭で2つ下に妹がいるって。という事は女3人家族ということだ。家の中は女性物が沢山ある。

帆波「こつちだよ」

八幡「お、おう」

そして案内された場所はリビングみたいところだ。そこには、4つの椅子と長いテーブルがあり、その内2つの椅子には帆波の母親と妹らしき人が座っていた。

帆波「お母さんただいま」

一之瀬母「おかえり帆波。それでそちらの方が…」

帆波「うん、私と付き合ってる…」

八幡「ひ…比企谷…八幡です！娘さんの帆波さんとお付き合いしています」

オレはそう言って、頭を下げる。良かった噛まず言えたぜ。

一之瀬母「そう固くならないで、私はどんな人か知りたかっただけだから」

八幡「そ、そうですか」

一之瀬母「まずは自己紹介ね。初めまして私は帆波と瑞希の母です」

みずき？あ、妹か。

瑞希「初めまして私は一之瀬瑞希です」

八幡「よ、よろしくお願いします」

一之瀬母「ええ、よろしくね」

瑞希「ねえねえ」

すると、いつの間にか近くに来た帆波の妹、瑞希がやってきた。

八幡「ど、どうしたんだ？」

瑞希「それ、何持ってるの？」

そうやってオレが持っていた紙袋の中が気になるのか、指を指していた。

八幡「あ、ああこれは。駅前のどら焼きだよ」

一之瀬母「そんな気を遣わなくてもいいのに」

八幡「いや、これはオレの気持ちみたいなもんなので、皆さんで食べてください」

一之瀬母「そう？ありがとう。受け取るわね」

八幡「はい」

一之瀬母「あ、そうだ。八幡君って呼んでもいいかしら？」

八幡「あ、はい。いいですよ」

一之瀬母「ふふっ、ありがとう」

瑞希「じゃあ私は八幡お兄ちゃんだね」

八幡「え？」

帆波「ちよっ!?!瑞希!?!」

瑞希「だっってお姉ちゃんと呼き合ってるのならそう呼ばないとダメでしょ？」

帆波「だ、だからって早すぎない!?!」

瑞希「ねえ、呼んでもいい？」

そう言つて上目遣いで聞いてくる。くっ…それは卑怯だぜ。

八幡「お、おう。別にいいぞ」

瑞希「やった〜」

そう言つて喜ぶ。なんていい笑顔なんだ。帆波と似てる笑顔で、やっぱり姉妹なんだなと思った。

一之瀬母「よし…それじゃあ八幡君。単刀直入に聞くけど、帆波とはどういう風に出会ったの？」

八幡「帆波とですか?…そうですね…最初の出会いは公園のベンチでした」

一之瀬母「公園のベンチで？」

八幡「はい、オレが学校で友達ができなくて落ち込んでいた時に帆波が話しかけてくれたんです」

一之瀬母「へえ〜、なるほど。帆波やるじゃん」

帆波「えへへ…そ、そうかな」

褒められて帆波は照れる。

八幡「それからオレと友達になってくれたんです。そして、帆波の

友達2人にも友達になつてくれて」

一之瀬母「あく、かおりちゃんと千佳ちゃんね」

あ、知ってるんだ。そりゃあそうだろうな。

一之瀬母「それから」

八幡「それから色々と買い物に行ったり、遊びに行ったりしました。そんなある日、帆波の事が頭から離れなかつたんです。初めはこの気持ちが高んなのかわからなかつたですけど、帆波の事が好きなんだつてわかつたんです」

一之瀬母「ふむふむ…なるほど。それで付き合うようになったと」

八幡「そんな感じですよ」

一之瀬母「話してくれてありがとう。でも実は言うと、帆波から時々聞くのよ八幡君の事」

帆波「ちよつ！お母さん!？」

八幡「そ、そうなんですか?」

一之瀬母「ええ。それはもうね。新しい友達ができたつてね」

八幡「…」

一之瀬母「それから八幡君の話を聞くようになってね。でも、本人は初め気づいてなかつたけど、八幡君の事好きだつて事にね」

帆波「おおおお母さん!？」

瑞希「うん！お姉ちゃん、八幡お兄ちゃんの話ばかりだつたよ」

帆波「ちよつ瑞希まで!？」

帆波は帆波のお母さんと妹の瑞希ちゃんに色んなことを暴露されて慌てている。こんな事思うのは帆波には悪いけど…かわいい。

それから色々聞かれたりした。その間にお昼ご飯も頂いた。すごく美味しかった。それと色々聞かれた時、帆波は顔を赤くしたり、両手をパタパタさせたりしていた。すごくかわいかった。

八幡「お邪魔しました」

時間は過ぎいい時間なのでオレはもう家に帰るところだ。

一之瀬母「今日はありがとうだね。また来てね。いつでも歓迎するか

ら

八幡「ありがとうございます」

瑞希「またね八幡お兄ちゃん」

八幡「おう、またな」

オレはそう言つて、いつもの癖で小町の頭を撫でるように瑞希の頭を撫でる。

瑞希「んフフ」

とつても気持ちよさそうにしている。

瑞希「気持ちいい」

帆波「八幡？」

八幡「うおつ!?ほ、帆波。いや、これは…いつも妹の頭を撫でるよ
うな感じでしたしまっただけで。癖みたいなものだ」

帆波「そういえば八幡にも妹さんいるって言ってたね」

一之瀬母「あら、そうなの?その妹さんの歳は幾つか聞いてもいい
かしら」

八幡「歳は瑞希ちゃんと一緒にです」

一之瀬母「あらホント?ならまた今度会わせてくれる?」

八幡「ええ、予定が合えば」

一之瀬母「ありがとう」

瑞希「私も楽しみ」

八幡「ああ、また今度な」

瑞希「うん!」

帆波「お母さんそろそろ」

一之瀬母「そうね。じゃあまたね八幡君」

八幡「はい」

帆波「私途中まで送っていくよ」

八幡「そうか?じゃあ頼む」

帆波「うん、じゃあちよつと行ってくるね」

一之瀬母「ええ、行ってらっしゃい」

瑞希「行ってらっしゃい」

八幡「ふう：ちよつと疲れたな」

帆波「なんかごめんねウチのお母さんと妹が」

八幡「いや大丈夫だ。まあ、気になるのはわかるけど、あんなに聞かれるとは思ってなかったな」

帆波「にやはは、確かにそうだね」

八幡「まあでも今度は帆波がこの気持ちに味わう番だしな」

帆波「ちよつとなんだかその言い方怖いよ。そうならないように守つてよ」

八幡「まあ、善処するわ」

帆波「約束だよ！」

八幡「ああ：あ、もうここでいい。ありがとうな」

帆波「そう？わかった。じゃあまた明日ここで」

八幡「ああ、また明日な」

そう言つてオレは帆波と別れて家に帰った。帰ると小町と母ちやんに色々聞かれたが、明日帆波に聞けばいいやとなった。

翌日の日曜日。昨日みたいに待ち合わせの公園に行くともう帆波は着いていた。

八幡「悪い帆波。待ったか？」

帆波「ううん、今来たところだから大丈夫だよ」

八幡「そつか、じゃあ行くか」

帆波「うん」

オレは自分の家まで帆波を連れて行く。その間は他愛もない会話をしながら歩く。そして：

八幡「着いたぞ。ここがオレの家だ」

帆波「ここが八幡の家か」

帆波はそう言いながらウチの家を見上げる。

八幡「じゃあ入るぞ」

帆波「うゝ、なんだか緊張してたゝ」

八幡「まあ、オレの時もかなり緊張したわ。どうする？」

帆波「そうだね…いつまでもここにいちやダメだし、覚悟を決めて行くよ！私」

八幡「そっか…入るぞ」

帆波「う、うん」

オレは帆波を家の中に入れて、リビングの方へ案内する。

八幡 side out

帆波 side

私は今、八幡の家族に挨拶しに来ている。かなり緊張しているけど、頑張つてやるしかない。

八幡「母ちゃんただいま」

そして、八幡に案内されてリビングに入ると、椅子に座っている2人の女性がいた。1人は多分八幡のお母さんで、もう1人は前に言っていた妹さんだろう。だって頭には八幡と同じでアホ毛があった。

比企谷母「おかえり八幡。それでそちらの方が八幡と付き合ってる人？」

八幡「ああ、オレの彼女帆波だ」

帆波「は、初めまして一之瀬帆波と言います。八幡君とお付き合いしています」

そう言いながら頭を下げる。よ、良かった。噛まずに言えた。

比企谷母「そんなに硬くならないで。あ、私は比企谷八幡の母親で、こっちが…」

小町「妹の小町です」

帆波「よ、よろしくお願いします。あ、それとこちらは気持ちです。皆さんで食べてください」

そう言つて菓子折りを差し出す。

比企谷母「あらそんなに気を遣わなくてもいいのに。でも、ありがとう。受け取るわね」

帆波「は、はい」

比企谷母「あ、そうだ。これから帆波ちゃんと呼んでもいいかしら？」

帆波「は、はい。かまいません」

比企谷母「そう、ありがとう帆波ちゃん」

小町「じゃあ小町は帆波お姉ちゃんだね」

帆波「にゃ!？」

八幡「お、おい小町いきなり何言ってるんだよ」

小町「何って普通じゃん。お兄ちゃんと付き合ってる人は小町のお姉ちゃんになるんだから」

八幡「え？何それ？」

小町「それで呼んでもいいですか？」

帆波「うん、いいよ。ちよつと驚いちゃっただけだから。好きなように呼んでくれてもいいよ」

小町「わかりました。じゃあ帆波お姉ちゃんと呼ばせていただきます」

帆波「うん、よろしくね小町ちゃん」

小町「はい！」

八幡「まあ、お互いそれでいいんじゃないけど」

小町「もう、お兄ちゃん。そんな細かいこと気にしてたらダメだよ」

八幡「へいへい。ほら、帆波、とりあえず座れよ」

帆波「あ、うん。失礼します」

比企谷母「ふふつ、面接とかじゃあないから楽にしてくれていいのよ」

帆波「は、はい」

そう言われてもさつきから緊張してしまって、上手く喋れるか心配だよ。

比企谷母「単刀直入に聞くけど帆波ちゃんはこういう風に八幡と出会って、付き合うことになったの？」

帆波「えつと…初めの出会いは公園でした」

比企谷母「公園で？」

帆波「はい、八幡…君は初めは友達を作るために色々頑張っていました。勉強や運動など色々頑張っていました。それでもできませんでした。何故ならクラスの皆揃って目が嫌だとか言って友達になろうとしませんでした」

ホントあの時の八幡は友達を作ろうと頑張ってたのが印象に残っている。

比企谷母「そんな事が…」

帆波「はい、でも、私はそんな八幡君の事が気になって話しかけたのがきつかけです」

比企谷母「なるほど、それで八幡と友達になったのね」

帆波「はい。それから八幡君とかおりと千佳…あ、今の2人も私と八幡君の友達です」

比企谷母「あら、そうなの八幡」

八幡「ああ」

比企谷母「そっか…良かったわね八幡」

八幡「ああ」

比企谷母「それで続き話してくれる？」

帆波「はい、それから今言った2人と私、そして八幡君と色んなところに遊びに行きました。買い物したりとか色々しました。でも、そんなある日に八幡君の事ばかり考えるようになりました。初めはどうしてか分かりませんが、家族と友達に言われて八幡君の事が好きなんだってわかったんです」

比企谷母「なるほど…それで付き合うことになったわけね」

帆波「はい」

比企谷母「そっか、ありがとうね、話してくれて」

帆波「い、いえ」

ふう…緊張した。上手く言えるか心配だったけど何とか言えた。八幡もこんな感じで私のお母さんに話したのかな。すごいなく。

小町「そっか、だからお兄ちゃん、その時からなんだか明るくなっただね」

八幡「え？そうなのか？」

小町「うん、前まではなんだか暗かったんだよ」

八幡「マジか…」

帆波「そう言えば私が話しかけるまで確かに暗い雰囲気出てたよ」
八幡「そう…なのか。帆波と小町がそう言うならそうなのかもしれない」

ないな」

小町「だから、帆波お姉ちゃん。お兄ちゃんと友達になって、そしてお兄ちゃんの事受け入れて彼女になってくれてありがとうごさいます」

そう言つて小町ちゃんは頭を下げる。

帆波「えつと…ここはどういたしましてって言えはいいのかな」

小町「はい！」

比企谷母「そうよ帆波ちゃん。帆波ちゃんのおかげで今の八幡がいるんだから、私からもありがとうね」

そう言つて八幡のお母さんも頭を下げる。

帆波「い、いえ、そんなあ、頭を上げてください」

八幡「母ちゃんに小町、もうやめてくれ。なんかこつちが恥ずかしいからさ」

比企谷母「何言つてるの八幡。帆波ちゃんのおかげで八幡は明るくなったんだからお礼を言わなくちゃダメでしょ！」

小町「そうだよお兄ちゃん！」

八幡「え？なんでオレ怒られてるの？ウケる」

比企谷母・小町「ウケないよー！」

なんとも息があつた親なんだろう。

それから昨日の八幡みたいに色々聞かれた。というより小町ちゃんにグイグイと聞かれた。八幡のどんところが好きかって、本人の前で言わないという恥ずかしい状況になった。でも、なんとか言えただけですごく恥ずかしいのでまた今度で。お昼もいただきました。

そして時間は流れいい時間なので私は家に帰るところ。

帆波「それではお邪魔しました」

比企谷母「今日はありがとうね。また、来てね。いつでも歓迎するから」

帆波「ありがとうございます」

小町「また来て下さい帆波お姉ちゃん」

帆波「うん」

いや、ホント前に八幡の言ってた通り妹の小町ちゃん、八幡とはまったく似てない。唯一似ているところと言えばやつぱアホ毛の部
分かな。

八幡「じゃあオレは帆波を送っていくわ」

帆波「ありがとう」

比企谷母「わかったわ」

小町「ちゃんと送らないとダメだよ」

八幡「わーっってるよ。じゃあ帆波行こうか」

帆波「うん、それではさよなら」

比企谷母「またね帆波ちゃん」

小町「さよなら帆波お姉ちゃん」

私は八幡のお母さんと小町ちゃんに手を振り、八幡に途中まで送ってもらった。

八幡「どうだ？調子の方は」

と私の体を気遣ってくれた。

帆波「うん、大丈夫。ちよつと質問攻めに疲れちゃったかな」

八幡「すまんウチの小町と母ちゃんが」

帆波「ううん、そんな事無いよ。優しそうな人で安心したから」

八幡「そっか、そう言ってもらえると助かる」

帆波「どういたしまして。あ、もうここでいいよ」

八幡「いや、家まで送るぞ」

帆波「ううん大丈夫。まだ明るいし」

八幡「そうか？」

帆波「うん」

八幡「わかった。じゃあまた明日な帆波」

帆波「うん、また明日ね八幡」

そうお互い言って私は八幡と別れて家に帰った。家に帰るとお母さんと、今度は瑞希に質問攻めにあった。

第4話

八幡 side

今日も帆波達と一緒に会話をしながら登校する。

かおり「やっぱ比企谷はそっちの方がいいと私は思うな」

千佳「私も。だってこれでもう目つきが悪いとか言われなさそうだしね」

かおり「それある!」

帆波「私も今の八幡もいいと思うよ」

八幡「そうか? まあ:サンキュ」

帆波「やっぱりさ、自分の彼氏が悪く言われるのは嫌だしね」

八幡「そうだな。オレも自分のか、かか彼女まで悪く言われるのは嫌だからな」

やっべえ超恥ずかしいんですけど。

かおり「あれ? 比企谷もしかして照れてる?」

そう言いながらニヤニヤしている。何あれ? ちよつとむかつんだけど。

八幡「うっせ折本」

かおり「ちよつと! 口悪くない!」

千佳「まあ、今のはちよつとかおりが悪いね」

帆波「まあ、かおりだしね」

かおり「みんなして酷い!? ウケる!」

八幡「ウケねえよ:」

何ホントコイツの口癖『ウケる』なの? なんなの? ポケモン? ウケるポケモン折本かおり? : : : いや、何考えてんだよオレ。そんな会話をしていたら学校に着いたので教室に入る。すると、何故か知らないオレだけに視線が集中しているような気が: : : いや、きつと気のせいだろう。うん、きつとそうに違いない。オレなんか視線を集中させるだなんておかしいぜ。

かおり「なんか比企谷にすごい視線いつてるね」

千佳「そうだね」

ああ：気のせいではなかったわ。

帆波「ホントだね：しかもほとんど女子…」

ん？最後の方が上手く聞き取れなかったな。

八幡「最後なんて言ったんだ？」

帆波「なくにも言っていないよ」

八幡「そうか」

どうやら空耳だったらしい。

八幡「じゃ、オレは席に戻るわ」

帆波「うん、じゃあまたお昼休みにね」

八幡「おう」

オレは帆波達と別れて自分の席に戻った。

八幡 side out

帆波 side

八幡がメガネを付けるようになった。理由は他の人達が八幡の目付きが悪いと言っていたので、それを少しでも和らげるために伊達メガネを買いに行った。それで八幡がメガネをつけたらすごく似合っていて、すごくかっこよかった。でも、それでかクラスの人達が八幡に視線が集中するようになってしまった。しかも女子ばかりだった。そんな中休みの時、八幡の事で話している人達の会話が聞こえてきた。どうやら女子みたいだけど……

女子1「ねえねえ、今日の比企谷君、なんだか雰囲気変わったね」

女子2「そうだね。なんだか前よりもなんだかかっこよくなって

るよね」

彼氏の八幡のいい所を言っていて彼女としてはちよつと嬉しい。

女子3「うんうん。でも比企谷君には一之瀬さん達がいるのよね」

女子1「そうだね」

女子2「そういえば聞いたんだけどさ、比企谷君は一之瀬さんと付

き合ってるらしいよ」

女子3「うそ！ホントに!？」

女子2「うん、みたいだよ」

女子3「そっか」

女子1「え、何？狙ってたの？」

女子3「うくん、でも私最初比企谷君が話しかけてきたのに目が嫌だって、言ってしまったっちゃって」

女子1「あー、メガネ付ける前だよ。私も最初思ったけど、もし言ってなかったらどうなってたかな」

女子2「うん、そうだね」

そんな会話を聞いていると、次の授業が始まるのでその女子達は自分の席に戻っていった。私も自分の席に戻った。それにしても八幡がメガネを付けて見た目が変わったからって、それで八幡に近づこうだなんて：ちょっと嫌だな。確かに少しでも八幡の見る目を変えたかったけど、この前までは色んな事八幡に言ってたくせに。なのにいきなり態度を変えて来るなんて。でも、八幡は誰にも渡したりしないんだからね。

帆波 side out

八幡 side

何故だろうホントになんでオレに視線が集中するのか分からない。オレ何かした？何かした覚えないんだけどな。うくん、わけわからん。

八幡「なあ、なんでオレこんなに視線が集中するの？マジでさっきから視線が痛いんだけど」

今は昼休み。帆波達と弁当を食べながら聞いてみる。

千佳「あー、多分。メガネつけてるからかな」

八幡「え？このメガネ？帆波達が選んだメガネそんなに変か？」

かおり「いやいや、前も言っただけど似合ってるからね」

帆波「そうそう」

八幡「じゃあなんで？」

千佳「前より雰囲気が変わってるから、思わず見てしまうんじゃないかな？」

八幡「そんだけで？」

帆波「うん、千佳の言う通りそうだと思うよ」

八幡「ほーん」

そんな雰囲気変わっただけで、こんなにも視線が集中するの？もう、わけわかめなんですけど。……いや、何言ってるんだよオレ。

八幡「まあ、でもそのうちおさまるだろう」

帆波「そうだといいいね」

八幡「ちよつとそんな怖い言い方すんなよ」

帆波「にやはは、ごめんごめん。でも確かにいつかはおさまると思うよ」

かおり「もしかしたら卒業までおさまらないとか」

八幡「怖えよ」

千佳「あははは」

帆波「確かに見られてるけど、少しでも八幡の見る目を変えられてよかつたよ」

千佳「そうだね。やっぱりそっちの方がいいと思うし」

八幡「そうか」

そんなこんなで、今日一日中視線を感じながら過ごした。やばい程疲れた。休めるとしたら帆波達と一緒にいる時と家にいる時ぐらいだろう。

八幡 side out

帆波 side

今日の八幡はなんだか疲れてそうな感じだった。そりゃあ、あんなに視線を感じたら誰だって疲れるよ。私もご飯を食べている時に一緒に感じた。そんなに見る？と思いつつながら過ごしたけど、私もちよつと疲れちやつたよ。でも、八幡の方が疲れてるよね絶対に。そして今はかおりと千佳でラインのグループ電話をしている。私はあのクラス的女子達の会話を話している。

帆波「それでねそのクラスの女子達がね八幡の事言ってたの」

かおり『あく、やっぱり見た目で判断してたというわけね』

帆波「うん、多分そうだと思う」

千佳『最初に比企谷君の事悪く言ったのを見た目が変わったからと言って、態度を変えて比企谷君に近づこうとしたんでしょ？虫がよすぎない？』

かおり『だね』

帆波「まあ、それは八幡もわかってると思うよ。最初に話しかけたのに悪く言われて、後からしつぽをふって近づいてくる人達は信用できないと思うし」

かおり『ホントにそうだね』

千佳『でも、大丈夫だよ。比企谷君は帆波の隣から離れたりしないって』

帆波「え？」

そう千佳に言われたけど、一体どういう事だろう……。まあ、確かに私も八幡の隣から離れるつもりは無いけど。

千佳『だって比企谷君、帆波の事大好きだもん』

帆波「にゃ!? / /」

かおり『あく確かに。だって比企谷、帆波と付き合う前は素直じゃあなかったけど、帆波と付き合うようになってから少しだけ素直になってきているもん』

帆波「そ、そうなの？」

全然気づいてなかった。いつも八幡を見てるからそんなに変わってないように見えたけど、2人には分かるんだね。2人は私と違った方向から八幡を見てるんだね。こういう人達が増えてくれたらいいんだけど、クラスの人はほとんど見た目で判断するからちよつと残念だな。

かおり『そうだ、帆波。帆波ってやっぱり比企谷と同じ高校に行くの？』

帆波「あく、もうそんな時期かく」

高校かく。確かに八幡と同じ高校に行きたい。まだ、八幡と行きたい場所もあるし、一緒に行きたいな。

千佳『それでどうするの？』

帆波「うん、一緒にするつもりだよ」

かおり『じゃあ比企谷がどこの高校に行くか聞かないとね』

帆波「そうだね。かおりと千佳はどうするの？」

かおり『私？私もできれば一緒の高校に行きたいな』

千佳『私も』

帆波「そつか。じゃあ明日八幡に聞かないとね」
かおり『そうだね』

千佳『一体どこの高校にするんだらうね』

帆波「そうだね。あ、もうそろそろ終わらうか」

かおり『あ、もうそんな時間かく早いな』

千佳『そうだね』

帆波「じゃあまた明日ね」

かおり『また明日』

千佳『うん、また明日』

そう言って電話を切る。さて八幡は一体どこの高校に行くんだらう。気になるなく。明日が楽しみになってきた。さて明日に備えて寝ようかな。

帆波 side out

八幡 side

八幡「ふああ〜」

大きなあくびが出てしまった。本を読んでいたら寝るの遅くなってしまう。

帆波「眠たそうだけど大丈夫？」

八幡「ああ、大丈夫だ。ちよつと本を読んでいたら寝るのが遅くなってしまうただけだから」

帆波「そうなんだ。でも、夜更かししすぎたらダメだよ」

八幡「わかっているよ。でも、区切りのいいところで終わらうと思ったら、最後まで読んでしまっただけだ」

かおり「比企谷って読書家なんだ」

八幡「いや、帆波達と友達になるまでいなかったから、本を読むぐらいしかなかったからな」

帆波「理由が悲しいよ!」

千佳「でも、今は私達がいるもんね」

八幡「そうだな」

帆波「あ、そうだ八幡。八幡ってどこの高校行くつもりなの？」

八幡「ん？高校か？高校は総武に行くつもりだけど」

かおり「え！総武!?なんでそんな頭良いところに行くの？」

八幡「いや、なんでって、それは家から通えてこの学校から誰も来なさそうなところに行こうかなって」

千佳「そうなんだ」

帆波「そっか…じゃあ私も総武に行くよ」

八幡「え？帆波も？」

帆波「うん、私は八幡と一緒に高校に行きたいの。八幡のいない高校生活なんて退屈だもん」

八幡「お、おう。そうか、それで折本と仲町は？」

かおり「そうだったら私も総武に行く！」

千佳「私も」

八幡「そっか、じゃあまた高校でも一緒だな」

帆波「そうだね。あ、でもかおりと千佳の成績大丈夫なの？」

かおり「う…」

千佳「そこなのよね」

え？大丈夫じゃないのに行くって言ったの!?おいおい、ホントに大丈夫かよ。

八幡「そう言う帆波は大丈夫なのか？」

帆波「うん、大丈夫。私はかおりと千佳より成績良いから」

八幡「へえ。それで折本と仲町の成績ってどれくらいなんだ？」

千佳「私は海浜総合に受かるぐらいだよ。かおりも一緒ぐらい」

おお…マジですか。総武と海浜総合の差はかなりあるぞ。運が良ければ受かるんじゃないか?いや、それはないか。

八幡「どうすんだよ」

かおり「ううう…：助けてえ帆波」

帆波「もう…：しょうがないな。今からでも遅くないし皆で勉強会しようか」

千佳「あ、いいね！」

かおり「ありがとう」

どうやら帆波達は勉強会をするらしい。

帆波「もちろん八幡もだよ。数学の成績悪いんでしょ？」

八幡「な、なんで知ってんだよ」

帆波「たまたま見ちゃったの数学のテストの点数を」

八幡「な、なにイ!？」

ま、まさかあの1桁の数学のテストを見たのか!

帆波「だから皆で頑張って総武に受かって一緒に行きこー!」

かおり「うん、そうだね。私、勉強苦手だけど頑張るよ!」

千佳「私も!」

八幡「…わかったよ。オレもできるだけ手伝うからやろうか」

帆波「よしっ!絶対に皆で一緒に総武に受かろうね」

かおり・千佳「うん!」

八幡「…おう」

ハア：嫌だな。数学…というより理系だよな。最もオレの苦手と
いうより捨ててる科目だもんな。

それからは、ほとんど勉強に時間を費やす。場所は教室やサイゼ、
帆波の家やオレの家でやった。オレの家に来た時は小町にも紹介し
た。紹介した時小町は『ホントに友達いたんだ』と言う反応された。
酷くない?別に見栄を張って言ってる訳じゃあないんだからさ。そ
んなある日の勉強会の時だった。

かおり「うー、頭パンクしそう…」

と言いながら頭を抱えている。そりゃああんだだけ帆波に教えられ
たんだしな。総武に受かる為とは言え結構ハードだ。仲町も結構き
ている。オレも数学を教えてもらいながら折本に勉強を教えている。
それからはちよつと休憩しながら勉強会を再開する。オレも数学を
予習や復習をするようになった。まあ、ほとんどは帆波に教えてくれ
た。帆波ってこんなに頭良かったんだ。オレよりも成績良いって聞
いたけど、めっちゃ良いじゃん。

勉強会をしているけれど、学校行事があればそれを優先して楽しん
だ。文化祭では帆波達と学校を周ったりした。けど、勉強しすぎてそ
れが夢まで出てくるようになったらしい：折本が。

そして…帆波と付き合って初めての2月14日

いつものように帆波達と登校して下駄箱を開ける。するとそこにはなんだか可愛くラッピングされた箱などが5つほど入っていた。

八幡「ん？なんだこれ？」

オレは何か分からずその中から1つ取り出す。

八幡「なあ、なんでこんな物がオレの下駄箱に入っているんだ？」

帆波「…八幡それ本気で言ってる？」

八幡「え？いや、マジで、なんでこんな可愛くラッピングされた箱が、下駄箱に入ってるのか分からないんだけど」

かおり「本当なんだ」

千佳「しかも5つも入ってる」

八幡「ん？なんだこの紙」

ラッピングされているリボンの間に紙が挟まっていたのでそれを取り出して開いてみる。

帆波「何が書いているの？」

そう言って覗き込んでくる帆波。折本と仲町も覗き込んでくる。ちよつとあなた達近いですよ。しかも3人揃っていい匂いするし。

かおり「あの時助けていただきありがとうございます。これはお礼です…だって」

なんで折本が読んじやうの？まあ、別にいいけどよ。

かおり「比企谷、誰か助けたの？」

八幡「いや、助けた覚え…あ、あるわ」

かおり「なんなの？」

八幡「大した事じゃあないんだけど、散らばったノートを拾ったり、転けそうになったところを支えたりしたただけだけど」

3人「『それだ』」

八幡「え？」

千佳「それだよ絶対」

かおり「助けてくれたお礼だよそれ」

八幡「そうか。まあこれがお礼の物だとわかったけどよ。これはなんだ？ん？1つはチョコレートみたいだけど……」

かおり「ねえ、比企谷。今日はバレンタインデーだよ」

八幡「あゝ、あつたなくそんなの。今まで無縁だったから忘れてたわ」

かおり「比企谷らしいね」

千佳「だね」

帆波「…」

ん？なんだ？なんでか帆波は頬を少し膨らませていた。なんかりスみたいだな。

八幡「ど、どうした帆波。なんか機嫌悪い？」

帆波「な、なんでもない！」

ええゝなんで怒ってるの？オレなんか怒らすような事したかな？

かおり「ほら、帆波。そんな顔してないでもう渡したら？」

千佳「そうだよ。もう渡しちやいなよ」

帆波「かおり、千佳…うん、そうだね」

帆波はそう言ってカバンからオレの持っているような可愛くラツピングされた箱が出てきた。

帆波「…は、八幡！」

八幡「お、おう」

帆波「こ、これ本命チョコ。手作りだから八幡の口にあうといいけど／＼／＼」

八幡「お、おう…さ、サンキュ／＼／＼」

かおり「おおく帆波ったら大胆」

帆波「にや!?!／＼／＼」

周りを見てみると、続々と登校してきた生徒達に見られてしまった。まさか、折本の奴これを狙って？

かおり「あ、そうだ。比企谷これあげる。義理チョコね」

千佳「私からも、はい」

八幡「お、おう、ありがとう」

それからは他の男子たちは嘆いていた。

そしてオレ達が3年になると小町と瑞希が入ってくる。もう既に小町と瑞希は会ってるから仲がいい。いつも一緒にいるところを見

かける。

修学旅行でも帆波達と班を組んで行動する。と言っても班行動時は他にも人はいるけど、自由行動の時は行動した。ホントに楽しい修学旅行だった。小町のためにお土産も買った。

そんな感じで時々帆波とデートとかもした。最初は結構緊張したが手を繋ぐところまでいった。

そして時は流れ総武校の合格発表日。

かおり「うぐめっちや緊張する」

千佳「私もだよ」

帆波「私も」

八幡「ああ、そうだな」

オレ達は今は合格発表場の総武校にいる。合格しているか、はたまた落ちているので緊張する。心臓の鼓動がうるさい。受かっているかどうかで緊張している。

八幡「な、なあ帆波」

帆波「何?」

八幡「どうしてオレの腕にしがみついているんだ?」

そうさつきから帆波はオレの腕にしがみついている。緊張しているからしがみついているのか分からないけど。

帆波「いいじゃん」

まあ、別にいいけどさ、さつきから折本がニヤニヤしてるのがちよつとイラツとくる。仲町は仲町で苦笑している。そんな事していると合格発表が始まる。

『えー、ただいまより合格発表をしたいと思います。受験者は自分の受験番号をこちらに用意してある紙から探してください。それでは貼ります』

そうやって筒状に丸められていた紙をホワイトボードに広げて磁石で固定させていく。さて、自分の番号を探さねえとな。オレ達は自分の番号を探す。

八幡「…あつ」

あつた。

帆波「…あつた」

すると隣からもそんな声が聞こえる。帆波の方を見ると帆波も才
レ見ていた。すると：

帆波「あつた…あつたよ…八幡」

八幡「あ、ああ。オレもあつた」

帆波「よ、よかつた〜！」

帆波はそう言ってオレの腕が離れて抱きついてきた。当たってる
当たってる。帆波の2つが当たってる。

かおり「ヒューヒューおふたりさんお熱いね〜」

千佳「ちよっ！かおり」

帆波「ハッ！／＼／＼」

帆波は気づいたのかオレから離れる。すごく顔が赤い。多分オレ
の顔も赤いだろう。だつてあついからな。

帆波「か、かおりと千佳はどうだったの!？」

かおり「私もあつたよ」

千佳「私も」

帆波「ほ、ホント！やったね！これでまた皆と一緒に学校行けるね
！」

かおり「そうだね」

千佳「うん」

八幡「皆受かっててホント良かったな」

帆波「うん、またよろしくね八幡、かおり、千佳」

3人「うん（おう）」

そして今は合格発表の帰り、折本と仲町と別れて今は帆波と一緒に
いる。

帆波「もう、中学校生活終わりだね」

八幡「ああ、そうだな。マジで早かったな。特に帆波と出会って、付

き合ってから早かったな」

帆波「そっか。高校でも色んな所行こうね」

八幡「ああ」

そして歩き続けていると、急に帆波が立ち止まった。

帆波「ねえ、八幡。ちよつと寄り道していい?」

八幡「おう、良いけど」

そう言っつて連れてこられたのが公園のベンチだった。すると帆波はスカートを正しながら座る。

帆波「ほら、八幡。八幡もここに座って」

ぱんぱんと隣に誘ってくる。

八幡「おう」

オレは言われた通り帆波の隣に座る。一体どうしたんだ?

帆波「八幡さ…あの時私、八幡に抱きついちゃたけど…嫌だった?」

あ、ああ。あの時か…確かにあの時帆波に抱きつかれたけど。

八幡「いや、別に嫌ではなかったぞ。ちよつといきなりすぎてビツクリしたけど」

帆波「そ、そっか…」

安心したのか胸を撫で下ろす。どうやらその事で心配していたらしい。

帆波「じゃあ…んっ」

すると腕を広げる帆波。え?何?何したらいいの?

帆波「ほ、ほら早く。ハグだよハグ」

ま、まさかオレにしろと?結構ハードル高くないですかね?というよりオレにそんな度胸まだねえよ。

帆波「…八幡?」

ちよつと目をウルウルしながら上目遣いはやめてください。でも、恋人を待たせるのはアレなため覚悟を決めおそれるおそれる帆波を抱き寄せた。すると帆波もオレの身体をギュツとしがみついていた。

帆波「んっ…はふう…」

八幡「お、おふう…」

思わずそんな声が出てしまった。

抱きしめた帆波の身体は想像よりも柔らかく、小さかった。

帆波「八幡の心臓すごい事になってるよ」

八幡「緊張してんだよ」

帆波「にやはは、そっか。八幡って女子にこういうのするの？」

八幡「いや、小町以外にしたのは帆波が初めてだな」

帆波「そ、そっか…八幡の初めてもらっちゃったな」

八幡「お、おう」

うん、その言い方すると勘違いする人いるからホントやめてね？

帆波「ねえ、もう少し強くして」

と耳元でささやかれる。ちよつと耳は苦手なんですよ。でも、オレはそれに答えるためさつきよりも力強く抱きしめる。

帆波「んっ…ありがとうございます」

八幡「…どういたしまして」

さつきより心臓の鼓動がすごいことになる。帆波の心臓の鼓動や体温が伝わる。

帆波「ねえ八幡」

八幡「ん？」

帆波「…好きだよ」

八幡「っ！…オレも帆波の事好きだ」

こうしてオレの中学校生活は終わりを迎えた。

できれば高校では帆波ともっと進展ができますように。

第5話

八幡 side

今日は総武高の入学式。オレは帆波達との待ち合わせ場所まで向かった。そこには総武の制服を着た帆波達がいた。するとオレに気づいたのか帆波達はオレに手を振ってくる。帆波と折本は高く手を上げており、仲町は自分の胸まで手を上げ手を振っている。オレも軽く手を上げる。

八幡「お待たせ」

帆波「ううん全然大丈夫だよ」

かおり「私達も今来たところだからさ」

千佳「そうそう」

八幡「そうか」

帆波「それよりも八幡。どう？私達の制服姿は？」

そう言つて何故かモデルのようなポーズをとる帆波と折本。仲町は苦笑していた。

八幡「いや、どう？って言われても…似合つてるとしか言えないな」

帆波「ホント？ありがとう」

かおり「やったね」

八幡「それで、なんでまたこんなに早く向かうんだ？」

帆波「遅れるよりかはマシでしょ？」

八幡「なるほどな」

かおり「比企谷く。帆波はこう言つてるけど、ホントは早く自分の制服姿を比企谷に見せたかったただけだからね」

帆波「ちよっ!?! かおり！なんで言つちやうの!?! 言わない約束だったじゃん！」

かおり「あ、ごめくん。私、鳥頭だからすぐ忘れちやうのよね」

帆波「こういう時だけなんでそういう事言うの？」

千佳「もう帆波諦めなつて。しようがないよかおりだもん」

なんでだろう。今の一言で納得してまう。さすがだな折本。

かおり「ちよっとな千佳!?!」

帆波「ハア：もう諦めてるけどね」

八幡「だな」

かおり「皆して酷い！ウケる！」

3人「「ウケねえよ（ないよ）」」

かおり「3人とも息ピッタリじゃん」

八幡「：それより早く行くんだろう。だったら行くぞ」

帆波「そうだね」

千佳「そうだねかおりはほつといて早く行こうか」

かおり「ちよつと酷くない！待ってよ」

そんなやり取りをしながら学校に向かう。だが、歩いている最中の時だった。どっかの誰かのペットの犬が道路に飛び出したのだ。おいおい、ちゃんとリードの管理しとけよな。だがタイミング悪く犬の方へ黒いリムジムが向かってくる。オレは考えるより先に体が動き、犬を助けようと道路に飛び出した。

必死に走って犬を抱き抱える。よしっ！と思ったたら束の間、もうすぐ近くにリムジムが来ていた。ダメだ、間に合わん。オレはそう思いながら犬を守らないと、と思い犬を庇うような体勢をとった瞬間：

ドン！

とぶつかる音が聞こえる。そりゃあそうだ。リムジンに吹き飛ばされたんだからな。

オレの体は地面に叩きつけられる。薄れゆく意識中、帆波達が駆け寄ってくるのが見えた。泣きながら何やら言っているようだがあまり聞こえない。

そしてオレの意識は途切れた。

八幡 side out

帆波 side

今日から待ちに待った高校生活が始まる。楽しみで皆と一緒に早く学校へ向かうことにした。1人目は親友のかおり、2人目も親友の千佳、3人目は私と付き合っている彼氏の八幡と一緒に向かっている。八幡に制服が似合ってるって言われてすごく嬉しかった。でも、そんな楽しい時間もおしまい。なぜなら八幡が車に跳ねられたから

だ。

帆波「う…そ…」

かおり「ちよつと…嘘…」

千佳「…嘘」

顔を見なくても分かる私達は血の気が引いていたと思う。そして八幡が叩きつけられた音は忘れられないと思う。

そして私達は八幡に駆け寄る。

帆波「ねえ！八幡！大丈夫！」

かおり「比企谷！」

千佳「比企谷君!？」

大丈夫なわけがない。でも泣きながら聞くことしかできなかった。すると、八幡の腕から犬が出てきた。八幡はこの犬を庇うために…：…しかも首輪の金具が壊れていた。ウソ…こんな状態で散歩してたの…信じられない。

千佳「わ、私救急車呼んでくる！」

千佳はそう言つてこの場から少し離れる。もうそこから何も考えられなかった。頭も回らない。その後、八幡は救急車に載せられ運ばれた。そして警察の人が来て色々聞かれたが、私の代わりにかおりと千佳が答えてくれた。私も少しだけだけ答えて解放された。

かおり「大丈夫帆波？」

帆波「…ううん…」

千佳「だよね…」

だつて目の前で彼氏が跳ねられたのだから。

かおり「あれ？犬は？どこにもいないけど」

帆波「え？…ホントだどこにもいない」

かおりに言われて探したが、あの犬はどこにもいなかった。

かおり「飼い主が連れていったのかな？」

帆波「…さあ？」

千佳「ねえ、比企谷君の事心配だけど、今は一先ず学校へ向かう」

帆波「…そうだね」

かおり「帆波、行ける？手貸そうか？」

帆波「うん、大丈夫…ありがとう」

学校に向かいながら小町ちゃんに連絡した。連絡をしてくれたのは千佳だった。私はまだ動揺していたのでしてもらった。病院は分かったら後で連絡してくれるみたいだ。

学校に着いたけど入学式に出る気にはなれなかった。それから自分達の親が来てくれた。そして私達は事故の事を話した。

母「そっか…」

お母さんも心配そうな顔をしている。当たり前か。かおりと千佳の親も心配そうにしている。

その後、八幡の事は心配だけど一旦家に帰った。シャワーを浴びて部屋に戻る。部屋には私と八幡、かおりと千佳が写っている写真を見てたら涙が出てきた。

帆波「う…うう…八幡…」

すると携帯が鳴った。相手は小町ちゃんからだ。

帆波「…はい、もしもし」

小町『帆波お姉ちゃん。お兄ちゃんですが〇〇病院に運ばれました、今は検査中です』

帆波「大丈夫だよね？」

小町『わかりません』

帆波「…そっか。わかった今から行くね」

小町『わかりました。待ってます』

帆波「うん」

それからかおりと千佳にも連絡して八幡のいる病院に向かった。そこで小町ちゃんを見つけて…

小町「あ、帆波お姉ちゃん、それにかおりさんに千佳さんも」

帆波「小町ちゃん。八幡は？」

小町「安心して下さい。脳とかに異常はありません。幸い足が骨折しただけで、入院が必要です。意識もそのうち戻るだろうって先生が言っていました」

それを聞いた瞬間、安心して緊張の糸が切れたのか近くにあった椅子に座る。

帆波「よ、よかった〜：八幡、無事でよかった〜：」

かおり「ホントにもう〜：こんなに私達を心配させて〜：」

千佳「でも本当に無事で良かったね」

帆波「うん〜：ホントに良かったよ〜」

安心してまた涙が出てきた。でも、その日は八幡は目を覚まさないかった。明日、目を覚ましてね八幡。

それから家に帰ってお母さんと瑞希に八幡は無事だと伝えたらすぐく安心してくれた。

そして次の日

かおり「帆波、もう大丈夫？」

帆波「うん、大分マシになったよ」

かおり「そっか、よかった」

千佳「でも、私達が早く行こうなんて言わなかったらこんな事にはならなかったのかな〜：」

帆波「私達のせいじゃないよ」

かおり・千佳「「え〜？」」

帆波「あのワンチャンの首輪が壊れていたの。その日に壊れたんじゃないくて、だいぶ前から壊れていたんだと思う」

かおり「え〜？ちよつと待って、まさかその状態で散歩させてたの!？」

千佳「それ飼い主が悪いじゃん」

帆波「でも、八幡の性格だから助けたんだと思う」

千佳「確かに比企谷君ならやりそう」

かおり「だね」

それから学校が終わった。最初の時だから早く学校が終わる。だから時間があるので、そのまま八幡のいる病院に行こうと思った瞬間小町ちゃんから電話がきた。

小町『帆波お姉ちゃん、今大丈夫ですか？』

帆波「うん、大丈夫だけど、どうしたの？」

小町『お兄ちゃんが目を覚ましました』

帆波「ほ、ホントに？」

小町『はい』

帆波「よ、よかった〜」

小町『なのでお見舞い来てください。お兄ちゃん喜ぶと思います』

帆波「う、うん。行くよ」

小町『はい、待ってます』

そして電話を切る。すると八幡が目を覚ました事に安堵したのか、涙が出てくる。

かおり「どうしたの？」

帆波「八幡が…八幡が目を覚ましたって」ポロポロ

かおり「ホントに？」

帆波「うん」ポロポロ

かおり「よかった〜」

千佳「本当によかった」

かおり「じゃあ早く行こ！そして私達を心配させたんだから、叱ってやろう！」

帆波「うん、そうだね」ポロポロ

私達は急いで病院に向かった。

帆波 side out

八幡 side

目が覚めると病院のベットのの上にいた。看護師や先生などがきて検査をした。なんでもない質問にもしつかりと答えた。そして検査が終わった後、小町がきて怒られた。

小町「お兄ちゃん。小町や帆波お姉ちゃん達がどれだけ心配したかわかる？」

八幡「…はい」

小町「犬を助けたのは良いけど、帆波お姉ちゃん達に怒られると思うから覚悟しといてね」

八幡「…ああ」

確かに小町の言う通りだ。目の前で人が撥ねられたんだそりゃあそうなるわな。何かお詫びでもしねえとな。

八幡「小町…」

小町「ん？」

八幡「心配かけてすまん。それと色々としてくれたんだろ？ありがとうな」

小町「ホントだよ。でも、どういたしまして」

八幡「今度お前の好きな物なんでも買ってやるよ」

小町「じゃあプリンをお願いね」

八幡「はいよ」

小町「帆波お姉ちゃん達もうすぐ来るよ」

八幡「おう、わかった」

小町「ちゃんと謝りなよ」

八幡「ああ、わかってる。ありがとう」

小町「うん、ならよしっ！」

そして小町は一旦オレの洗濯物を洗いに家に帰った。その後、帆波達がやってきた。そして帆波はスタスタとオレに近づき…

バチン！

とオレの頬を叩いた。帆波の顔を見ると目には涙がたまっていた。

帆波「もう…バカ！心配したんだから！」ポロポロ

八幡「ごめん…」

帆波「でも…」ポロポロ

そう言いながら帆波はオレを包み込むように抱きついてきた。帆波の体がダイレクトに来る。そして帆波の柔らかいものも当たる。

八幡「帆波…？」

帆波「…無事で良かったよ…」ポロポロ

そう言いながら抱きしめる力が強くなる。それと、少し震えていた。その様子からよっぽど心配してくれたんだと分かる。そんな帆波をオレも抱きしめる。

八幡「ごめん…帆波ごめん…」

帆波「ホントに…もう…」ポロポロ

帆波と抱き合うような体勢のまま、折本と仲町に視線をうつす。

八幡「折本と仲町も本当にごめん」

かおり「ホントに私達がどれだけ心配したかわかってる？犬は助かったけど、あんたが目の前で撥ねられて、私達がどれだけ泣いたか

もわかってる？」

千佳「そうだよ…でも、助かって良かったよ」

八幡「すまん…ありがとう」

帆波「うう…ひぐつ…」ポロポロ

帆波はオレの肩で泣いていた。

かおり「多分、相当あんたの事心配してたし、緊張の糸が切れたんだと思う」

八幡「そうか…彼女を泣かせるだなんて…彼氏失格だな」

千佳「そう思うなら今度から気をつけることだよ」

八幡「ああ、そうするよ」

帆波「うう…八幡…」ポロポロ

帆波はそう言いながらまたさらに抱きしめる力を強める。ちよつと苦しくなったが、これだけ心配させたんだ。オレは何も抵抗せず帆波の思うがままにした。すると、一旦家に帰った小町が戻ってきたのだ。それと瑞希も来てくれたみたいだ。

小町「お兄ちゃんって、何これ？一体どういう状況？」

瑞希「どうしたの小町ちゃん？あ、お姉ちゃん…八幡お兄ちゃん」

八幡「あく、これは…」

かおり「今は帆波のやりたいようにさせといて」

千佳「そうそう」

小町「は、はあ…まあ、でも大体は分かります」

瑞希「そうですね」

来たばかりの小町ですら分かってしまうという。さすがは小町だな。そう思いながらオレは帆波の頭を撫でる。

八幡「帆波心配かけてすまなかった。もう大丈夫だ」

帆波「うん…うん…もうこんな気持ちになりたくない。だからもう

これつきりしてよね」ポロポロ

八幡「ああ、約束する」

帆波「ホント？」ポロポロ

八幡「ああ」

帆波「じゃあ証拠としてもっと強く抱きしめて」ポロポロ

八幡「え？いや、でも折本達もいるんだぞ」

帆波「そんなの関係ないよ。だから、早く」ポロポロ

八幡「…いいのか？」

帆波「…うん」ポロポロ

これでも相当強くしてるんだがな。これ以上やったらなんだか壊れてしまいそう。でも、このまま帆波を不安にさせる訳にはいかな。だからオレは帆波の願い通り抱きしめる力を強くする。

八幡「これでいいか？」

帆波「うん…ありがとう」

安心したのか少しずつ涙が止まっていく帆波。というか折本達はなんでそんな見守るようにな目で見えるの？なんかドラ○ものの映画でよくある『暖かい目で』という目で見えてくるんだが。

そしてしばらくして、帆波は落ち着いたのかオレから離れる。

かおり「満足した帆波」

帆波「うん、もう大丈夫」

千佳「そっか、それはよかった」

瑞希「よかったねお姉ちゃん」

小町「よかったですね！」

帆波「うん、もうこれで八幡はこんな事しないって約束してくれたしね」

千佳「そうだ比企谷君。当分の間入院でしょ？」

八幡「そうだな。先生が言うには約2週間ぐらい入院だそうだが…それがどうした？」

千佳「その間私が授業のノート、とってあげるよ。その間、比企谷君勉強遅れるでしょ？」

八幡「それはありがたいが、いいのか？」

千佳「うん。でも、本当は帆波にとって欲しかったんだけど…」

帆波「私もそうしたかったけど、八幡と同じクラスになれなかったんだもん」

あらやだかわいい。でも、帆波と同じクラスでは無いのか…それは

ちよつと残念だな。ん？てことは

八幡「仲町がノートをとるということは、仲町はオレと同じクラスということか？」

仲町「うん、そうだよ。後かおりも一緒だよ」

八幡「折本も一緒ということは、帆波だけ外れてしまったということか」

かおり「そうなんだよ。帆波ったらその事で拗ねてね」

千佳「そうそう」

帆波「せっかく同じ高校したのに同じクラスになれないだなんて、ちよつと退屈だもん」

おおく、確かに拗ねてらっしやる。拗ねてる帆波もかわいいと思っ
てしまう。でも、どうやって機嫌を直してもらおうか…あ、そうだ。

八幡「なあ、帆波」

帆波「何？」

八幡「ノートは仲町に頼むけど、勉強は見てもらえないかな？ノートを写すだけじゃあやつぱ身につかないし、教えて貰える人も必要だ
なって思ってさ。それでどうかな？」

帆波「私でいいの？」

八幡「ああ、帆波にしか頼めないんだ」

帆波「私しか…うん！わかった！私が八幡の勉強見てあげる」

八幡「ありがとな」

何とかなったな。その後、面会時間がギリギリになるまで帆波達はい
いて、時間になったので帆波達家に帰って行った。

翌日、オレを撥ねた車の持ち主の人達がやってきて、謝罪をしに
来た。でも、こつちもせっかく安全運転していたのにオレが飛び出した
せいでこうなってしまったので、こつちも謝罪をした。向こうはお詫
びとして入院費など色々出してくれた。こつちも悪いのに良くして
くれた。

そしてその日から帆波に勉強を見てもらうことになった。やっぱ
り帆波の教え方は上手いな。仲町にもノートとってもらってるし、オ
レは結構助かってる。

3人がお見舞いに来てくれたそんなある日、部屋のドアをノックされた。ここは1人部屋だ。だからオレにしか来客は来ない。

八幡「どうぞ」

オレがドアに向かってそう答える。

???「失礼します。こちらは比企谷さんの病室でしょうか？」

八幡「はい、そうですが…あなた？」

雪乃「申し遅れました。私は雪ノ下雪乃と申します。そして、謝罪に来るの遅れてしまい申し訳ございません。入学式の時に私どもの不注意で比企谷さんに怪我をおわせてしまい申し訳ございません」
そう言って頭を下げて謝罪をする雪ノ下。

八幡「えつと…この前来た人にも言ったが、オレも急に道路に飛び出したのが悪い。だからそんなに気に病むことはない」

雪乃「そう…そう言って貰えるとありがたいわ。でも、なにかお詫びをしたいわ」

八幡「いや、そんなのは良い。入院費など色々してもらったからな。それだけで十分だし、それに雪ノ下は車に乗ってただけだろ？」

雪乃「ええ」

八幡「そんな乗ってただけの奴にお詫びをさせる訳にはいかない」
雪乃「それでは私の気が済まないわ」

これは引く気がないな。一体どうすればいいんだ…

八幡「じゃあ…オレ達と友達になってくれないか？」

雪乃「え？」

八幡「いや、そんなお詫びとかはいらないからさ。雪ノ下さえ良ければオレ達と友達になってくれないか？帆波達もどうだそれで？」

帆波「うん、そうだね。私はそれでいいよ」

かおり「私も」

千佳「私も」

雪乃「そんなので良いの？」

八幡「ああ、3人もこういつてるんだし良いぞ。で？どうだ？」

雪乃「…私で良ければ友達になってください」

帆波「ふふっ」

雪乃「え？」

帆波「あ、ごめんね。さつき雪ノ下さんが言ったのが初めて八幡と友達になった時と同じだったから」

雪乃「そう…なのね」

帆波「あ、でも友達にはなりたい」

かおり「私も」

千佳「私も」

雪乃「そう…ならよろしくお願いします」

まさかの敬語。もしかして雪ノ下って今まで友達いたことないとか？

帆波「うん、よろしくね雪乃ちゃん」

雪乃「え？名前？」

帆波「友達になるんだからいいでしょ？」

かおり「そうそう、いいじゃん」

千佳「もし、ダメなら良いけど」

雪乃「いえ、別にかまわないわ。ちよつと驚いただけだから。それ

と私の事は好きないように呼んでくれていいわ。と、友達なのだから」

帆波「…かわいい」

雪乃「え!?!」

かおり「確かにさっきのは可愛かったね」

千佳「そうだね」

雪乃「も、もう…やめて…ひ、比企谷君…止めて」

そんなウルウルした目で見ないで。でも、3人がこうなったらもう止めれない

八幡「…耐えろ。そのうちおさまる」

雪乃「そ、そんな…」

その後、帆波達は雪ノ下を弄りまくった。というより色々質問とかをしていた。時々オレにも話を振られて、答えたりした。そんな感じで高校生活で初めての友達ができた。出会いは事故がきっかけだが、そんなの関係なしで普通に友達になった。

第6話

八幡 side

あれから雪ノ下も入院中のオレの勉強をたまに見てくれるようになった。聞いたところによると、全科目1位という。いや、めっちゃ頭良いな。しかも帆波と同じくらい教えるの上手いし、色々助かった。それから小町や瑞希にも紹介すると、すぐに仲良くなりやがった。いや、君達ホントにすごいコミュ力高いね。ビックリしてるよ正直。そんな感じであつという間に退院できた。

そして…

帆波「とうとう八幡も今日から学校に行けるね」

八幡「ああ」

帆波「緊張する？」

八幡「いや、別に」

かおり「へえくそうなんだ」

千佳「でもなんで？」

八幡「いや、だってお前らがいるから安心だなんて思ってた」

帆波「…八幡、そんな事言われたら嬉しいけど、急だと困るよ」

かおり「ほんとね」

千佳「うん」

ええく、なんで？ホントの事言っただけじゃん。

帆波「でも、そっか。私達がいるから安心するんだ」

八幡「ああ」

そんな他愛もない会話をしながら学校へと向かう。そして、下駄箱に着くと…

雪乃「あら、おはよう比企谷君、一之瀬さん、折本さん、仲町さん」
雪ノ下と会って挨拶された。

八幡「おう、おはよう雪ノ下」

帆波「おはよう雪乃ちゃん」

かおり「おはよう！」

千佳「おはよう」

雪乃「とうとう今日から学校に来るのね」

八幡「ああ、やっとだ」

雪乃「そう、良かったわね」

八幡「ああ」

帆波「じゃあ私自分のクラスに行くね。また、お昼になったらそっちに行くから」

八幡「おう、わかった」

かおり「じゃあまたお昼ね帆波」

千佳「またお昼にね」

帆波「うん。よし、じゃあ雪乃ちゃん行こ！」

雪乃「わ、わかったから引つ張らないで」

と帆波は雪ノ下を連れて行つた。

八幡「もしかして帆波は雪ノ下と同じクラスなのか？」

かおり「うん、そうだよ」

八幡「へえ」

千佳「じゃあ私達も教室に行こ」

八幡「おう」

かおり「そうだね」

オレは折本と仲町のあとを着いていき、自分の教室まで向かった。

かおり「あ、比企谷の席そこだから」

折本が指さす方向には誰も座ってない席があった。なるほど、ここか。

八幡「サンキュ」

オレは自分の席に座る。すると右隣には仲町が座った。あれ？もしかして…

千佳「比企谷君の隣は私だよ」

八幡「そうだったのか。よろしくな」

千佳「うん」

かおり「私も比企谷の隣だよ」

八幡「マジか…」

かおり「マジだよw」

八幡「そうか、折本もよろしくな」

かおり「うん、よろしく」

まさか折本と仲町が隣同士の席だったとはな。思ってもなかったぜ。それから担任の先生が来て、オレはクラスの人達に自己紹介した。何とか噛まずに言えて良かった。その後の授業では、帆波達のおかげで難なく受けることができた。もし、帆波達と出会ってなかったら、授業に追いつけず絶望してたかもしれないな。ホント帆波達には今度何かお詫びしないとな。

そんな感じで昼休みになると帆波がオレ達のクラスのやつてきて、4人で弁当を食べるので、オレ達3人の机をくつつけて、イスは余っている物を1つ持ってきて、そのイスを帆波が座る。当然オレの隣だ。折本と仲町は向かいの席に座る。雪ノ下は用事があるそうだ。

帆波「じゃあ」

4人「二「いただきます」」

帆波の合図でオレ達は手を合わせて、そう言って弁当を食べる。オレの弁当は小町が作ってくれている。中学に上がったことにより、包丁などが使えるようになり、母ちゃんそれに帆波にも教わりそれで料理の腕がメキメキ上達した。

帆波「やっぱ小町ちゃん上手くなったね」

八幡「ああ、これも帆波のおかげだな」

帆波「そんなことないよ。小町ちゃんが頑張った成果だよ」

八幡「そっか」

帆波「うくん、でも小町ちゃんも忙しい時はどうするの?」

そうだな。アイツ生徒会に入ってるから、作れない時もある。その時は作って貰えないな。

八幡「そうだな。まあ、そんな時は購買で適当に買って済ませようかなって思ってる」

千佳「それだと栄養かたよるでしょ?」

八幡「まあ、そうだな」

帆波「そ、それじゃあ…私が作るよ!」

八幡「え? 帆波が?」

帆波「う、うん」

八幡「いいのか？」

帆波「うん、八幡さえ良ければ小町ちゃんが忙しい時…ううん、毎日作るよ」

八幡「ま、毎日？でも、悪いってそれは」

帆波「ううん、私がやりたいの！」

八幡「…じ、じゃあ、頼んでもいいか？」

帆波「うん、まさせて！」ニコツ

う、その笑顔は卑怯ですよ帆波さん。

かおり「おやおやお、お二人さんお熱いですなあ〜」ニヤニヤ

うわあ…うぜえなあ顔。しかも言い方がおばさんみたいだな。

千佳「なんかおばさんみたいな言い方だねかおり」

かおり「な！誰がおばさんよ千佳！」

千佳「いや、言い方がおばさんって言ったのよ」

帆波「確かにおばさんみたいな言い方だったね」

八幡「だな」

かおり「ちよつと皆してひどい！」

3人「「あはははは」」

かおり「笑い事じゃあないよ！」

そんな感じで弁当を食べ終わり、午後の授業も難なく受けることができた。でも、ある日オレが帆波達と一緒にいる時だった。多分帆波のクラスメイトであろう人達がやってきた。

「ねえ、一之瀬さん達。その人は一之瀬さん達の知り合い？」

かおり「友達だよ」

千佳「私も」

「へえ〜、一之瀬さんは？」

帆波「彼氏だよ」

「え？一之瀬さんの彼氏!？」

「この人が前に言ってた人か〜」

「へえ〜、中々かっこいいね」

帆波「でしょ？」

え？何？帆波もしかしてオレが入院中に何言ったの？

かおり「比企谷心配しなくてもいいよ。この人達は大丈夫だから」
千佳「そうだよ」

八幡「い、いや、別に心配してないけど、オレが入院中に何言ったのかな…って思ってたな」

かおり「なんだそんな事か。なら、心配いらないよ。だって帆波、比企谷の事自慢してたもん」

千佳「そうだね」

八幡「え？」

帆波「ちよっ?!かおり!？」

「あゝ、確かに自慢してたね」

「うんうん」

「そうだね」

帆波「え、ちよっ!皆まで!？」

えっと…帆波は一体どんな事言ったんですか？

「あの時の一之瀬さんの顔すごく真っ赤だったもんね」

「うんうん」

「彼氏さんの事すごく嬉しそうに話してたりもしてたもんね」

かおり「あの時の帆波、すごく可愛かったよ」

千佳「そうだね。あの時、比企谷君のために写真撮っとけば良かったよ」

帆波「うう…みんなやめて…お願いだから／＼／」

そう言いながらオレの後ろに隠れる帆波。しかもみんなに言われて恥ずかしいのか、若干顔が赤いような気もする。

八幡「ほ、帆波?」

帆波「いや…今はこっち見ないで…は、恥ずかしいから…／＼／」

八幡「お、おう」

さらに顔を隠すようにオレに密着する帆波。それにより、オレの背中に2つ柔らかい物が押し付けられる。ちよっとうれしいが折本がすげえニヤニヤしながら見ていて、半分腹が立つ。

八幡「もう、そのぐらいにしといてやれ。でないと帆波がまたねえ

よ」

かおり「そうだね。もうやめとくよ」

千佳「そうだね。帆波にも悪いし」

「確かにそうだね。ごめんね一之瀬さん」

「私もごめん」

「私もごめんね。つい、からかいたくなってしまうっちゃったよ」

八幡「だつてさ」

帆波「う、うん、いいよ。別に気にしてないから」

そう言つてオレの後ろから出てくる。どうやら落ち着いたみたいだ。でも、まだ顔が赤いような気もするけど、気のせいかな？

「じゃあ私達行くね」

「またね一之瀬さん」

「また明日ね」

帆波「うん、また明日ね」

そして帆波のクラスメイトと別れる。なんかすごい奴らだったな。でも、確かに帆波達の言う通り、心配はいらないみたいだな。

八幡「じゃあ帰りますか」

帆波「そうだね」

さつさと帰る準備をして家に帰るため学校から出る。でも、最近まで入院してたからなのか、体が少しなまっちゃったな。

八幡「フウ…」

帆波「?どうしたの八幡」

八幡「いやな、この間まで入院してただろ?それでこの前体育のとき、すぐ息切れしてしまつてな、体がなまっちゃつたつて思つてさ」

帆波「そうなんだ」

かおり「確かに確かに体育の後の比企谷、なんだか疲れてる様子だったの覚えてるよ」

千佳「私も」

八幡「約1ヶ月ぐらい寝てたからな。多分それでなまっちゃつたんだろう」

帆波「それじゃあさ、今度の休み一緒に運動しない?」

八幡「え？」

帆波「だから今度の休み一緒に運動するの。体がなまった八幡を治すために」

かおり「あ、それいいね」

千佳「確かにいいかもね。それに私も運動しなきゃって思ってたところだし」

かおり「ん？そうなの？」

千佳「まあちよつとね」

帆波「よし、だったらみんな一緒にやろうか」

八幡「オレはそれで良いけど：一体何するんだ？」

帆波「そうだね、どこかの運動施設にでも行こっか」

八幡「そうだな。折本と仲町もそれでいいのか？」

かおり「うん、いいよ」

千佳「私もそれでいいよ」

帆波「じゃあ今度の休みにみんな一緒に行こうか」

と言うわけで今オレは帆波達と運動施設にいる。体がなまったオレの為に帆波達は付き合ってくれ。と言っても帆波達も運動しなかったらしいがな。そんな感じで準備運動も終えて、次に何かしらのスポーツをするのだが：

八幡「で？何するんだ？」

かおり「色々あるみたいだけど、どうする？」

千佳「ホントだ。結構色んなところあるんだね」

帆波「ホントだね。よし早速これしようか」

と帆波が指を指したのは：

かおり「テニス？」

帆波「うん、どうかな？」

千佳「良いと思うよ」

八幡「オレもそれでいいぞ。折本はどうする？」

かおり「うん、いいよ」

帆波「よし、じゃあ早速移動しようか」

八幡「そうだな」

オレ達はテニスコート場へと移動する。そこには他にもテニスコートを使ってる人達がいる。まあ、当たり前だけどな。空いているテニスコートに入り、テニスの準備をする。

八幡「どうする？2対2にするか？」

かおり「そうだね。人数的にそうするしかないよね」

千佳「そうするならチーム分けどうする？」

帆波「んん、そうだね。どうしよつか」

かおり「それはやっぱり、帆波と比企谷。私と千佳でいいんじゃない？」

八幡「え？それだと折本と仲町が不利なんじゃ…」

千佳「私は別にそれで良いけど」

ええ、本当にいいの？体なまってるとはいえ、男であるオレがいる方が有利なんじゃあ…

帆波「だったらローテーションしながらやったらどう？」

かおり「あ、なるほど。それなら全員とチーム組めるし良いかもね」

千佳「じゃあそうしよつか」

八幡「そうだな」

帆波「よし、じゃあやろうか」

帆波の掛け声でテニスを始める。最初のペアはさつき言ってた通り帆波だ。向こうは折本と仲町ペア、全員合わせると4人なのだが、男1人、女3人というね。周りからしたら、羨ましい光景である。でももしここに雪ノ下を入れれば女は4人になってしまう。そうなのでしまったら、オレはハーレムでも作ってるのではと勘違いさせるのではないだろうか。

そんなことよりテニスだテニス。と言っても真剣勝負ではないので、かるーくやる感じでやっている。それにしても、結構くるな。これは良い運動になる。

帆波「よっ」

かおり「それ」

八幡「ほい」

千佳「えい」

こんな感じで各々ボールを相手方に返していく。それと得点も取ったりしている。それからはペアを変えたりしてテニスを楽しんだ。そして一通りやったオレ達は椅子に座る。

帆波「フウ：」

かおり「疲れた〜」

千佳「そうだね」

八幡「こんなに運動したの初めてだな。明日多分筋肉痛だろうな」

帆波「八幡はあんまり運動してないからでしょ？」

八幡「ひでえ：」

かおり「でも私もなりそう」

千佳「多分私もなりそう」

八幡「それで帆波はどうなんだ」

帆波「にやはは：多分私も筋肉痛になりそう」

やっぱりか：帆波も運動神経は良くもないし、悪くもない。言わば普通と言えればいいだろう。オレも普通ぐらいだ。折本はあんましなさそうだしな。仲町は折本よりかはあるだろう。

かおり「あく、もう動けなくい」

千佳「あはは、私もだよ。これじゃあテニスだけで終わってしまうね」

八幡「そうだな」

帆波「じゃあ終わりにしようか」

かおり「さんせ〜い」

千佳「そうだね」

帆波「八幡もそれでいい？」

八幡「ああ、良いぞ。オレももう動きたくない」

帆波「あはは、八幡らしいや」

いやもうホント疲れたよ。こんなに動いたの初めてだ。そして、オレ達は運動施設から出て家に帰る。

八幡「久々に良い運動したわ〜。ありがとな」

帆波「どういたしまして。私も良い運動になったし」

かおり「私も」

千佳「私も」

八幡「そっか、それなら良かった」

帆波「でも今度は雪乃ちゃんも一緒に行こうよ」

かおり「おっ、それいいね」

千佳「そうだね。今日は用事があるから無理だったけど、今度は予定のない日に誘おうか」

八幡「そうだな」

それからは時々こんな感じで運動をする事になった。雪ノ下も誘ってやるのだが、雪ノ下は相当負けず嫌いらしく、自分に得点が入ると小さくガッツポーズをとっていた。運動の他にもカラオケとかにも行った。雪ノ下や帆波、歌上手いな。カラオケの他にもシヨツピングなどにも行ったりして楽しんだ。

勉強も帆波や雪ノ下に見てもらったおかげで、成績はいい感じに上がっている。数学なんて中学の時に1桁とかだったのが、今じゃあ70点以上も取れるようになった。いや、ホントここまで苦労したわ。雪ノ下は帆波以上に厳しく教えるので、すごく苦労した。折本も成績は上がったが、何度も頭パンクしかけてた。仲町も成績は上がったが、仲町もかなり苦労した。帆波は元々成績は良かったで、苦労しなかったらしい。

そんな感じで楽しい1年を過ごした。

そして2年になって早々オレは職員室に呼び出されていた。誰に呼び出されたかと言うと、生活指導の先生で国語の教師の平塚教諭である。え？なに？何したんだって？こっちが聞きてえよ。

平塚「なあ、比企谷。私が授業で出した課題は何だったかな？」

八幡「はあ：『高校生活を振り返って』というテーマだったかと思えますが」

平塚先生は少し呆れた口調で言ってくる。オレは正確に答える。すると、平塚先生は手を頭にそえて、頭痛いポーズをとってくる。

平塚「だったらこの作文はなんだ？」

なんだと言われましても、確か帆波や折本、仲町と出会えた事と帆波と付き合えた事を書いたような。

八幡「いや、何かおかしかったですか？」

平塚「いや、おかしくはないがな、もうこれは中学生生活を振り返ってないか？」

八幡「そうですか？」

平塚「ああ、もうほとんど中学の事しか書いてないぞ」

八幡「はあ…」

平塚「それに本当に友達とか彼女がいるのか？そうには見えないが」

おっと、これは聞き捨てならないな。

八幡「そこで見栄を張るような子供じゃあないですよ」

平塚「妄想か？二次元か？」

ホント失礼だなこの人。そんなことしてるから結婚できん…と考えているとオレの顔を掠めるような感じで平塚先生の拳が通り過ぎた。

平塚「比企谷。今なにか失礼な事考えてなかったか？」

なんでわかるんだよ、エスパークだよ。ていうか早っ！どんだけ早いんだよこの人。

八幡「い、いえ。そんな事はありません」

平塚「そうか？ならいいが…」

内心ホツとする。あぶねえく、危うくバレるところだったわく。すると、職員室の扉が開き…

帆波「失礼します。比企谷八幡君はいらっしゃいますか？」

と帆波の声が聞こえた。多分オレが来るのが遅いから迎えにでも来たのだろうか。

平塚「おお一之瀬か。比企谷ならここにいるぞ、どうした？」

帆波「あ、八幡いた。ほらかおり、千佳、八幡いたよ」

千佳「あ、ホントだ」

かおり「比企谷く。遅いよ何してるの？」

八幡「お前ら…どうしたんだよ」

帆波「八幡が中々来ないから迎えに来たの」

八幡「そうか、それは悪いな」

「どうやらオレの予想は合っていたらしい。」

平塚「ん？なんだ、お前らは知り合いなのか？」

八幡「ええ、さっき言ってた友達と彼女ですが」

平塚「なっ…本当だったんだな」

八幡「だから言ったでしょ」

平塚「そうか…それでどっちが比企谷の彼女なんだ？」

帆波「私です」

平塚「そうか…一之瀬か…クソ、生徒に先越されるとは…」

帆波「それでなんで呼び出されたの？」

八幡「国語の授業で出された作文の事で呼び出された」

帆波「作文で？」

八幡「ああ」

かおり「何書いたの？」

平塚「ここにあるぞ。読むか」

「ちよつと平塚先生!?何勝手に人の書いた作文を渡しちゃうの？」

千佳「ありがとうございます」

と仲町がオレの書いた作文を受け取る。それを横から見ようと、仲

町の左右に帆波と折本が覗き込んで読む。

3人「…」

3人は真剣に作文を読む。

3人「!!」

3人は驚いた顔になる。

帆波「ちよつ八幡！」

八幡「な、なんだ？」

帆波「こ、こんなの書いて提出したの？」

八幡「そうだけど…」

かおり「こんな恥ずかしいの書いて提出するなんて…」

千佳「うん…気持ちは嬉しいけど…やっぱり恥ずかしいよね」

帆波「うん…」

かおり「私や千佳の事書かれてるけど、ほとんど帆波よね」

千佳「うん、そうだね」

やっべえ…今気づいたけど、確かにほとんど帆波の事しか書いてないな。オレって帆波の事好き過ぎだろ。どんだけ好きやねん。まあ、確かにオレは帆波に大好きだと言ってるしな。でも、それだけでこんなにも書くのかよ。

帆波「／／／」

帆波の方を見ると顔を赤くして下の方を見ている。何このかわい
い生き物。

八幡「……」

なんて声をかければいいのか……なんかこつちまで顔が赤くなり
そうさ。

平塚「イチャイチャするな！」

その声でオレと帆波は我に返る。

平塚「はあ…まったく。とりあえず作文は書き直しだ。それと君に
はペナルティとして奉仕活動してもらおう」

はい？なんか面倒くさそうだなあ。

平塚「拒否権はない」

な、なんて横暴な。作文書き直しだけで良くない？でも、今度は本
当に殴られそうなので。

八幡「ハア…わかりました。それでどうすればいいんですか？手短
にお願いします。帆波達を待たしてるので」

平塚「それなら一之瀬達も着いてくるといい」

帆波「いいんですか？」

平塚「ああ」

帆波「わかりました。じゃあ私達ついて行くね八幡」

八幡「お、おう」

え？ホントに着いてくるの？別に着いて来なくても良くない？玄
関で待っててくれればいいのに。そして、オレ達は平塚先生の後を着
いていき連れてこられたのは特別棟の奥の方の教室で、その教室のプ

レートには何も書かれていない。

すると先生は教室のドアをガラリと開ける。

「平塚先生。入るときにはノックを、とお願いしているのですが」
何やら聞き覚えのある声だな。

平塚「そういつて君は返事をした試しがないじゃないか」

「返事する間もなく先生が入ってくるんですよ」

それもそのはず。その声の主は1年前、オレと帆波達の友達になった人物。雪ノ下雪乃なのだから。

雪乃「それで今日はって、比企谷君？それに一之瀬さん達まで」

帆波「あ、雪乃ちゃんだ」

かおり「あ、ホントだ」

千佳「聞き覚えのある声だなと思ったら」

雪乃「それでどうしたの？」

八幡「平塚先生に連れてこられたんだ」

雪乃「何したの？」

八幡「おい、待て。オレが何かしたという前提で聞くな」

雪乃「違うの？」

八幡「いや、まあそれは…当たらずとも遠からずというか」

雪乃「それで結局なんの用ですか平塚先生」

平塚「あ、ああ。実は…というよりお前ら知り合いか？」

帆波「雪乃ちゃんと私達は友達です」

平塚「!?…そうなのか？雪ノ下」

雪乃「ええそうですよ」

平塚「そうか…あ、用事というのはな、今日比企谷をここに入部させに来たんだ」

八幡「はい？」

平塚「これから君には舐めた作文書いた罰としてここでの部活動を命じる。異論反論抗議口答えは一切受け付けない」

八幡「いやいや、それはさすが横暴すぎるでしょ」

帆波「そうですよ先生」

雪乃「確かにいくらなんでもそれはないと思いますよ先生」

帆波と雪ノ下の意見を聞いた平塚先生はため息をついた。いや、こつちがつきてえよ。

平塚「じゃあこうしよう。比企谷、君には雪ノ下の補佐をしてもらう」

八幡「補佐？」

平塚「なーに。これからも依頼はくるだろう。そこで雪ノ下が一人じゃ抱えきれない問題がくるかもしれない。そこで、比企谷に補佐をやらせる。拒否権はない」

くつ「マジかよ……何が拒否権はないだ。でも……」

八幡「ハア：わかりました。やります」

かなり横暴だが、逆らったら殴られそうだからな。いくら教師でも殴ったらダメだろう。

平塚「そつかそつか。引き受けてくれるか」

うんうんと頷きながら言う平塚先生。すると……

帆波「先生。私も入部していいですか？」

え？帆波もこの部活に入部するの？まあ、確かにオレ達は部活に入っていないけど。ホントに入るの？

かおり「じゃあ私もいいですか？」

千佳「私も」

平塚「ああ、良いぞ」

3人「「ありがとうございます」」
いいのかよ。

帆波「これからよろしくね雪乃ちゃん」

かおり「よろしく」

千佳「よろしくね」

と帆波達は雪ノ下に次々と行っていく。あ、これオレも言わないといけないパターンだ。

八幡「よろしく」

雪乃「ええ、よろしく。あなた達4人の入部を歓迎するわ」

こうしてオレと帆波達は高校生活2年目にして、雪ノ下が所属する部活に入部することになった。

第7話

八幡 side

今日は部活に入らされてた。その部活は雪ノ下が所属していた。ほとんど強制的に入らされたが、帆波達も入ることになった。その後は挨拶みたいなので済まし、今日は終わりで家に帰るだけとなった。その帰り道

帆波「でもまさか高校2年で部活をするとは思ってもなかったね」

八幡「そうだな。しかも雪ノ下がいるなんてな」

かおり「そうだね。ビックリしたね」

千佳「うん」

まあ、でも帆波達がいるならまた一緒に帰れるし良いかな。もし、オレだけ入ってたら一緒に帰れなかったな。でも、帆波達と一緒に部活するのもいいかもしれないな。

帆波「あ、やっぱり私達と一緒に帰れなくなるのがそんなに嫌だったんだね」

八幡「なっ!」

なんでわかるんだよ、エスパーかよ。

帆波「見てれば分かるよ、ね?」

かおり「うん」

千佳「比企谷君って結構わかりやすいよね」

な、なん…だと。そんなにもわかってしまうのか?

帆波「もう、私達それなりの付き合いだよ。それぐらいわかるって」

八幡「さいですか」

帆波「うん、それに一緒に部活するのもいいかもって思ってるし、一緒に帰るのも嬉しいんだから」

八幡「…そっか」

それからしばらく歩いて、それぞれの帰り道に別れる。

帆波「また明日ね」

かおり「うんまた明日」

千佳「じゃあね」

八幡「おう、また明日」

そしてオレは家に帰った。

八幡「たでーま」

小町「あ、おかえりお兄ちゃん」

リビングからひよこつと出てきた小町が返事する。

小町「今日は遅かったね。また帆波お姉ちゃん達とどっかに寄ってきたの？」

八幡「ん？いや、部活入った」

小町「ふーん、部活入ったんだ…って部活!？」

おお、なんともノリツツコミみたいな感じで驚いている小町。

小町「ど、どどどどうしたのお兄ちゃん!?!部活なんて!お兄ちゃんが部活をするなんて天変地異の前触れなの!?!」

八幡「ひでえ…」

なんでオレが部活に入っただけで天変地異が起きるんだよ。というかどこで覚えたんだよその言葉。

八幡「まつ、言ってもペナルティーって言って強制入部になってしまつてな」

小町「なーんだ、そういう事か」

急に態度変えたなこいつ。

八幡「まあ、そういう事だから帰り遅くなる」

小町「ん?という事は帆波お姉ちゃん達ともう一緒に帰らないの？」

八幡「いや、帆波達も入る事になつてな」

小町「へく、つてことはまた一緒に帰ってくるんだね」

八幡「そうだな」

小町「どんな部活なの？」

八幡「あ、聞くの忘れた」

小町「なにやっつてんのさ」

八幡「聞く暇がなかったんだよ。あ、でもその部活に雪ノ下がいたぞ」

小町「雪乃さんが？」

八幡「ああ、オレ達が雪ノ下が所属する部活に入った形になったんだ」

小町「へ〜」

八幡「ま、とりあえず飯にしようぜ」

小町「わかった。準備しとくから着替えてきて」

八幡「はいよ」

その後着替えて小町の作った飯を食べた。でも、ホントなんの部活なんだろう。そんな事を考えながら本を読んでいると、睡魔が襲ってきたので寝た。

翌日

いつも通り帆波達と一緒に登校する。他愛もない会話をしながら学校へ向かった。そして、昼休みいつものように帆波がオレ達のクラスにやってくる。帆波の手には2つの弁当箱を持っていた。それは……

帆波「はい、八幡お弁当」

八幡「おお、ホントに作ってくれたのか？」

帆波「うん、私がやりたかっただけだし、それに八幡に食べて欲しかったから」

そう言われると嫌な奴なんていない。ありがたくいただくとするか。

八幡「サンキュ、じゃあいただくわ」

帆波「うん！」

帆波から弁当を受け取り、蓋を開ける。弁当の中は栄養バランスが考えられており、なんとも美味しそうなものばかりだった。そして早速、弁当の中の1つ玉子焼きをいただくことにした。玉子焼きを口の中に運ぶ。

帆波「ど、どう…かな？」

八幡「うん、前も食べた事あるけど美味しいぞ」

帆波「ホント!?!良かった〜」

安心したのかそつと胸撫で下ろし、ニツコリ笑う帆波。うん、かわいいな。

かおり「そりやあなんてたつて愛妻弁当だもんね」
それを聞いたオレはむせてしまった。

帆波「ちよっ！かおり!?／＼／＼」

八幡「お、お前な」

かおり「あつははは顔赤いよ帆波」

帆波「も、もうく…ていうか私達はまだ結婚してないんだからね」

あ、それを言ってしまったら…

かおり「あ、”まだ”なんだ」

帆波「あつ…ううく…／＼／＼」

帆波は恥ずかしいのか両手で自分の顔を隠している。オレも片手で顔を隠すようにする。それを見た折本はニヤニヤしている。ホントこいつ腹立つな。

千佳「もうかおり、それぐらいにして私達も食べよ」

かおり「うん、そうだね」

八幡「オレ達も食べるか」

帆波「うん…そうだね」

少しまだ顔が熱いが帆波が作ってくれた弁当を食べ進める。そんな時、昨日事を思い出し。

八幡「そういえばオレ達まだどんな部活か聞いてなかったよな」

かおり「あ、そういえば」

帆波「そうだね」

千佳「確かに聞いてないよね。どんな部活なんだろう。今日の放課後にでも聞く？」

八幡「そうだな。行かないと平塚先生に何されるかわからねえしな」

千佳「行く理由はそれなんだ」

と苦笑しながら言われた。だってあの人すぐ殴ってくんだよ。教師としてどうなんだよ。でも、いい教師なのにそれが原因で残念にしてるよな。

そして時は過ぎホームルームが終わり、オレと折本と仲町は教室を

出ると、平塚先生が仁王立ちで待っていた。いや、あんた暇かよ、仕事どうした？

平塚「さあ、比企谷部活の時間だ」

あゝ、なるほど。この人はオレがサボらないようにしてたんだな。やっぱり暇じゃん。

八幡「いやいや、最初から行くつもりでしたよ。それに折本達がいるのにどうやってサボるんですか」

するとうんうんと頷き始める平塚先生。ええ、何この人、オレが言うのもなんだけど気持ち悪いよ。

平塚「そうかそうか、それなら良い。精一杯励めよ」

と言って去って行った。ホント、あの人暇人かよ。

八幡「さて、じゃあ行きますか。帆波も先に行ってるそうだし」

かおり「そうだね」

千佳「うん」

オレ達は部室のある特別棟へと向かった。向かう間も他愛もない会話をしながら向かう。そうこうしてるうちに部室に着いたのでオレは部室のドアを開ける。

八幡「うつつ」

かおり「おいつす！」

千佳「かおり何そのあいさつ。こんにちは」

雪乃「こんにちは」

雪ノ下は昨日と同じで窓際に近いところで座っていた。

帆波「あ、みんなやつと来た」

そう言っただけでオレ達に軽く手を振っていた。帆波は雪ノ下少し離れた場所に座っている。さて、どのようにして座ろうか。

かおり「よし、とりあえず比企谷は帆波の隣ね」

八幡「え？」

オレが悩んでいると折本が勝手に決めてくる。

千佳「うん、それがいいと思う」

かおり「ほら、千佳もこう言ってるんだし、早く座る」

そう言いながら押しにくる。意外と力お強いんですね折本さん。

八幡「わかつたわかつた。座るから押すな」

折本の言う通りオレは帆波の隣に座る。折本はオレとは反対側の帆波の隣に座り、仲町はその折本の隣に座る。

八幡 折伸 雪

机

という感じの席順で座る。というかホント何も無い部屋だな。あるのは机と今座っているイスとか、前には黒板があるぐらいかな。一体何をすれば…あ、聞かないといけないことがあったんだ。

八幡「なあ、雪ノ下。この部活は何部なんだ？一体どんな活動をしてるんだ？」

雪乃「え？平塚先生に聞いてないの？」

八幡「ああ、無理やりここに連れてこられたからな、何も聞いてないぞ」

するとハアと深いため息をつく雪ノ下。

雪乃「まったく…入部させるんだったら、説明するのが筋つてもんじゃないかしら」

コメカミに手を当てて、頭痛いポーズを取りながら言う雪ノ下。いや、ホント適当すぎだろまったく。

雪乃「そうね、この部活は、持つものが持たざる者に慈悲を与える。人はそれをボランティアと呼ぶの。途上国にはODAを、ホームレスには炊き出しを、モテない男子には女子との会話を。困っている人に救いの手を差し伸べる。それがこの部の活動よ。ようこそ、奉仕部へ。歓迎するわ」

腕を組み立ち上がり言い放つ。

かおり「へく、なんか凄そうな部活だね」

千佳「そうだね」

帆波「奉仕部…それがこの部活の名前なんだね」

雪乃「ええ、そうよ」

なるほどな。ボランテティアみたいな感じだけど、ちよつと違うんだな。

八幡「活動内容はわかったが、その依頼が来るまで何すればいいんだ？」

雪乃「何をしてくれても構わないわ。読書に勉強、娯楽、基本自由よ」

へく、部活だからどんなのか心配していたが、そんなのは必要なかったみたいだな。

かおり「ふーん、じゃあその依頼が来るまでしゃつべっててもいいというわけ？」

雪乃「ええ、そうね」

八幡「折本は勉強した方がいいんじゃないか？」

帆波「そうだね。かおりの成績は低くはないけど、もっと勉強した方がいいよね」

かおり「え!?!私だけ!?!」

八幡「そりゃあお前、この中で1番成績低いんだから」

かおり「ひどい!?!」

だって実際そうだろ? 因みにこの中で1番成績高いのは雪ノ下だ。で、その次に帆波、オレ、仲町、折本、という順番となっている。

八幡「安心しろ、冗談だ」

かおり「もう…」

帆波「もし、分からないところがあったら言ってね。私で良ければ教えるよ」

かおり「ありがとう帆波」

と言いながら帆波に抱きつく折本。おいコラ、何ユリユリを発動させてんだよ。帆波も帆波で折本の頭を撫でている。

八幡「まあ、テストが近づいたら勉強でもしたらいいかもな」

千佳「確かにね」

その後も他愛もない会話をしながら過ごしていたが…

コンコン

と部室のドアをノックする音が聞こえる。すると、雪ノ下は姿勢を

正して返事する。

雪乃「どうぞ」

雪ノ下の声でドア開かれる。

??? 「失礼しまゝす」

そう言つて入つてきたのは、1人の女子生徒だ。肩までの茶髪に緩くウェーブを当てて、歩くたびにそれが揺れる。というかコイツの格好今時のジョシコウセイみたいだな格好だな。よく見かけるよ。短めのスカートに、ボタンが三つほど開けられたブラウス、覗いた胸元に光るネックレス、ハートのチャーム、明るめに脱色された茶髪、どれも校則を完全に無視した出で立ちだった。そんなことを思つていると、彼女はオレを見てびっくりしたのか、後ずさりした。うん、懐かしいなその感じ、今はメガネをかけてるからそんなのなかったけど。でも、なんで? そんなに変なのか?

??? 「な、なんでヒツキーがここにいの!？」

は? ヒツキーってオレのこと? 今まであだ名で呼ばれたことなかったからな。とその前にこいつは誰?

雪乃「由比ヶ浜結衣さんね。どうぞ、そこに腰をかけて」

雪ノ下はオレ達のいる反対側のイスに誘導する。というかホントにコイツ誰なの? コイツなんでオレの事知ってるんだ?

帆波「八幡の知り合い?」

八幡「いや、まったく知らん」

結衣「はあ!?! 同じクラスじゃん信じられない!?!」

オレにしたなら、初対面の人に対して、引きこもりみたいなあだ名つける方が信じられないよ。

かおり「比企谷、同じクラスなのになんで知らないの?」

千佳「そうだよ」

どうやら折本と仲町は知っているらしい。そりやあそつか。なぜなら折本と仲町は去年と同じで、クラスが一緒なのだ。帆波は残念ながら同じクラスになれなかった。同じクラスになれなくて帆波は頬を膨らませながら拗ねていた。あの時の帆波も可愛かったな。

結衣「あ、かおりん(折本)に仲つちゃん(仲町)じゃん。やつは

ろー」

かおり「あ、うん。やつほー由比ヶ浜さん」

千佳「うん、由比ヶ浜さん」

折本と仲町は由比ヶ浜の事さんで呼ぶという事は、少なくとも友達ではなく、クラスメイトととして接しているみたいだ。

雪乃「比企谷君、あなたね：クラスメイトの名前ぐらい覚えてたらどうなの？」

八幡「別にクラスメイトだからって、覚えなといけなという理由はない。それだったら勉強の1つや2つでも覚えるわ」

結衣「なにそれ意味わかんない!? キモイ! 死ねば?」

と由比ヶ浜は言った瞬間、周りの空間が凍りつくような感じになる。この空気にした主は、オレの隣に座る我が彼女、一之瀬帆波からだっただのだ。顔はすごく怒っている様子で手も握って少し震えていた。ヤバイ! 帆波を停めなくてはと思ったが時すでに遅し、帆波は席から立ち上がり。

帆波「由比ヶ浜さん：だっけ?なんで初めて会う八幡にそんな酷い事言うの?」

氷のような冷たい声と眼差しで由比ヶ浜に向ける。だが：

結衣「はあ!?だってヒツキーがクラスメイトの名前覚えてないのが悪いんじゃない!」

と何故か逆ギレしてくる由比ヶ浜。いや、確かにオレもクラスの事何一つ覚えようとしてないのも悪いけどね。

帆波「確かにクラスメイトの事を覚えようとしてない八幡も悪いかもしれない。けど、キモイとかないんじゃないの?しかもその後、人に向かって死ねって言ったよね?死ねは言わなくても良くない?なんで死ねって言ったの?」

結衣「だって本当の事だもん!」

おい、それを言ったらオレは死んで当然みたいになってないか?

帆波「へえ、そうなんだ：」

更に冷たくなる。オレや折本達は冷や汗が出てきた。こんなに怒ってるのは中学以来：いや、中学以上に怒ってるな。

雪乃「一之瀬さんその辺で」

ヒートアップしそうな所で雪ノ下が止める。

帆波「…わかった」

まだ言い足りなさそうな顔をしながらイスに座る。フウ、何とか治まった。もし、このままいけばどうなってたか分からなかったしな。雪ノ下が止めてくれて良かったわ。

雪乃「由比ヶ浜さんも何か依頼があるから来たのでしょ？」

でも若干怒りの感情を入れながら由比ヶ浜に聞く。オレは何も言わなかったが、あんなだけ言われたら流石のオレもキレル。だが、その感情を表に出さないように押し殺している。折本も仲町も相当怒っている様子だ。

結衣「う、うん…実は…」

と言いながらオレの方をチラチラ見てくる。チツ、オレがいると言にくいってか…さっきも散々オレの悪口言ってそれかよ…正直イラつくな。

八幡「ハア…」

と深いため息をつく。すると全員オレに視線を向ける。由比ヶ浜も同様こちらを見てくる。

結衣「えっと…何かな？」

八幡「いや、何かな？じゃねえよ」

自分でも驚くほど冷たく低い声だった。

結衣「う…え…？」

八幡「すまんが雪ノ下、オレはコイツの依頼受けたくない」

結衣「な、なんでだし!？」

ホントうるせえよ。もうちよつと抑えられないのかよ。

雪乃「由比ヶ浜さん、もうちよつと声を抑えてちょうだい。それと比企谷君、それはどうして？」

八幡「いや、だってオレの事キモイや死ねって言われたんだぞ？すぐ謝るならまだしも、コイツはなんて言った？本当の事だって言ったんだぞ？てことはオレはキモくて死んで当然、と言ってるようなもんだ。そんな奴の依頼なんてオレは受けたくない」

雪乃「…なるほど」

帆波「雪乃ちゃん、私も受けたくない」

結衣「はあ!？」

一々うるさいヤツだな。叫ばないと生きていけないのかよ。

帆波「さつき八幡も言つてたけど、人の事キモイや死ねつて言う人の依頼、私も聞きたくない。すぐお引き取り願いたいよ」

結衣「意味わかんないし!ちゃんと納得のいく説明しろし!」

いやいや、これでもスゲエ納得のいく理由だぞ。コイツ、相当頭悪そうだな。

かおり「ごめん、私も受けたくない」

結衣「なんでだし!」

千佳「そりやあそうだよ。だつて大切な友達の時、悪く言われてるんだよ?そんなの誰だつて怒るよ」

帆波と折本と仲町は怒りの視線を由比ヶ浜に向ける。由比ヶ浜も3人に睨んでいた。いや、なんでお前から睨まれないといけない。意味がわからん。すると、雪ノ下が口を開く。

雪乃「…確かにそうね」

結衣「…え?」

由比ヶ浜は弱々しい声になる。多分、雪ノ下なら話聞いてくれるだろうとでも思っていたのか知らんが。

雪乃「私も大切な友達を悪く言われて気分が悪いわ。あなたには悪いけれど、ここから出ていってちょうだい」

結衣「な、なんで?」

雪乃「当たり前でしょ?人に悪口言つて謝りもしない。そんな礼節をわきまえない輩の願い事なんて聞きたくないわ。だから出ていってちょうだい」

ここにいる全員由比ヶ浜の依頼を受けたくない的一致する。あの雪ノ下ですら拒絶したんだ、相当な奴だよ。そして全員からそう言われた由比ヶ浜は……

結衣「もういい!」

そう言つて部室のドアを勢いよく開け閉めして出ていった。

八幡 s i d e o u t

結衣 s i d e

なにさ！なにさ！みんな揃ってなんであんな事言うの？ヒツキーもヒツキーでなんであんな酷い事言うの？それに一之瀬さんはなんであんなにヒツキーと近いの？意味わかんない！ヒツキーの隣はあたしのなの！だってヒツキーは王子様だからね！あたしの大切な家族である、犬のサブレを助けてくれた王子様。あの時、ヒツキーがすぐくカツコよく見えた、まるで私の家族を守った王子様。そのヒツキーの隣に居座って、何様なんだしあの一之瀬さんは！ヒツキーはあたしのなんだからね！

そうか、ヒツキーは一之瀬さん達に騙されてるんだ。きつとそうだ。そうじゃなきゃヒツキーはあんな酷い事言わない。おどし？せんのう？みたいなのしてるんだきつと。助けなきゃ！ヒツキーを一之瀬さん達から助けなきゃ！待っててねヒツキー。助けてあげるからね。

結衣 s i d e o u t

八幡 s i d e

由比ヶ浜は去ってから帆波達はひと呼吸おく。

帆波「なんであんな事言うのかな？」

かおり「まさか、あんな人だとは思わなかったよ」

千佳「だね」

帆波「かおりと千佳の友達じゃあないの？」

かおり「ううん、違うよ。ちよつと話したことがあるくらいだよ」

帆波「そうなの？」

千佳「うん、それなのにあだ名つけられちゃって」

八幡「あゝ、確かかおりんと仲っちゃんだっけ？」

千佳「ちよつと比企谷君言わないでよ」

帆波「確かにかおりのかおりんはちよつとわかる気もするけど、千佳のは…」

かおり「そうなんだよね。初めて聞いた時ビックリしたもん。仲っちゃんって言われた千佳の顔、すごい嫌そうな顔だったの覚えてる

よ」

千佳「当たり前じゃん。そんなに仲良くないのに急にあだ名つけられて」

八幡「それを言うならオレもだぞ。初対面の相手に引きこもりみたいなあだ名つけられて」

雪乃「あら、あながち間違っただけじゃない」

八幡「おいコラ」

雪乃「フフツツ…冗談よ」

コイツ…

八幡「まあでも、ありがとうな帆波。オレのために怒ってくれて」

帆波「そりゃあ怒るよ。人の彼氏に向かってキモイとか、その挙句死ねだなんて、言われて怒らない彼女はいなよ」

八幡「そうか…折本達もありがとうな」

千佳「どういたしまして」

かおり「そうそう、比企谷が気にすることないって。友達が酷い事言われて黙っていられたからね」

雪乃「そうね、あなたは私の数少ない大切な友達なもの」

八幡「そうか…ありがとうな」

4人「…どういたしまして」

その後は由比ヶ浜が来る前と同じで他愛もない会話をしながら依頼が来るのを待ったが、その日は来ることはなかった。

第8話

八幡 side

今日も携帯のアラームで起き上がる。うん、いつも通りの日常だな。オレはさつきと着替えて下に降り、洗面所で顔を洗いリビングに入る。

小町「あ、お兄ちゃんおはよう」

八幡「おう、おはよう」

いつものように小町に朝の挨拶をする。いつもオレより早く起きて朝食を作ってくれる。ホントありがたい。そう思いながら自分の席に座ろうとした時だった。

帆波「あ、おはよう八幡」

八幡「ああ、おはよう帆波」

と帆波にも挨拶を済ませる。どうやら帆波は小町と一緒に朝食を作っているようだ。帆波まで作っているとは思ってなかったな。

……ん？

八幡「なんでいんの？」

帆波「え？」

いや、え？じゃなくてだな。

八幡「いやいや、なんで帆波が家にいるの？」

帆波「え？ダメだった？」

八幡「いや、ダメじゃあないけどよ」

帆波「だったら良いじゃん」

良いじゃんじゃあなくてだな。

小町「お兄ちゃん何言ってるの？帆波お姉ちゃんがいることはおかしなことじゃないよ」

うん、ダメだこれは。もう帆波がウチにいても何もおかしくないという設定が出来上がっているようだ。いや、別に良いんだよ、嫌じゃないし。

帆波「はい、八幡。ご飯できたよ」

八幡「お、おお。サンキュ」

なんだろう。帆波が家にいることは、もう触れてはならないらしい。うん、何故だよ。

そして朝食を済ませたオレと帆波は折本と仲町との待ち合わせ場所まで向かう。

八幡「でも、まさか帆波がオレの家にいるなんて思ってたわ」

帆波「やったねドツキリ大成功だね」

八幡「まさか…小町までグルなんて言わねえよな」

帆波「そのまさかだよ、八幡」

とビシッと指を指してくる。予想はしてたけどホントに小町もグルかよ。

八幡「マジか…」

帆波「もしかして嫌だった？」

八幡「いや、嫌じゃなねえよ。ちよつとビックリしただけだ」

帆波「そっか…良かった」

八幡「でも、まさかこれだけの為に早起きしたのか？」

帆波「うん、そうだよ」

八幡「それ大丈夫なのか？」

帆波「八幡…こういうのは好きな人の為ならできるんだよ」

八幡「なっ！／＼／＼」

帆波「フフツ…顔赤いよ八幡」

誰のせいになってると思ってるんだよ。だってあんな事言われたら嬉しいに決まってるだろう。

八幡「でも…それでもあんまり帆波には…無理して欲しくないかな…それで体調でも崩したらどうするんだよ」

帆波「心配してくれてるの？」

八幡「当たり前だろ」

帆波「そっか…ありがとう」

八幡「おう」

帆波「でも時々行くね」

八幡「ああ、わかった」

そんな会話をしていたら…

かおり「おーい、帆波く、比企谷く」

とオレと帆波を呼ぶ声が聞こえた。声のした方を見ると、そこには折本と仲町がいた。そしてオレは軽く手を上げて。

八幡「おう」

帆波「おはよう、かおり、千佳」

オレと帆波は折本と仲町の元へ近づく。

千佳「おはよう、帆波、比企谷君」

かおり「おはよう、帆波、比企谷」

八幡「おう、おはよう」

かおり「帆波、やっぱり比企谷の家に行ったんだね」

帆波「うん、そうだよ」

八幡「おい…まさかお前らまでグルなのかよ」

千佳「あははは、実はそうなんだ」

八幡「マジかよ…オレに味方はいないのかよ」

帆波「あははは、大丈夫だよ。確かにこの事は八幡に言わなかったけど、私達はいつでも八幡の味方だよ」

かおり「そうだよ」

千佳「うん」

八幡「そつか…ありがとうよ」

帆波「フフツ…どういたしまして」

かおり「よし、じゃあ行きますか」

千佳「そうだね」

八幡「ああ」

オレ達は学校へ向かう。その間も他愛もない会話をしながら向かう。

かおり「あ、そういえば今日、ウチのクラス小テストじゃん」

千佳「え？忘れてたの？」

かおり「う、うん。すっかり忘れていた」

八幡「で？いけそうなのか？」

かおり「う、今さっき思い出したから、1個も勉強してないや」

千佳「あーあー」

帆波「やらかしたね」

八幡「それじゃ今日の小テスト、折本は残念な結果になるな」

かおり「そ、そんな…た、助けてよ。帆波、千佳、比企谷」

帆波「あ、ごめん私クラス違うから」

千佳「そうだね」

八幡「でもあんま時間無いし、いけるのか？」

千佳「確かにね」

かおり「うう…どうしよう…」

どうやら相当困っているらしい。さっきも言っていたが帆波は違うクラスだ。教える事は出来るかもしれないが、小テストは1時間目にあるのだ。だからオレ達のクラスに来て教えるのは難しい。

八幡「ハア：仕方ねえな。少しだが範囲内教えてやるよ」

かおり「うっそ…マジ？ありがとう比企谷」

千佳「私も手伝うよ」

かおり「ありがとう千佳」

八幡「けど、あんま時間ないし、駆け足になってしまっけどいいか？」

かおり「うん、それでも良い。それでテストが上手いくのならお願い」

八幡「わかった」

千佳「うん、任せて」

そんな会話をしていると学校に着いたので帆波とは一旦お別れだ。オレ達は教室につくと折本のテスト勉強が始まる。と言ってもホントの数分だけだけどな。

そして朝のSHRも終わり、小テストがある1時間目になった。オレは勉強していたから、難なく解くことができた。テスト中だから折本の様子は見れないけど、何とかなるだろう。

そして1時間目も終わって、折本にテストはどうだったか聞いてみる事にした。

八幡「どうだった折本テストの方は？」

かおり「うん、比企谷と千佳のおかげで何とか半分は解けたよ」

千佳「そっか、それは良かった」

かおり「比企谷と千佳はどうだったの？」

八幡「オレか？オレは一応全部解けたぞ」

かおり「うっそマジ！やっぱ比企谷頭良いんだ」

八幡「おい」

かおり「ごめんごめん。で？千佳はどうだったの？」

千佳「私？私は全部は無理だったけど、ほとんど解けたよ」

かおり「うそ：やっぱ私頭悪いのかな？」

八幡「自分自身で鳥頭とか言ってるもんな」

かおり「ちよつと、それは触れないでよ」

千佳「あー、確かにそんな事言ってたね」

八幡「だろ？」

かおり「もー、いじめないでよ」

八幡・千佳「あははは」

かおり「もー」

八幡「悪い悪い」

千佳「ごめんね、かおり」

そんな会話していると2時間目が始まるので自分の席に戻る。けど気になることがある。それはこの前部室に来た由比ヶ浜がこつちをずっと見ていた事だ。まさか、この前散々言われた事に恨みでもあるのか？けど、あれはアイツが悪いんだからな。ま、そんな事はどうでもいい。次の授業に集中するか。

そして時は流れ昼休み。

帆波「はい、八幡。お弁当」

八幡「おう、サンキュ」

かおり「あれ？朝の時に渡してなかったの？」

千佳「そうそう」

帆波「うん、そうなんだ。というか私が、こうやって渡したかった

だけだから」

かおり「ふーん、良かったね比企谷」

八幡「うっせえぞ折本」

千佳「あははは」

八幡「でも悪いな」

帆波「ううん、私がやりたいからやってるだけだから気にしないでって、これ昨日も言ったような」

八幡「確かにそうだな」

帆波「それと、もうそれは言わない事。わかった？」

そう言って片手を腰に当てて、もう片方の手は人差し指を立てて言ってくる。なんでだろう、今のその仕草小町そっくりだ。

八幡「お、おう：わかった」

帆波「うん、よろしい」

なんかオレしつけされている子供のようだな。

八幡「よし、じゃあ食べますか」

帆波「そうだね」

今回の弁当の中は肉がメインか、料理名は多分生姜焼きだろう。そう思いながら一口食べる。うん、美味しいな。それからは帆波達と会話しながら食べる。すると折本がオレ達にしか聞こえない程度の声で言ってくる。

かおり「ねえ、ちよつと」

八幡「ん？どうしたんだよ。そんな声小さくして」

かおり「さつきから由比ヶ浜さんがこつちを見てきてるんだけど」

八幡「え？」

そう思い由比ヶ浜がいる方を見ようとすると…

かおり「ちよつと比企谷。今見たら気づかれるよ」

八幡「お、おう：そうだな」

かおり「もし、見るなら気づかれないようにしないと」

八幡「そ、そうだな」

確かに下手に見たら気づかれそうだし、目だけで由比ヶ浜の方を見る。すると、折本の言う通り、こつちを見ている。授業との間の休み

時間でもこつちを見ていたな。でも、なんでだ？

帆波「確かにこつちを見ているね」

千佳「でもなんでこつちを見ているのかな？」

かおり「さあ？それが分からないのよね」

八幡「…」

多分、あれなのかもしれないな。

帆波「…八幡？」

八幡「ん？」

帆波「何か思い当たる顔だけど、何かあるの？」

八幡「…多分、昨日の部室であった事が関係があるのかもしれないなって、思ってたな」

帆波「ああ、あれね」

かおり「でも、それが関係あるのなら、あれは由比ヶ浜さんが悪いんじゃない」

千佳「そうだよ。でもそれだけで私達は見られていたの？」

八幡「多分、そうじゃあないか？」

帆波「えく、何それ…でも何もされてないし、今は無視しとこ」

八幡「そうだな」

かおり「だね」

千佳「うん」

オレ達はそう言って由比ヶ浜を無視して、弁当を食べ進めながら会話をした。

結衣「…」

「結衣どうしたの？」

結衣「え？あ、何でもないよ優美子」

優美子「そ？ならいいけど」

結衣「あ、あははは」

そしてまた結衣は八幡達の方を見るが、八幡達はそれには気づかず楽しく会話をしながら弁当を食べていた。

結衣「…」

そして放課後、オレと折本と仲町は部室に向かうため、廊下を歩く。
かおり「今日は依頼来るかな？」

千佳「どうかな？」

かおり「来ないと退屈じゃん」

八幡「まあ、来ないのが一番いい事なんだがな」

「ヒツキー」

千佳「うん、確かにそうだね」

かおり「そうかもしれないけどさ」

八幡「そんなに頻繁に来てたら、どんだけ悩みを抱えてる学校なんだよ」

「ヒツキー！」

千佳「確かにね」

かおり「まあ、それもそっか」

さつきも言ったが頻繁に来てたら、対処できなくなってしまうだろうな。5人いるとはいえ、頻繁に来てたら難しいだろうな。中には難問の依頼もあるかもしれないしな。

「ヒツキーってば！」

八幡「うおっ!？」

そう言っただけ腕を引つ張られて、すつとんきよんな声が出てしまった。チツ、誰だよ。急に引つ張りやがって。

八幡「危ねえな…一体なんだよ…」

オレは無理向きながら引つ張ってきた奴に言う。

八幡「…何の用だ…由比ヶ浜」

そう、さつきオレの腕を引つ張ってきたのは由比ヶ浜だった。由比ヶ浜は何故か知らんけど怒っている顔だった。

結衣「さつきから呼んでるのになんで無視するし！」

八幡「あ？呼ばれてねえよ。まさかとは思うけどヒツキーだって言わねえよな」

結衣「そうだし！聞こえてるのなら返事しろし！」

八幡「オレは引きこもりみたいな名前じゃあねえし」

結衣「はあ!?!ヒツキーはヒツキーじゃん！」

何言ってるんのコイツ？頭おかしいんじゃないやねえの？というかコイツはコイツで何言ってるの？みたいな顔してるの？それオレ達の反応だよ。

八幡「ハア…というかオレとお前は仲良くないのになんでそんなあだ名で呼ばれなくちゃならん」

結衣「良いじゃん別に！」

八幡「……」

ダメだ、全然話を通じない。

かおり「そんな事より由比ヶ浜さん。なんでさつき比企谷の腕急に引つ張ったの？」

結衣「それはヒツキーが無視するからだし！」

千佳「それでも危ないじゃん。もしそれで比企谷君が怪我でもしたらどうするつもりだったの？」

結衣「そ、それは…でも、やっぱり無視するヒツキーが悪いと思うし」

やっぱりダメか……。早く部室に行かねえとな。

八幡「んで？何の用だ」

結衣「あ、うん。お昼の時なんでヒツキーは一之瀬さんからお弁当を作ってもらってるの？」

あー、なるほど。それで昼の時、こつちを見ていたわけか。

八幡「別にそんなのお前に関係ないだろ」

結衣「なんでだし！言ってくれても良いじゃん！」

八幡「なんで言わなくちゃいけない。それに教える理由もないだろ」

結衣「同じクラスなんだし教えてくれも良いじゃん！」

八幡「同じクラスだからって、言わないといけないのか？どうなんだ？折本、仲町」

かおり「え？別にないと思うけど」

千佳「うん、ないと思うよ」

八幡「ほらな。誰にだって言いたくないことだってあるんだ。お前にも1つや2つあるんじゃないのか？知らんけど」

結衣「うつ…そ、それは…」

何やら顔色を悪くして下を向いている。一体どうしたんだ？何か変な事言ったか？でも、まあ、いいや。

八幡「話はそれだけか？じゃあオレ達は行くからな。行くぞ折本、仲町」

かおり「そうだね」

千佳「うん、わかった」

結衣「え？ちよつと待って…」

由比ヶ浜の声はオレ達には聞こえてなく、オレ達はそのまま部室に向かった。

かおり「まさか、帆波が比企谷に弁当を渡した事知りたかったのかな？」

八幡「さあ？オレにはさっぱりわからん。仲町はわかるか？」

千佳「ううん、私にもわからないな」

八幡「そっか、折本はどうだ？」

かおり「ごめん、私もわからない」

八幡「そっか…まあ、どうでもいいがな」

そんな会話していると部室に着いたので。

八幡「うつす」

かおり「おいつす！」

千佳「こんにちは」

雪乃「こんにちは」

帆波「やつほーみんなー。やっと来たね。何かあったの？」

八幡「ん？まあ、大した事じゃないけどな。実は…」

オレはさつき由比ヶ浜に絡まれた事を話した。

八幡「…と言うわけなんだ」

帆波「そんな事があったんだ。それで答えたの？」

八幡「いや、教える理由は無いから教えてないぞ」

帆波「そうなんだ」

八幡「ああ」

帆波「それにしても、なんでそんな事聞いてきたのかな？」

八幡「さあ？」

かおり「それ、私も気になってたんだ」

千佳「確かに。なんでだろうね」

オレも考えてみたが全然思い浮かばない。帆波達も考えてくれたがわからない。けど、1人思い当たるような顔をした人物がいた。

雪乃「…」

八幡「雪ノ下？」

雪乃「っ！な、なにかしら」

八幡「何か知ってるような顔だけど、何か知ってるのか？」

帆波「そうなの、雪乃ちゃん？」

オレ達全員雪ノ下の方に視線が集中する。雪ノ下は少し戸惑ったが話してくれるようになった。

雪乃「もしかして何も聞いてないの？」

八幡「何がだ？」

雪乃「1年前の事故よ」

八幡「ん？それはお前の家とは話し合って終わった事だろ？」

雪乃「いいえ、私とは違うの。由比ヶ浜さんも関係しているの」

4人「は？（え!?!）」

オレと帆波達はそれを聞いてすつとんきような声が出てしまった。は？嘘だろ…由比ヶ浜が関係してる…まさか…

八幡「おい…それって…まさか」

雪乃「…ええ、そのまさかよ。1年前に比企谷君が助けた犬の飼い主が、由比ヶ浜さんなのよ」

は？マジかよ…。すると帆波達はすぐ怒ったオーラが出ていた。

帆波「あのワンチャンの飼い主が、由比ヶ浜さんだなんて…」

千佳「…信じられない」

かおり「まさか…」

八幡「？おい…一体どうしたんだよ」

帆波「あ、そういえば八幡は知らなかったんだっけ？あの時八幡が助けたワンチャンの首輪、壊れかけていたの」

八幡「は？ということは由比ヶ浜がその首輪の管理を怠ったせいで、あの事故は起こったというわけか？」

帆波「多分：そうじゃないかな…」

おい：嘘だろ：首輪の管理もできねえのかよ。あまり言いたくないがそんな奴に飼われる犬は可愛そうだな。ちゃんと管理していたら、オレも帆波も折本も仲町も雪ノ下も辛い思いをしなくて済んだのにな。

かおり「でもさ、それなのになんで比企谷にお礼や謝罪をしないの？」

千佳「それなのに比企谷君に暴言を吐いて、何しているのかな」

帆波「ホントは八幡が助けたの知らないんじゃないの？」

八幡「それは知らんが、まさかアイツが飼い主だとはな」

雪乃「ホントに何も聞いてなかったのね。あの時、由比ヶ浜さんが比企谷君を見た時、事故の事言うのかなと思ってたけど、言わないであんな暴言を吐くだなんて」

八幡「まあ、ここでそんな事言っても無駄だろうな」

帆波「そうだね。でも、更に由比ヶ浜さんの事苦手になっちゃったな」

かおり「だね」

千佳「私も…」

雪乃「ごめんなさい。私があの時言っておけば良かったわね…」

八幡「雪ノ下のせいじゃねえよ」

帆波「そうだよ」

かおり「そうそう」

千佳「雪乃ちゃんが気に病むことは無いよ」

オレ達は雪ノ下は悪くないと言う。実際に雪ノ下は悪くない。悪いのはあの由比ヶ浜だ。オレが助けたと言う事は知ってるかどうか知らないが、あんなに暴言を吐いたんだ。相当帆波達に嫌われるだろう。

ま、そんな話はやめて、オレ達は他愛もない会話をしながら依頼が来るのを待ったが、今日も依頼人は来なかった。まあ、来ないのが1

番だけどな。

第9話

八幡 side

今日も何も無く放課後になった。いや、何も無いとは言ったがあつたな：また由比ヶ浜がこつちを見ていたことだけだがな。未だに分からない：なんでこつちを見ていたのかも分からないし、昨日だつてオレが帆波から弁当を受け取ったことについて質問してきたし、ホント訳分からん。それにあの事故の原因を作った本人でもあるしな。まあ、そんな事よりオレは折本と仲町と一緒に部室に行くと、何故か帆波と雪ノ下が部室の中を覗いていた。何してんだ？

かおり「なにやってんの2人とも？」

帆波「あ、みんな：実は部室に不審者が」

千佳「え？不審者？」

八幡「おいおい、それやばいんじゃないやねえの？で？どこ？」

雪乃「あそこよ」

雪ノ下が部室の中を指を指すので、オレは部室の中を見ると確かに誰かいる。

かおり「どうする？」

八幡「どうするって言われてもな」

雪乃「比企谷君。ちよつと見てきてちようだい」

え、オレが行くの？まあ、確かに帆波達も不安がつてるし、無視は出来ないな。少し警戒しながら部室に入った。視界に広がったのは、床にちりばめられた大量の紙、そしてそこに佇む一人の男がいた。その男は、もうすぐ初夏だというのに汗をかきながらコートを羽織って指ぬきグローブはめてるし。

???'クククツ、まさかこんなところで出会うとはな。：待ちわびたぞ。

比企谷八幡」

八幡「……」

どう反応したらいいんだ？

帆波「八幡の知り合い？」

と帆波が聞いてくる。

八幡「いや、全然知らん。やつぱり不審者だろう。帆波、通報頼む」
???「まま、待て!我だ、この相棒の顔を忘れるとは、見下げ果てたぞ、八幡」

かおり「相棒とか言ってるけど…」

うん、折本さん。そんな冷ややかな目で見ないでくれます。

???「そうだ相棒。貴様も覚えているだろう、あの地獄のような時間をともに駆け抜けた日々を…」

八幡「体育でペア組まされただけじゃねえか」

千佳「あ、そうなんだ」

八幡「ああ」

マジでコイツのせいで帆波達に勘違いされたじゃねえか。それよりも本題だ。

八幡「んで、何の用だ。材木座」

材木座「む?我が魂に刻まれし名を口にしたか。いかにも我が剣豪
將軍・材木座義輝だ」

バサツとコートを力強く靡かせて、ぽつちやりとした顔にきりりつとやたら男前な表情を浮かべる。ハア…とりあえず。

八幡「コイツは材木座よしてる。まあ、体育の時間一緒にペアを組んでいるやつだ」

かおり「へく、比企谷が人を覚えるなんて…」

八幡「おい、折本。それは一体どういう意味だ。いくらオレでもペア組んだら嫌でも覚えるわ」

かおり「もう冗談だつてく」

八幡「ハア…お前な…」

千佳「あはは…」

帆波「ねえ、八幡。さつきから気になってたんだけどあれ何?剣豪
將軍とか言ってるんだけど」

八幡「ん?ああ、あれは厨二病というやつだ」

帆波「厨二病?…ああ、中学の時なんか変な事言ってる人達いたね」

かおり「ああ、いたね」

千佳「そういえばそうだったね」

「そういえばいたな。いやあく、懐かしいなあ。」

雪乃「ねえ、さつきから気になってるんだけど。その厨二病って病気の？」

八幡「別にマジで病気なわけじゃない。スラングみたいなもん：中二病というのはアニメや漫画のキャラ、もしくは自分で作った設定に基づいて行動する奴のことを言う。例えば、主人公が持つ不思議な力に憧れを抱き、自分にもそうしたものがあのかのように振る舞う。そういう感じだ」

雪乃「ふうん、つまりお芝居してるのね」

八幡「まあ、そんなところだ。あいつは、室町幕府の十三代将軍・足利義輝を下敷きにしているみたいだ。名前が一緒だったからベースにしやすいかったんだろう」

帆波「でもなんで八幡を仲間として見てるの？」

八幡「ん、ああそれは、八幡つつー名前から八幡大菩薩を引っ張ってるんじゃないか？清和源氏が武神として厚く信奉してたんだ。鶴岡八幡宮って知ってるだろ？」

帆波「あく、知ってる。なるほど、だから八幡を仲間として見てるんだね」

八幡「まあ、オレにはそんな感情は一切無いけどな」

かおり「なかなか辛辣だね」

八幡「当たり前前だ。仲間と思われたくないからな」

千佳「あはは…」

雪乃「それで、依頼というのはその病気を治すことでいいのかしら？」

材木座「…：八幡よ。余は汝との契約の下、朕の願いを叶えんがためこの場に馳せ参じた。それは実に崇高なる気高き欲望にしてただ一つの希望だ」

雪ノ下から顔を背けて、材木座はオレの方を見た。一人称も二人称もブレブレだ。どんだけ混乱してんだよ。

雪乃「話しているのは私なのだけれど。人が話しているときはその人の方を向きなさい」

冷たい声音でそう言って雪ノ下が材木座の襟首をつかんで無理矢理正面を向けさせた。

材木座「……モ、モハハハ、これはしたり」

雪乃「そのしゃべり方やめて」

その後も、材木座は雪ノ下の質問攻めにあつた。この時期にコートがどうか、指ぬきグローブがどうか。そのたびにしゃべり方を言われ、材木座は、声が小さくなつていった。その後、帆波達が止めに入り、何とかおさまった。

ハア：仕方ない。

八幡「んで、何の用だ」

と聞くと目を輝かせていた。気持ち悪いなホント。

材木座「依頼というのはこれだっ!?!とくと見よ」

そう言つて材木座は床に散らばつた紙を集めオレ達の前に差し出した。

かおり「これは？」

雪乃「原稿用紙ね。何か書かれているわ」

千佳「これって小説じゃない？」

八幡「ああ、そうだな。しかも見るからにラノベの類だ」

帆波「ああ、八幡がよく読んでいるやつだよ」

八幡「ああ」

そう、材木座が持っているのは自分で書いたであろう小説だった。材木座「ご賢察痛み入る。如何にもそれはライトノベルの原稿だ。とある新人賞に応募しようと思つているのだが、友達がいないので感想が聞けぬ。読んでくれ」

雪乃「何か今とても悲しいことをさらりと言われた気がするわ…」
中二病を患つたものはラノベ作家を目指すようになるのはそのままで不思議じゃない。あこがれ続けたものを形にしたいという思いは実に正当な感情だ。加えて、妄想癖のある自分なら書けるっ！と考えたつておかしいことはない。さらに言うなら好きなことで食つてい

けるならそれはやはり幸せなのだろう。

けど、オレも危なかった。オレも厨二病になりかけた。けどその前に帆波達と出会ったから、厨二病になる事は無かった。

そんな事よりもなんでオレ達なんだよ。

八幡「投稿サイトとか投稿スレにでも載せたらいいじゃねえか」

材木座「それは無理だ。彼奴らは容赦がないからな。酷評されたら我死ぬぞ」

うつわ…心弱え…。

そして帰り道。

かおり「ねえ、ホントにあれ読まなくちゃダメなの？」

帆波「そりやそうだよ。受けた依頼はきちんとしないとダメだよ」

千佳「そうだよかおり。そうしないと約束を破ると同じだよそれでもいいの？」

かおり「よ、良くない…」

八幡「だったら読まないとな」

かおり「う…恋愛なら読んだけどなく」

帆波「文句言わないの」

かおり「ハア…もう諦めるよ」

千佳「最初っからそうしなよ」

八幡「でも、あの量だ。絶対に徹夜だよな…」

かおり「う、ウソ…」

千佳「かおり、寝落ちしないようにね」

かおり「しないよって言いたいけど、しちゃうかもしれない」

正直だな。確かに中学の時受験勉強している時だって、たまに寝落ちしてたな。今度もそうならないようにしてほしいな。

八幡「頑張って起きて読めよ」

かおり「うう…うん！頑張ってみる！」

千佳「おお！珍しくかおりがやる気だ！明日雪でも降るんじゃない？」

かおり「降らないよ！というかこの季節じゃないでしょ！」

八幡「だから降るんじゃないか？」

帆波「うん、確かに明日雪でも降るかもね」

かおり「皆してひどい!?ウケないよ!」

3人「二あ、ウケないんだ」

ホント、毎回毎回ウケるとか言ってるのに、今回はウケないんだ。どういう基準でそうなるのか知らないけどな。いや、知りたくもないな。

帆波「でも、ホントすごい量だったね。あれはちよつと苦労しそうだね」

八幡「ああ、そうだな」

そしてオレ達は他愛もない会話して、それぞれの家に帰るために別れた。オレも家に帰るため帰り道を歩く。さて、今日の晩ご飯はなんだろうな。

帆波「今日の晩ご飯は麻婆豆腐だって小町ちゃんから連絡あったよ」

八幡「ほー、麻婆豆腐か。いいな」

帆波「でしょ?」

八幡「ああ…え?」

帆波「え?何?どうしたの?」

八幡「いやいや、なんで帆波がこっちの道歩いてるの?帆波の家あつちだよな?」

帆波「え?だって今日は八幡の家に泊まるんだよ」

八幡「は?オレの家に泊まる?オレそんなの聞いてないぞ」

帆波「え?だって昨日、小町ちゃんに泊まって良いつて聞いたら良いつて言われて」

八幡「いや、オレそんなの一言も聞いてないぞ。それに瑞希は良いのかよ」

帆波「ああ、瑞希も泊まるから」

八幡「はい?」

おいおい、どうなってんだよ。そんな事マジで一言も聞いてない。一体どうなってんだよ。

帆波「もしかして小町ちゃんから聞いてないの?」

八幡「ああ」

帆波「んもう。小町ちゃんったら…」

八幡「あく、何となく察したわ」

帆波「ハア…そういう事」

八幡「よし、こうなったら小町にお仕置が必要なようだな」

帆波「うん、そうした方がいいよ」

八幡「ああ、そうだな」

帆波「でも程々にね」

八幡「わかつてるよ」

帆波「でも、泊まるのはいいでしょ？」

八幡「ああ、もう決まってるしな。今度からオレにも言った方がいいかもな」

帆波「そうだね。ごめんね今度からそうする」

八幡「ああ」

そしてオレは帆波と一緒に家に帰る。

八幡「たでーま」

小町「おかえりお兄ちゃん、帆波お姉ちゃん」

瑞希「おかえりなさい八幡お兄ちゃん、お姉ちゃん」

八幡「おう、ただいま瑞希」

帆波「お邪魔します小町ちゃん」

小町「もう、帆波お姉ちゃん。そこはただいまでいいですよ」

帆波「いや、それは…」

小町「いいんです。ねえ！お兄ちゃん」

八幡「ああ…そうだな。いいかもな」

帆波「は、八幡？」

小町「ほら、お兄ちゃんもこう言ってますし。ね？1回だけでも言ってみませんか？」

何故かテンションが高い小町。何故か帆波にただいまと言わせたらしい。そんなテンションの高い小町の頭の上に自分の手をのせる。

小町「ん？お兄ちゃん？どうしたの？」

八幡「どうしたの？じやないよ小町ちゃん」

小町「え？ホントどうしたの？」

八幡「なんでこうされてるか、わかる？」

小町「い、いや…わかんないな」

どうやら誤魔化しているみたいだ。ホントはわかっている癖にな…仕方ない。

八幡「なくんで帆波が泊まることオレに言わないの？」

小町「あ、いや…それは…その…あれだよ…あれ」

八幡「ん？どれだい？」

小町「…ご、ごめんなさい。忘れてました」

瑞希「小町ちゃん言わなかったの？」

小町「う…ごめん忘れてた」

瑞希「もう小町ちゃん」

小町「う…」

どうやらすごく反省しているようだ。けど、ちよつとやりすぎちやっただけかな。

八幡「もういい。どうやら反省してるみたいだからな」

小町「ありがとうお兄ちゃん」

八幡「今度からはちゃんと伝えてくれよ」

小町「うん、わかった。帆波お姉ちゃんもごめんなさい」

帆波「うん、いいよ。次はちゃんと伝えないとダメだよ」

小町「はい。瑞希ちゃんもごめんね」

瑞希「うん、良いよ。でも次から気をつけないとね」

小町「うん」

よし、小町の反省も終わった。そしたらなんだか腹が減ってきたな。

八幡「よし、小町。腹が減ったら飯しようぜ」

小町「うん、わかった。じゃあ着替えてきて」

八幡「はいよつて帆波と瑞希の着替えはどうするんだ？」

小町「ああ、それならあるよ。いつでも泊まれるように」

八幡「用意周到だな、おい。まあ、あるのならいいや。じゃあ着替

えてくるわ」

小町「はいはい」

オレは着替えた後、晩飯を食って風呂にも入った後、帆波と小町と瑞希とオレでテレビを見ながら色んな話をしながら過ごした。もう時刻は10時になるうとしていている。オレと帆波にはやる事がある。カバンから材木座が書いた原稿用紙の束を取り出し、リビングのソファに座る。隣には帆波もいる。時々、帆波が書かれている事について質問してくるので、説明をしたりした。

けどいくら帆波でも年頃の女子だからちよつと緊張するな。風呂に入った後だからシャンプーのいい匂いが鼻に響く。というより湯冷めする前に読み終わりたいな。というか帆波さん、あなたなんでそんなに近いんですか？もうほとんど密着してるじゃん。あー、ダメだ。読むのに集中しなきゃな。

しばらく読んでいるとちよつと集中力が落ち眠たくなってきた。読者が眠くなるということはおそらくそこまで面白くないんだろう。けど、依頼である上に人が頑張って書いた物語だ。最後まで読むか。帆波もだんだん眠たくなってきているのか小さいあくびをしている。

八幡「大丈夫か？帆波」

帆波「うん、なんとかね。でも、後もう少して終わるから頑張るよ」

八幡「そっか」

帆波が最後まで読むって言ってんだからオレも最後まで読まねえとな。よし、オレも後少しだ。ラストスパートをかけて一気に読むか。

そしてオレと帆波が読み終わった時には、時刻はもう日をまたいでいた。

八幡「フウ：終わった」

帆波「私も終わったよ…ふあああ」

帆波があくびをする。もうどうやら帆波は限界のようだ。まあ、オレも眠たい。もう寝るか…ん？ちよつと待てよ。帆波はどこで寝るんだ？さすがにこのソファはないよな。小町と瑞希はもう寝てるし

…まさか…

八幡「なあ、帆波。帆波はどこで寝るんだ？」

帆波「あれ？言ってなかったけ？私は八幡の部屋で寝るんだよ」

八幡「はい？」

帆波「だから八幡の部屋で寝るの」

八幡「い、いや、待て。それはさすがにさ…その…やばくないか？」

帆波「べ、別に…私は八幡と一緒に寝てもいいよ／＼／＼」

八幡「なっ！／＼／＼」

な、なななんなんですと!?そんな事言われたら勘違いするでしょ?しかも顔を赤くして、モジモジしながら言わないでよ。そんな事されたら抱きつきたくなっちゃうでしょ。

八幡「じ、じゃあ、帆波はオレのベットを使ってくれ。オレはこのソファで寝るからさ」

よし、これで良い。帆波と一緒に寝るのはダメだ。そんな事してみるドキドキして寝れなくなっちゃうからな。

帆波「だ、ダメだよ。ここで寝たら風邪引いちゃうよ。だ、だからさ…一緒に部屋で寝よ」

八幡「い、いや…でもな…」

いくらなんでも、この歳で彼女と一緒に寝るのはさすがにダメだろう。色々と問題があるしさ。

帆波「だ、ダメ…」

八幡「うっ…」

上目遣いに涙目とは卑怯なコンボを使いますな帆波。そんなウルウルさせた目で見られるとなんか罪悪感というか、そういうのがでてるからやめてよ。

八幡「わ、わかった…ここで寝ないから。自分の部屋で寝るからさ、その目はやめてくれ」

帆波「ホント？」

八幡「あ、ああ」

そう言うのとペアと明るい顔になる帆波。おお、さっきの顔が嘘のようだ。

帆波「うん、じゃあ八幡の部屋に行こっか」

八幡「…ああ」

オレは帆波を自分の部屋に連れていき、一緒に同じベッドに入る。やばい…マジでドキドキしまくって寝れるかどうかわかんねえ。持つてくれよオレの理性。

帆波「じゃ、おやすみ八幡」

八幡「おう…おやすみ帆波」

オレはドキドキしながら眠りについた。

翌日、起きたら小町と瑞希がニヤニヤしながら見ていた。小町に関してはスマホで写真を撮っていた。何故かと言うと帆波がオレの背中から抱きついているからだ。オレも一瞬ビツクリしてしまったよ。そして帆波が起きてオレに抱きついているのを知るとものすごく顔を真っ赤にして、自分の顔を隠していた。オレもなんだか恥ずかしくなりそつぽをむく。

数分後

オレ達は着替えて、朝食も食って学校へ向かった。

小町「じゃあお兄ちゃん、帆波お姉ちゃん行ってくるであります」

瑞希「お姉ちゃん、八幡お兄ちゃん行ってきます」

八幡・帆波「行ってらっしゃい」

と小町と瑞希と別れて学校に向かう。その途中折本と仲町と合流する。案の定折本と仲町はなんだか眠たそうだった。

そして時間が経って放課後になる。授業はほとんど聞いてない。けどノートはしっかりと取ってあった。

部室

八幡「うつつ」

かおり「おいつす」

千佳「こんにちは」

部室に入ると雪ノ下は穏やかな顔で寝息を立てているのが目に入った。どうやら雪ノ下も徹夜したみたいだな。

千佳「雪乃ちゃんも徹夜したんだね」

八幡「みたいだな」

かおり「ホント、あれ読むの苦労したよ」

八幡「寝落ちしなかったのか？」

かおり「うん、大丈夫だったよ」

千佳「あ、帆波も寝てるね」

八幡「ああ、そうだな。起こさないように静かにするか」

千佳「うん、そうだね」

オレ達は帆波と雪ノ下を起こさないよう静かに過ごす。まあ、起きなかつたら材木座が来るまで寝かせとけばいいしな。でも、そうなれば早く来るだろう。アイツに喋る相手なんていないんだし。

けど、材木座が来る前に2人は目を覚ました。

雪乃「あら、来ていたの。ごめんなさい気づかなかったわ」

千佳「ううん、大丈夫だよ」

かおり「そうそう」

帆波「材木座君はまだ来てないの？」

八幡「ああ、でもそのうち来るだろう」

そう思うこと数分後

部屋の戸が荒々しくたたかれる。

材木座「たのもう」

材木座が古風な呼ばわりとともに入ってきた。

材木座「では、感想を聞かせてもらおうか」

材木座は椅子にドカツと座り、その顔は自信に満ち溢れていた。対して正面に座る雪ノ下は珍しく申し訳なさそうな顔をしていた。

雪乃「ごめんなさい。私にはこういうのよくわからないのだけど」

材木座「構わぬ。凡俗の意見も聞きたいところだったのな。好きに言ってくれたまえ」

そう、と短く返事をする。雪ノ下は小さく息を吸って意を決した。

雪乃「つまらなかつた。読むのが苦痛ですらあったわ。想像を絶するつまらなさ」

材木座「げふうっ!？」

一刀のもとに切り捨てやがった。その後も雪ノ下のダメ出しが続くので近くにいた仲町が止めに入る。けど雪ノ下はまだ言い足りないさそうな顔していた。あれでまだ言いたくないのかよ容赦ねえな。次は仲町だが

千佳「うくん、ごめんホントに面白くなかった」

材木座「うぎやぎや！」

なんつー声だよ。次は折本の番。

かおり「一言言うとおつまんなかった」

材木座「ひぎやあ!？」

次は帆波の番。

帆波「えく…つと…面白くなかった」

材木座「ぐふうつつ!？」

おいおい大丈夫かよ。もう限界なんじゃねえの？

帆波「じゃあ次は八幡」

とうとうオレの番になってしまったか。

材木座「ぐ、ぐぬう。は、八幡。お前なら理解できるな？ 我の描いた世界、ライトノベルの地平がお前にならわかるな？ 愚物どもでは誰一人理解することができぬ深遠なる物語が」

材木座の目が『お前を信じている』と告げていた。いや、オレにそんな目を向けられても困る。でも、言わなきゃ男が廃る。そう思いオブラートに包んで言ってみよう。

八幡「んで。あれはなんのパクリ？」

材木座「ぶふっ!?!ぶ、ぶひ…ぶひひ」

材木座はごろごろと床をのたうち回り、壁に激突すると動きを止めて、そのままの姿勢でビクともしない。

帆波達は若干引いている様子の中材木座が立ち上がり、埃をばんぱんとはたいてまつすぐオレを見る。

材木座「…また、読んでくれるか？」

オレは驚いた。あんなだけ言われてなお書き続ける意思があるのか。むしろ死にたくなるぞあれは。

材木座「また、読んでくれるか？」

今度は雪ノ下達に向かつて力強く言った。

八幡「お前……」

かおり「ドMなの？」

ちげえよ。そうじゃねえだろ。っかなんでそうなるんだよ。

八幡「お前、書き続けるのか？」

材木座「無論だ。確かに酷評はされた。もう死んじやおっかなーと思つた。むしろ、我以外死ねとも思つた」

あ、やっぱりそう思うんだ。

材木座「だがそれでも嬉しかったのだ。自分が好きで書いたものを誰かに読んでもらえて、感想を言ってもらえるというのはいいものだな。この想いに何と名前を付ければいいのか判然とせぬのだが。……読んでもらえるとやっぱり嬉しいよ」

そう言つて材木座は笑つた。それは、剣豪將軍の笑顔ではなく、材木座義輝の笑顔。

なるほどな。こいつは中二病つてだけじゃない。もう立派な作家病に罹つているのだ。書きたいことが、誰かに伝えたいことがあるから書きたい。そして誰かの心を動かせたのならとても嬉しい。だから何度だつて書きたくなる。たとえそれが認められなくても、書き続ける。それを作家病というのだろう。

八幡「ああ、読むよ。出来たらここに来い。楽しみにしてるぜ」

読まないわけがない。だつて、これは材木座が中二病を突き詰めた結果たどり着いた境地なのだから。病気扱いされても白眼視されても無視されても笑いものにされても、それでも決して曲げることなく諦めることなく妄想を形にしようと足掻いた証だから。

材木座「また新作が書いたら持つてくる」

そう言つて材木座は立ち去つて行つた。

かおり「なんか凄そうな人だったね」

千佳「そうだね」

帆波「うん」

確かにすごい奴だ。でもあの気持ち悪い部分を除けば。

その日以降オレは材木座と体育の時間で話すようになった。

第10話

八幡side

月が替わると、体育の種目も変わる。我が学校の体育は3クラス合同で、男子総合60名を2つの種目に分けて行う。この間までやっていたのはバレーボールと陸上。今月からはテニスとサッカーだ。オレと材木座もチームプレーより個人技に重きを置くファンタジスタ的存在なので、サッカーではむしろチームに迷惑をかけるだろうと判断し、テニスを選んだ。けど、今年はテニス希望者が多かつたらしく、壮絶なジャンケンの上、オレはテニス側に生き残り、材木座は敗北してサッカー側へと振り分けられてしまった。まあ、仕方ないよな。そんな事よりテニスの授業が始まる。

厚木「うし、じゃあお前ら2人1組作れ」

そう厚木が言うのと、皆が三々五々めいめいにペアを組み始める。なんでそんなすぐに対応できるんだよ。周り見渡すことなくペア組めるとかお前らノールックの達人なの？まあいい、こんな時は

八幡「あの、オレあんま皆が調子よくないんで壁打ちしてていいですか。迷惑かけることになっちゃうと思うんで」

そう言つて、厚木の返事を待たずにオレはさっさと壁際でほこすかと壁打ちを始める。これでよし。体育自体のやる気は見せてるので何も問題ない。そして、打球を追つてただ正確に打ち返すだけのまるで作業のような時間が続く。すると周囲では派手な打ち合いできやつきやつと騒ぐ男子の歓声が聞こえる。

「うらあつ！おおつ！?今のよくね？ヤバくね？」

「今のやーばいわー、絶対とれないわー、激アツだわー」

絶叫しながら実に楽しそうにラリーをしていた。うるせえなー死ねよと思いつつながら振り返る。そこにはオレのクラスの上位カースト集団達がいた。名前は知らないが確かあの由比ヶ浜と一緒にグルーブだったような気もする。するとカチューシャをつけた茶髪が

茶髪「やつべー今の球、マジやべーって。曲がった？曲がったくね？今の」

「いや打球が偶然スライスしただけだよ。悪い、ミスった」

片手を挙げてそう謝るイケメンの声を掻き消すように茶髪はオーバリアクションで返す。

茶髪「スライスとかマジ『魔球』じゃん。マジぱないわ」

ハア：マジでうるさい。でもオレには関係ないことだ。さつさと壁打ちの続きでもするか。と思い壁に目線をうつすと…

茶髪「スライースツ！」

ほらうるさい。茶髪の放った打球はまったくスライスすることなく、そのグループのリーダーみたいなやつから大きく外れてコートの方隅、日が当たらず薄暗いじめじめした場所へと飛んでいく。つまりオレのいる場所に飛んできた。いや危ねえな、おい。

茶髪「あ、ごつめーんマジ勘弁。えつと、えー…。ひ？ヒキタニくん？ヒキタニくん、ボールとつてくんない？」

誰だよヒキタニくんつてさ。訂正する気も起きず、オレは転がってきたボールを拾い上げて投げ返してやった。

茶髪「ありがとうねー」

と茶髪がお礼を言ってきた、グループリーダーは朗らかに笑いながらオレに手を振ってくる。けど、オレはすぐに壁に視線をうつしたので気づいていない。そのまま壁打ちの続きました。

昼休み

オレ達はいつもの如く教室で弁当を食べるのではなく、特別棟の1階。保健室横、購買の斜め後ろ、位置関係でいえばちようどテニスコートを眺められる場所で食べている。なぜって？そりゃ由比ヶ浜がほとんど毎日見てくるからだ。最初は無視していたが、鬱陶しくなつてここに移動してきたという訳だ。ここなら由比ヶ浜の視線を気にせず食べれる。

かおり「いや、こんない所あっただなんて、よく見つけたね比企谷」

八幡「まあな。元ボッチを舐めるなよ」

かおり「またそういう事言つて」

千佳「あははは…比企谷君らしいね」

帆波「でもホントにいい所だね」

千佳「そうだね」

かおり「それもそうだね」

そんな会話をしているとひゅうつと風が吹く。風向きが変わったのだ。臨海部に位置するこの学校はお昼を境に風の方向が変わる。朝方は海から吹き付ける潮風が、まるでもといた場所へ帰るように陸側から吹く。

千佳「気持ちいいねこの風」

かおり「だね」

折本と仲町の言う通りこの風に当たるのは気持ちいい。何より帆波達と一緒に食べるのが1番いい。

八幡「ああ、それにあの由比ヶ浜の視線を気にせず食べられるから楽だな」

かおり「確かにね。あんなにジロジロ見られてたら気が散るもんね」

千佳「流石にね」

帆波「うん、そうだね。でも今も気になるんだけど、なんでまだ未だに謝罪やお礼を言いに来ないのかな？」

八幡「さあ？もしかしてオレがアイツの犬を助けた事知らねえとか？」

千佳「それにしても比企谷君に馴れ馴れしいけど」

確かに馴れ馴れしかったな。

かおり「確かにね」

帆波「でも本当に知らないのかな？」

確かに本当に知らないのかもしれない。けど、なんであんなにオレ達を見たり、変なあだ名をつけたりしてくるんだろう。そこが分からないんだよな。そう言つてオレ達が考えていると…

???「あれ？折本さん達、今日はここで食べてるの？」

オレ達に声をかける人物がいた。見るとそこには銀髪の女子だつ

た。

かおり「あ、戸塚君じゃん」

ん？君？

千佳「戸塚君は練習？」

???'「うん。うちの部、すつごい弱いからお昼も練習しないと…。お昼も使わせてくださいってずっとお願いしてたらやつと最近OK出たんだ。折本さん達はここでお昼を食べてるの？」

かおり「うん、そうだよ」

千佳「それにしても戸塚君、授業でもテニスやってるのにお昼も練習してるだなんて、大変だね」

???'「ううん。好きでやってる事だし。あ、そういえば比企谷君テニス上手いんだね」

予想外にオレに話が振られて黙ってしまう。というかなんでオレの名前知ってるの？オレはあなたの名前知らないのに。

八幡「いや、照れるなく。って折本、仲町の知り合いか？」

かおり「ちよつと比企谷。同じクラスでしょ？それに体育一緒にでしょ？いい加減覚えなよ」

千佳「そうだよ比企谷君」

だって仕方ねえだろ。クラスの奴らとあんまり関わりないんだからよ。ん？一緒？

彩加「あはは、じゃあ自己紹介ね。同じクラスの戸塚彩加です」

八幡「お、おう。というか男子と女子って体育違うだろ。一緒なのは折本と仲町の方じゃねえの？」

とオレが言うのと静かになる。え？なんで静かになるの？なんか傷つくからやめて！というかホントにどうしたの？

彩加「あはは…実は僕、男なんだ」

八幡「え」

オレはその言葉に驚いてしまった。だって見た目は女子に見えるのに男子って。世の中分らない事だらけだな。

八幡「あー、なんか悪いな。やな思いさせて」

彩加「ううん。気にしてないから大丈夫だよ」

八幡「そっか、なら良かった。それよりよくオレの名前知ってるな」
彩加「だって比企谷君目立つよ」

八幡「え？オレが？」
え？嘘：オレが目立つ？そんな事あるわけないよな。

彩加「うん、だって比企谷君、いつも教室では折本さんと仲町さんと楽しそうに話してるし」

八幡「あー、なるほどな」

彩加「それに前までは教室で一之瀬さんも入れてお昼一緒に食べたし」

八幡「まあ、確かに食べてたな」

彩加「でもなんで今日はここで食べてるの？」

八幡「ん？あー、まあ、ちよつと気分転換みたいな感じだ」

由比ヶ浜が関係してるだなんて言えないよな。

彩加「そうなんだ。あ、そういうえば1つ聞きたかった事があるんだけど、聞いてもいいかな比企谷君？」

八幡「ん？なんだ？」

彩加「比企谷君って一之瀬さんと付き合ってるの？」

八幡「なんでだ？」

彩加「だって毎日一之瀬さんからお弁当受け取ってるから、もしかして付き合ってるのかな？って思ってる」

八幡「あー、なるほどな」

彩加「それで付き合ってるの？」

どうしようかな：まあ、でも由比ヶ浜じゃないし、戸塚なら口もかたそうだし、黙っておくように言っとくか。

八幡「ああ、オレは帆波と付き合ってるぞ」

彩加「やっぱりそうなんだ」

帆波「うん、実はそうなんだ」

彩加「もしよければんだけど、付き合いはじめたのっていつなの？」

帆波「中学2年生の時だよ」

彩加「へえ、そうなんだ。折本さんと仲町さんとはいつ知り合っ

たの？」

帆波「私は入学した時に会って友達になって」

八幡「オレは2年の時に会った」

彩加「そうなんだ。ありがとう教えてくれて」

八幡・帆波「「どういたしまして」」

八幡「あ、それとこれは誰にも言わないでくれないか？」

彩加「うん、わかった。約束する」

八幡「ありがとう」

良かった、これ以上目立ちたくないからな。そんなやり取りをしていると、昼休みの終わりのチャイムが鳴る。

彩加「戻ろっか」

千佳「そうだね」

オレ達は帆波と別れて、教室へ戻った。

数日の時を置いて、今再びの体育である。度重なる壁打ちの結果、オレは壁打ちをマスターしつつあった。いまや動かずともひたすら壁とラリーできるほどだ。そして、明日の授業からはしばらく試合に入る。つまり、ラリー練習は今日が最後だ。最後だから目いっぱい打ち込んでやろうと思ったところで肩をちよんちよんと叩かれた。

誰だ？オレに話しかけるやつとか皆無に等しいし…ハツ！もしや幽霊？オレのステルスがあまりにも強すぎて、周りの幽霊が仲間だと思いついたのか！？すごい、この能力は幽霊が接触できる領域まで進化を遂げたんだな。とバカげたことを思いながら振りむくと右頬に指が刺さった。

彩加「あはっ、引つかかった」

そう可愛く笑うのは戸塚彩加である。え、何これめっちゃ可愛いんですけど。今一瞬ドキッとしてしまったよ。危うく惚れそうになっちゃった。帆波がいるのにオレ何考えてんだろう。というか見た目が女子に見えるのに、こういう行動してるから更に勘違いを巻き起こしてるんじゃないか？

八幡「どした？」

彩加「うん。今日さ、いつもペア組んでる子がお休みなんだ。だか

ら：よかつたらぼくと、やらない？」

それはいいんだが、頬を染めて上目遣いは男子のやることじゃないからやめた方がいいよ。なんかまたドキツとしてしまうから。

八幡「おう、いいぞ。オレも一人だからな」

と言うことだ。すまん、壁。今日は打ってやれない。今まで世話になったな：とオレは壁に向かって謝罪していると、戸塚は小さい声で「緊張したー」と息を吐いた。そんなこと言われるとこっちも緊張するからやめてねホント。

そして、オレと戸塚のラリー練習が始まった。戸塚はテニス部だけあって相当上手い。オレが壁を相手に会得した正確無比なサーブを上手に受けて、オレの正面にリターンしてくる。それを何度も何度もやっていると、単調にでも感じたのか戸塚が話しかけてきた。

彩加「やつぱり比企谷君、上手だねー」

距離があるため、戸塚の声は間延びして聞こえる。

八幡「ずっと壁打ってたからなー。テニスは極めたー」

彩加「それはスカツシユだよー。テニスじゃないよー」

伸び伸びの声をお互いに出しながら、オレと戸塚のラリーは続く。他の連中が打ちミス受けミスを出す中、オレ達だけが長いこと続けていた。と、そのラリーが止まった。ぽーんと跳ねたボールを戸塚がキヤツチする。

彩加「少し、休憩しよっか」

八幡「おう」

2人して座る。戸塚が横に座ってきた。ちよつと？おかしくない？普通男子同士で座る時つて少し間を開けたり、向かい合ったりするもんじゃないの？

彩加「あのね、ちよつと比企谷君に相談があるんだけど…」

戸塚が真剣な様子で口を開いた。

八幡「相談、ねえ」

彩加「うん。うちのテニス部のことなんだけど、すつごく弱いでしょ？それに人数も少ないんだ。今度の大会で3年生が抜けたら、もつと弱くなると思う。1年生は高校から始めた人が多くてまだあ

まり慣れてないし……。それにぼくらが弱いせいでモチベーションが上がらないみたいなんだ。人が少ないと自然とレギュラーだし」

弱小の部活にはよくありそうなことだと思う。弱い部活には人は集まらない。そして、人が少ない部活にはレギュラー争いというものが発生しない。

彩加「それで…比企谷君さえよければテニス部に入ってくれないかな？」

八幡「え？」

なんでそうなるんだ？オレが視線だけでそう問うと、戸塚は体育座りの姿勢で身体を縮こまらせながら、ときおりすぎるような目つきでちらちらとオレの顔を見る。

彩加「比企谷君、テニス上手だし。もつと上手になると思う。それに、みんなの刺激にもなると思うんだ。あと…比企谷君と一緒にだったら僕も頑張れるし。あ、あの、変な意味じゃなくて！ぼ、ぼくも、テニス、強くなりたい…から」

そう言つて貰えると嬉しいが…答えは決まっている。

八幡「…悪い。それはちよつと無理だ。オレは奉仕部に入ってるからな」

オレは自分の性格をよく知っている。だいぶマシになったがオレはコミュ障で集団行動を好まない。第一、毎日放課後スポーツに励むのは到底無理だ。そんな気持ちで入る訳にはいかない。

彩加「そっか…そうだよね…ん？奉仕部？もしかしてあの奉仕部？」

うえ!?!知ってるの!?!マジで？どういう経緯で知ったの？

八幡「なんだ知ってるのか？」

彩加「聞いた事あってね。でもどんな活動内容知らないんだ」

八幡「生徒の願いを叶えるための手助けをする部活なんだ。まあ、簡単に言うとならボランティアみたいな感じだ」

彩加「なるほど。そういう活動内容なんだね」

八幡「ああ、だから今相談してくれた事はこつちで考えとく。いいか？」

そう言うと戸塚はアイドル顔負けの笑顔を向けて
彩加「うん！ありがとう。少し気が楽になったよ」

部室

八幡「……」

帆波「どうしたの八幡？難しい顔して」

八幡「あ、いや、ちよつと戸塚に相談事されてな」

千佳「戸塚君に？」

八幡「ああ」

雪乃「比企谷君に相談なんて」

八幡「おい」

雪乃「冗談よ」

こいつ……

かおり「そんで？その相談内容な何？」

八幡「ああ、実は……」

オレは戸塚に相談された内容を帆波達に話した。

八幡「と言うわけなんだ」

帆波「なるほど……」

かおり「もしかして比企谷、テニス部に入るの？」

八幡「いやいや、オレはもうこの部活に入ってるからな。それに……」

と言いかけた時、部室の扉をノックされた。そして雪ノ下は姿勢を

正して

雪乃「どうぞ」

と雪ノ下が返事をする、扉が開き……

彩加「失礼しまーす」

と入ってきたのはさつき話していた人物、戸塚彩加だった。でも、

なんでここに？

彩加「あっ！比企谷君！」

オレと目が合った瞬間、まぶしい笑顔をオレに向けた。え？なに？

オレと会えてそんな嬉しい？そんなバカな事考えてる場合じゃやじや
ないな。

八幡「おう、どうした戸塚」

彩加「体育の時間教えてもらった奉仕部の場所を教えてもらって来たんだけど…」

戸塚がそう言うとき雪ノ下は席から立ち

雪乃「戸塚彩加君ね。どうぞ」

戸塚はオレ達とは反対側のイスに座る。

雪乃「それで何か御用かしら」

冷たい視線に射抜かれて、戸塚がぴくっと一瞬身体を震わせた。

彩加「あ、あの…比企谷君にも相談したんだけど、うちのテニス部は弱いんだ。だから、部活を活気づけるために、強くなりたいんだ…」

雪乃「なるほど…つまりはあなたのテニスの技術向上ね。言っておくけれど、私たちはあくまで手助けするだけよ。強くなれるかどうかはあなた次第よ」

彩加「うん、わかってる。でもそれで少しでも部員のみんなの刺激になれば、嬉しいんだ…」

なるほど…意思是固いというわけか…いや、責任感も強い。自分のため、部員のため、部活のため、この小さな身体で一人で頑張っている。それだけじゃない。精神的にも十分な強さがある。戸塚彩加はそこらの男子よりよっぽど男子だ。

八幡「…オレは受けてもいいと思ってる。帆波達はどうか？」

帆波「うん、いいよ。一緒に頑張ろう」

かおり「そうだね。私も協力するよ」

千佳「私も」

雪乃「ええ、そうね。その依頼受けましょう」

彩加「みんな…ありがとう」

こうしてオレ達は戸塚の依頼を受ける事になった。それからはどうやったらいいかを話し合うことになった。

かおり「んく、やっぱりテニスをするのが一番かな？」

八幡「そうだな…あとは体力とか筋力をつけるトレーニングをした方がいいんじゃないか？」

帆波「確かにテニスって、状況に応じて全身の筋肉使うもんね」

千佳「確かにね」

彩加「えっと…みんなはテニスやったことあるの？」

八幡「ああ、ちよつとだけやった事があるだけだ」

彩加「そうなんだ」

まあ、前に帆波達とやった事あるけど、そんなには上手くは無いです。まあ、人並みくらいかもしれない。オレ達は戸塚みたいに真剣にやってないからな。どっちかと言うと遊びでやってる感覚だ。けど、今回はそういう気持ちでやってはいけない。そんな事したら戸塚に悪いからな。

八幡「それでだ、学校ではテニスをやって、家では筋トレとかをしたらいいんじゃないか？筋トレは無理せず自分のペースに合わせてやっていけばいい。途中で無理と感じたらすぐにやめろ。それと、身体を柔らかくしたければ入浴後にストレッチなんかしたらいいと思う。これがオレの意見だがどうだ？」

と帆波達に視線を向ける。

帆波「うん、いいと思うよ」

かおり「うん、私もいいと思う」

千佳「私も」

雪乃「…悔しいけれど比企谷君の意見が良さそうね」

うわあ…ホントに悔しそうな表情してる。え？何？そんなにオレに負けるのが嫌なの？雪ノ下は相当負けず嫌いなんだな。

そして翌日の昼休みにテニスコートに集合する事になった。

第11話

八幡 side

翌日の昼休み。オレは体操服であるジャージに着替えて、テニスコートに向かう。オレの学年のジャージは無駄に蛍光色の淡いブルーで非常に目立つ。その壮絶なまでにダサイ色合いのおかげで、生徒には大不評で、体育や部活の時間以外にこれを好んで着る奴はいない。そいえば戸塚は学校では常時ジャージだったな。何かしらの理由があるのだと思うけど、まあ、それは聞かないでおこう。

そしてテニスコートには雪ノ下と帆波達がいた。雪ノ下は制服のまままで、帆波と折本と仲町の3人はジャージ姿だった。

雪乃「では、始めましょうか」

彩加「よ、よろしくお願いします」

雪ノ下に向かって、戸塚がぺこりと一礼する。

そして練習が始まるが、初めに戸塚は基礎体力がないそうなのでまずは走り込みと筋トレから始まりその後球出し練習といった感じだ。まあ昼休みでできるのはこのあたりが関の山だろう。走り込みは15分間走。コートをひたすら15分走り続ける。15分間走が終わるとほぼ休まず筋トレ。戸塚は筋力はないようでかなりきつそうだ。オレも少し運動してるはずなんだが、やっぱりキツイな。そして筋トレが終わると少し休憩。

帆波「お疲れ八幡」

帆波はそう言いながらタオルを渡してくる。

八幡「サンキュ」

オレは帆波からタオルを受け取り汗を拭く。

帆波「やっぱりまだ運動不足だね。八幡」

八幡「ああ、そうだな。ちよつとキツかったわ」

かおり「もつと体力つけないとね比企谷」

八幡「そういうお前もな」

かおり「うっ…」

千佳「まあまあ、でもちよつとずつでも良いからつけたらいいじゃ

ない」

八幡「まあ、そうだな」

そして休憩も終わり、練習を再開する。そして球出し練習が始まった。オレと帆波が球出し。雪ノ下がフォーム指導、折本と仲町は球拾い。そしてしばらくやっている、戸塚が球を捕らえようと走るが、捕え損ねて転んでしまう。ちよつと罪悪感が出てしまう。

かおり「戸塚君！大丈夫!？」

球拾いしていた折本と仲町は戸塚に駆け寄る。

彩加「うん、大丈夫だから続けよ」

雪乃「…まだ、続ける気なの？」

彩加「うん、みんな付き合ってくれてるしもう少し頑張りたい」

雪乃「そう…なら一之瀬さん達少しここお願いするわ」

帆波「うん。わかった」

そう言つて雪ノ下はくるつと踵を返すとスタスタと校舎の方へと歩いていった。

彩加「僕、怒らせちゃつたのかな？」

帆波「ううん。そんな事ないよ。雪乃ちゃんは頼ってくれる人を見捨てたりしないから。ね？みんな」

かおり「うん、そうだよ」

千佳「そうそう」

八幡「そうだな。多分、雪ノ下は救急箱を取りに行ったんだと思うぞ」

彩加「そつか…良かった」

戸塚は安心したのか胸を撫で下ろす。多分、不安だったのであろう。取り敢えず続けるか聞こうと思つた瞬間…

「あーテニスやってんじゃんテニス」

と声が聞こえたので、声のした方を振り向くと。そこには金髪で髪がぐるぐる巻かれている髪型の女子と前の体育の時間に近くにいた金髪の男子と由比ヶ浜とその他諸々がいた。どうやら由比ヶ浜のグループと1人だろう。

「ねー戸塚ー、あーしらもテニスで遊んでいい？」

と金髪ぐるぐるロール：長いな、金髪縦ロールで良いか。その金髪縦ロールが聞いてくる。というかなんか偉そうだな。

彩加「み、三浦さん。僕は遊んでるんじゃないやなくて練習を…」

三浦「え？なに聞こえない」

いや、聞こえるだろう。もしかして難聴？耳鼻科に行ったほうが良いくない？それよりアイツの名前三浦って言うんだな。まあ、オレには関係ないけどな。

彩加「だから、練習を…」

三浦「ふーん。でも部外者いんだしいつしよ？」

帆波「私達は部外者なんかじゃないよ」

と帆波が三浦とか言うヤツらに向かって言う。そして帆波は続けて言う。

帆波「私達は学校から正式な許可を貰ってここを使わせてもらった。もし、ここを使ったかったら学校から許可を貰ってくれないかな？」

帆波はそう言う。まあ、正論だな。オレ達は正式な許可を貰って使っている。許可もなく使ったら何かしらの罰を受けることになるだろう。

三浦「は？何言ってるの？テニス部でもないんだから部外者じゃん」

何アイツ？話聞いてたのか？頭おかしいんじゃないの？

帆波「話聞いてた？私達は許可を貰ってるし、戸塚君の依頼で練習に付き合ってるの。使いたかったら許可を貰ってきて」

帆波は負けずと相手を説得を頑張る。けどそれぐらいじゃ相手は引いてくれなかった。しかも…

結衣「そんなの関係ないじゃん！使わせてよ！」

ハア：またアイツか由比ヶ浜。ほんと毎回毎回鬱陶しいな。なんでそんなにオレ達に関わってくるんだよ。ハア：これはオレも手伝うしかないな。

八幡「おい、お前ら本当に帆波の話聞いてたか？」

帆波「…八幡」

と近づき言うとう二人はこつちを見てくる。三浦は何コイツ？みたいな視線で、由比ヶ浜からは少し怒りの感情が入った視線で見ている。

三浦「はあ？あんたいきなり何？」

八幡「だから話聞いてたかって聞いてんだよ。オレ達は戸塚に練習に付き合ってくれって依頼されて使ってるって言ってただろ」

三浦「ふーん…じゃあその練習あーしらも付き合ってもいいよね？」

八幡「だから学校から許可取って来いって言ってる。人の話聞けって」

ハア…ホントコイツ人の話聞かねえな。そんな時だった…

金髪「まあまあ、そんなケンカ腰にならなくてもさ…」

そう言ってるこの多分グループリーダーの金髪イケメンが仲裁に入ってくる。

金髪「ほら、皆でやった方が楽しいしき。そういうことでもいいんじゃない？」

帆波「葉山君、ごめんだけど許可取ってきてよ」

帆波がそう言う。アイツの名前葉山って言うんだ。知らなかったな。まあ知りたくもなかったけどな。するとその葉山は顎に手を当てて考えている。そして何か思いついたのか顔を上げて

葉山「じゃあこうしないか？部外者同士で勝負。勝った方が明日からテニスコートが使える。もちろん戸塚の練習にも付き合う。強い人と練習した方が戸塚のためにもなるからな。どうだ？」

三浦「テニス勝負？…なにそれ、超楽しそう」

いや、こつちは楽しくもないんだけどな。するとわっと取り巻きの連中が沸き立つ。え？なにこれ？もしかしてこれやらないといけないパターン？マジかよ……

そして本当に勝負することになってしまった。今や、校庭の端に位置するこのテニスコートには人がひしめき合っていた。というか

どつから話を聞きつけたんだよ。めっちゃいるな。この連中の大半がああ葉山の友人、およびファン達である。まあ、全く興味がないがな。

「HA・YA・TOO!フウ!HA・YA・TOO!フウ!」

ギャラリーの葉山コールのあとはウェーブが始まる。これではアイドルのコンサートだな。

かおり「で?どうするの比企谷」

八幡「どうするつてもなく。オレがでるしかないか」

千佳「そうだよ。相手は葉山君だもんね」

八幡「あ、それより雪ノ下にテニス部の顧問とサッカー部の顧問の先生ここに連れてくるように連絡してくれ」

かおり「え?なんで?」

八幡「それは来てのお楽しみってね」

千佳「比企谷君。悪そうな笑顔だよ」

帆波「ホントだね」

彩加「でも大丈夫なの?」

八幡「まあ、なんとかなるだろう。雪ノ下に連絡頼んだぞ」

千佳「じゃあ私がしとくよ」

八幡「おう」

三浦「ねー、はやくしてくんない?」

うるせーなドリルビッチと思って顔を上げるとラケットをもってコートに立っていた。それを意外に思ったのはオレだけではなく、イケメンの葉山も同様だったようだ。

葉山「あれ?優美子もやんの?」

三浦「はあ?当たり前だし。あーしがテニスやりたいつつたんだけど」

葉山「いや、でも向こう男子が出てくるんじゃないか?あの一、ヒキタニ君だっけ。ちよつと不利になるんじゃない?」

だから誰だよヒキタニ君って。そんなやつここにはいない。とうか懐かしいな中学の時よく言われてたな。

三浦「あ、じゃ、男女混合ダブルスでいいじゃん。うそやだあーし

頭いーんだけど。つつつてもヒキタニ君と組んでくれる子いんの？とかマジウケる」

三浦とかいう金髪ドリルが甲高い下品な声で笑うと、ギャラリイにもドツと笑いが起こった。ホントこういうの好きだよね。オレみたいな奴を笑いものにするの。でも、それ以上はやめた方がいいよ。理由は帆波達がめっちゃ怒るからだ。

帆波「八幡、手伝うよ」

と怒りの感情を少し出しながらコートに近づいてくる。

八幡「お、おう。悪いな」

帆波「彼女なんだから遠慮しない。それに私、イラツときてるし」

八幡「そ、そっか…無理するなよ」

帆波「わかってる。雪乃ちゃんが帰ってくるまでの時間稼ぎでしよ」

八幡「ああ」

けど大丈夫か？相手はテニスウェアを着ていて、帆波はジャージで戦うことになるのか…：…いけるか？

帆波「心配しないで八幡。大丈夫、私はいけるから」

八幡「おう、わかった」

どうやら帆波には筒抜けらしい。さすがオレの彼女だな。

八幡「ちゃんといえるから安心しろ。そんじゃ始めるぞ」

葉山「ああ、わかった。それとヒキタニ君」

八幡「なんだよ」

葉山「俺、テニスのルールとかよくわからないんだ。ダブルスだと余計難しいし」

八幡「じゃあ適当に打ち合って点取りあえばいいんじゃないか細かいルールは無しでどうだ？」

葉山「うん、わかった。それでやろう。それじゃ11点取った方が勝ちで良いかな？」

八幡「ああ、わかった」

そして試合開始の合図がでる。始まった当初こそ、ギャラリイは熱い雄叫びや黄色い声援を送っていたが、息の詰まるような接戦が続

く。オレと帆波はなんとかして相手の球を打ち返す。けど三浦が放ったサーブだった。ヒッパツとラケットが鳴ったと思ったら、コートに弾丸の如くボールが突き刺さり、後方へと飛んでいく。マジかよ……。

帆波「強いね」

八幡「ああ。これ雪ノ下が戻るまで勝負つくんじや」

帆波「分からない。けどやっぱり雪乃ちゃんが戻るまで頑張ろう」

八幡「ああ、そうだな」

その後、帆波からのサーブから始まる。葉山はそのサーブを難なくこつちに返してくる。しかも速くて重い球が飛んでくる。その球をオレは必死に食らいつき、力いっぱい振り抜いた。打球は相手のコートへ返るが、それを狙い済ましたように打ち返してきた。返ってきた打球を帆波が打ち返す。その繰り返し作業みたいになってしまふ。

それから数分後。得点は5対8で負けている。アイツらから5点も取れたのは良かった。まあ、わざと点を取らせたのか、わざとじゃないのか知らねえが、雪ノ下よまだなのか。

葉山「ま、お互いよく頑張ったってことで。あんまマジになんないでせ。引き分けてことにしない？」

なるほど、敵に情けをかけてくるとはな。まあ、こつちとしてはすぐにやめたいが……もしここでやめたら向こうが勝ってしまう事になる。そうになったらオレ達は使えなくなる。せつかく戸塚が頼って依頼してくれたのに。けどフツとギャラリーの人と人の間を見ると、雪ノ下と2人の先生の姿があった。ホッ……なんとか時間稼ぎができたみたいだな。

テニス部顧問「これはなんの騒ぎだ！」

テニス部顧問であろう先生が言うのと周りの奴らは驚いている。そりやそうだろうな。

サッカー部顧問「葉山、お前何してんだ？」

葉山「い、いや……これは……」

テニス部顧問「葉山君と三浦さんは何でテニスコートとラケット持ってるのですか？」

葉山「それは…」

葉山と三浦が戸惑っていると、隣にいた帆波が手を上げる。

帆波「それについては私が説明します」

テニス部顧問「わかった。一之瀬さんお願いするよ」

帆波「はい、私達が練習していると、自分達にもやらせると言ってきたんです。ですが私達は許可を取って来るように説明したのですが、聞いてくれなくて」

テニス部顧問「戸塚君本当かな？」

彩加「はい、本当です」

テニス部顧問「なるほど」

サッカー部顧問「葉山、本当なのか」

葉山「…はい」

サッカー部顧問「ハア…お前ってやつは…：…すまなかつたな戸塚。せつかくの練習時間を無駄にしてしまった」

彩加「い、いえ…大丈夫です」

サッカー部顧問「それと葉山。この事は両親に説明するし、レギュラーの件も考え直すからな」

葉山「…はい」

すると葉山は下唇を噛んでいた。すると先生を連れてきた雪ノ下が口を開く。

雪乃「葉山君、あなたには失望したわ。この事は母さん達に報告するわ」

それを聞いた瞬間葉山の顔は青ざめていた。え？…どうしたの？…なんでそんなに青ざめているの？あの雪ノ下の一言で青ざめるなんて、一体雪ノ下の家はどれだけ怖いんだよ。そして葉山と三浦がテニスコートを出ようとしたので。

八幡「おい、葉山、三浦。お前ら謝りもしないで何戻ろうとしてんだよ。こんだけ戸塚に迷惑かけたのにもかかわらずにか？」

葉山「っ！…そ、そうだね。邪魔してすまない戸塚」

三浦「ご…ごめん」

彩加「うん、もういいよ。次はちゃんと許可取ってきてね」

葉山「…ああ」

そう言つて葉山と三浦、その他諸々は戻つて行つた。

八幡「フウ：雪ノ下サンキュ助かつたわ」

雪乃「気にしないでちょうだい。それに仲町さんから連絡来た時驚いてしまったわ。急にテニス部顧問とサッカー部顧問の先生を連れて来てつて連絡があつて、何かと思えば…どうせ葉山君か三浦のせいなんでしょ？」

八幡「まあ、そういうわけだ」

雪乃「そう、でもお疲れ様。2人ともよく耐えたわね」

八幡「いや、もうホントしんどい」

帆波「もう…それだったらもつと体力つけなよ」

八幡「うるせえ」

彩加「あ、あの、比企谷君、一之瀬さん。ありがとう」

八幡「ん？ああ、気にするな」

帆波「そうそう」

彩加「でも、助けてもらったから」

八幡「そつか、気持ちだけ受け取つとくわ」

彩加「うん！」

そう言つて笑顔になる戸塚。

八幡「さて、もう昼休みも終わるし、終了するか」

雪乃「そうね。では解散しましょうか」

帆波「うん、わかつた」

かおり「わかつたよ」

千佳「わかつた」

そしてオレ達は急いで後片付けを済ませ、制服に着替えた。ホントあいつらのせいでロクに練習できなかつたな。でもまあ、テニス部顧問とサッカー部顧問の先生に見つかつたし、何かしらの罰を受けることになるだろう。まあ、オレ達には関係ない事だ。由比ヶ浜同様、これ以上関わつてこない事を祈るしかないな。

今日は部活は休みという事でオレ達はそのまま帰ることになった。

八幡「ハア…疲れた」

帆波「だね」

かおり「お疲れ」

千佳「お疲れ様」

八幡「いや、ホントあいづらなんなの？しかも由比ヶ浜までいるなんて」

帆波「ホントだね」

かおり「まあ、仕方ないんじゃない？だって由比ヶ浜さんは葉山君達と一緒にグループだもん」

八幡「だからって人の話ちゃんと聞いてほしいもんだ」

千佳「そうだね。帆波と比企谷君が説明してるのに、聞かずにやらせろって…私、ちよつと引いちゃったよ」

かおり「私もだよ」

八幡「でもまあ、これであまり関わってこないだろう…多分」

帆波「断言できないんだね」

八幡「そりやそうだろう」

帆波「まあ、そうだね。葉山君と三浦さんは兎も角、由比ヶ浜さんはまた関わってくるんじゃない。本当に関わってきたら

八幡「帆波よ…フラグを立てるんじゃない。本当に関わってきたらどうするんだよ」

帆波「にやはは…ごめんごめん。そうだね、フラグ立てちゃった」
八幡「まったく」

かおり「でも、本当に由比ヶ浜さんどうするの？あの事故の事話すの？それとも無視するの？」

八幡「さあな。また関わってきてても無視するだけだけだな」

千佳「うん、その方がいいと思うよ。もし下手に関わって、また事故になっても嫌だしね」

帆波「そうだね」

八幡「まあ、その時はその時に考えればいい」

かおり「それもそっか」

八幡「ああ」

その後は普通に会話しながら家に帰った。

そして翌日、聞いた話によると葉山と三浦は無断でテニスコートとテニス部の備品を使ったことにより、1週間の停学と反省文を書くことになったらしい。もし、あの時葉山が三浦の事止めて許可でも取りに行っていたらこんな事にならないで済んだのにな。ホント残念な奴らだ。

第12話

八幡 side

あれから数日経った休日。オレは駅で帆波と待ち合わせをしている。折本と仲町は来ない。オレと帆波の2人だけだ。所謂デートと言うやつだ。帆波と2人つきりで出かけるのは久々だな。高校1年の時もやったが2年になってからはやってないな。今日はすごい楽しみだ。

帆波「八幡お待たせ。待った？」

八幡「いや、待ってないぞ」

帆波「そっか、よかった」

まあ、本当は10分ぐらい前に来ていたが実際そんなに待っていない。そんな事よりも今日の帆波の服よ。なんだあれは？トップスなのか？分からないけど、なんで袖の方割れてるんだ？そのおかげで帆波の肌が少し見える。下は赤いスカートを身につけており、手にはバンドバンドを持っている。

八幡「あー、帆波」

帆波「ん？何？」

八幡「その服似合ってるぞ」

帆波「うん、ありがとう！」

と嬉しそうに笑顔になる帆波。

八幡「でも、そんな袖が割れてる服もあるんだな」

帆波「うん、そうだよ。可愛いでしょ？」

八幡「あ、ああ…：そうだな。でも、目立たないか？」

帆波「そうかな？」

八幡「だって少しだけだが肌も見えるし」

帆波「だってそういう服だもん。それに八幡に見せたかったから」

八幡「そ、そうか…：ありがとうな帆波」

帆波「うん！」

八幡「それでどこ行くんだ？」

帆波「えっとねショッピングモールに行こうかなって思ってるん

だ」

八幡「わかった。じゃ行くか」

帆波「うん」

オレと帆波は電車で3駅離れたショッピングモールに向かった。そして目的地であるショッピングモール着いた。このモールはそれなりに大きいモール。映画館もあるし、買い物天国みたいなどころだと聞いた事がある。

八幡「やっぱり人が多いな」

帆波「そうだね。やっぱり休日だからじゃない」

八幡「かもな」

でもやっぱり混んでいる。やっぱり人混みはまだ苦手だな。そんな事思いつながら帆波と雑談しながら移動する。すると帆波が立ち止まる。何事かと思えば帆波を見ると、ショーウィンドウに飾られている服を見ていた。

帆波「ねえ、八幡。ここ入ってみていい？」

帆波が指さした方向はやはり女性ものの服屋だった。オレというか男性には辛い空間なのでは無いか。

八幡「いや、良いけど…オレが入ったら怪しまれないか？」

帆波「大丈夫大丈夫。私と一緒にいれば怪しまれないし、それに今の八幡なら怪しまれないって」

うん、ありがとう。でもね、その言い方すると前のオレなら絶対に怪しまれたみたいない言方になりませんか？

八幡「そうか？」

帆波「うん。もし、心配ならこうすればいいの」

帆波はそう言ってオレの腕を組んでくる。あまりに急だったので驚いてしまう。

八幡「お、おい。帆波いきなりどうしたんだよ」

帆波「だってこうすれば絶対に怪しまれないでしょ？それに私達は付き合ってるんだから普通でしょ？それに中学の時1回やったでしょ」

まあ、確かに1回やったよ。でもあれは学校に着いた時にやったん

だったかな。

帆波「まあ、本当の理由は私がやりたいただけなんだけどね」

八幡「…さいですか」

帆波「うん、じゃあ早速入ろうか」

八幡「お、おう」

オレは帆波に腕を引つ張られながら服屋の中に入る。チラツと店員を見るとめっちゃ笑顔だった。なにあれ？なんであんなに笑顔なの？しかも目もオレ達を暖かく見ているような目で見てくる。まあ、なにせよ怪しまれないで済んだので良かったわ。

帆波「ねえ、八幡」

八幡「ん？なんだ？」

帆波「八幡ってどういう服が好みなの？」

八幡「は？服？」

え？何？服の好み？何それ？

八幡「服に好みとかあるのか？」

帆波「あるよ」

あるんだ。

帆波「ほら、服とか手に持ってみてトキメクかトキメかないかで決めるじゃん」

八幡「知らねえよ」

帆波「そう？じゃあ…私に着てほしい服とかある？」

八幡「え？オレが決めるのか？」

帆波「うん、そうだよ」

八幡「マジかよ…オレは服のセンスとかないぞ」

帆波「いいのいいの。ほら八幡、選んでよ」

八幡「わかったよ…後で文句言うなよ」

帆波「言わないよ」

八幡「そうか」

ハア…なんでオレが帆波の服を選ばなくちゃならない。普通自分で選ぶもんじゃないの？オレは親とか小町に任せてるから知らんけど。まあ、そんな事よりも帆波の服選ばないとな。でも、どれにした

らしいんだよ。そういえばこの前小町が言ってたな。こういう時は相手に着てほしい服を選ぶのが良いって。そうなればオレが帆波に着てほしい服を選ぶという訳か。さて、どれにしようか。と悩みながら店内を見て回る。その間帆波はずっと着いてきてもらっている。でないとおれ絶対に怪しまれるからな。すると視界にマネキンに着せられた服が入る。これは：ワンピースか？色は水色で後ろの方はVネックデザインでリボン風のデザインのワンピースだった。

八幡「これなんかどうだ？」

帆波「このワンピース？」

八幡「ああ。このワンピースだったら帆波に似合うと思ってな」

帆波「そっか、わかった。着てみるよ。すいませくん」

帆波は近くにいた店員に向かった。

帆波「すいません。あのマネキンが着ている服試着してみたいんですけど」

店員「はい、わかりました。少々お待ち下さい」

店員はマネキンが着ていたワンピースを取り、オレ達に近づいてくる。

店員「お待たせしました。こちらでよろしかったですか？」

帆波「はい、ありがとうございます」

そう言つて帆波は店員からさっきのワンピースを受け取り、オレの方へ体を向ける。

帆波「じゃ試着するから試着室の前で待っててね」

八幡「あ、ああ、わかった」

オレは帆波の後をついていき試着室の前まで来た。

帆波「じゃ試着するから絶対に待っててね」

八幡「わかったよ」

そう答えると笑顔になり、クルッと周り試着室へと入っていった。試着するのを待つのは良いけど、オレ目立ってないかな？そこだけが心配だ。そんな事を思いながら数分後、着替え終わったのか試着室のカーテンを開けて出てくる。それを見たオレは見惚れてしまった。高いウエスト位置から広がるフレアラインが出ているせいか脚が長

く見える。それになんだか上品な大人感を出している。それに帆波はスタイルも良いから余計に可愛く見える。

帆波「八幡、どうかな？」

そしてオレに感想を聞いてくる。

八幡「お、おう…その…似合ってるぞ／＼」

オレは思わず顔を逸らしてしまう。そしてそれを見て何を察したのかニヤニヤしながら聞いてくる。

帆波「あれ？どうしたの八幡？顔を赤くして、それに視線を逸らして」ニヤニヤ

八幡「いや…それは…」

帆波「ほらほらく、ちゃんとこっちを見て感想言っつてよね」

八幡「うっ…」

帆波のやろう…絶対にわかってて言ってるなアレは。あんまり目視できねえのによ。クソっ…こうなりやヤケだ。オレはゆっくりと帆波の方を向き。

八幡「すごく似合ってるぞ。帆波に合っつてて可愛いぞ」

とスゲエ恥ずかしいけど帆波に感想言った。

帆波「にや!?!／＼」

帆波はすごい驚いていた。なんでだよ。ちゃんと顔を見て感想を言っつてほしって言ったの帆波だろ。だからちゃんと顔を見て感想を言っつたのに。

帆波「き、急にそんな事言われたら困るよ…／＼」

八幡「いや、帆波が言っつたんだろ？ちゃんと見て感想言っつて」

帆波「そ、そりや言っつたけど…やっぱり恥ずかしい」

八幡「まあ、オレも恥ずかしかったしな」

帆波「そ、そっか…」

八幡「それでどうするんだ？」

帆波「え？あ、そうね。じゃあ買おうかな」

八幡「え？買うのか？」

帆波「うん、八幡が選んでくれたし、似合っつて言っつてくれたし、何より私も気に入ったからね」

八幡「そうか。じゃあ出口で待ってるからな」

帆波「うん、わかった」

そしてオレは会計が終わるまで出入口で待つことにした。

一方レジの方では：

帆波「すみません。これお願いします」

店員「はい、ありがとうございます。それとお連れの方はもしかして彼氏さんですか？」

帆波「あ、はい、そうです」

店員「やっぱりそうなんですネ。お2人を見ているとお似合いのカップルに見えたので」

帆波「あ、ありがとうございます／＼」

店員「フフフツ」

と言う会話は八幡には聞こえてはいなかった。

八幡に戻り：

何話をしているんだ？そんな事思っていると会計を終わらした帆波が戻ってきた。

帆波「お、お待たせ八幡」

八幡「おう、それより店員と何話していたんだ？」

帆波「べ、別に何にもないよ」

八幡「そ、そうか：なら良いが」

そして場所は変わり男性用の服屋に来ている。何故って？オレが帆波の服を選んだから、今度は帆波がオレの服を選んでくれるらしい。

帆波「八幡、次はこれ着てみて」

八幡「：はいよ」

かれこれ何着も着せられている。オレは着せ替え人形かよ。そんな事思いつながら帆波から服を受け取り試着室へ入る。まあ、でも帆波のセンスはオレよりも良い。だからかなり良い服を選んでくれる。けど帆波が納得のいく物が中々ないらしい。ここまで来たら完璧にしたいらしい。そして着替えていると外から話し声が聞こえてきた。

店員「どうですか？良い服見つかりましたか？」

帆波「そうですね。彼に似合う服が中々無くて」

店員「そうなんです。でも彼女さんが選んだ服なら彼氏さんも嬉しいと思いますよ」

帆波「あ、ありがとうございます」

そんな話が聞こえてきた。まあ、確かに帆波が選んだ服なら嬉しいけど。そんな事より着替え終わったし出るか。

帆波「あ、着替え終わったんだね」

八幡「ああ」

すると帆波はオレを上から下へまた下から上へと見る。

帆波「うん！すごく似合ってる」

八幡「お、おう、そうか…じゃあオレもこの服買おうかな。帆波がせつかく選んでくれたし」

帆波「うん、わかった」

オレはその後着替えてレジで会計を済ませて帆波の所へと向かった。

帆波「終わった？」

八幡「おう」

帆波「じゃ行こっか」

八幡「おう」

オレと帆波は服屋から出てしばらく歩く。

帆波「ねえ、八幡。そろそろお昼にしない？」

八幡「お、もうそんな時間か」

帆波「うん、だからどっか入らない？」

八幡「ああ、そうだな」

オレと帆波はお昼ご飯を食べるためどこかのファミレスへ入った。入ると店員に案内され席に座る。座る順としては向かいあわせで座る。メニューを見て何食べるかを決める。

帆波「八幡決めた？」

八幡「ああ」

帆波「じゃあ店員さん呼ぶね」

店員を呼んで注文をする。そしてオレと帆波は注文した料理がくるまで雑談しながら待つことにした。

帆波「それにしても良い服見つけてくれてありがとうね八幡」

八幡「喜んでもらえて何よりだ」

帆波「八幡は知らないと思うけど、あの服結構人気のやつなんだよ」

八幡「へえ、そうなんか。オレそんなの全然知らないけど」

帆波「いいのいいの。こういうのは好きな人に選んで貰うのが、女の子にとっては嬉しいの」

八幡「そういうもんか？」

帆波「そういうもんなの」

八幡「ふーん」

そんな会話をしていると店員が注文した料理を運んできた。オレが頼んだのはカルボナーラ、帆波はボスカイオーラを頼んだ。

帆波「じゃ、食べようか」

八幡「そうだな」

オレは早速一口口の中に運ぶ。

八幡「美味しいな」

帆波「こっちも美味しい」

ホント美味しいな。

帆波「ねえ八幡。それ一口頂戴」

八幡「ん？あぁいいぞ。ほれ」

帆波「あーん」

八幡「は？」

帆波「だからあーん！」

八幡「い、いや…それは…」

帆波「やってくれるまでやめないよ。ほら、あーん」

八幡「くっ…」

帆波はずっと目をつぶり口を開けている。マジかよ…これ本当にオレが帆波に食べさせないとやめてくれないよかよ。そんな事迷っている、周りからすごい視線が集まってくる。や、やばい…これオレがやらないとオレが悪いみたいな感じが出てしまう。オレはカル

ボナーラをフオークですくって帆波の口へと運ぶ。

八幡「ほ、ほれ…あ、あーん」

帆波「あー…む…うん、美味しい」

八幡「そ、そうか…」

帆波「じゃお礼に私のも一口あげる。はい、あーん」

八幡「なっ?! い、いやオレはいい／＼／」

帆波「むっ…」

オレは帆波のあーんを断ると帆波は少し頬を膨らませていた。

帆波「これも八幡が食べてくれるまでやめないよ」

またかよ。ていうかまだオレ達食べさせ合いなってしたことないのになんで今する必要あるんだよ。でも、これもオレがやらないと周りの視線が痛いだろうし、もう諦めるか。

八幡「わかったよ…あ、あーん」

帆波「フフ…はい、あーん」

八幡「あむ…うん、こつちも美味しいぞ」

帆波「それなら良かった」

本当は全然味がわからなかったですはい。だって初めて食べさせ合いて、それにこれってあれだろ関節キスというやつだろ。それで余計に味がわからなかったわ。

帆波「私達初めてあーんしたね」

八幡「そうだな…」

帆波「やっぱり恥ずかしいね」

八幡「だったらもうやらんところぜ。オレも結構恥ずかしかったし」

帆波「それはダメ」

八幡「なんでだよ。恥ずかしいんならやらない方が良いだろ」

帆波「そうかもしれないけど、やっぱり私達は付き合ってるんだしさやらないと」

八幡「いや、別に付き合ってるからって絶対にやらないといけないという決まりはないだろ?」

帆波「…八幡は私とこういうことするの…嫌?」

八幡「うつ…」

帆波はそう言って涙目になりながら上目遣いで見てくる。ちよつとホントそれは卑怯ではないですか帆波さん。

八幡「…その…なんだ…オレも帆波とこういうのできて嬉しかったぞ」

オレは頭をガシガシとかきながら言う。でも少し恥ずかしさもあまりまた視線を逸らしてしまう。

帆波「そ、そっか…／＼／＼」

その後数秒後沈黙が続く。よく見ると帆波の顔が若干赤いような気もする。

八幡「…さ、さっさと食べるか」

帆波「そ、そうだね」

その後は食事を終えたオレと帆波は何も目的地もなく歩く。

八幡「さて、次はどこ行く?」

帆波「うーん、そうだな。…ん?」

八幡「どうした?」

帆波「あそこにいるのつて由比ヶ浜さんよね」

オレは帆波が指さす方向を見る。するとそこには帆波が言ったように由比ヶ浜がいた。その近くに三浦とあと一人は多分同じグループの人だろう。

八幡「ホントだな。見つかつて絡まれたら厄介だし、違う道行くか」

帆波「そうだね。せっかくのデートを邪魔されたくないしね」

八幡「ああ」

オレ達は由比ヶ浜達がいる方向とは違う方向へ向かって歩く。ホント絡まれたら厄介だしな。まあ、ほとんどは由比ヶ浜が絡んでくると思うしな。なんであるなに絡んでくるのか未だにわからん。せっかくの帆波とのデートを邪魔されたくないからな。まあ、そんな事より今は帆波とのデートを楽しむか。

その後はモール内を色々見てまわった。由比ヶ浜達と鉢合わせし

ないように気をつけながらまわった。けど特にこれといっている物
は見つからず帰る時間となったのでオレは帆波を家まで送った。

帆波「送ってくれてありがとう八幡」

八幡「どういたしまして」

帆波「今日は楽しかったよ」

八幡「オレもだ」

帆波「そっか。じゃあまた明日ね」

八幡「おう、また明日」

そう言っただけでオレは帆波が家に入るまで見送ってから、自分の家に
帰った。

第13話

八幡 side

帆波とのデートを終えて月曜日の昼休み。いつものようにベストプレイスにて弁当を食べている。

帆波「ねえねえみんな。職場見学で行くところ決まった？」

八幡「いや、決まってないな。グループも行先も何一つ決まってない」

今、帆波が言ったように総武高では2年生になると、職場見学という行事が行われる。各人の希望を募りそれをもとに見学する職業を決定し、実際にその職場へ行く。社会に出るということを実感させるゆとり教育的なプログラムだ。

帆波「え？かおりと千佳と組んでいるんじゃないの？」

八幡「いや、それがさ。同性同士で組めって言われたんだよ」

帆波「え？そうなの？私のクラスは別にそんな事言われなかったよ」

かおり「それはJ組だけじゃない？だってJ組ってほぼ女子校だもん」

千佳「確かに」

八幡「そうだな」

帆波「なるほど。確かに私のクラスは女子ばかりだもんね」

八幡「はあ：マジでどうしようグループ」

もし、同性同士じゃなかったら折本と仲町と組んでいたのになんだよ。けど、まあ当たり前かこういう時は同性同士でグループを組むのが当たり前だよな。けど、どうしよう。同性の友達なんていねえぞオレ。まあでも余ったところに行けばいいか。

八幡「まあ、それは追追考えるとしてさっさと弁当食べようぜ」

帆波「そうだね」

そう言っただけでオレ達は弁当を食べ終えて教室に戻った。

そして放課後になったので部室に向かった。

八幡「うーす」

かおり「おいつす！」

千佳「こんにちは」

雪乃「ええ、こんにちは」

いつも通りのあいさつを済ませて席に座る。けどする事も無くどうしようかと迷ったが、テストも近い事だからオレは勉強道具を取り出し勉強を始める。

かおり「あ、比企谷が勉強をしてる」

八幡「そりやお前、もうすぐテストなんだし勉強する奴もいるだろう」

かおり「うっ…た、確かにもうすぐテストだった…」

千佳「また忘れてたの？」

かおり「ち、違うのたまたまだよ！」

雪乃「なんだか聞いた事のあるセリフね」

かおり「うっ…」

八幡「はあ…まあ、今度はまだ時間もあるんだし今からでも勉強したらどうだ？」

かおり「うん、そうだね…そうする」

千佳「私もしようと」

それからは部室が勉強会に変わり黙々と勉強をする。時々折本が分からない所をオレ達に聞いてくるので近くにいる帆波や仲町が教えている。オレと雪ノ下も教える事はできるが席が遠いので教えるのはちよつと難しい。まあ、そんな感じで勉強を進める。そんな中オレは数学で詰まってしまった。中々解けない。やっぱり数学は苦手だな。そう思っていると…

帆波「どうしたの八幡？」

八幡「あ、いや、ちよつと分からないところがあつてな」

帆波「そうなんだ。どこが分からないの？」

八幡「ここなんだけどさ」

帆波「あーそこね。ちよつとややこしいんだよね」

八幡「そうなのか？」

帆波「うん、えつとね。そこは…」

オレは帆波から分らない問題の解き方を教えてもらった。帆波の言う通り少しややこしかった。けど、帆波が教えてくれたおかげで何とか解くことができた。

帆波「こんな感じで解くんだよ」

八幡「なるほどそういう事か。サンキュ帆波助かった」

帆波「どういたしまして」

いや、ホント助かった。いや、ホント帆波は教えるのが上手いな。数学が苦手なオレでもわかりやすく教えてくれる。まあ、そんな感じであつた。勉強会は部活が終わるまで続いた。オレ達は後片付けをして部室から出て家に帰った。

翌日

教室で授業の間の休み時間に次の授業の準備をしていると…

彩加「ねえ、比企谷君」

と戸塚が話しかけてきた。

八幡「ん？どした？」

彩加「比企谷君はもう職場見学のグループ決まった？」

八幡「いや、まだだけど」

彩加「そうなんだ。じゃ僕と一緒にグループにしたない？」

八幡「え？」

オレは急な事だったのでマヌケな声が出てしまった。なんでオレと一緒にグループに？

八幡「オレで良いのか？」

彩加「うん、僕は比企谷君が良い」

そう言つてニッコリ笑う戸塚。やめて！その笑顔は反則ですよダナナ！そんな風に誘つてくれた同性は戸塚が初めてだった。オレもグループを組む相手がいなくて困つてたところだし、戸塚も勇気をだして誘つてくれたんだし、その気持ちを無駄にする訳にはいかないな。

八幡「じ、じゃあよろしくなとつ…彩加」

名字では無く名前です。同性で名前で呼んだのは戸塚が初めてだ。もし、これで気持ち悪がられたらどうしよう。と思いがながら戸塚を見ると戸塚はポカーンとした顔でこつちを見た。口はポケツと開いている。……ああ、やっぱりいきなりは不快だったか。オレはすぐに謝ろうとした時

彩加「…嬉しいな。初めて名前で呼んでくれたね」

ええ、良いんですかダンナ!と思っていると言っていると戸塚は続けて言う。

彩加「僕も八幡って呼んでいい?」

八幡「お、おう、いいぞ」

彩加「ホント!?ありがとうございます!」

そう言ってまたニツコリと笑う戸塚改めて彩加。

彩加「じゃあよろしくね八幡」

八幡「お、おう、よろしく。彩加」

そして彩加は笑顔で自分の席へと戻って行く。正直助かったな。知り合いがいると気が少しでも楽になるからな。

かおり「良かったね比企谷」

千佳「戸塚君に誘ってくれて良かったね」

八幡「ああ。って言ってもあと一人なんだよな」

かおり「それを言うなら私達もだよ」

千佳「私とかおり、後一人どうしようかな」

八幡「こつちもどうするかな。でもまあ、適当な奴と組めばいいか」

かおり「比企谷らしいね」

千佳「そうだね」

八幡「フツ…まあな」

かおり・千佳「褒めてないよ!」

あれ?

そして放課後部室。今日は勉強せずに話したり、読書をしたりして過ごす。

雪乃「どうぞ」

と雪ノ下が紅茶を入れてくれた。

八幡「サンキュ」

帆波「ありがとう」

かおり「ありがとうね」

千佳「ありがとう」

雪ノ下が入れてくれた紅茶を飲んで気を休める。コーヒーやマツクスコーヒーも美味いけど、雪ノ下が入れてくれた紅茶も美味しいな。そんな感じで時間も過ぎていく。そしてもう部活も終わろうとしていた時だった。タンタンっとリズムカルに扉を叩く音がした。オレは内心こんな時間なんだよと思ってしまう。

雪乃「どうぞ」

と雪ノ下がそう返事すると来客が入ってくる。

葉山「失礼するよ」

うっわ：アイツは確かテニスの練習を邪魔して停学くらった奴じゃん。まあ、今はもう停学明けだけだな。ていうか何しに来たんだよ。

葉山「こんな時間にごめん。ちよつとお願いがあつてさ」

そう言つてエナメルバッグを床に置き、自然に向かい側の席に座る。と言うかごめんと言うなら来るなよ。明日にでも来いよ。

葉山「いやー、なかなか部活から抜けさせてもらえなくて。試験前は部活休みになつちやうから、どうしても今日のうちにメニューをこなしておきたかつたつばい。ごめんな」

なんで自慢話してんだよ。何お前？自慢してないと生きていけないのかよ。

雪乃「能書きはいいわ。何か用なんでしょ？葉山隼人くん」

とバツサリと冷たく切る雪ノ下。テニスの時も思ったが雪ノ下はもしかして葉山の事嫌い？まあ、オレも嫌いだけだよ。それにしても毛嫌いしているな。もしかして昔何かあったのか？

葉山「あ、ああそうだった。奉仕部ってここでいいんだよね？平塚先生に、悩み相談するならここだって言われて来たんだけど…」

何コイツ？喋るたびに、何故か窓から爽やかな風が吹き込んでくる。マジないわ。

葉山「折本さんに仲町さんに一之瀬さんも悪いね
かおり「別に」

帆波「全然いいよ」

千佳「うん」

と3人は答えるがどこか素っ気ない。お前らも葉山の事嫌い？

葉山「ヒキタニくんも遅くなってごめん」

八幡「…別に」

オレも素っ気なく答える。別にコイツ仲良くしようなんてこれっぽっちもないけどな。すると…

帆波「ねえ、葉山君」

葉山「何かな？一之瀬さん」

帆波「八幡の名前はひきたにでは無くひきがやと読むんだよ。八幡は気にしてないかもしれないけど、名前はちゃんと呼んだ方がいいよ」

葉山「そ、そうだったのか。す、すまない。今度から気をつけるよ」と帆波がオレの名前を訂正してくれた。確かにオレはヒキタニと呼ばれても気にしない。中学の時も呼ばれてたから気にしなくなった。それよりも

八幡「んで何か用があつたから来たんだろ」

葉山「あ、ああ…実はコレなんだけど…」

葉山はそう言ってオレ達の前に携帯の画面を見せてきた。そこには…

『戸部は稲毛のカラーギャングの仲間ゲーセンで西高狩りをしていました』

『大和は三股かけている最低のクズ野郎』

『大岡は練習試合で相手校のエースを潰すためにラフプレーをした』

と書かれたメールだ。なるほど、所謂チェーンメールというやつだな。高校でもこんなのやる奴いるんだな。

帆波「あ、これチェーンメールというやつだよね」

八幡「みたいだな」

葉山「実はうちのクラスで昨日から回ってるやつなんだ」

八幡「そうなのか折本、仲町」

かおり「あー、確かにきてたね。でも消したよ」

千佳「私も」

八幡「あ、消したんだ」

かおり「うん」

うわお、すごい普通に答えるじゃん。まあ、理由は聞かないでこお
う。そしてそのメールを改めて見ながら、葉山は微苦笑を浮かべなが
ら

葉山「これが出回ってから、なんかクラスの雰囲気悪くてさ。それ
に友達の事悪く書かれてれば腹が立つし」

そういう葉山の表情はしようたいのわからない悪意にうんざりし
た顔だった。まあ、確かにオレも帆波や折本や仲町、それに雪ノ下の
事を悪く言われたら腹が立つ。けどクラスの雰囲気が悪いんじゃない
くて、お前らのグループの雰囲気が悪いんじゃないの？知らんけど。

帆波「それでこれをどうするの？」

葉山「止めたいんだよね。こういうのは気持ちがいいもんじゃない
しよ。あ、けど犯人を探したいんじゃないんだ。丸く収める方法を知
りたいんだ。頼めるかな？」

うん、何言ってるのこイツ？日本語でOK。

雪乃「なるほど、つまり事態の收拾図ればいいのね」

葉山「ああ、そうだな」

雪乃「では犯人を捜すしかないわね」

うん、それが良いだろう。

葉山「うん、よろし、え!?あれ、なんでそうなるの？」

前後を完全に無視された葉山が一瞬驚いた顔をしたが、次に瞬間に
は取り繕った微笑みで穏やかに雪ノ下の意図を問う。すると、葉山と
は対照的に、凍てついた表情の雪ノ下がゆっくりと、それはまるで言
葉を選ぶかのように話し始めた。

雪乃「チエーンメール……あれは人の尊厳を踏みにじる最低の行為
よ。自分の名前も顔も出さず、ただ傷つけるためだけに誹謗中傷の限

りを尽くす。悪意を拡散させるのが悪意とは限らないのがまた性質が悪いのよ。好奇心や時には善意で、悪意を周囲に拡大し続ける…止めるならその大本を根絶やしにしないと効果がないわ。ソースは私」
千佳「あ、実体験なんだ…」

まあ、雪ノ下の実体験は置いといて、オレは雪ノ下の意見に賛成だ。こういうのは犯人を見つけ出すのが1番手っ取り早い。

八幡「まあ、確かに犯人を見つけ出すのが1番手っ取り早いよな」

葉山「え!?!なんで?」

八幡「いや、こういうのは犯人を見つけてもうさせないのが良いだろう」

葉山「いや、俺はただ大事にしなくないだけで」

八幡「あのな…」

帆波「八幡ストップ」

帆波はオレの言葉を遮る。

帆波「気持ちは分かるけど、一応葉山君は依頼人なんだし、依頼人の意見も入れないと」

八幡「…分かったよ」

納得したオレを見た帆波はニッコリと笑った後、葉山に体事向き口を開く。

帆波「よし、まず初めに聞くけどそのメールが来たのはいつ頃なの?」

葉山「えっと…先週末からだったかな」

帆波「そうなるの?かおり、千佳」

かおり「うーん…確かそれぐらいだったかな」

千佳「そうだね。でもすぐに消したよ」

帆波「それはなんで?」

かおり「だつて気味悪いじゃん。知らないメールアドレスから来るしさ。だから気味悪くなって消したの」

帆波「そっか…八幡はこのメール来てる?」

八幡「いんや来てないぞ」

帆波「え?そうなの?」

八幡「ああ」

千佳「私、てつきり比企谷君にも来てるんだと思ってたよ」

かおり「でもなんで？」

八幡「こつちが聞いてえよ」

雪乃「それはあなたがメールアドレスを聞かれなかったからでしょ？」

八幡「まあ、それもあるな」

千佳「…あるんだ」

仲町は苦笑しながら言ってくる。折本と帆波も若干苦笑気味だった。

雪乃「それよりもそのそのメールは先週末から突然始まったわけだけど。先週末に、その3人が関係する出来事は何かあったの？」

葉山「いや、なかったと思うけど」

雪乃「折本さんと仲町さん、それに比企谷君はどう？」

かおり「うーん、無かったかな」

千佳「私も思いつかないや」

八幡「オレもない……いや、1個だけあったな」

帆波「それは何？」

八幡「職場見学」

かおり・千佳「あ、なるほど」

帆波「確かにそれかもしれないね」

葉山「え？そんなことか？」

かおり「こういうイベントごとはグループ分けはその後の関係性に関わるからね。ナイーブになる人もいるんだよ」

八幡「へえ〜」

雪乃「成程、それでは容疑者はあの3人が最有力候補で決まりね」

雪ノ下が結論を出す、葉山が声を荒げて異議を申し立てた。

葉山「ちよ、ちよつと待ってくれ！俺はあいつらの中に犯人がいるなんて思いたくない。それに、3人それぞれ悪く言うメールなんだから？あいつらは違うんじゃないのか？」

八幡「いやいや、馬鹿なの？そんなの自分が疑われないようにする

ためだろ？」

帆波「まあ、確かに八幡の言う通りかもね。3人の誰かをハブらせるメリツトなんてその3人にしかないよね？他の人がやったってメリツトなんてないし」

その反論に葉山は悔しそうに唇を噛んだ。こんなこと想像していなかったんだろう。いや、どんだけ頭の中お花畑なんだよ。

雪乃「それではまず、その3人の特徴を教えてくださいかしら？」
雪ノ下が情報の提示を求める。すると葉山は意を決したように顔を上げた。その瞳には信念が宿っている。おそらくは友の疑いを晴らそうという崇高なる信念が。

葉山「戸部は、俺と同じサッカー部だ。金髪で見た目は悪そうに見えるけど、一番ノリのいいムードメーカーだな。文化祭とか体育祭とかでも積極的に働いてくれる、いい奴だよ」

雪乃「騒ぐだけしか能がないお調子者、ということね」

葉山「…」

雪ノ下の一言に葉山は絶句していた。当然オレらもだ。すごい変換機能だな。

雪乃「…どうしたの？続けて」

葉山「あ、ああ。大和はラグビー部。冷静で人の話をよく聞いてくれる。ゆったりしたマイペースとその静かさが人を安心させるっていうのかな。寡黙で慎重な性格なんだ。いい奴だよ」

雪乃「反応が鈍いうえに優柔不断…と」

葉山「…」

葉山はもう諦めたかのような顔で、ため息をつきながら続ける。

葉山「大岡は野球部だ。人懐っこくていつも誰かの見方をしてくれる気のいい性格だ。上下関係にも気を配って礼儀正しいし、いい奴だよ」

雪乃「人の顔色窺う風見鶏、ね」

隼人「…」

雪ノ下…あんたマジパないスっわよく人をそこまで悪しげまに解釈できるな。見る葉山を、もう諦めたかのように曇り顔で沈黙してる

ぞ。実際オレらも終始ポカーンとしてたからな。

雪乃「どの人が犯人でもおかしくないわね」

八幡「むしろお前が一番犯人っぽいぞ」

雪乃「私がそんなことするわけないでしょう。私なら正面から叩き潰すわ」

八幡「あ、さいですか…」

もうオレは呆れてしまった。帆波達なんて苦笑しているよ。すごいよ雪ノ下。

葉山「じゃあ悪いけど、よろしく頼むよ」

雪乃「ええ、わかったわ」

葉山はそう言って部屋から出ていった。

帆波「さて、チエーンメールどうしようつか？」

雪乃「そうね。私と一之瀬さんはクラスが違うから、これは同じクラスである折本さん、仲町さん、比企谷君に調査してもらいたいのだがけれど、いいかしら」

八幡「まあ、依頼だし仕方ねえか。出来る限りのことはする」

かおり「そうだね」

千佳「うん」

帆波「お願いね」

八幡「ああ」

ハア…めんどくさいけどやるしかないか。

第14話

八幡 side

翌日オレと折本、仲町の3人はいつも通り話をする。けど話をしながら葉山達のグループの様子を伺う。今更だが葉山のグループのメンバーは、葉山、由比ヶ浜、三浦、海老名さんそしてメールで書かれていた戸部、大岡、大和の7人だ。男女比は4対3という感じだ。確かに職場見学のメンバーは3人。誰か一人はハブかれる。

かおり「ねえ、ホントにこれでわかるの？」

八幡「わからん」

かおり「わからんって…」

八幡「でもこうやって様子を伺うしかないだろ」

千佳「確かにね」

オレらは時折葉山グループをチラツと様子を伺う。今葉山は男子達とつるんでいる。その葉山達は窓際に陣取っている。葉山が壁際に寄りかかり、それを囲むようにして戸部、大岡、大和がいる。ここからわかることは実に簡単。そのグループの中で上位に位置するのが葉山ということだ。壁という絶対の背もたれを持つ場所こそがキングにはふさわしい。おそらく本人達にそんな自覚はあるまい。だが、自覚がないからこそ、それは本能的、本質的な行動であることをしている。そして3人の役割はそれぞれ決まっているように見えた。

大岡「で、さ。うちのコーチがラグビー部の方にノック打ち始めて！やばかったわー。硬球なのによー」

大和「…あれはうちの顧問もキレてた」

戸部「マジウケんだけど！つつーか、ラグ部とかまだいいわ。俺らサッカー部やベーから。いいやーやばいでしょ、外野フライ飛んでくるとかやばいしょ！アツイわ激アツだわ」

大岡が話を振り、大和がそれを受ける。そして、戸部が盛り上げる。よくできた演劇のようだ。と言うか戸部、もしかして折本のウケる感染してない？え？違う？まあいいや。それより戸部うるさいな。そ

して、この舞台の監督が、観客が葉山だ。葉山は時に話に笑い、時に話題を提供し、時に一緒になつてはしゃぐ。だが、彼らを見てみるとさまざまなことに気づく。

八幡「あ、アイツ今見えないように小さく舌打ちしたぞ」

かおり「え？マジ？」

千佳「分からないけど、確かにそういう仕草をしてたような…」

八幡「そして、アイツは隣の奴が会話をし始めると急に黙る」

かおり「あ、言われてみれば…」

千佳「確かになんだかつまんなそうに携帯をいじってるね」

八幡「と言うかあれ本当に友達同士なのか？」

千佳「どうだろう…」

かおり「んく、なんだろう…：友達の友達？」

千佳「あ、それだ」

八幡「？友達の友達？他人みたいなの？」

かおり「まあ、そんな感じかな」

千佳「多分あの3人につけて葉山君は友達でそれ以外は友達の友達…んく、言い方変えるとただのクラスメイトみたいなの？」

八幡「うわ何それ…なんかめんどくさいな」

かおり「そうなんだよ。だから気をつけないとダメなんだよね」

八幡「ああ、そうか。オレも気をつけるよ」

ホント人間関係は難しいな。と思いつつながらまた葉山達の方へ向く。周りから見るとすぐ仲良さそうだけど、中身はスゲエドロドロしてるんだな。

千佳「ねえそれよりさ」

かおり「ん？どうしたの千佳」

八幡「何か分かったのか？」

千佳「それはまだだけど、さつきからチラチラと由比ヶ浜さんがこつちを見てくるんだけど」

八幡・かおり「「え？また？」」

千佳「うん」

八幡「言つちや悪いがめんどくさい依頼をしているのに、更にめん

どくさい奴が絡んできたらもつと厄介になりそうだな。これは早い事依頼を終わらすしかないな」

千佳「そうだね。あ、葉山君がこっちに来るよ」

八幡「は？」

え？なんでこっちに来るの？と思い見ると本当にこっちに向かってくる。一体なんだよ。そして葉山がこっちに近づいてきた。

八幡「何か用か？」

葉山「いや、なんかわかったのかなって思ってたさ」

八幡「いや、そんなすぐにわかるわけ…」

と葉山の質問に対して否定しようとしたが、窓際のあの3人の光景を見て、それは遮られた。3人とも携帯をいじり、だるーっとしていた。そして時折葉山の方をちらつと見ている。

八幡「なるほどな」

さっきまで話していたようにアイツらは友達の友達のような顔になって。そして折本も仲町も3人の光景を見て分かったような顔になった。

葉山「何か分かったのか？」

八幡「ああ、分かったよ。だから放課後部室に來い」

葉山「あ、ああ。わかった」

そう言つて葉山は3人の元へ戻って行く。そしてまた3人と話すとさつきと同じ光景が始まる。

八幡「やっぱりさつき話してたようにアイツらは友達の友達みたいだな」

千佳「みたいだね」

かおり「だね」

千佳「でもどうやって解決するの？」

八幡「ん？そうだな。それは後のお楽しみってな」

かおり「えく、何それ」

千佳「そっかー」

そして放課後

雪乃「どうだったかしら？何か分かったのかしら？」

八幡「ああ、わかった」

帆波「ホントに？」

八幡「ああ、まあな」

葉山「それじゃあ、説明してくれないか」

八幡「そうだな。まず、葉山お前に聞く。お前はお前がいないうき
の3人を見たことあるか？」

葉山「いや、見てないが」

八幡「まあ、いないから見れるわけないか。まあ、正直言うとき
つらが3人の時、傍から見たら全然仲良くないぞ。携帯いじったり、
ポケーツとしてるだけだ。まあ、折本と仲町とで話してわかったがア
イツらに取って葉山は友達でそれ以外は友達の友達なんだよ」

帆波「なるほど…確かに会話の中心人物がいなくなると気まずいよ
ね」

かおり「あー、わかる。それで何話していいか分からなくなって携
帯いじっちゃうよね」

千佳「うん」

一方雪ノ下はわからない様子だ。まあ、オレもだけど。オレと雪ノ
下は帆波達以外に友達はいないからな。

雪乃「それでどうするの？それだとしてもやっぱり犯人を突き止め
るしか方法しかないんじゃないかしら？」

八幡「いや、犯人は探さなくてもいい」

雪乃「探さなくてもいいの？」

そう言ってコテンと首をかしげる。確かに雪ノ下の言う通り犯人
を突き止めるしかない。けど、昨日帆波が言ったように依頼人である
葉山の意見を入れるのなら、犯人を探すのでなく、丸く収める方法を
知りたいと言う依頼だからな。

八幡「ああ」

雪乃「じゃあどうするの？」

八幡「一つだけ方法はある」

帆波「それは？」

葉山「なんだい？」

八幡「あの3人とグループを組まない。葉山自身がハブられる。そ

うすれば3人の誰かがハブかれることはないし、そして、アイツらももつと仲良くなれるかもしれない。まあ、最終的に決めるのは葉山、お前自身だけだな」

オレがそう言うのと帆波達は驚いた表情になっていた。

葉山「…そうか。なるほど…こんな簡単な事だったんだな。ありがとう比企谷。雪ノ下さん達もありがとう」

雪乃「え、ええ…あなたがそれでいいんなら良いけど…」

葉山「それじゃ」

葉山はそう言って爽やかに去っていった。ホントアイツ一々爽やかな仕草しないと生きていけないのかよ。

雪乃「本当にアレで良かったのかしら」

八幡「本人が良いって言ったんだからいいんじゃないの？」

雪乃「それもそうね」

帆波「でも本当に犯人は誰なんだろう」

八幡「それもわかったかもしれない」

かおり「え!?!マジ!」

千佳「比企谷君本当?」

八幡「ああ、つても予想だけだな」

帆波「誰なの?」

八幡「多分大和だと思う」

かおり「大和君が?」

八幡「ああ」

雪乃「どうしてそう思ったのかしら?」

八幡「まずは昨日見たチェーンメールの内容をおさらいしよう。内容は確か戸部は稲毛のカラーギャングの仲間ゲーセンで西高狩りをしてた。大和は三股かけている最低のクズ野郎で、大岡は練習試合で相手校のエースを潰すためにラフプレーをした。だったよな」

千佳「うん、確かにそうだった」

八幡「まあ、それを聞くと3人全員が最悪なイメージが定着してしま」

帆波「確かに戸部君は暴力で、大和君は三股をかけてるし、大岡君

も相手に怪我を負わせてるから、3人とも悪者扱いされるよね」

千佳「それがもし本当なら大変な事だよ」

八幡「そうだな。もし本当なら停学や自宅謹慎、下手したら退学になるだろう。けど、その中で1人だけ罰を受けない奴がいる」

かおり「え？嘘一体誰？」

八幡「まあ、待て。まず戸部だがさつき帆波が言ったように戸部は暴力沙汰の内容、これが本当なら間違いなく停学や退学になるだろう。次に大和を飛ばして大岡だ。大岡は相手校のエースにラフプレーをした。これも本当なら退部又は停学、最悪退学になるのはわかるだろう」

かおり「まあ、それは」

千佳「分かるけど」

八幡「じゃあ最後に大和だ。大和は三股をしている最低野郎だ。聞いてみたら本当に最低野郎だ。誰でもわかる事だよな」

帆波「分かるけどそれでなんで大和君が犯人になるの？」

八幡「簡単な事だ。大和と違って戸部と大岡の2人は問題を起こしている。さつきも言ったが間違いく停学や退学レベルだ。でも三股はどうだ？確かに三股も問題だが他の2人と違って停学にも退学にもならない。最低野郎のレッテルを貼られるだけだろう。もうこれで分かるだろう？」

雪乃「なるほど」

帆波「そうか…」

帆波と雪ノ下はわかったようだ。仲町と折本は多分まだわかっていない。

八幡「要するにだ。4人のうち誰かがハブかれる状況だ。もしかしたら自分かもしれない。だからあのチェーンメールをクラスに回収した。だが自分が疑われないようにする為、自分の悪口を入れた。けど過激過ぎると停学や退学になってしまう。だから戸部や大岡の2人とは違って軽く済むような内容にしたんだとオレ個人としての意見だ」

千佳「そういう事か。やっと分かったよ」

かおり「私も今わかった。なるほど。やっぱり比企谷すごいや」

雪乃「ええ、そうね」

帆波「すごいよ八幡」

八幡「ありがとうな。でも、本当に大和が犯人かは分からん。他の誰かかもしれない。だからこれでもし、大和に問い詰めて間違っていたらこつちがダメーシを受ける事になる。だからさつき葉山に提案した方法で行くしか無かったんだよ。それに依頼人の意見も入れなきやならなかったしな」

雪乃「確かにそうね。無闇に問い詰めて間違っていたらこつちがダメーシを受ける事になるしね。今回はその方法が正解かもしれないわね」

八幡「そういう事だ。それにそのチェーンメールは職場見学が終わったら収まると思うし」

かおり「え？ そうなの？」

八幡「ああ、だと思うぞ」

千佳「そつか。収まると良いな。一々鬱陶しいんだよねあのメール」

かおり「それある！」

そんな感じで葉山の依頼は無事？に解決することができた。まあ、それでも解決出来なければもうお手上げ。諦めるしかないな。だから放っておくしかない。それ以上オレ達に関わることは無いだろう。その後オレ達は家へと帰った。

翌日

葉山が自らの運命を決定づける選択をした翌日のことだ。教室の後ろの黒板には、クラスメイトの名前が羅列されていた。それぞれ3名ずつ一塊になって書かれていたそれらは職場見学のグループを表している。黒板には『戸部、大和、大岡』と書かれていた。そこには『葉山』の名前は無かった。昨日オレが提案した「ハブられる」っつーのは、原因の一つである葉山を取り除くということだ。そしてその3人はと言うと後ろの方でお互いの顔を見つめてちよつと照れくさそうに笑っていたり、ヘッドロックをかけたりにしてじゃれあっていた。

オレはと言うと彩加と組んでいて後1人どうしようかと話し合っていた。折本と仲町も後1人どうしようかと話し合っている。そんな中葉山が近づいてくる。正直なんだ?と思ってしまう。

葉山「比企谷、戸塚。ここいいか?」

と聞いてくるが答える前にオレの隣の席に座る。聞く前に座るんだったら、初めっから聞くなよって話だよな。

葉山「君のおかげで丸く収まったよ。ありがとな」

そう朗らかに感謝の意を言葉にした葉山。

八幡「別にオレは何もやってねえよ」

正直そうだ。オレはただ提案はしたが最終的に決めて行動したのは葉山自身だ。なのになんでこいつは気安く話しかけてくるの?良い奴?それともお人好し?まあどちらでもいいや。

葉山「いや、君がああ言ってくれなきゃ、酷い揉め事になったかもしれないし。それに、俺のせいで揉めることもあるんだな、と少し痛感したよ」

そう呟いた時の葉山はどこか寂しそうだった。オレは葉山にかけた言葉が見つからず…と言うよりは見つける気はさらさらない。どうでもいいからだ。すると葉山は更に続けて言う…

葉山「俺があいつらと組まないって言ったら驚いてたけどな。ま、これをきっかけにあいつらが本当の友達になれればいいなと思っているよ」

正直ここまで友達想いだと逆に不気味に感じる。病気なのかとも疑う。ここまで言う奴は初めて会う。

葉山「それでさ、俺まだグループ決まっていんだけど、よかつたら2人の中に入れてくれないか?」

彩加「うん、ちょうど僕たちも3人目を探してたところなんだ。僕はいいよ。八幡は?」

八幡「ああ、別にいいぞ」

と適当に相槌を送る。けど正直助かった。後1人どうしようかと悩んでいたところだったからな。

葉山「ありがと。それじゃあ名前書きに行こうか。行きたい場所は

ある？」

八幡「どこでもいいぞ」

彩加「僕も、決まってるからお任せするよ」

オレと彩加の返答に葉山はそうか、と言って後ろの黒板に書きに行った。

『葉山、戸塚、比企谷』

と言うか葉山の奴、帆波に注意されてからか名前を間違えて呼ぶ事はなくなつたな。

八幡「んでどこにするんだ？」

葉山「マスコミ関係のどこだよ。気になっててね」

マスコミか……報道機関ーマスコミユニケーションで情報の発信側となる機関、報道、出来事取材し、マスメディアで公表する仕事だ。

八幡「…意外だな」

隼人「そうか？まあ、親の仕事と深い縁がある職業だからね。興味はあつたんだ」

マスコミと縁がある仕事ね。つつーことは、政治とかに関係する仕事か。ボンボンじゃねえかクソオ…。

すると…

「あ、あーし、隼人と同じとこにするわ」

と金髪縦ロールこと三浦が言う。

「うそ、葉山くんそこいくの？あ、うちも変える変えるう！」

「私も〜」

「ウチも〜」

とクラス連中が一齐に葉山の周りに集まる。サメかよお前ら。そしてあれよこれよという間に皆が葉山と同じ職場を選び、黒板の名前の書き換えをし出した。人が集まって来たのでオレは折本と仲町の所へと避難する。

八幡「フウ…」

千佳「大変だね」

八幡「ああ、まったくだ。と言うよりああいう風に何人も書けるの

なら、依頼受けなくて良かったんじゃないの？」

かおり「確かにそうだね」

八幡「折本と仲町もどうだ？後1人見つからないのならあいつらみたいに書き換えたらどうだ？」

かおり「うーん、そうだね」

千佳「そうしょっか」

かおり「だね」

そう言っつて折本と仲町も他の奴らと同じようにオレらと同じ班のところの名前を書き足した。

八幡「これで一安定的な感じだな」

千佳「そうだね」

かおり「でも一応後1人探した方が良くないかな」

八幡「どうだろうか？」

千佳「そうだね。でも確かに一応後1人探そうか」

八幡「そうか。なら、オレも手伝えることあったら手伝うぞ」

かおり「あの比企谷が自分から言うだなんて…明日雨でも降るんじゃない？」

千佳「ホントだね」

八幡「お前らな。そんな事言うんだったら手伝わないぞ」

かおり「あー、ごめんごめん！手伝って！お願いします！」

千佳「私からも！」

八幡「ったく…」

まあ、でもこんなやり取りでも楽しい自分がある。

第15話

八幡 side

今オレは小町と帆波と一緒に朝ごはんを食べている。時々こうして帆波が朝、家に来て朝ごはんを作ってくれる。そんな時突然小町が口を開く。

小町「そういえばさ、お兄ちゃん」

八幡「ん？なんだ？」

小町「あの事故の後、あのワンちゃんの飼い主さんがうちにお礼に来たよ」

八幡「は？」

今、小町の奴なんて言った？犬の飼い主がお礼に来た？ということ
は由比ヶ浜はうちにお礼に来たという事になる。

小町「どうしたのお兄ちゃん？」

八幡「いや、なんでも無い。それで？」

小町「ああ、うん。それでお兄ちゃん寝てたから言つとこうと思つてさ。で、お菓子もらったよ。おいしかった」

八幡「ちよつと待て。それ確実にオレ食べてないよね。まさか全部食べたんじゃないでしょうね？」

帆波「あ、それなら大丈夫だよ。私がちゃんと取つといたから」

八幡「あ、そうなんだ。サンキュ帆波」

帆波「どういたしまして」

小町「あ、それでその飼い主さん、学校同じだからお礼言うつて言つてたよ？」

八幡「お前さ、なんでそう言うのもつと早く教えないの？」

小町「ご、ごめん。忘れてた」

八幡「はあ…まあ、今回は許す。次気をつけろよ」

小町「はい」

八幡「それでその飼い主さんの名前聞いてないのか？」

小町「え？……『お菓子の人』、だったかな？」

八幡「お中元かよ……」

小町「うーん、ごめんなさいそれも忘れちゃった」

八幡「…そうか」

小町「ごめんなさい」

八幡「いや、小町が気にする事じゃない。それに未だにお礼や謝罪を受けてないからな」

小町「え！何それ!?あれからもう1年だよ！小町には言うって言ったのに未だに言っていないだなんて。まさか嘘を言ってたのかな」

八幡「それは知らんが、まあ教えてくれてありがとうな」

小町「どういたしまして」

本当は知っている。けどこうして思い出して教えてくれたんだ、感謝しねえとな。そしてオレ達は飯を食い終わり学校へ向かう為に家を出た。それから小町と別れてオレと帆波は折本と仲町のいる所まで向かう途中で

帆波「まさか由比ヶ浜さんが八幡の家に来てただなんて思わなかったね」

八幡「ああ」

帆波「それに小町ちゃんには八幡に謝るって言ってたのに未だに謝ってこないだなんて。ますます信用できないね」

八幡「そうだな」

帆波「ハア：ホント嫌になるな」

八幡「…そうだな。オレが入院している時にうちに来たのに、なんでオレの病室にも来なかったんだ？」

帆波「そうだよ。八幡の家に来たんだったら、八幡の病室にも来るはずだよ」

八幡「雪ノ下やその家族は謝罪に来たが、由比ヶ浜が来た記憶はないな。帆波は覚えてるか？由比ヶ浜というか由比ヶ浜らしき人とか来たか？」

帆波「ううん来てなかったよ」

八幡「そうか」

帆波「八幡の家に来てからもう1年が経ってるよ。しかも八幡がワンちゃんを助けた事知ってた事になるよね」

八幡「そうだな」

帆波「今までは知らないと思ってたけど、実際は知ってたんだよね。ならなんで部室とか教室で言わなかったのかな？」

八幡「さあ？それは知らんがもう放っておこうぜ。無闇に関わって面倒な事にならんからな」

帆波「それもそうだね」

向こうが謝ってこないのなら、それでも良いが後悔するのは向こうなんだから放っておくのが良い。そんな事考えてると…

かおり「おーい、帆波く、比企谷く」

八幡「おーう」

帆波「おはよう」

かおり「おはよう」

千佳「おはよう。それより2人共どうしたの？さつきまでなんだか暗かったけど」

八幡「ああ：実は今朝小町に言われたんだけど、由比ヶ浜の奴オレが入院中にウチに来たらしいんだ」

かおり「え？それって…」

八幡「ああ、あの事故の事でだ。小町曰く由比ヶ浜は学校が同じだからお礼を言おうと言ったらしい」

千佳「え？でも言われてないよね」

八幡「ああ」

かおり「という事は事故の事知ってたんだよね。知ってたんだってらなんでお礼の一言も言えないの？常識でしょ？」

帆波「そうだよね」

千佳「うん」

八幡「オレに言われてもな。まあ、言いたくないんだったらそれでいいんじゃないの？知らんけど」

かおり「そうだね」

千佳「確かにそうだね。困るのは由比ヶ浜さん自身だもんね」

帆波「だね」

八幡「ほら、さつきと学校行くぞ」

帆波「そうだね」

オレ達はそんな会話を打ち切り、違う話をしながら学校へ向かった。

そして時は進みオレは放課後に予備校の資料集めをした。色々あるけど、どこがいいのか人それぞれだしな。この後じっくり資料を見たいけど、その前に帆波達と勉強をするので、約束の場所であるサイゼへと足を運んだ。そしてサイゼに入り帆波達を探す。すると

帆波「八幡く。こっちこっちく」

とオレを呼ぶ帆波の声が聞こえた。声のした方を見ると、もう既に皆揃っていた。

八幡「おう。悪いな遅くなつて」

帆波「ううん、大丈夫だよ。ほら座つて」

そう言われて席に座る。因みにオレの席は帆波と彩加の間に座っている。向かいに折本、仲町、雪ノ下という順で座っている。

かおり「それじゃあ比企谷も来たことだし、勉強会始めようか」

折本の一言で勉強会が始まった。皆黙々と勉強する。時々分からない所を教えあったりする。この店で勉強をしているのはオレ達だけでは無い。周りを見ると他の人達も勉強している。多分どの学校も試験が近いのだろう。

かおり「ねえ、比企谷」

八幡「どした？」

かおり「さつき色々資料みたいな持ってたけど、あれ何？」

八幡「ん？あれは色んな予備校の資料とかだな」

かおり「へー、予備校か。私もどうしようかな。進路の事もあるしな」

千佳「そうだね。比企谷君は大学に行くの？」

八幡「まあ、そのつもりだ。それにオレはスカラシップ狙ってるからな」

かおり「すからしつぷ？何それ？」

帆波「スカラシップと言うのはね、奨学金の事だよ。予備校では成績が良い人の学費を免除してくれる制度だよ」

かおり「何それすっこ!？」

千佳「そんなのがあるんだ。知らなかったな。ん？てことは帆波もそれ狙ってるの？」

帆波「うん、そうだよ。八幡に教えてもらってね。これを使えばお母さんを楽させる事ができるしね」

かおり「なるほどね」

千佳「いいじゃん」

雪乃「一之瀬さんなら取れると思うわよ」

帆波「ありがとう雪乃ちゃん」

帆波の家は母子家庭だからな。この事教えてやったらすごく喜んでいた。そして更に勉強を進めていると：

小町「あれ？お兄ちゃん？それに帆波お姉ちゃん達だ」

瑞希「あ、ホントだ！」

声のした方を見ると中学の制服を着た妹の小町と瑞希がいた。そして嬉しそうな笑顔を浮かべ、手を振っていた。

八幡「小町に瑞希？何してんの？」

小町「いや、ちよつと相談されちゃってね」

そう言つて1人の男子が後ろから出てきて一礼する。

八幡「ほう：それで？小町と瑞希とどういう関係なんだ？」

帆波「そうだね。教えて欲しいなあ」

小町「ちよつ!?!待って待って！お兄ちゃん！帆波お姉ちゃん！」

瑞希「そうだよ！大志君はただの友達だよ！」

帆波「小町と瑞希がそう言うのなら」

八幡「仕方ねえな」

オレと帆波がそう言うのと小町と瑞希はホッと胸を撫で下ろしていた。

八幡「んで？何してんだ？」

小町「あー、えつとね。大志君のお姉さんが不良化しちゃって、その事で相談されてね。あ、そうだ！お兄ちゃんと帆波お姉ちゃん。

ちよつと一緒に聞いてくれない?」

瑞希「私からもお願いします」

八幡「いいけど…どうする雪ノ下?」

雪乃「まあ、そうね。聞くだけ聞いてみましようか」

千佳「そうだね。実行するかは置いてね」

かおり「そうだね。困ってるみたいだしね」

彩加「僕も手伝うよ」

八幡「よし、という事で大志とやら話してみろ」

大志「あ、はい。えつととりあえず自己紹介するつす。川崎大志です。姉ちゃんは総武高の2年で…あ、姉ちゃんの名前は川崎沙希って言うんですけど。姉ちゃんが不良になったというか、悪くなった?というか」

かおり「あー、川崎さんか。確かになんだか不良っぽい感じだね」

千佳「確かにね。川崎さんが誰かと仲良くしてるところ見た事ないな。いつもぼーつと外見てる気がする」

彩加「あー確かにそうだね」

八幡「知ってるのか?」

かおり「知ってるも何も同じクラスじゃん」

八幡「え?まじ?」

かおり「まじ」

八幡「そ、そうか」

雪乃「それで?お姉さんが不良化したのはいつぐらいかしら?」

大志「は、はい…えつと…姉ちゃんが総武校行くぐらいだから中学のときはすげえ真面目だったんです。それにわりと優しかったし、よく飯とか作ってくれたんです。高一んときも変わらなくて…。でも変わったのは最近なんすよ」

雪乃「なるほど。2年になってから変わった事はあったかしら」

かおり「うーん。あったかな?」

千佳「あつたと言えばクラス替え?」

雪乃「そう。じゃあもしかしたら家の事情なのかもしれないわね」

ふむ、確かに雪ノ下の言い分もわかるな。

大志「あと帰りも遅いんです」

帆波「遅いつてどれぐらい？」

大志「朝の5時っす」

帆波「え!?!5時!?朝と言うより日またいでるじゃん」

おお：それはまた酷いな。高校生がそんな時間まで帰らないのは、結構な問題ごとだ。犯罪にだって巻き込まれるかもしれないねーし。

彩加「ご両親は何も言わないの？」

大志「そつすね。うちは両親共働きだし、下に弟と妹いるんであんな姉ちゃんにはうるさく言わないす。それに時間も時間なんで滅多に顔合わせないし…。それに俺が聞いてもあんたには関係ないの一点張りで」

八幡「ふむ：ということは家族にはバレたくないという訳か」

帆波「かもしれないね」

大志「あと、家に電話がきたんす。エンジェル何とかっていう場所から：」

千佳「エンジェル？」

かおり「聞いた事ないな」

雪乃「おそらくバイト先じゃないかしら？家族には内緒にしてるのだから知らなくてもおかしくないわ」

八幡「なるほどな」

帆波「夜遅いという事は深夜バイト？」

八幡「おいおい、もしそれが本当なら労働基準法破つてることになるぞ。もしそれがバレたらめっちゃ大変だぞ」

ハア：なんだか面倒事に巻き込まれたな。これだけ聞いてしまった以上何とかしねえとな。

八幡「：んで？どうする雪ノ下？こんだけ聞いてしまったんだ。何とかするの？」

雪乃「そうね：これだけ聞いてしまった以上何とかする必要がありそうね」

ハア：やっぱりか。でも確かにここで動かないと後で後悔するか

もしれないしな。

八幡「わかったよ。大志、そういう事だから、後はオレ達に任せて今日は帰れ」

大志「は、はい。ありがとうございますお兄さん」

八幡「ははは、お兄さん言うな潰すぞ?」

お前にお兄さんと呼ばれる筋合いは無い。そう思い言う

帆波「はいはいストップストップ」

と帆波に止められた。ちっ!命拾いしたな。

八幡「わかつてる冗談だ」

帆波「それなら良かった。まあ、それよりもその川崎さんが働いているというならまずはその特定が必要だね」

かおり「特定するのは良いけど、どうするの?やめさせるの?」

千佳「でもそうすると今度は違う店で働き始めるかもよ?」

帆波「所謂イタチごっこだね」

かおり「うーん、どうしよっか」

八幡「まあ、今日は帰ろうぜ。時間も時間だしさ。後は明日にでも考えようぜ」

雪乃「それもそうね。それじゃあ今日のところは解散ね」

帆波「そうだね」

八幡「よし、じゃあ帰るか。小町行くぞ」

小町「あいあいさー」

帆波「瑞希も帰ろう」

瑞希「うん」

こうしてオレ達は解散して家に帰った。そして翌日総武高の校門で集合して作戦会議が始まった。

八幡「悪いな彩加。付き合わせちゃって」

彩加「ううん、いいよ。ぼくも話聞いちゃったし。それにぼくが付き合いたいし」

八幡「そっか。ありがとな」

彩加「うん!」

そう言つてニツコリ笑顔になる彩加。帆波と違った感覚だな。

雪乃「それでは始めましょうか」

かおり「具体的にはどうするの?」

雪乃「少し考えたのだけれど、一番いいのは川崎さん自身が自分の問題を解決することだと思うの。誰かが強制的に何かをするより、自分の力で立ち直った方がリスクも少ないし、リバウンドもほとんどないわ」

八幡「かもな」

さて、どうしようか。

雪乃「まず、一つ目の案はアニマルセラピーよ。動物と触れさせ合うことで彼女の心のケアになると思うの」

大志「あ、すんません。姉ちゃん動物アレルギーなんでダメだと思います」

八幡「ダメだな」

雪乃「…そうね」

ちよつと残念そうな表情を浮かべる雪ノ下。

八幡「次何かあるか?」

彩加「ぼく、いいかな?」

八幡「おう、いいぞ」

彩加「じ、じゃあ平塚先生に言ってもらうのはどうかな? ご両親だと距離が近すぎるから言えないことつていうのもあると思うんだ。でも、他の大人なら相談できるんじゃないかな?」

かおり「なるほど。それある!」

千佳「うん、確かに良いかもね」

雪乃「確かにあの人他の教師より生徒の関心が高いし、生活指導を担当している。むしろこれ以上ない人選だと思うわ」

八幡「んじや早速平塚先生に連絡だな」

そう言つてオレは携帯を取り出し平塚先生に電話すること数分後平塚先生がやってくる。

八幡「あれ?早かったですね」

平塚「うちの生徒が深夜バイトしてるという由々しき事態にのんびり等してられないだろう。これに限つては緊急性を要する。私が解

決しよう」

と何やら不敵な笑みを浮かべる。何か勝算でもあるのか？

平塚「君たちは見てたまえ。2分ほどで戻る」

あれ？何でだろう、頼もしいこと言ってる筈なのにこの不安はなんだろう。嫌な予感しかしい。

すると川崎沙希がやってくる。気だるげな足取りで時折、くあと欠伸を漏らす。そして平塚先生は川崎を呼び止めて、朝帰りの話を切り出していた。それからしばらく口論になって、イケるか？と思っていたら、川崎に何を言われたのか先生はうなだれてトボトボと川崎から離れていってしまった。何を言われたのか考えないようにしよう。うん、それがいい。そして今日は案が出てこなかったので今日も解散となった。

そして翌日、オレ達は今エンジェルと名の付く店にやってきた。エンジェルとつく飲食店は2つあった。まずはその一つである『えんじえるている』というメイド喫茶に行く。

かおり「ねえ、これって男子が行くようなところでしょ？女子の私達はどうするの？」

雪乃「それなら問題ないわ。ここ、女性も歓迎してくれるみたいだよ」

そう言って雪ノ下が指を指す。その方向を見ると看板に『女性も歓迎！メイド体験可能！』と書かれていた。

帆波「へく、メイドの体験できるんだ」

雪乃「ええ、だからそれを利用して、お店の裏側を調べるわよ」

かおり「いいんじゃない？それにメイド体験も中々できないしね」

千佳「だね」

そしてオレ達は店の中へと入る。

「お帰りなさいませー」主人様！お嬢様！

とおきまりの挨拶を頂く。けど思った絶対に川崎はここいないと。オレと彩加は席に座る。帆波達はメイド体験に向かった。さて、川崎がないと分かれば後は帆波のメイド服を見るだけだ。そして待つ

こと数分後…

帆波「お、お待たせしました。ご、ご主人様／＼」

振り返ると着替え終わった帆波がいた。帆波はフリフリのメイド服を着ており、オレはその姿に見とれていた。

帆波「な、何か言つて欲しいんだけど／＼」

八幡「え、あ、す、すまん。えつとその…スゲエ似合ってるぞ帆波。す…スゲエカワイイ／＼」

帆波「そ、そっか…ありがとう八幡／＼」

八幡「お、おう／＼」

や、やべえめつちや恥ずかしい。彩加も周りのメイドもスゲエ優しい目で見てくる。

彩加「なんだか初々しいいね」

八幡「彩加…あんまりからかわないでくれ」

彩加「あはは、ごめんごめん」

すると調査を終えたのか雪ノ下達が戻ってくる。

かおり「ねえ、どう？似合う？」

と言つてモデルポーズをとる折本。いや、絶対に違うだろ。

八幡「ん？そうだな似合ってるんじゃないやねえか？な、彩加」

彩加「うん、皆とつても似合ってるよ」

かおり「ありがとう」

千佳「なんかそう言われると照れるね」

八幡「んで川崎いたか？」

雪乃「いいえ、残念ながら居なかつたわ」

八幡「そうか。まあ、何？調べてもらつて悪いな」

雪乃「いいえ大丈夫よ」

さてそれじゃあ

八幡「すみません。写真つて撮つても良いですか？」

「はい大丈夫ですよ。よろしければ撮りましょうか？」

八幡「良いんですか？」

「はい」

八幡「それじゃお願いします。帆波、一緒に撮ってもらうぜ」

帆波「う、うん。そうだね」

「はい、それじゃ撮りますよ。もつと寄って寄って」

そう言われてオレと帆波はお互い寄る。もう肩と肩が触れ合うぐらいまで寄った。これぐらいならもう慣れてる。

「良いですね。じゃあいきますよー。はい、チーズ」

八幡「ありがとうございます」

「いえいえ」

オレはそう言っただけで店員から携帯を受け取り写真を確認する。おおこれは良い。宝物の1つにしよう。

帆波「八幡、後で私にもちようだい」

八幡「おう、いいぞ」

「ただどこには居なかった。だとするとあと1つ候補点である『エソジェル・ラダー階』だけがそこはホテル・ロイヤルオークラの最上階に位置するバーだ。オレ達未成年が入っていい場所では無い。だけど行くしかないがその前にオレは大志に聞く事があり小町に呼んでもらった。」

小町「お兄ちゃん連れてきたよ」

八幡「サンキュ。大志悪いな、急に呼び出したりして」

大志「いえ大丈夫です。それで聞きたい事ってなんですか？」

八幡「ああ、そうだな。まずお前の姉ちゃんが遅くなった時に何か変わった事とかなかったか？どんな些細な事でもいい」

大志「うーん、そうすつね……。強いて言うなら俺が塾に通い始めてからすつかね。それ以外には何も思いつきません」

八幡「お前が塾に通い始めてからか。じゃあお前の姉ちゃんは塾とか予備校とかには行ってたのか？」

大志「いえ、姉ちゃんは行ってません。家計的にそんな余裕はないので：」

八幡「そうか」

なるほど。オレの予想が合っていれば多分川崎は学費の為にバイトをしているのだろう。大志が塾に通い始めた時点で大志の学費の問題は解決している。生活に余裕が無いから川崎沙希は塾や予備校

に通えない。高校生向けの塾や予備校は結構金を取られる。だからバイトをして金を稼いでるってことだ。深夜バイトは確かに給料少し高いからな。それもホテルのバーとなるとな。多分川崎は歳を誤魔化して働いているのだろう。

八幡「スマンな嫌な事言わせちまつて」

大志「いえ大丈夫です！それで何か解決できるのなら」

八幡「そうか。ありがとうな」

さて、大体予想もできたし後は帆波達に相談するか。その為には大志を帰らせなくちゃならない。こんな事大志の前で話せないからな。

八幡「教えてくれてありがとうな。また聞きたい事があつたら聞くからそんなときも頼むわ」

大志「はい！」

そしてオレ達は大志と別れる。大志が店を出ていったを見届け瞬間…

帆波「八幡、もしかして何かわかった？」

八幡「なんで分かるんだよ。エスパークだよ」

帆波「違うけど、強いて言うなら顔見た時何かわかった様な顔してたから、何かわかったのかな？って思ってる」

八幡「さいですか」

帆波「それで本当はどうなの？」

八幡「わかったと言うか予想だけだな」

帆波「教えてくれる？」

八幡「ああ、いいぞ。言うつもりだったし」

雪乃「それじゃ早速言ってもらえるかしら」

八幡「ああ。まず川崎がバイトしている理由だが、多分学費の為に」

帆波「え？学費？」

八幡「ああ」

かおり「でもなんで？」

八幡「まず川崎が不良化っぽくなったのは2年の時と大志が塾に通い始めた時と言うのは聞いたよな。そして川崎も塾に行つてると思

いきや家計の関係で行っていない。もうここで大志の学費問題は解決しているわけだ」

帆波「なるほど。だから川崎さんは自分の学費を稼ぐ為にバイトをしているんだ」

八幡「ああ、多分な」

千佳「でもどうするの？」

八幡「そこなんだよなく。多分言っても無理だろうし、というよりオレらが川崎の無理なバイトをやめさせる権利は無いしな」

雪乃「確かにそうね」

帆波「何か良い方法は無いのかな？」

確かに何か良い方法はないだろうか。けどこの問題は人の家庭事情だ。赤の他人であるオレ達が下手に関わってはいけない。けど、色々聞いてしまったから何かしらしないと。皆で色々考えていると折本が何か良い案を思い出したのか口が開く。

かおり「…あ」

雪乃「どうかした折本さん。何か思いついたのかしら？」

かおり「うん、前に比企谷が言ってたあの…えつと…スカラシップ？だっけ？あれを教えてみたらどうかかな？」

八幡「あ、なるほどな。確かにあれがあれば学費の心配はいらないな」

帆波「確かにそうだね」

雪乃「いいかもしれないわね」

千佳「教えるのは良いけど、どうやって教えるの？」

八幡「そうだな…折本、仲町、悪いけど明日昼休みにオレのところに来てきてくれないか？」

かおり「え？私達が？なんで？」

八幡「いや、オレが言ったら勘違いするだろ？多分」

千佳「あ、確かにそうかもしれないね。わかった明日川崎さんを比企谷君のところに来ていけば良いんだね」

八幡「ああ、頼む」

雪乃「じゃあ今回は比企谷君達に任せるわ」

八幡「ああ」

そして翌日の昼休み。オレと帆波はベストプレイスで折本達が来るのを待つこと数分後。

かおり「比企谷く、連れてきたよ」

八幡「ああ、サンキュ。いきなり悪いな川崎」

沙希「アンタは確か比企谷だっけ？それで何の用？」

八幡「すぐ終わる。まず初めにお前、最近帰りが遅いんだってな。朝の5時らしいじゃねえか。大志が心配してたぞ」

沙希「成程。最近周りがやけに小うるさいと思ってたら、あんたたちのせいかな。大志が何言ったか知らないけど、私から言っておくから、これ以上関わらないでね」

帆波「バイト辞める気無いの？」

沙希「ないね。話はそれだけ？もう行くけど」

八幡「まだ話は終わってねえ」

沙希「まだなんかあるの？」

八幡「ああ。それじゃあ単刀直入に聞くそんなに学費が必要か？」

沙希「っ!？」

それを聞いた川崎は明らかに動揺したような表情になる。オレの予想は的中した訳か。

八幡「まあ、どんな理由でバイトしているかオレは聞かねえけど、もっと家族を大切にされた方がいいぞ」

沙希「でも…お金が…」

八幡「まあ、確かに塾とか予備校に行くとお金はかかるし、進学するとさらにお金はかかる。そこでだ。川崎、お前スカラシップって知ってるか？」

沙希「スカラシップ？何それ？」

八幡「まあ、簡単に言うと成績優秀者の学費を免除するってやつだ」

沙希「え？そんなのがあったの？」

八幡「ああ、詳しくは先生とか聞けばいい。お前が抱えてる問題が学費だけならこれで解決できるはずだ。確か最近は大学によっちゃ

この制度が入ってるとこもあるみたいだぜ」

沙希「そうか：ありがとう教えてくれて」

八幡「どういたしまして。それと家族と話せよ」

沙希「うん、話すよ。ちよつと怖いけど」

帆波「うん、その方が良いよ」

かおり「怒られるかもしれないけどね」

千佳「確かに」

沙希「うん、覚悟はするつもりだよ」

八幡「そうか。まあ、話はそれだけだ。時間取らせて悪かったな」

沙希「いいよ」

八幡「そうか。それじゃな」

沙希「うん」

そう言つて川崎は去つていった。

帆波「上手くいったね」

八幡「ああ、そうだな」

かおり「じゃあ終わった事だしお昼食べよう」

千佳「そうだね」

そして数日後、川崎はバーのバイトやめたそうだ。そしてスカラシップを狙うため勉強を頑張るそうだ。そして今日は職場見学の日だ。オレ達に向かうのは海浜幕張駅。このあたりは結構なオフィス街でもあり、意外な会社の本社があったりもする。オレは彩加、葉山の3人グループのはずだった。けど実施は葉山の周りにわらわらと集まっている。何、大名？まあ、それよりオレ達、というより葉山が選んだのはどこかで聞いた事のある電子機器メーカーだった。まあ、なんやかんやあつて職場見学も終わり周りの奴らはそろそろと出入口の方へと向かう。

かおり「あー、終わった終わった」

千佳「そうだね」

八幡「そういえば帆波と雪ノ下はどこで待ってるんだっけ？」

かおり「えつと確か駅前のカフェだよ」

八幡「あー、そうだったな」

千佳「早く行こ！早く行かないと怒られちゃうよ」

かおり「それもそうだね」

八幡「あ、オレちよつとトイレ行ってくるわ」

かおり「わかったじゃあ外で待ってるね」

八幡「おう、わかった」

オレはさつきとトイレを済ませてエントランスに行くと、そこにはお団子頭がいた。いや、なんているんだよ。ハア…見つかって絡まれたら嫌だからさつきと外で待っている折本と仲町の所へと向かおうとした時だった。

結衣「あ、ヒツキー！」

チツ！やっぱり見つかってしまうか。正直めんどくせえな。無視して行こうかと思つたら

結衣「ちよつ！無視すんなし！」

八幡「チツ！なんだよ。何か用か由比ヶ浜」

結衣「今までどこに行つてたし！あたし待ってたんだからね！」

八幡「いや、どこに行こうがオレの勝手だろう。それに待つ理由もないだろう」

結衣「あるし！それにもうみんな行っちゃったよ？」

八幡「だつたらなんだよ」

結衣「だからヒツキーも一緒に行こ？」

八幡「行かねえよ」

結衣「なんでだし！」

あーもう、うっさいな。ここまだ会社のエントランスだぞ。もうちよつと静かにしろよ。あー、早く行かねえと怒られるんだよな。そう思っている

かおり「ちよつと比企谷？何して…ん…の…？」

千佳「どうしたのかおり？あ…」

考えていると外で待っていた折本と仲町がやってきた。

八幡「あー、悪い。すぐ行く」

そう言つて折本と仲町の所へ向かおうとした時、オレの腕が掴まれた。

結衣「ちよっ！待つし！」

八幡「なんだよ。オレは今から行くところあるんだ。邪魔すんじゃないよ」

結衣「行くところってどこに行くの？」

八幡「なんで一々お前に教えなくちやならない。しかもお前には関係ないだろ」

結衣「教えてくれてもいいじゃん！」

八幡「なんでだよ」

結衣「同じクラスなんだし教えてくれてもいいじゃん！」

八幡「またそれかよ……」

一体なんだよそれ。同じクラスだからって教えなくちやならないのなら、お前も言う事あるだろう。

八幡「それより由比ヶ浜。お前、オレに言う事あるだろう」

結衣「はあ!?そんなの無いし！」

ハア、とオレがため息をつく。折本と仲町も同じタイミングでため息をつく。マジかよコイツ。オレの家に来てお礼を言うって言ったくせに。今もこうしてチャンスをあげたのにそれをコイツは無下にした。ホントどうしようもない奴だな。

八幡「そうか……じゃあこういえば分かるか入学式、事故でわかるんじゃないか、なあ、犬の飼い主さんよ」

そう言うのと由比ヶ浜は目を大きく見開きすごく驚いた様子だった。

結衣「ひ、ヒツキー、覚えて、たの？」

八幡「いや、雪ノ下が教えてくれた」

結衣「そ、そうなんだ」

そう言うのとオレの腕を掴んでいた手の力が緩んだので、オレはさすがに手を引く。

結衣「あ……」

八幡「じゃあな。オレら人待たせてるんだ。行くぞ折本、仲町」

かおり「うん」

千佳「わかった」

オレ達はそう言って職場から外に出て帆波と雪ノ下が待つカフェ

へと向かった。

帆波「あ、八幡、かおり、千佳遅かったね何かあったの？」

八幡「ああ、あった」

帆波「何があったの？」

八幡「ああ、実はな」

オレは職場であったこと帆波と雪ノ下に話した。

八幡「と言うわけで少し遅れた」

帆波「また由比ヶ浜さんか…。八幡がチャンスをあけてたのになん

でお礼とか言わないの？」

かおり「ホントそれだよ」

千佳「しかも馴れ馴れしく色んな事聞いてくるしね」

八幡「ハア：疲れた」

雪乃「お疲れ様」

かおり「ホントだよ」

帆波「ま、そんな嫌な事は忘れて、注文しよ」

八幡「それもそうだな」

かおり「だね」

千佳「うん」

こうしてオレ達は由比ヶ浜の事は忘れてカフェで色んな話をしながら過ごした。

第16話

八幡side

職場見学から大分日が経ち、7月の半ばに入ろうとしている。そして7月の半ば頃といえ、あれがある。そう…あれだ。忘れてはいけない日が近づいているのだ。

八幡「そろそろ帆波の誕生日だな」

と部屋でそう言い放った。因みに帆波は日直の仕事をしているので、今は部屋にいない。

かおり「そうだね」

八幡「折本達はもう誕生日プレゼント買ったのか？」

かおり「私はまだだよ」

千佳「実は私もなんだ。雪乃ちゃんは？」

雪乃「私もまだよ。色々と考えてしまつて未だに決められないの」
千佳「そうなんだ」

どうやらオレも折本達もまだ帆波の誕生日プレゼントを買えていないみたいだ。悩むんだよなホント。去年の誕生日プレゼントはヘアピンをあげた。あの時はすごい喜んでいたので、嬉しかったのを覚えている。

八幡「何にすつかな」

かおり「あ、じゃあさ。明日の休日にさ、みんなで帆波の誕生日プレゼント買いに行かない？去年はそれぞれ考えてたけどさ、今年はみんなで教えあつて買わない？」

千佳「あ、それいいかも」

雪乃「確かにいいかもしれないわね」

八幡「そうだな。折本にしたら良い考えだ」

かおり「でしよ、つて、今バカにしてたでしよ！」

八幡「いや、全然。むしろ褒めてるんだよ」

かおり「ホント？」

八幡「ホントホント。八幡ウソつかない」

かおり「…まあ、そういうことにしてあげる」

千佳「あはは…じゃあ明日の休日何時に集合する？」

かおり「そうだな。1時に海浜幕張駅に集合で良い？」

八幡「オレは良いぞ」

千佳「私も」

雪乃「私もいいわよ」

かおり「よし、じゃあそういうことでよろしく」

と折本が言った同時に部室の扉が開き日直の仕事を終えた帆波が入ってきた。

帆波「？何がよろしくなの？」

かおり「え!?!いや、何にもないよ!」

帆波「え?でもさつき言ってたの聞こえたよ」

かおり「えく…つとそれは…」

まさかこのタイミングで来るとは思ってたな。でも矛先が折本に向いているのはありがたい。いや、でも下手したらオレにも矛先が来るかもしれん。くつ、そうならなかったためには折本が何とかして誤魔化してくれるのを期待するしかない。

かおり「そ、そう!さつきお母さんに頼み事をしたの。それでよろしくって言ったんだ」

帆波「あ、そういう事ね」

フウ：何とか誤魔化してくれたみたいだ。危ねえ危ねえ。でもまさか折本がそんな誤魔化し方を思いつくなんてな。思ってもなかったな。え?なに?折本に失礼だった?仕方ないさ、それが折本なんだからな。

そして時間は進み依頼人も来ずただただのんびりと話したりして過ごした。まあ、依頼がないのが1番なんだけどな。依頼も来ないということ、今日は早く部活も終わり家に帰った。そして翌日オレは約束通り、待ち合わせ場所である海浜幕張駅に来て折本達と集合して、シヨッピングモールへと向かった。

雪乃「一之瀬さんへのプレゼント、一体何が良いのかしら」

モールの中を歩いていると雪ノ下がそう言った。

八幡「そうだな」

かおり「毎年悩むよね」

千佳「それがプレゼント選びだもんね」

八幡「そうだな」

確かに誕生日プレゼント選びは悩むもんだ。相手の事を思い何が良いのか考えてしまい時間が過ぎていってしまう。その後モール内を歩き周り帆波へのプレゼント探す。そして途中で、雪ノ下の案でキッチン雑貨店に立ち寄った。そこはフライパンなどの基本的な調理器具の他、パペットみたいな鍋つかみとかマトリョーシカを模した食器セットのようなファンシー系アイテムが取り揃えられている。なるほど確かに帆波は料理は得意だしな。それに毎日オレのために弁当を作ってくれるし良いかもしれん。

雪乃「ねえ、これどうかしら？」

そう言われて呼ばれた方を見ると、そこにはエプロン姿の雪ノ下がいた。黒い生地は色合いとは裏腹に薄手で、雪ノ下が羽織ると涼しげですらあった。胸元に小さくあしらわれた猫の足跡。腰ひもがぴこつとりボン状に結ばれ、それが雪ノ下の引き締まったくびれを強調していた。首回りや腕回りの具合、そして動きやすさを確かめるように、雪ノ下はくるとワルツでも踊るかのよう一回転して見える。そうすると、解けかけた紐がゆらっと動き、しっぽみみたいだった。

雪乃「どうかしら？」

さらに雪ノ下は聞いてくる。

八幡「どうと言われても…すげえ似合ってるとしか言えないな」

千佳「うん、すごい似合ってるよ」

雪乃「ありがとう。けれど、私のことではなくて。一之瀬さんにごうかしら、という意味よ」

八幡「ん、帆波にか…そうだな、良いかもしれんが、もつと違うやつの方がいいんじゃないか？」

雪乃「例えば？」

八幡「例えば…そう言われると悩むな」

かおり「確かにそうだね」

千佳「うん、そうだね」

八幡「そうだな。帆波はこうもつと明るい感じのやつの方がいいんじゃないの?」

かおり「あ、確かにそうかもね」

千佳「そうだね」

雪乃「なるほど。……ではこういうのかしら?」

と雪ノ下は少し周りを見渡して、近くにあつた明るい感じの色のエプロンを手に取り聞いてきた。

八幡「お、いいんじゃない?」

雪乃「そう、では買ってくるわ」

そう言つて2つのエプロンを持つてレジの方へと向かつて言った。あ、それも買うのね。その後もモール内を歩き周り帆波の誕生日プレゼントを買つた…オレ以外は。

かおり「比企谷く。何買うか決まつた?」

八幡「いや、残念ながら決まつてない」

かおり「悩みすぎじゃない?」

八幡「悩むに決まつてるだろ」

かおり「もう、帆波なら比企谷に貰うものならなんでも喜ぶつて」

八幡「その何でもつて言われるのが1番困るんだよな」

多分これは何か食べたいものない?と聞かれて、なんでもいいつて言われて困るやつだと思う。

かおり「まあ、じっくり考えなよ。私達はそれに付き合うからさ。

ね?千佳、雪乃」

雪乃「ええ、そうね」

千佳「うん、最後まで付き合うよ」

八幡「サンキュ」

こう言つて貰えるありがたい。やつぱり友達はいいいものだな。そんな事考えながら、帆波へのプレゼント何が良いのか色々考えた結果、アクセサリーショップで赤色のシユシユを買つた。

八幡「やつと買えた」

千佳「良かったねいい物が買えて」

八幡「ああ」

かおり「帆波も喜ぶと思うよ」

八幡「そうか？それだと嬉しいんだが」

雪乃「大丈夫よ。私達が保証するから」

八幡「そっか…ありがとな」

雪乃「どういたしまして」

色々考えて、やっと帆波への誕生日プレゼントを買うことができた。折本達も最後まで付き合ってくれたし、そこは感謝しねえとな。それに帆波が喜んでくれたら一番良いんだけど、そこは3人に保証されたし、頑張つて渡すか。

???「あれー？雪乃ちゃん？あ、やつぱ雪乃ちゃんだ！」

雪ノ下の名前を呼ぶ声があった。オレ達は声のした方へ、見てみるとそこには艶やかな黒髪、きめ細かく透き通るような白い肌、そして、整った端正な顔立ち。輝きを放つような類い稀なる容姿は清楚さを漂わせながらも、人懐っこい笑みのおかげで華やかさが加わっていた。そしてオレはこの人の事知っている。

雪乃「…姉さん」

千佳「え？雪乃ちゃんのお姉さん!？」

雪乃「ええ」

そして雪ノ下の姉が近づいてきて

???「こんなところで何してるの？」

雪乃「友達と一緒に友達の誕生日プレゼントを買いに来たのよ」

???「友達？」

雪乃「こちらの3人が私の友達よ」

陽乃「そうなんだ。あ、私、雪ノ下陽乃。雪乃ちゃんのお姉ちゃんだよ。雪乃ちゃんと仲良くしてくれてありがとうね」

かおり「ど、どうも折本かおりです」

千佳「仲町千佳です」

陽乃「折本ちゃんに仲町ちゃんね。うん、よろしくね。そしてそっちの子は…あ」

八幡「どうも」

かおり「もしかして比企谷、雪乃のお姉さんと知り合いなの？」

八幡「知り合いというか、去年オレが入院中に謝罪に来てくれたんだ」

千佳「あ、そうなんだ」

陽乃「去年は本当にごめんね。あの後、何か困った事とかあった？」

八幡「いえ、その後も何不自由なく生活できてます」

陽乃「そっか。それなら良かった」

すると今までに貼ってあった仮面が剥がれた。どうやら本当にオレの事を心配してくれたようだ。

八幡「ご心配いただきありがとうございます」

陽乃「ううん、こっちもごめんなさいね。轢いてしまっって」

八幡「いやいや、こっちも急に飛び出したのも悪いですし」

陽乃「そっか、そう言っって貰えて嬉しいよ。じゃあ私行くね。じゃあまたね雪乃ちゃん」

そう言っって雪ノ下の姉、雪ノ下陽乃は去っって行った。

かおり「なんか嵐みたいな人だったね」

千佳「そうだね。でも、比企谷君がまさか雪乃ちゃんのお姉さんとお知り合いだったなんて思わなかったよ」

八幡「いや、知り合いという程ではないんだけどな。それよりこれからどうする？まだ時間あるなら適当に歩き回るか？」

雪乃「別にいいわよ」

かおり「私もいいよ」

千佳「私も」

八幡「そうかじゃあ行くか」

オレの一言で歩き始める。これと言っって目的地はないけど、他愛もない会話をしながら歩き回る。そんな事しながら数分経過しようとしていた。途中で椅子が配置された休憩場所に近づいてきたので。

八幡「大分歩いたし、ちよつとここで休憩するか」

かおり「そうだね。そうしよっか」

雪乃「そうね」

千佳「うん」

オレ達は休憩場所の椅子に座り一息つく。結構歩いたからな、雪ノ

下も疲れている様子だ。

八幡「大丈夫か雪ノ下」

雪乃「…ええ、大丈夫よ。ちよつと疲れてしまっただけよ」

かおり「ごめんね。なんか無理させちゃった？」

雪乃「そんな事ないわ。私も楽しかったから」

千佳「そつか…でも無理せず言っただけ」

雪乃「ええ」

ちよつと無理させずきたかな。これからはもつと気をつけないとな。そう思い椅子に座る。そして数分雑談しながら休憩していると雪ノ下の顔色もだんだんと良くなってきている。ほっ…良かった。と安心していると放し飼い状態の犬が欠伸混じりににトコトコと歩いていた。犬種はミニチュアダックスフントみたいだが。おいおい、飼い主は何してんだよ。ちゃんと見とけよな。そう思っていると、突然ミニチュアダックスがオレ達の方へ向かって、脱兎のごとく駆け出した。犬なのに。

雪乃「ひ、比企谷君…い、犬が…」

すると雪ノ下がおろおろしている。もしかして犬が苦手なのか？でもこんな雪ノ下を見るのは珍しいな。折本と仲町も少し驚いている様子だ。そんなことよりも。

八幡「よっ…と」

がっ、と犬の首根っこを押さえる。伊達に日ごろから嫌がって逃げるうちの猫を無理やり取り押さえていない。この手の動物を捕まえるのは得意だ。犬は悲しげな瞳をしていたが、はつとオレを見上げるとくんかくんかとオレの匂いを嗅いでから、怒濤の勢いで指をぺろぺろしだす。びっくりして思わず犬から手を離してしまった。

八幡「うわつと…」

雪乃「あ、手を離したら…」

雪ノ下が焦ったように言う。が、犬は逃げ出すことなく、オレの足元にじゃれついてからおもむろにぐろーんと転がった。腹を見せてはつはつはつと舌を出していた。なんだよこの犬…懐きすぎだろ。

かおり「あ、この犬…」

八幡「?知ってるのか折本」

かおり「知ってるもなにもこの犬、あの事故の犬だよ」

八幡「は?あの事故の犬ということは、この犬の飼い主は…」
かおり「うん、由比ヶ浜さんだよ」

八幡「マジかよ…」

千佳「それに見て。まだ首輪が壊れてるよ」

3人「「えっ!?!」」

ウソだろ…まだ首輪が壊れてるのかよ。あれから1年たってるんだぞ。買い替えることぐらいできただろう。すると…

「サ、サブレー…ごめんなさい!サブレがご迷惑を」

そうやって駆けつけてきた飼い主が犬を抱き上げて、凄いい勢いで頭を下げる。ソイツは折本の言う通りやっぱり由比ヶ浜だった。そして由比ヶ浜は下げていた頭を上げてこつちを見ると、驚いた表情になった。こつちも驚いたけどな。

結衣「ヒ、ヒツキー…」

八幡「はあ…ヒツキーって呼ぶな」

結衣「別にいいじゃん!」

八幡「本人が嫌がってるのになんで呼び続けるんだよ。嫌がらせか?」

結衣「違うし!」

八幡「それに…まだ首輪買い替えてないんだな」

結衣「あ、…それは…」

そう言うとか何かバツが悪そうな顔色になる由比ヶ浜。

八幡「ま、そんな事オレ達には関係ないけどな。けどそんな状態だとまたトラブル起こっても知らねえぞ。それじゃ行くぞ折本、仲町、雪ノ下」

かおり「うん」

千佳「わかった」

雪乃「そうね」

さっさとこの場から離れよう。コイツともう関わりたくないからな。チラッと後ろの方を見ると、由比ヶ浜は足元を見ていた。何に落

ち込んでいるのか知らんが、これはアイツが悪いからな。そんな事考
えながら、この場を後にして家に帰った。

そして数日後、今日は7月20日。帆波の誕生日だ。でも今日は平
日、学校がある。だから放課後に部室でお祝いすることになった。

4人「二」「帆波（一之瀬さん）誕生日おめでとう！」「三」

とオレ達は帆波お祝いの言葉を送る。

帆波「わあ、みんなありがとう！」

かおり「じゃあ、はい、これ私からの誕生日プレゼント」

千佳「私からもあげる」

雪乃「私からも、受け取って貰えるかしら？」

帆波「もちろんだよ！ありがとう！かおり、千佳、雪乃ちゃん」

女子3人は帆波にプレゼントを渡し終える。後はオレだけだな。
なんだかそう思えると、緊張してくるな。フウと深呼吸を入れて落ち
着かせる。よし、何とか落ち着いたことだし、帆波にプレゼントを渡
すか。

八幡「帆波、これはオレからの誕生日プレゼントだ」

帆波「ありがとう八幡！開けていい？」

八幡「お、おう。いいぞ」

オレがそう言うのと帆波はオレがあげたプレゼント袋を開ける。そ
して袋の中からプレゼントを取り出す。

帆波「これは…シユシユ？」

八幡「あ、ああ。帆波に似合うと思って選んだんだが」

かおり「帆波帆波、比企谷相当悩んで選んだんだよ」

八幡「あ、おい！折本！言うなよ！」

千佳「そうそう。結構悩んでいたよ」

雪乃「確かに悩んでいたわね」

八幡「お前ら…」

ホントマジでやめて。マジで恥ずかしいから。そう思いオレは片
手で顔を隠す。

帆波「そっか…そんなに私のために選んでくれたんだ」

八幡「ホント…マジでやめて。恥ずかしいから」

帆波「ふふっ、でもありがとう」

八幡「お、おう」

恥ずかしながらも何とか返事をする。まあ、でも喜んでくれたみたいだし、良かった。すると、帆波は手に持ってたシュシュで髪をまとめてポニーテールの髪型にした。

帆波「どう、かな？」

八幡「お、おう。似合ってるぞ」

帆波「そう？ありがとう」

かおり「ホント似合ってるよ帆波」

千佳「うん、すごい似合ってるよ」

雪乃「すごく似合ってるよ一之瀬さん」

帆波「ありがとう。後、雪乃ちゃん」

雪乃「何かしら？」

帆波「もうそろそろさ、私達の事下の名前で呼んでくれない？」

雪乃「え？」

帆波「私達さもう長い付き合いじゃん？今までは私達が雪乃ちゃん
の事下の名前で呼んでるじゃん。だからもうそろそろ呼んで欲しい
なあて、思ってたさ」

かおり「あ、それ私もそれ思った」

千佳「私も」

雪乃「そ、そうね。確かに言われてみればそう、ね。わ、わかった
わ。ほ、帆波、さん。か、かおり、さん。ち、千佳、さん…で良いの
かしら／＼／」

ちよつと顔を赤くしながら帆波達女子3人の名前で呼ぶ。そして
言い終わると雪ノ下はふいつと顔を逸らす。

雪乃「な、何か言って貰えないかしら？／＼／」

かおり「あ、ごめんごめん。そんな急に言われると思ってなくて、
ちよつと驚いてしまっただけだから」

千佳「そうそう」

帆波「そうだよ。驚いちゃったけど、嬉しいよ!」

雪乃「そ、そう」

かおり「じゃあ、比企谷。比企谷も雪乃の事下の名前で呼びなよ」
八幡「はあ!」

何故か矛先がオレの方へと向かれた。な、何故オレが雪ノ下の事下の名前で呼ばないといけないんだ?

八幡「い、いや、なんでそうなるんだよ」

かおり「え? いいじゃん。じゃあ雪乃の事下の名前で呼んでも」

千佳「そうだよ。あ、そうだ! だったら私とかおりも比企谷君の事下の名前で呼ぶのはどう?」

かおり「いいね!」

いや、何がいいね! だよ。

八幡「いや、でもな…」

かおり「じゃあ私達だけ呼ぶね八幡」

千佳「そうだね。私達は勝手に呼ぶね八幡君」

八幡「なっ! / /」

かおり「あ、八幡照れてる」

八幡「うっせ!」

千佳「ふふっ」

帆波「ほらほら八幡。女子だけに言わせるつもり?」

八幡「んぐっ」

た、確かに帆波の言う通りだな。女子が言ったのにオレだけ言わない訳にはいかねえな。そうだ、だったら…

八幡「わかったよ。かおり、千佳、雪乃」

雪乃「!」

かおり「おお!」

帆波「まさか八幡から雪乃ちゃんの事下の名前で呼ぶなんて、やるじゃん八幡」

千佳「ほらほら雪乃ちゃん。いいの? 八幡君に負けてるよ」

雪乃「負けてる…私が…」

お、おお…なにやら雪乃の負けず嫌いを発動させてしまったらし

い。そして何か意を決したのか。雪乃はオレに視線を移し。

雪乃「よろしくね八幡君」

八幡「お、おう」

マジか。オレすげえ緊張しながら平常を装って言ったのに、なんだかアイツは普通に言ってるやがる。まあ、でもこれでオレ達はまた友情を深まったと思う。でも下の名前で呼ぶのはまだ慣れねえと思うが慣れるまで頑張るか。

雪乃「ではそろそろケーキでも食べましょうか」

帆波「え!?!ケーキあるの?」

雪乃「ええ、私を作ったケーキだけけど」

帆波「ホントに!わーい!」

帆波は両手を広げて喜ぶ。ふっ、まったく本当にかわいいな。でもいつの間にか作ったんだケーキなんてよ。さすがは雪乃だな。

その後は雪乃が作ってくれたケーキを食べて部活は終了した。

第17話

八幡 side

じりじりと日差しが眩しく、肌が焼けるような暑さにやられながらも、総武高は夏休みを迎えました。やっと長い夏休みに入ったから家とかでダラダラしたり、帆波達と出かけたりしようかなと思っっている、奉仕部で泊りがけでボランティア活動をする事になったらしい。そういうメールを平塚先生から送られてきた。というかあの人メールだと人変わりすぎだろ。

という事で待ち合わせ場所である駅に向かうともう平塚先生達が出た。

平塚「来たか比企谷」

八幡「うっす」

後ろにはワンボックスカーが止まっており、平塚先生の服装はたくし上げられ裾を結んだ黒いTシャツにデニムのホットパンツ、足もとは登山靴みたいなスニーカーだった。手には黒いサングラスを持っており、頭にはカーキー色のキャップを被っている。そして周りを見ると帆波達の姿が見えなかった。

八幡「あの、帆波達はまだなんですか？」

平塚「いや来てるぞ。今アソコのコンビニで何やら買っているらしい」

八幡「そうですか。あ、後それと小町も誘って頂きありがとうございます」

小町「ありがとうございます平塚先生」

平塚「なーに、気にすることないさ。こういうのは人数が多いと楽しいからな」

八幡「そうですね」

平塚「おや？君がそういう事を言うとは驚きだな」

八幡「自分でも驚いてますよ。多分オレは帆波達と出会ってなかつ

たら、否定していたと思いますし」

平塚「そうか。一之瀬達が君を変えてくれたんだな」

八幡「ま、そんな感じですよ」

平塚「そうか。それは良い出会いだな」

八幡「はい」

そんな会話をしているとコンビニから帆波達が出てきた。

帆波「あ、八幡だ」

雪乃「あら、本当ね」

千佳「おはよう八幡君」

八幡「おう。おはよう帆波、雪乃、千佳、かおり、瑞希」

雪乃「ええ、おはよう」

帆波「おはよう」

かおり「おはよう」

瑞希「おはようございます」

と帆波達に挨拶をする。瑞希も小町と一緒に誘ってもらったらしい。ふとみんなの服装を見ると、みんな動きやすい服装を着ていた。そして帆波の手首にはオレが上げたシユシユを身につけていた。

小町「おはようございます皆さん」

帆波「おはよう小町ちゃん」

雪乃「おはよう小町さん」

かおり「おはよう。元気だね」

千佳「ふふっ、そうね。おはよう小町ちゃん」

瑞希「おはよう小町ちゃん！」

小町「瑞希ちゃんもおはよう！」

こいつらは元気だなホントに。

八幡「平塚先生、揃いましたけど」

平塚「まあ、待てあと1人くる」

と平塚先生は答えた。え？もう1人来るの？誰ですか？オレはてつきりもう全員揃ったのかと思いましたよ。もう1人とは一体誰なんだ？そう思っていると…

「八幡！」

とオレを呼ぶ声がした。振り返らなくても声だけで誰だかわかってしまう。オレを八幡と呼ぶ同性は1人しかいない。念の為確かめてみると、やはり彩加だった。材木座？え？誰ですか？全然分かりません。そして彩加はオレ達の所へと駆け寄ってくる。

彩加「おはよう八幡」

八幡「おう、おはよう彩加」

と挨拶をかわす。

彩加「一之瀬さん達もおはよう」

帆波「おはよう戸塚君」

雪乃「戸塚君おはよう」

かおり「おっはよー戸塚君」

千佳「おはよう戸塚君」

小町「おはようございます戸塚さん」

瑞希「おはようございます」

彩加「おはようございます平塚先生」

平塚「うむ、おはよう戸塚。これで全員揃ったな。では、車に乗ってくれ」

と言うと平塚先生は運転席へと乗った。帆波達もそれに続いて車に乗り込んで行く。オレはどうしようかと思っっていると…

平塚「比企谷、君は助手席に来なさい」

八幡「え？オレ？」

平塚「ああ、早くしろ」

八幡「ええ、なんでまた」

平塚「フツ、助手席は1番死亡率が高いからだ」

八幡「あんた人として最低だなおい！」

平塚「まあ、それは冗談だ。長時間のドライブだからな。運転中は退屈しない方がいいだろ？それに君との会話はそれなりに楽しいからな」

八幡「さいですか」

そういう落ち着いた柔らかい笑顔をされたら、断れないじゃないですか。まあ、そういうことなら大人しく助手席に乗りますかね。そし

て全員乗り込んだことを確認し、シートベルトを締める。

八幡「それで泊まりがけのボランティアと言ってましたけど、具体的には何するんですか？」

平塚「そういえば言っただけでなかったな。今から君たちは小学校の林間学校のサポータースタッフとして働いてもらうため、千葉村へ行く」

八幡「千葉村ですか。また遠い所へ行くんですね」

平塚「だから長時間のドライブになるんだ」

八幡「なるほど」

だから話し相手になってくれと言っただけだ。それから他愛もない会話をしながら車に揺られていると、千葉村に着いたので全員車から降りる。

かおり「おおうホント山だ」

帆波「ホントだね」

千佳「なんだか空気がおいしいね」

まあ、確かに都会とか、街の中だと味わえない空気かもしれないな。

平塚「さて、まずは荷物を下ろしておきたまえ」

そう言われてオレ達は車から荷物を下ろしていく。するともう一台のワンボックスカーがやって来た。ここはキャンプ場とかもあるから、多分一般客かなんかだろうな。人が降りるとそのまま来た道を引き返していく。どうやら送迎らしい。そしてその車から降りてきたのは若い男女5人組。ああ言う連中が川の中洲でバーベキューとかして取り残されてレスキュー呼んじやうだろうな。そんな事考えていたらその一団の1人がオレに向かって軽く手を挙げた。

葉山「や、ヒキタ：比企谷」

八幡「……葉山か」

コイツいまさっきオレの事ヒキタニと呼ぼうとしたけど、すぐに言い直しやがったな。それに後ろの方を見ると、やはりあの葉山グループのメンバーがそこにいた。もちろんあの由比ヶ浜もいるけどな。

雪乃「あの何故葉山君達までいるんでしょうか？」

平塚「ん？ああ、君たち以外にも募集をかけていてね。それで、こいつらが参加すると言ってきたんだ」

葉山「俺は、内申が加点されるって聞いたからなんだ」

ふむ、なるほど。所謂餌に釣られたというわけか。なんとも卑怯な誘い方だ。

平塚「では、荷物を本館に置き次第仕事だ」

そう言つて平塚先生が先導する。オレ達はそれにつき従つて歩き始める。本館に荷物を置くと、今度は集いの広場という所へ行かされた。そこで待っていたのは100人近い小学生の群れだった。見たところ小学6年なのだろうか、体格にもばらつきがかなりあり、雑然としていた。そしてここにいるほぼ全員が同時に喋っているからやかましいことこの上ない。その光景にオレ達は圧倒されてしまった。高校生ともなると、小学生の集団を間近で見るとはほとんどない。綺麗に言うパラフルだろうな。

帆波「す、すごいね」

と小さな声で帆波が話しかけてくる。

八幡「そうだな。これだとかおりの方がマシだな」

帆波「そうだね」

かおり「ちよつと！お二人さん!?ちよつと失礼過ぎない!？」

とかおりが言ってくる。だってそうだろう？まだかおりの方が静か
でいいぞ。

千佳「確かにそうかもしれないね」

かおり「千佳まで〜！」

雪乃「確かにここは八幡君の言う通りね」

かおり「雪乃まで!?!うゝ…みんなしていじめるゝ…」

八幡「ハハツ、冗談だ冗談」

帆波「ふふつ、かおりつたら本気にしちゃった?」

かおり「当たり前だよ!」

千佳「ごめんねかおり」

雪乃「ごめんなさい。私も悪ノリしちゃったわ」

かおり「なんか謝られてる気がしないけど、まあいいや」

あ、いいんだね。そんなやり取りをしてから数分後、徐々に静かになる。

「はい、みんなが静かになるまでに3分かかりました」

うわくでたよ。全校集会とか学級会とかでよく使われるよなあれ。まさか高校生にもなって聞くとは思ってなかったな。そしてその後はこれからの予定が発表される。一日目はオリエンテーリングだぞうだ。

「では最後に、みなさんのお手伝いしてくれる、お兄さんお姉さんを紹介します。まずは挨拶をしましょう。よろしくお願いします」

「二」「よろしくお願いします」「三」

先生の後に続いて小学生達が同時に挨拶をする。そんな中葉山がすつと一歩前に出た。

葉山「これから3日間、みんなのお手伝いをします。何かあったらいつでもぼくたちに言ってください。この林間学校で素敵な思い出をたくさん作ってってください。よろしくお願いします」

と挨拶が終わると拍手が巻き起こる。小学生の女子はきやーきやー言ってる。あいつさては慣れてやがるな。なんの打ち合わせもないのにいきなりできるとはマジかあいつ。

「ではオリエンテーリング。スタート!」

男教師がそう言うのと、生徒達は我先にとグループを作り始める。この合宿が始まる前から、班は決めていたっぽい。

それに、みんな明るい顔をしている。おそらく、スクールカーストなる物が確立されてないのだろう。そういうのが生まれるのは中学生くらいからだ。すると戸部いきなり口を開く。

戸部「いやー、小学生マジ若いわー。俺ら高校生とかもうおっさんじゃんじゃね」

三浦「ちよつと、戸部やめてくれない? あーしがババアみたいじゃん」

戸部「いや、マジ言ってるから! ちげーから!」

三浦に威嚇されて戸部があわてて弁解する。その言葉にオレはババアじゃなかったらジジイかよと思ってしまう。と言うかそんな事よりもさ。

雪乃「それで私達は何をすればいいのでしょうか」

と雪乃が代わりに言ってくれた。

平塚「君達はゴール地点で昼食の準備だ。生徒達への弁当と飲み物の配膳を頼む。私は車で先に行っているからな」

八幡「いや、それ俺らも車で行きませんか？」

平塚「そんなスペースはない。ああ、あと、小学生より早く着くようにな」

ええ…こんな森の中を小学生達よりも早く着けというのか。マジで言ってるこの人。まあ、言っても仕方ないさつきと行くか。そしてしばらく歩いていると度々小学生を見かける。すると葉山と三浦が「頑張れー」とか「ゴールで待ってるから」とか応援していた。葉山がするのはわかるが、あの三浦がしていることに驚きを隠せない。

三浦「ね、ね、隼人。あーし、意外と子供超好きなんだよねー。子供って超可愛くない？」

と三浦が葉山に対して言う。なるほど、この為に小学生達を応援していたのか。わかりやすいやつだ。あれは「可愛いつて言ってるアタシ可愛いアピール」である。決して三浦を褒めるとかそんな事しない。ていうか何故しないといけないのか分からない。オレ達奉仕部と小町達はそんなの無視して歩き続ける。

雪乃「ねえ、あの子達何してるのかしら」

雪乃の視線の先には、小学生数名がなんか溜まっている。

葉山「ちよつと見てくる」

と言つて溜まっている小学生達の所へと向かっていく。すると雪乃はため息を着く。ホント雪乃と葉山の間は何があったんだろうか。けど、それを無理に聞き出すつもりは無い。

「お兄さんーチェックポイントってどこにあるの？」

葉山「うーんどこだろう」

「じゃあお兄さん手伝つてよー！」

葉山「仕方ないな、ここだけ手伝うけどみんなには秘密な」

さすがコミュ力が高い。けれど一見見てみれば普通の小学生グループと高校生の会話だが、基本このオリエンテーリングは5人一組の班で行動する。しかし葉山に群がるのは4人。もう一人は、少し離

れてデジカメを握っている。葉山はその1人の少女に近づいていく。

葉山「チエックポイント、見つかった？」

「いえ」

と困ったように笑って返事する。すると葉山はにこりと微笑み返す。

葉山「そっか、じゃあみんなで探そう。名前は？」

留美「鶴見、留美」

葉山「俺は葉山隼人、よろしくね。あっちのほうとか隠れてそうじゃない？」

そう言って葉山は少女、改めて鶴見を押しして誘導していく。

八幡「すげえなあいつ。ナチュラルに誘って、名前までも聞き出しやがった」

帆波「確かにすごいね」

かおり「八幡はあんなのできないでしょ」

八幡「まあな」

とドヤ顔で言ったら帆波達に苦笑された。

千佳「いや、自慢のように言われても」

八幡「だよな…それよりあのやり方は…」

雪乃「ええ、あまりいいやり方とは言えないわね」

どうやら雪乃も同じ意見らしい。ふと葉山達の方を見ると、葉山が鶴見をあของกลุ่มに連れていくとほんの一瞬だけグループの空気が張り詰める。そして葉山が少し離れると他の4人は何事も無かったように談笑を続けながら進む。もちろんその一人を除いて。

帆波「小学生にもあんなのあるんだ」

雪乃「小学生も高校生も関係ないと思うわ。等しく同じ人間なのだから」

帆波「そうだね」

八幡「だな」

又もや雪乃と意見が合う。ちよつと簡単そうな感じだったが、それは難しそうだな。ハア…帰りたいなく。そして葉山の助けもあり小学生達はチェックポイントを見つけた事のできたみたいだ。けどオ

レ達はそんなの無視して先にゴール地点へと向かった。

第18話

八幡side

そして集合場所へと着く。そこにはタバコを吸う平塚先生の姿があった。と言うか小学生がいるのにタバコなんて吸ったらダメでしょ。

平塚「おお、遅かったな」

平塚先生がワンボックスカーから降りてくる。オリエンテーリングのコースとは別に、山の車道がここに繋がっているのだろう。そして後ろのトランクを開けると、弁当とドリンク類が折り込みコンテナに入って山と積まれている。その後男手でえっさほいさとコンテナを運び出した。

平塚「それとデザートに梨が冷やしてある」

そう言っただけで平塚先生が後方をくいと親指で指し示した。ちよろちよろと小川のせせらぎが聞こえる。どうやら流水に浸かっているらしい。

平塚「包丁類もあるから、皮むきとカッター、よろしくな」

ほんとカゴを叩く平塚先生。それには果物ナイフにミニまな板いくつかと、紙皿につまようじと果物取り分け用セットが詰まっていた。しかし、1学年分の梨を剥くとなると結構な労働量だ。加えて弁当類の配膳の準備もある。

葉山「手分けした方がよさそうだな」

でんと積まれた仕事の山を見て葉山が言うと、三浦が自分のネイルをしばしばと見つめながら口を開いた。

三浦「あーし、料理パス」

戸部「俺も料理は無理だわー」

海老名「わたしはどっちでもいいかなー」

と葉山グループ共が続いて答える。そしてそれを聞いた葉山はしばし考える。

葉山「んー、どうするかな。配膳はそこまで人いらないうし…。じゃあ、俺たち5人で配膳やるか」

帆波「それじゃ、私達で梨を切ろっか」

八幡「そうだな」

ということで葉山グループは配膳係、オレ達は梨の皮むきとカット係という役割となった。まあ、予想通りの結果になったな。由比ヶ浜がこつちの係になる可能性もあつたしな。そんな事よりもさつさと取りかかるか。

オレ達はナイフやミニまな板などを受け取り、皮むきを始める。周りを見るとやはり帆波と雪乃は上手いな。スルスルと剥いていく。オレも剥いていくがそんなに早く剥けない。さすが日頃から料理してるだけあるな。

八幡「やっぱ上手いな帆波と雪乃は」

千佳「そうだね」

かおり「でも、八幡も上手いよ」

八幡「そうか？」

千佳「うん、私も上手いと思うよ」

雪乃「確かに男子にしては結構上手いわよ」

帆波「そうだよ八幡」

八幡「そうか？サンキュな」

いや、こうも真つ直ぐに褒められたのは初めてだな。なんだか嬉しいな。

かおり「でもどうしてそんなに上手いの？」

八幡「ん？ああ、多分それは小町が小さい時に飯作ってたからかな？」

小町「あー、確かに小町が小さい時良く作ってくれたもんね」

千佳「へー、そうなんだ」

八幡「ああ、包丁をまだ持たせる訳にはいかなかったからな」

小町「あー、お父さんとお母さんそんな事言ってたね」

八幡「ああ、小町に怪我させないためらしいがな」

小町「あ、そうだったんだ」

八幡「ま、ほとんど親父が決めたんだけどな」

小町「あ、なるほど」

となんとも素っ気ない返事をする小町。ホントこの子実の父親に対して中々辛辣だな。その後は他愛もない会話をしながら皮むきが続いていると、続々と小学生の軍団が到着する。オリエンテーリングが終わったばかりだというのに、ギャーギャーワーワーと元気にはしゃいでいる。高校生のオレ達と違って元気が有り余っているのだろう。その元気は一体どこから溢れ出しているのやら謎だな。それからオレ達は飢えた小学生達に弁当と梨を配布するだけの存在となった。

合宿の料理といえど？と聞かれたら大体はカレーと答えるだろう。いや、と言うよりカレーしか作ったことないかもしれないだろう。なんてたってカレーは万能料理だ。小学生でも、料理をしたことがない人でも説明通りに作ればある程度の味になる上に、とりあえず野菜とか肉とかを煮込んでカレールーをぶっ込めば、変なものを入れない限りある程度の味のカレーになる。つまり、この世のすべての食材はカレーの材料に成りうる可能性を秘めているということだ。

そんな事を考えながらオレはカレーを作るために、軍手を真っ黒にしながら竈の火を起こす。お手本として平塚先生がやっていたが、サラダ油ぶっかけて火をおこしていた。あんな危ない事できねえだろう。男子達はオレと同じように火の準備をしていた。女子達はどうとカレーに使う食材を取りに行っている。

彩加「熱そうだね…」

すると彩加はオレを気遣うように声をかけてくれた。

八幡「まあな…」

いかに高原といえど、真夏。火のすぐ傍で動いていれば汗はだくどくと流れてくる。

彩加「そうだ。僕何か飲み物取ってくるよ。みんなの分も」

そう彩加が言ってその場を離れると、「みんなの分なら俺も手伝うわー」と戸部がついていく。存外いい奴なのかもしれない。けどそうなると思われたのはオレと葉山だけとなる。いや、ここに海老名

ささいなくて良かったと考えながら、パタパタパタと仰いでいると、右の頬に冷たい何かが当たる。右を向くと、飲み物を取りに行っていた彩加が戻って来たみたいだ。

彩加「はい、八幡。おまたせ」

八幡「おう、サンキュ」

そう言いながらオレの頬に当たった紙コップを渡してくる。中にはキンキンに冷えた麦茶が入っていた。いや、キンキンに冷えているな。

葉山「比企谷、代わるよ」

八幡「ん？そうか？じゃ頼むわ」

オレはそう言って葉山に団扇を渡す。そしてその団扇を受け取った葉山は炭火に向き直り、ぱたぱたと扇ぎ始めた。そして近くのベンチのようなものに腰掛けて麦茶を飲む。そこに女子が帰ってくると、葉山に向けての歓声上がる。

三浦「隼人すごい！」

海老名「葉山くんアウトドア似合うねー」

三浦と海老名が大絶賛する。そしてちらりとオレの方を見られた。あれは多分「なんでヒキタニはサボってんの？」みたいな意味だろうな。

葉山「比企谷がだいたいやってくれたからな」

とさりげなくフォローしてくれたが、「かばってあげてる隼人優しい」みたいな空気になってるんだが。まあ、世の中そんなもんだろうな。

帆波「八幡お疲れ、はいこれ」

三浦達と帰ってきた帆波が洗顔ペーパーを渡してくる。

八幡「お、サンキュ帆波」

オレは軍手を外して、洗顔ペーパーを受け取り手を拭く。

彩加「八幡はほんと頑張ってたよ！ほんとにほんと」

彩加がぐっと拳を握って力説してくれた。確かに今の状態だけ見たらサボってるように見えるだろう。

かおり「そうだよ。八幡って変とこで真面目だもんね」

帆波「ふふっ、確かにそうだね。その証拠にほら顔も汚れてるよ。軍手で顔拭いたでしょ？」

帆波はそう言いながら違う洗顔ペーパーでオレの顔を拭いてくる。
八幡「お、おう：サンキュ」

そして時間は過ぎて食材を全て鍋に入れて後は煮込むだけとなった。オレは鍋を見てみると平塚先生が

平塚「どうした？暇なら見回って手伝いでもするか？」
えー、めんどくせえな。

八幡「あ、自分鍋見ときますんで」

平塚「気にするな。私が見ておこう。小学生との交流も大事だろう」

帆波「そうだよ八幡。一緒に行こー！」

帆波も続けて言ってくる。帆波はこういう交流は大切にしているもんな。仕方がないな。

八幡「わかりました。ではお願いします」

平塚「うむ、任せておきたまえ」

そう言葉を交わしてオレは帆波と一緒に小学生達と交流する事にした。小学生達は高校生の登場をちよつとしたイベントのように捉えているのか、えらく歓迎された。オレも帆波も色々聞かれたよ。オレ達は恋人同士なのか、喧嘩したことあるの？とかあれこれ聞かれたよ。主に女子小学生にな。なんで女の子はこういうの聞きたがるのかな。ホントにわからん。ふと視界にあのハブにされてる小学生鶴見留美の姿が入る。周りの子達はというと、何やらヒソヒソしている。ホントに何しているんだろうか。後それに葉山の奴も鶴見に近づいて何しようとしているんだ？

葉山「カレー好き？」

鶴見「…………別に、カレーに興味ないし」

そう言っって少し小高い所へと歩いて行った。なるほどな、戦略的撤

退みたいな感じだな。好意的に返しても素っ気なく返しも同じ扱いされてしまう。オレは思わずため息をついてしまう。葉山は全くわかってないな。ぼつちに話しかける時はあくまで秘密裏に密かにやるべきだ。話しかけられたその事実だけでイジメの材料にさせられるから。鶴見が去ると葉山は少し重くなつた空気を変えようと声をはる。

葉山「せつかくだから何か隠し味いれようか！なにか入れたいものある人！」

と言つた瞬間、小学生達がガンガン案を提案する。確かにカレーに隠し味というと、家カレーが頭に浮かぶな。

八幡「なんか隠し味と聞くと家カレーを思い出すな。家に寄って個性とか色々出るよな」

帆波「あー、確かにそうだね」

かおり「あー、そういえばカレーにチョコレートとかインスタントコーヒーとか入れてるって聞いた事ある」

千佳「私は、はちみつとかりんごとか聞いた事あるよ」

八幡「へー、色々あるんだな」

帆波「そうだね」

いやー、色んな隠し味があるんだな。チョコレートとかインスタントコーヒーとか入れる人とかいるんだな。なんだかどんな味かちよつと気になってきたな。そんな事を思っていると、聞き覚えのある声の主が提案をする。

結衣「はい！あたしフルーツがいいと思う！桃とか！」

は？桃…だと？コイツまさか本気で言ってるのか？桃なんて入れるわけねえだろう。というかどんな味になるんだよ、想像しただけでなんか気持ち悪いな。

八幡「何言ってるんだか」

帆波「だね」

かおり「桃は…ないよね」

千佳「…うん」

オレらは由比ヶ浜達に聞こえないように小さい声で話す。聞こえ

たらかなりめんどくさい事になるからな。そしてオレは鶴見の方を見るとなんだか悲しそうな目をしていた。

全員で夕食のカレーを食い終わり、小町の淹れてくれた紅茶で食後のティータイムを過ごしている。席順は雪乃、帆波、オレ、かおり、千佳、彩加、小町、瑞希という順で座っている。反対は…どうでもいいか。見事に奉仕部と葉山グループと別れたな。ま、当たり前か。

結衣「大丈夫、かな…」

と由比ヶ浜が少し心配そうな声で一言呟いた。誰も何が、と問おうとしない。100%鶴見留美の事だろう。ここにいる全員気づいている。由比ヶ浜の言葉に、席を離れて紫煙を燻らせている平塚先生が反応した。

平塚「何か心配事かね？」

葉山「ちよつと、孤立しちやってる子がいて」

三浦「ねー、可哀想だよねー」

三浦は相槌のつもりなのか、当然の如く、その言葉を口にした。けど、その言葉に感情が一切込められていないようにも聞こえる。

八幡「違うな葉山。一人でいること自体は別にいいんだ。問題は、悪意によつて孤立している事なんだよ」

三浦「は？意味わかんないんだけどなにが違うわけ？」

葉山に言ったはずなのに三浦から返ってきた。怖い。

葉山「好きで一人になつていいのか、そうじゃないのかつてことか？」

八幡「まあ、そういう解釈でいい」

だから、解決すべきは彼女の孤立ではなく、彼女にそれを強いる環境の改善であるはずだ。

平塚「それで、君たちはどうしたい？」

葉山「それは…」

平塚先生に問われて、全員黙る。どうしたい？別にどうもしたくない。ただその事について話してみたいだけだ。もちろん、問題意識

をもって本気で取り組む人間はある、それは本当に素晴らしいことだし、尊敬も称賛もする。でも、オレ達は違う。オレも葉山も三浦も、本気で何かをする訳でも何かができるわけでもない。それを知っているながら、力がないことを言い訳にしながら、それでも自らに優しい心根があることを自覚したいのだ。自分たちには無関係なことだが、それでも見てしまった以上、知らなかったとは言えない。でも、どうにもすることができない。だからせめて憐れませてほしい、そういうことだ。

葉山「俺は…」

重々しく閉ざされた口を開いたのは葉山だった。

葉山「出来る範囲の事で、なんとかしてあげたいと思います」

雪乃「あなたでは無理よ。そうだったでしょう？」

雪乃の凜とした声が響く。絶対零度の声音と視線。理由の説明を求めようもないほど、確定した事実であるかのように断言した。

葉山「そう、だったかもな。……でも、今は違う」

雪乃「どうかしらね」

葉山の答えに、肩を竦めるような仕草をして、雪乃は冷たくあしらった。予想していなかった2人のやりとりを目にして、それきり座には重い沈黙が垂れ込める。オレも黙ったまま2人の様子を窺う。そういえば雪乃は奉仕部に葉山が来た時に感じたが、雪乃が葉山に対してとる硬化した態度は普段とは違う。この2人の間に何かがあるのは明白。けどそれを無理やり聞き出すとは思わない。前にも言ったが人には言いたくない過去がある。それを無理やり聞き出すのはどうかと思う。

平塚「雪ノ下、君はどうしたい？」

雪乃「一つお尋ねしますが、今回は奉仕部の合宿を兼ねていると聞いています。この案件も、奉仕部として取り扱っても？」

平塚「合宿中に起きたトラブルであるのなら、原理原則としては問題なからう」

雪乃「ならば私は奉仕部として、助けを求められればそれに応えるだけです」

おお：雪乃がかっこよく見える。帆波もかおりも千佳も小町も瑞希も尊敬しているような眼差しで見ている。

平塚「で？実際助けは求められたのかね？」

雪乃「…それはわかりません」

確かに、オレ達は鶴見に何かをお願いされたわけではない。彼女の意志をはっきりとした形で認識したわけではないのだ。

帆波「多分、あの子は言いたくても言えないんじゃないかな」

八幡「なるほどな」

確かに言いたくても言えない時もある。言ったら言つたでまた何かされる可能性もある。どうすればいいのかわからなくなる。

平塚「さて、ここからは君たちでどうするか話し合ってみたまえ。

私は寝る」

そう言つて席を立った。

その後、オレ達は鶴見留美の孤独問題の対策の会議をすることが決まり、皆で話し合うことになった。最初に口火を切つたのは三浦である。

三浦「つーかさー、あの子、結構可愛いし、他の子とつるめばよくない？試しに話しかけてみんじゃん、で、仲良くなるじゃん。余裕じゃん」

戸部「それだわー。優美子冴えているわー」

三浦「ふっ、だしよ？」

うわあ：コイツ楽観的だな。そんな事で上手くいくのなら鶴見も苦労したり、苦しんだりしていない。

結衣「それは優美子だからできるんだよ……」

さすがのあの由比ヶ浜でも賛同しない。葉山や三浦と一緒になつてテニスの練習を邪魔していたのにな。

葉山「言葉は悪いけど、足がかりを作るって意味なら優美子の意見は一理ある。けど、結衣の言う通り、話しかけるのはハードルが高すぎるかもしれない」

葉山が即座に三浦の意見のフォローをする。適度にフォローしつつも、反対の意見を織り交ぜながら言うとは、流石は葉山と言ったところか。葉山の意見を聞いた縦ロールは少し不満げだったが「そっかー」と言って引き下がる。すると今度は海老名さんが自信満々の表情で挙手をした。

葉山「姫菜、言ってみて」

葉山が指名する。へく、海老名さんの下の名前姫菜と言うんだね。そして指名された海老名さんは立ち上がりメガネを輝かせせ

海老名「大丈夫。趣味に生きればいいんだよ。趣味に打ち込めば、いろんなイベントとかお店とかに行くでしょ？そこで同じ趣味の人と仲良くなっちゃえば、自分の居場所とかが見つかるんじゃないかな？学校だけがすべてじゃないって思えて、楽しくなると思うよ」

予想以上にまともな答えで正直驚いている。特に、学校だけがすべてじゃない、というのは実に正しいことだ。小学生、中学生くらいまでは自分の世界は学校と家庭しかない。だから、そこで否定されてしまうと、世界そのものに拒絶されたように感じてしまう。けれど、海老名さんはそうではないと、学校以外に自分が胸張って前を向ける場所を探せばいいと言っているのだ。そして海老名さんは更に続ける。

海老名「私はBLで友達ができました！ホモが嫌いな女子なんていません！だから、雪ノ下さん達もわたしと」

葉山「優美子、姫菜とお茶とってきて」

素早く葉山が打ち切ると、三浦が立ち上がって海老名さんの腕を取った。

三浦「おっけー、ほら、海老名行くよ」

海老名「ああっ！まだ布教の途中なのにつ！」

抵抗はしたものの、ぼしつと頭を叩かれてずると引きずられるようにして海老名さんが消えていく。

雪乃「あの人、私に何を勧めようとしていたのかしら…」

八幡「それは知らなくてもいい事だ」

いや、ホント知らなくてもいい事だ。まさかこの状況で布教を始めるとは思わなかったな。その後もぽつぽつと意見は出るものの、現実

的な妙案は出てこない。議論が活性化しないと自然と意見の数も減ってくるものだ。ソースはやる気のない学級会。シンと静まった空気の中、葉山が一言口にした。

葉山「…やつぱり、みんなで仲良くできる方法を考えなきやダメか…」

それを聞いて思わず、ふっと乾いた笑いが漏れ出してしまふ。じろつと葉山に視線を向けられ。こればかりは視線をそらす気もなければ、相槌を打つ気もない。オレは絶対の自信を持って真正面から葉山のアイデアを嘲笑する。

やはり、根本のところどこいつは理解していないのだ。みんな仲良く？素晴らしい。だがそれはただの理想に過ぎない。みんな仲良くという言葉自体が元凶なのに。それだったら中学の時、沢山友達ができるはずだ。それに人間なんて、どう頑張ったって嫌いな奴や性格が合わないやつは出てくる。そこで、「嫌いだ」とか正直に言えれば改善の余地や交渉の余地があるのかもしれない。問題は表面化しなければ問題にはならないという怠惰な欺瞞によつて成り立った暗黙の了解だ。だから、オレは葉山の意見を全力で否定する。それは、オレだけではなかった。

雪乃「そんなことは有り得ないわ。絶対に」

雪乃の凜とした声音が、オレの嘲笑なんかよりよほど冷徹な言葉が、葉山の意見も視線も粉碎した。けどオレは雪乃と意見が合うな。するとそれを聞いていた三浦が吠えてきた。

三浦「ちよつと、雪ノ下さん？あんた、何？」

雪乃「何が？」

三浦「その態度のこと。せつかくみんなで仲良くやろうとしてるのに、なんでそういうこと言ってるわけ？別にあーし、あんたのこと全然好きじゃないけど、楽しい旅行だからって我慢してんじやん」

結衣「ま、まあまあ、優美子」

怒涛の勢いで感情をぶつける三浦を由比ヶ浜が宥めようとする。が、一方の雪ノ下も納める気は全くないらしい。

雪乃「あら、意外とに好印象だったのね。私はあなたのこと嫌いだ

けど」

帆波「雪乃ちゃんも落ち着いて、ね」

隣に座っていた帆波が雪乃を宥めようとする。

小町「でも、ぱつと見た感じ、留美ちゃん結構性格きつそうですから小学生の女子グループの中だけだと溶け込むのは難しいかもですね。もう少し年齢上がってくると、派手な方向の人たちと仲良くなれると思いますよ?」

瑞希「あー、確かにちよつと冷たい、というより冷めてる感じもあるよね」

三浦「冷たいっつーか、舐めてるっていうか、超上から目線なだけなんじゃないの? 周り見下したような態度とってっからハブられんでしょ。誰かさんみたいに」

三浦が挑発的に笑うと、雪ノ下は淡々と答える。

雪乃「あら、私にはもつたいたないくらい大切な友達がいるわ。それにそれはあなたの被害妄想よ。劣っているという自覚があるから見下されていると感じるだけではなくて?」

三浦「っ! あんさー、そういうこといってから」

葉山「優美k「はい、ストップ!」」

葉山が何か言おうとした時、帆波がそれを遮る。

帆波「これ以上言い合いしても意味無いでしょ。私達は今留美ちゃんの事で話し合いしてるんですよ。だったら言い合いしてる場合じゃないんじゃないの?」

帆波が立ち上がり雪乃と三浦の間に入って言う。

帆波「雪乃ちゃんも熱くなりすぎ、一旦落ち着こう」

雪乃「そうね。少し熱くなりすぎたわね」

雪乃はそう言って椅子に座り直した。そして帆波は次に三浦に視線を向き。

帆波「三浦さんも」

三浦「……わかったし」

ちよつと渋々な感じで三浦も席に座り直した。それを見届けた帆波も席に座り直した。けど、その後話し合いという雰囲気ではなくな

り、翌日に持ち越すことだけ決定した。というか高校生のオレらが仲良くできないのに、小学生たちにみんな仲良くなんつつたつて無理に決まっているだろう。

そしてその夜。

葉山「じゃあ消すぞー」

葉山がそう声をかけて、電気が消える。

戸部「ねーねー隼人くーん。こういう時は恋話するっしょー！」

葉山「……なんでそうなるんだよ」

まったくくだ。なぜそうなるのか分からない。まったくリア充の考える事は分からないな。

戸部「俺も好きな人言うからー隼人くんも言ってくんねー？」

葉山「なんでそうなるんだよ」

戸部「いいじゃんいいじゃん！」

鬱陶しいなこいつ……。少しワイワイしていると、途端に戸部が静かになる。なんだ？寝たのか？

戸部「……俺さ、実は海老名さんのことちよつといいなって思ってるんだ」

八幡「え？」

オレは思わずそんな声を漏らす。

戸部「あー言ってみると結構恥ずいわー！なーなー隼人くんも言ってるよー！俺もいったんだしー！」

葉山「……ええ」

戸部「じゃーイニシャルだけでも！」

葉山「……………………Y」

恐ろしい間の後にイニシャルだけ言った。Yと言ったらず最初思い出すが、雪乃だな。その次は雪乃の姉の雪ノ下陽乃。他には由比ヶ浜や三浦の下の名前である優美子だな。まあ、オレには関係ないけどな。

戸部「ヒキタニくんは一之瀬さんと付き合ってるんだよね」

どうやらもうバレているらしい。だったらもう隠す必要はないかもな。

八幡「…ああ、そうだけど」

戸部「べー、マジか。じゃ戸塚は？」

戸部は次に彩加に話を振った。ほう…彩加に好きな人か。いるのかちよつと気になってしまっけど、実際どうなんだろう。

彩加「僕は…いないかな」

いないのか。まあ、そのうち現れるだろう。

その後も寝ようとしたが中々寝付けない。他の3人は静かに寝ていた。一旦外に出た。外は少し肌寒かった。少し歩いていると、林立する木々の間に長い髪を下ろした女の子が2人立っていた。その2人は帆波と雪乃だった。すると帆波がこっちを振り向いた。

帆波「あ、八幡」

なんで気づくんですかね？

雪乃「あら、本当ね」

八幡「よお、何してんだ？星でも見てたのか？」

帆波「ん、そういうわけじゃないんだけど」

ん？じゃあ一体なんだ？

雪乃「ちよつと三浦さんが突っかかってきてね…」

雪乃はしゅんと落ち込んだように顔を下に向ける。

帆波「私はそれを止めようとしていたら、今度は由比ヶ浜さんが私に突っかかってきて…」

なるほどな。それよりも三浦はまだ雪乃に突っかかって来るんだな。それと由比ヶ浜も突っかかって来るなんてな。もう、いいかんげんにしろよな。

雪乃「それで30分ほどかけて完全論破して泣かせてしまったわ、大人げないことをしてしまったわ…」

あんたマジでか。30分も論破したのかよ。

八幡「それでさすがに気まづくなつて出てきたのか」

雪乃「ええ、まさか泣いてしまうと思っていなかったから…。とりあえず由比ヶ浜さんが宥めてるわ」

帆波「私も居たらまた突つかかれると思って雪乃ちゃんが出てきたの」

八幡「なるほどな」

雪乃「あの子のこと、…何とかしなければね」

帆波「そうだよね」

八幡「そうは言ってもな」

雪乃「それに葉山君もずっと気にしている」

八幡「葉山と何かあったのか？」

雪乃「小学校が同じなだけよ。うちの会社の顧問弁護士が彼の父親なの」

八幡「所謂幼なじみってやつか。大変だな」

雪乃「ええ、まあね」

ホントに色々大変そうな感じだな。

帆波「雪乃ちゃんそろそろ戻ろっか」

雪乃「ええ、そうね」

八幡「じゃおやすみ帆波、雪乃」

帆波「うん、おやすみ八幡」

雪乃「ええ、おやすみ八幡君」

そう言葉を交わすと帆波、雪乃は自分達のバンガローへと戻って行った。さて、本当に鶴見留美の事どうすればいいのやら。下手に聞ければ明確なイジメに発展してしまうかも知れない。そんな事になり、鶴見がもし不登校や引きこもったりしたり、悪くて自殺なんてしてしまつて、『ごめんなさい』で済まされないからな。はあ…一体どうすれば…。その後オレは少しの間、夜空を見上げてからバンガローに戻り眠りについた。

第19話

八幡 side

「八幡、起きて。朝だよ」

ゆつくりとオレを気遣うように身体を揺する柔らかい手。肌を通して感じるほんのりとした寝起きの体温。そしてその声はよく聞き覚えのある声だ。

八幡「ん…」

ようやくオレの瞼が開いてくる。朝の光が眩しい。その光の中見えてきたのは、我が彼女である一之瀬帆波だった。

帆波「やくつと起きた。おはよう八幡」

八幡「お、おう。おはよう帆波」

オレはそう言っただけで起き上がり、枕元に置いてあった伊達メガネをかける。

八幡「なんで帆波がいるの？」

そうここはここは、男子のバンガローである。帆波は女子だからここにいないはずが無かった。

帆波「八幡が起きるのが遅いから、様子を見に来たの。それで来てみたらまだ寝てるし」

八幡「わ、悪い…」

反省してしまったので、素直に謝る。いやもうホントごめんね。昨日寝れなかったとはいえ、まさかここまで寝ていたとは思わなかった。

帆波「まあいいや。それより早く着替えて来てね。朝ごはんの準備して待ってるから」

八幡「はいよ」

パタパタと帆波は男子のバンガローから出ていく。自分が使っていた布団を片付けて、さっさと着替えて食堂に向かう。

ビジターハウスの食堂に着くとそこには既に小学生達の姿はなく、

いたのはいつもの面々と平塚先生だけだった。すると小町達がオレに気づくと

小町「あ、おはようお兄ちゃん」

かおり「あ、やっと来た。遅いよ八幡」

千佳「もう、夏休みだからって不規則な生活をしてたらダメだよ」

八幡「わかってるよ」

別に夏休みだからって、遅くまで寝てる訳ないからね。……本当だよ。

雪乃「あら、やっと起きたのね。寝坊助さん」

八幡「ああ、起きたよ。おはようさん」

雪乃「ええ、おはよう」

さて、来たのは良いがどこに座ろうか。と考えていると帆波が近づいてきた。

帆波「はい、八幡」

帆波はそう言ってオレに朝食がのっているおぼんを渡してくる。

八幡「サンキュ帆波」

帆波からお盆を受け取りどこに座ろうかと周りを見渡すと、もう既に席は埋まっており、どうやらオレの席は帆波の隣のようなようだ。昨日と同じだな。そして全員で両手を合わせて、『いただきます』と言って、朝食を食べ始める。出された朝食は白米、味噌汁、焼き魚にサラダ、納豆、味海苔、香の物、デザートにオレンジ。わりとスタンダードなホテルの朝食のイメージかもな。そう思いながら食べていると、すぐに白飯不足に陥てしまう。納豆と味海苔があるだけで、ご飯が進むな。そんな空になりそうな茶碗を見て、帆波が声をかけてきた。

帆波「八幡、ご飯のお代わりよそってあげようか？」

八幡「ん？悪い、頼む」

お言葉に甘えて帆波に茶碗を渡す。茶碗を受け取った帆波は鼻歌交じりでお櫃から盛り付ける。

帆波「はい八幡。ちよつと多かったかな？」

そう言われて目の前をみると白飯を山盛りにされた茶碗があった。なんか、日本昔話であるようなご飯だな。まあ、良いんだけどね。

八幡「いや、別に大丈夫だ。ありがと」

帆波「そう？なら良かった」

帆波から茶碗を受け取り、食事を再開する。

その後、全員しつかり朝食をとり、最後にお茶を啜る。それを見計らったかのように平塚先生が食堂に入って来た。

平塚「おはよう。全員朝食は済ませたようだな。では今日の予定を説明する。小学生は昼間は自由行動。夜に肝試しとキャンプファイヤーをやる予定だ。君たちにはその準備を頼みたい」

八幡「キャンプファイヤーっすか」

かおり「あー、確かフオークダンスとかするやつだったよね」

千佳「あー、確かにやったね」

小町「おお！ベントラーベントラーとか踊るんですよね！」

瑞希「小町ちゃん。それはオクラホマミキサーじゃない？」

と瑞希が小町に対してツツコミを入れる。

八幡「たいして変わんねえと思うぞ。相手にするのは宇宙人みたいなもんだし」

かおり「ちよつと言いつつ」

なんとということだ。あのかおりに注意されてしまった。

雪乃「あなたの場合はエアオクラホマミキサーだったのでしょう？」

八幡「ちよつと？オレのトラウマを掘り返すのやめてくれない」

帆波「本当だったんだ」

少し帆波から悲しみの視線を向けられる。やめて！そんな目で見ないでくれ帆波さん。

平塚「兎に角、この後はキャンプファイヤーの準備だ。その後は夕方の方の肝試しの準備まで各自自由に過ごしてもらっていい。では早速行こうか」

各々が食器を片付け、平塚先生に着いて行く。道中、葉山達を回収してから山道を進み、暫く歩いていると広場に出た。どうやらここでキャンプファイヤーをするらしい。男子三人は平塚先生のレクチャーを受けて、キャンプファイヤーの準備を始めた。戸塚と戸部は

薪を割ったり運んだりしてくる。葉山は薪を積み上げ、オレは木材を井の形に組み上げていく。こうしているとアレだな。帆波達とやったジエンガを思い出すな。前までは1人でやってたけどな。そういえば女子といえば、そのキャンプファイヤーを中心とした大きな円に白線を引いていた。フォークダンスをやる時のラインだろうか。

その後も只管木を積み立てていく。余りの暑さに途中何度か休憩しながらだったが、作業を進めた。すると、平塚先生が近づいてきた。

平塚「おつかれ比企谷」

八幡「うつつ」

平塚「暑いだろう。ほら冷たい飲み物だ」

そう言って平塚はキンキンに冷えたジュースを渡してくる。いや、ホントありがたい。こんな暑い中作業してるから、水分補給しないと熱中症になってしまう。いつもはちよつとウザイし、ブリット系をどばしてくるけど、やはりいい先生だ。

八幡「ありがとうございます」

平塚「気にするな。既に他の奴らも作業をあらかた終えて自由時間だ。あとは私と小学校の先生で仕上げよう」

八幡「わかりました。ありがとうございます」

オレは平塚先生にお礼を言って、もらったジュースを飲みながら部屋へ戻ろうとしたけど、このまま戻っても多分葉山と戸部と鉢合わせして、居づらくなるだろうし、ちよつとそこは辺を散策でもするかね。それに多分川もあるだろうし、そこで顔でも洗おう。汗もかいているからな。そう思い歩いてみると水の流れる音が聞こえてくる。やはり川があるようだ。さらに歩き続けると、いつの間にか沢の河原にっいていた。沢の水は案外綺麗で、とても気持ちよさそうだ。

八幡「早速顔を洗うか」

オレは沢の水で顔をバシャバシャと洗う。冷たい水の間を感覚を味わってきて、気持ちいい。そんな事を感じていると、不意に声をかけられる。

小町「おーい、お兄ちゃん」

八幡「ん？」

妹の声に反応し顔をあげると、そこにはそこにはフリル付きのビキニを身につけた小町が立っていた。

八幡「何？お前水着持ってきたの？」

小町「うん、そうだよ。それで感想は？」

八幡「おう、めっちゃ似合ってるぞ」

小町「わーいありがとう！」

瑞希「あ、八幡お兄ちゃん」

八幡「おお、瑞希。瑞希も水着持ってきていたんだな」

瑞希「うん、そうだよ。ね？私の水着似合ってる？」

八幡「ああ、似合ってるぞ。」

瑞希「えへへー、ありがとう」

すると、小町と瑞希の後ろから水着姿の帆波達がこつちに向かってくる。

かおり「あ、八幡じゃん」

千佳「あ、ホントだ。ほら帆波八幡君だよ。水着見せてあげなよ」

帆波「え、ちよつ!?千佳、お、押さないで…」

かおり「ほら、恥ずかしがってないで八幡に見せなよ」

帆波「か、かおりまで！」

そんなやり取りをしながら帆波はかおりと千佳に押されながらオレの目の前へと出てくる。帆波は水色の水着を着ていて、恥ずかしそうに顔を赤らめていた。何この子、可愛すぎるだろ！オレの彼女可愛すぎるだろ！可愛過ぎて結婚したいわ！すると、帆波はモジモジしながらこう言ってくる。

帆波「ど、どうかな！に、似合ってるかな？／／／／」

八幡「お、おう…似合ってる…ぞ／／／」

帆波「そ、そっか…ありがとう！」

八幡「お、おう／／／」

そう言われてオレは視線を逸らす。いや、ホント目のやり場に困る。美少女達が水着着てるのは非常に眼福ではあるのだがな。

かおり「八幡照れてる。可愛い」

八幡「男に可愛い言うな」

いや、ホントオレが可愛いって誰得だよ。男が可愛いのは彩加だけだ。

その後、オレは木に寄りかかり、遊んでいる連中を遠目から眺める。帆波達は水をかけあっていた。ワイワイキヤアキヤアと遊んでいる。あの雪乃も帆波達とウォーターバトルを繰り広げていた。そんな光景を見てみると、帆波が近づいてきた。

帆波「八幡。八幡も一緒に遊ばない？」

八幡「いや、オレはいい。水着も持ってきてないし」

帆波「そつかく。あ、じゃあ今度一緒にプールに行かない？」

プールか：良いかもな。

八幡「ああ、いいぞ」

帆波「ほんと！約束だよ！」

八幡「ああ」

こうしてオレは帆波と一緒にプールに行く約束をした。すると、脇の小道からざつと足音が聞こえた。気配のあるほうを見やれば、見覚えのある少女がいた。鶴見留美だ。

八幡「よお」

オレが声をかけると、留美はうんと頷く。そのままオレの横に腰をかける。

帆波「えつと：鶴見留美ちゃんだよね。私は一之瀬帆波。よろしくね」

八幡「オレは比企谷八幡だ」

留美「うん」

八幡「で、1人か？」

見れば分かる質問だが聞いてみる。するとうんと頷いていた。

留美「今日、私たちは自由行動なんだって。それで朝ご飯食べて部屋に戻ったら誰もいなかった」

八幡「えげつねえ：」

いやホント近頃の小学生は怖いな。

帆波「そつかく。あ、なら私達と一緒に遊ばない？」

帆波はしやがみ込み、留美と視線を合わせながら聞く。でも、留美

は首を横に振る。

帆波「そっか…」

留美「ねえ、帆波さん、八幡はさ」

おう、いきなり名前呼びですか。こいつはなかなかの肝をお持ちで。

留美「小学校の頃の友達っている？」

八幡「いねえな。というか小学校の時、友達はいなかったからな」

留美「そうなんだ」

八幡「帆波は？」

帆波「私は小学校の時は友達はいたけど、あんまり会わないかな。時々、ばったり会うくらいかな」

八幡「ほーん」

帆波でも会わないらしい。

かおり「何話してるの？」

帆波「小学校の時の友達はあるのかって話したんだ」

かおり「私はまあまあいたけど、今は会ってないな」

千佳「私も」

雪乃「私も会ってないわ」

帆波「そっか」

八幡「聞いたか。この美少女達でもこんなんだ」

3人「二び、美少女：／／／」

雪乃「あなたね…」

八幡「ん？」

何故だろ？帆波とかおりと千佳は顔が赤くなっている。まさか…怒っているのか？それに雪乃は雪乃で呆れたような顔で見てくる。

八幡「オレ何かしたか？」

雪乃「はあ…」

盛大のため息をつかれる。

留美「八幡って…：タラシ？」

八幡「おい、小学生がなんでそんな言葉を知ってるんだ」

なんで小学生がそんな言葉を知ってるんだらうな。というかオレ

は別にタラシでもなんでもないからな!

八幡「んっん! 帆波の学年は何人いたんだ」

帆波「え? うーんと…30人3クラスかな」

八幡「90人か。以上のことから卒業から5年後も友達やってる確率は3〜6%ってとこだな。帆波ですらこの確率だ」

帆波「なんかそんなに少ないとちよつと悲しくなるね」

千佳「そうだね」

八幡「普通の人は大体二方美人くらいだから、単純に四で割って、まあ大体1%くらいだ。こんなもん切り捨てていい。四捨五入と言う偉大な言葉を知らないのかよ。五と四なんて一つしか違わないのに四は何時も捨てられちゃうんだぜ? 四ちゃんのこと考えたら一なんて切り捨てられて当然だ」

かおり「なんか無茶苦茶だね」

留美「小学生の私でもそれは違うって分かる」

八幡「ようは考え方の問題だよ。別に全員と仲良くなんてしなくていいんだ」

留美「でも、お母さんはそれで納得しない…」

留美は首から下げているデジカメを両腕で抱えて、俯いたまま話す。

留美「今日も、友達とたくさん写真撮って来なさいって言って、デジカメ渡してくれたの」

千佳「そっか…良いお母さんだね。留美ちゃんの事心配してくれるんだし」

八幡「まあ、母親って余計な事するのが仕事みてえなところあるからな」

かおり「あー、分かる。分かっているのに余計な小言を言ったり、勝手に部屋の掃除したりするよね」

千佳「あー、あるよね」

八幡「まあ、要するにだ。愛情がなかったら管理したりしねえよ」

雪乃「…そうね」

幾分か優しそうですらあった。

八幡「んで？お前はどうしたいんだ？」

留美「わかんない。なんでか知らないけど、最近になってからハブられるようになってき、どうしてか考えたけど、わからなくてさ」

八幡「…そうか」

最近になってからハブられるようになったということは、標的が変わったとかそんなんか？ローテーションかよ。いや、ホント小学生でもえげつない事するんだな。

その後、あんまり話さず終わった。留美はまだ自由時間があるらしく、そこら辺を散策しに行ってしまった。オレも座ってるだけというのはアレだったので、散策しようと思いついて離れる。やはり夏というわけで、日差しが強い。しかもセミの鳴き声でより一層暑く感じる。そんな事を感じながら散策していると、何やら話し声とかが聞こえてきた。声からして留美と同じ小学生達だろう。そう思い近づいて見ると、そこはちよつとした広場だった。その広場では何やら作業をしながら話していたので、オレは隠れて聞き耳を立てた。盗み聞きみたいだけどね。

「おい、そっちはどうだ？」

「もう少しでできるよ」

「早くしろよ。間に合わなくなるぞ」

「わかってらー」

「絶対に間に合わせなきゃね。なんてたって留美ちゃんの誕生日だからね」

なに？留美の誕生日だと。それは一体どういう事だ？

「そうだね。留美ちゃん驚くかな？」

「絶対に驚くだろ！だって鶴見に内緒で計画したんだからな！」

「だね！」

「サプライズ絶対に成功させようぜ！」

「「おう！」」

一斉に掛け声をする小学生達。どうやら留美の同級生達は交代しながら、誕生日サプライズの用意をしているようだ。そういえばさつき留美も言っていたな。最近になってハブられるようになったと

言つてたな。まさか、そうだったのはこの事か？そりや誕生日サプライズは本人には内緒にするけど、留美はそれをハブられてるって勘違いしたのか。なるほどな。良い奴らじゃん。しかもご丁寧にプレートには『鶴見留美ちゃん誕生日おめでとう！』って書いてあるしな。そんな光景を見ていると

帆波「八幡、どこ？」

帆波の声が聞こえた。どうやらオレを探しに来てくれたみたいだ。そしてオレは小学生達に気づかれないうちに帆波を呼ぶ。

八幡「帆波、こつちだ」

帆波「そこにいたんだ。そこで何してるの？」

八幡「しっ」

オレは人差し指を口の近くまで持つてくる。それを見た帆波は首を傾げる。というか良く見ると帆波は水着の上からパーカー着ていた。

八幡「静かに来てくれないか」

帆波「うん、わかった」

そう言った帆波は足音を立てずにオレの近くまで近づいてくる。

帆波「どうしたの？」

八幡「アレ見てみるよ」

オレはそう言つて、さっきまで見ていた小学生達の方へ、指を指す。帆波はその指した方向を見る。けれど、見ようとした時オレと帆波の距離が近づく。ちよつと近いですよ帆波さん。

帆波「アレって…もしかして留美ちゃんの誕生日をお祝いしようとしているの？」

八幡「みたいだな」

帆波「そつか…あ、じゃあハブられるようになったのは」

八幡「多分、これだろうな」

帆波「そつか、じゃあ私達の勘違いだね」

八幡「ああ、そうだな」

帆波「そつか。良かった…留美ちゃんハブられてなかったんだね」
八幡「そうだな」

帆波「なら、もう安心だね！」

そう言つて帆波はこつちを振り向く。今、オレと帆波は近い距離にいる。だから今帆波がこつちを見るといふことは。

帆波・八幡「あ……」

お互いの顔が近いということだ。すると、帆波の顔はみるみる赤くなつていく。オレもだんだん顔が暑くなつていくので多分、オレの顔も赤くなつていふのだろう。

帆波「ご、ごめん／＼」

八幡「え、あ、いや……こつちもごめん／＼」

オレと帆波は少し間を開ける。そしてそのまま少しばかり沈黙が流れる。いや、だつてこんな顔が近くなるなんて思わないじゃん。

八幡「と、とりあえず他の連中のところに戻るか」

帆波「そ、そうだね。この事をみんなに報告もしないといけないしね」

八幡「そうだな」

オレと帆波は小学生達に気づかれないようにその場を去つた。

その後、帆波は私服に着替えた後、オレと2人で他の奴らにさつき見た事を話した。鶴見留美はハブられて1人になったのでは無く、鶴見留美の誕生日だからそのためのパーティーの準備をしていた為だつた事を伝えた。

帆波「という事なんだ」

葉山「なるほど、そういうことだつたんだね。まさか留美ちゃんの誕生日を祝おうと計画していたんだね」

八幡「そうなるな」

雪乃「まさか、あの子の誕生日パーティーを計画していただなんてね。思つても無かつたわ」

八幡「オレもだよ」

いや、ホントまさかだよな。まさか留美の誕生日パーティーを計画

していただなんて想像もしてなかった。

かおり「ということは私達の勘違いってことだね」

帆波「うん、そうなるね。だからこれで問題解決ってことになるって事だよ」

葉山「確かにそうだね。教えてくれてありがとう一之瀬さん」

帆波「ううん、気にしないで。それに教えてくれたのは八幡だから」

葉山「そうか。比企谷もありがとう」

八幡「別に気にするな」

別にオレはお前の為にやった訳では無い。ただ散策してたら、たまに見ただけだからな。だからお前為にやった訳では無い。

そして時は流れ、肝試しも終わった後、留美の誕生日パーティーが行われた。留美はかなり驚いていた。そりやそうだろうな。さつきまで自分がハブられてると思ってたら、自分の誕生日の為にサプライズを用意してくれてんだからな。その後、留美は同級生に誕生日を祝ってもらって、留美が持っていたデジカメで写真を撮ったりして、楽しく過ごしていた。

帆波「良かったね。留美ちゃん楽しそうで」

八幡「そうだな」

オレ達はそんな光景を見ながら話す。帆波の言う通り留美は楽しそうだ。最初の時みたいに暗い表情は無くなっている。どうやら誤解が解けたようだ。

その後オレ達はそれぞれのバンガローに戻って眠りについた。

千葉村での全ての仕事を終了し、我が愛すべき千葉へと帰ってきた。車の中では疲れからか帆波達は寝ていた。オレもだんだん眠くなってきて、平塚先生が着いたら起こしてくれると言うので言葉に甘えて眠りについた。そして今は総武校前に車を停車している。

平塚「さて、家に帰るまでが合宿だ。各員事故のないよう気をつけて帰るように」

解散を告げた平塚先生は一服していくらしく、タバコを取り出して火をつける。

小町「お兄ちゃん、買い物して帰ろうよ」

八幡「ん、いいぞ」

帆波「瑞希、私達も買い物してから帰るよ」

瑞希「わかった」

各々帰りの準備を始める。すると一台の黒塗りの車が総武高校前に止まる。どこかで見たような……。そう思っているとハイヤーから出てきたのは白いワンピースを着たとても綺麗な女性。雪ノ下陽乃だった。

陽乃「やつほー雪乃ちゃん」

雪乃「姉さん」

帆波「え!?!あの人雪乃ちゃんのお姉さんなの?」

雪乃「ええ」

陽乃「ん?そつちの子は初めて見るね。はじめまして私は雪乃ちゃんの姉の雪ノ下陽乃。よろしね」

帆波「は、はじめまして一之瀬帆波です」

陽乃「一之瀬帆波ちゃんね。よろしくね」

そう言った雪ノ下さんは雪乃に向き直る。

陽乃「ね、雪乃ちゃん。この前友達誕生日プレゼントを買いに行ってたけど、その友達って一之瀬ちゃんの事?」

陽乃「そつかそつか。雪乃ちゃんにこんな友達ができてお姉ちゃん嬉しいぞ。あ、これからも雪乃ちゃんと仲良くしてね」

帆波「あ、はい」

雪乃「それで?何しに来たの?」

陽乃「決まってるじゃない。雪乃ちゃんを迎えに来たんだよ」

雪乃「帰るのはお盆と言ったはずだけれど」

陽乃「そうなんだけどさ。お母さんが早く雪乃ちゃんに会いたいたって言うんだもん。それに雪乃ちゃんの友達の話も聞きたいって言ったから。だからこうして迎えに来たんだよ」

雪乃「もう…わかったわ。それじゃあまた会いましょう」

八幡「ああ、またな」

帆波「またね雪乃ちゃん」

かおり「じゃあね」

千佳「また」

小町「さよなら雪乃さん」

瑞希「また会いましょう」

雪乃「ええ」

そして雪ノ下姉妹を乗せたハイヤーは、来た時と同じように颯爽と去っていった。雪乃は一体オレ達の事なんて話すのだろうか、ちよつと気になる。そしてハイヤーがいなくなるまで見届けた後、買い物してから家に帰った。

第20話

八幡 side

今日はこの前約束していた帆波と一緒にプールに行く日である。あの林間学校のボランテアに行った時に帆波と一緒に行くという約束をした。オレが水着を持ってきてなかったからある。けれど、帆波とプールに行けるのは結構楽しみでもある。そしてボランテアを終えた数日後に帆波から連絡をくれて、行く日を決めた。そしてその日が今日なのである。

帆波「おまたせ〜八幡。待った?」

そんな事を考えながら待ち合わせ場所である駅前で待っていると帆波がやってきた。かおりや千佳、雪乃は来ない。帆波とオレの2人だけ。そうデートある。

八幡「いや、待つてないぞ。ついさつき来たところだ」

帆波「ホント?良かった〜」

八幡「それじゃあ行くか」

帆波「うん」

そう言つてオレと帆波は電車に乗るために駅の方へ向かう。

八幡「と、その前に」

帆波「ん?どうしたの?」

八幡「その服似合ってるぞ」

帆波「にやははは、ありがとう」

少し照れながらもなんだか嬉しそうに笑いながらお礼を言う帆波。今の帆波の服は白いシャツにショートパンツの姿で肩にはトートバッグのようなものをかけている。

八幡「それじゃ改めて行くか」

帆波「うん」

その後電車で揺られながら目的地である駅まで移動する。その後、駅から少し歩きプール着く。そこにはオレ達以外にも人はいたのだが、夏休みとあつてか人が少し多い気もする。

帆波「なんだか人が多いね」

八幡「ああ、多分夏休みだからじゃねえか」

帆波「ああ、そうかもね」

八幡「まあ、今日はまだ平日だからこの人数であって、休日になると更に人が多くなってると思うぞ」

帆波「そっか、なら今日にして正解だったかな？」

八幡「かもな」

その後、入場料を払いお互い着替えるため、それぞれの更衣室へ向かう。荷物はロッカーにしまい外へ出る。周りを見渡すと場所取りする人もいれば、もう既にプールの中に入り遊んでいる人もいる。そんなことよりも帆波を探さないとな。けど今探している中ではないなさそう。出入口の方で少し帆波を待つか。そんな事を思いながらしばらく待っている。帆波がやってきた。

帆波「おまたせ」

帆波の水着は千葉村の時に着ていた水着だった。

八幡「改めて見てみると…やっぱり似合うなその水着／＼」

帆波「っ！…えへへ、ありがとう！／＼」

帆波は少し照れながらもお礼を言う。さっきも言ったがやはり似合う。スタイルも良くて思わず見とれてしまう。

帆波「み、見すぎだよ八幡／＼」

八幡「はっ！わ、悪い。あ、あれだ。似合いすぎて見とれてしまった／＼」

帆波「へえあ!?!い、いきなりは…ず、ずるいよ／＼」

帆波は更に顔を赤くして視線を逸らす。

八幡「と、とりあえず。行こうぜ」

帆波「そ、そうだね。じゃあ最初にあのウォータースライダーに乗ろうよ」

八幡「おう、わかった」

そうと決まればウォータースライダーの所まで移動しようとした時、帆波がオレの腕に抱きついてきた。水着を着ているせいか、以前よりも膨らみがオレの腕に伝わってくる。服の上からとは大違いの感触。

八幡「お、おい。いきなりどうしたんだよ」

帆波「別に、せっかく八幡と2人っきりのデートなのにナンパされたら嫌だからだよ。それに私達は恋人なんだから同然でしょ？」

八幡「そ、そうだけど…やっぱり周りの視線が痛いな」

帆波「そう？」

八幡「そう」

実際視線はオレに集中砲火されているので帆波に対する視線は無いと言ってもいいだろう。プールに入るためメガネはロッカーの中である。なので今のオレはあの腐った目である。そんな男がスタイルも良い美少女の帆波の隣にいるのだから余計だろうな。

そんな周りでは

「なんであんな奴があんな美少女と…」

「クツソ…イチチャイチャしやがって…」

「羨ましくなんてないんだからね！」

「ねえねえ、見たあの女の子の幸せそうな顔」

「見た見た。彼氏の方も目がちよつと残念と思っただけど、あれはあれで良いね」

「そうだね。あー、私も彼氏欲しいなあ〜」

という声が飛ぶがその声は八幡や帆波には聞こえていなかった。

そして八幡と帆波に戻り。

その後、視線が気になるのを無視してウォータースライダーの所まで向かい、列に並ぶ。帆波と会話をしながら順番を待つ。待っている間、ウォータースライダーを滑っている人達からキヤーキヤーと言う声が聞こえてくる。めっちゃ叫ぶやん。え？何？そんなに怖いのか？そんな考えは置いといて、とうとう順番が回ってきた。

スタッフ「カップルですね？それでは後ろから彼氏さんが抱きしめる感じをお願いします」

帆波「はい。ほら、八幡先座って」

八幡「え？あ、おう」

オレは帆波に言われるままスライダーのスタート地点に座る。

帆波「じゃあちよつと失礼して」

帆波はそう言つてオレの前に座る。

帆波「ほら、八幡。私の前に手を回して」

八幡「お、おう」

言われた通りオレは帆波の前に目を回す。

スタツフ「それじゃあしつかりと抱きしめてくださいね」

そう言われて帆波のお腹に回された手に入れすぎない程度に力を入れる。

八幡「大丈夫か？これぐらいで」

帆波「うん、大丈夫だよ」

良かった。もし力入れすぎてたらどうしようかと思つたよ。

スタツフ「それでは行つてらっしゃいませ」

そう言つてスタツフにオレの背中を押され滑り出す。

帆波「キヤー」

八幡「うおおおおお」

スライダーが曲がつてる部分でグワングワンと視界が揺れる。帆波は喜びの悲鳴を上げ、オレは驚きの叫びを上げてスライダーを滑り降りる。けど、スライダーは気持ちいいが、帆波の肌に触れ、帆波の腰に手を回しているせいか帆波の細さがわかつてしまう。帆波つてこんなに細かったけ？と思つてしまう。これ以上抱きしめる力を強めたら壊れてしまうのではないがとも思つてしまう。それにとても柔らかい。ダメだ、落ち着け八幡。平常心平常心、平常心を保つんだ！そんな事を考えているとスライダーのゴールにたどり着きオレと帆波はプール中へと突つ込む。

帆波「ぷはあく、あく面白かつた〜」

八幡「ああ、そうだな」

ふう：なんとか平常心を保つことができた。いい匂いもしたし、理性が壊れてしまいそうだった。これぐらいで壊れる理性って一体…。そんな事を考えていると帆波がオレの手をとる。

帆波「ねえ、もう1回すべりにいこうよ！」

八幡「いいぞ」

ということでもう1回すべるため列に並ぶ。

八幡「やっぱり男女2人組はカップルに見られるのかね」

帆波「そうじゃない?」

八幡「それでも例えば兄妹だったらどうするんだ?」

帆波「あー、確かに言われて見ればそうだね。けど、兄妹ですべる人はいたとしてもあんまりいないんじゃない?」

八幡「まあ、確かにそうだな」

帆波「まあ、でも私達は恋人なんだし、私は八幡とすべれて楽しいよ」

八幡「そうか。まあ…オレも…帆波とすべれて楽しいぞ」

帆波「そつか…八幡も楽しいか。でも、そこはすつと言うものだよ」

八幡「うるせえ…なにせ女子としかも彼女と一緒にプール行くのは初めてなんだから、仕方ねえだろ」

帆波「へえ、初めてなんだ、そつかそつか。また、八幡の初めてもらつちやつた」

だからそういう言い方やめてくださいよ帆波さん。前まではオレ1人だけだったけど、今は周りに人いるんだよ。勘違いする人もいるかもしれないんだよ。わかっている?そしてその後オレ達の番になりすべるのだが、やはりさつきと同様帆波は細くて柔らかかったです。

次のプールでは

帆波「それっ!」

と言いながら帆波がオレに向かってプールの水をかけてきた。

八幡「わぷっ!」

盛大に頭から水がかかる。それを見た帆波が大笑いする。

帆波「あはは、やったー大成功!」

どうやらオレは帆波にイタズラされたらしい。帆波は未だにお腹を抱えて笑っている。いや、笑いすぎじゃね?そんなに笑うところなの?けどやられっぱなしなのはちよつと嫌なので、オレは仕返しと言わんばかりに帆波に向かってプールの水をかけた。

帆波「わわっ!」

帆波もオレと同様頭から水がかかる。

八幡「フツ、お返しだ」

帆波「もー！やったなく。それ！」

そう言っつてまたオレに水をかけてきた。けどオレはそれを躲す。そう何度もかかるかよ。

八幡「どうか初めに仕掛けたの帆波だろ」

帆波「そうかもしれないけど、仕返しの仕返しだよ！えい！」

また、水をかけてきた。またそれを躲した後、オレも帆波に向かつて水をかける。帆波は反応できず水がかかる。

帆波「もー！避けないでよ！」

八幡「避け無きやかかるだろ」

帆波「むうー」

八幡「膨れてもダメだ」

帆波「いけずう」

八幡「あのなあ…」

そう言いながらオレはため息を着く。いや、正直に言うところ可愛かったよ。頬をふくらませた帆波はね。そんな事を考えていると

帆波「スキあり！」

オレのスキをついてオレに水をかけてきた。オレは反応できず水がかかってしまう。

帆波「隙だらけだよ八幡！」

そう言っつて人差し指をオレに向かつて指してくる。

八幡「このやろ」

その後もオレ達はお互いに水を掛け合った。掛け合っている時オレは思った。これはあれだな。よくプールにきたカップル達がやるようなアレだなと思った。まさかオレがこんな事するなんて思わなかった。昔のオレだったら「クツソリア充め」とか「イチヤイチヤしやがって！」とか「別に羨ましくなんてないんだからね！」とか思ってたな。いや、最後のはただただ気持ち悪いだけじゃん。まあ、けど今はオレもリア充なのかもしれないな。だからこういうのを楽しいと感じるんだな。

帆波「あゝ、楽しい〜」

八幡「ちよつと疲れたけどな」

帆波「にやははは、確かにあんなに動いたもんね。私もちよつと疲れちゃったよ」

八幡「もうそろそろお昼だな。売店で何か買うか」

帆波「あ、待って」

八幡「ん？」

帆波「えっと…実は…お弁当を作ってきたんだ」

八幡「え、マジ？」

帆波「うん」

そして帆波はロッカーに向かい弁当を持ってきてくれた。弁当箱を開けるとそこには栄養バランスや彩りなどが考えられている弁当だった。

八幡「おお…美味そうだ」

帆波「にやはは、ありがとう。じゃあ…」

帆波・八幡「いただきます」

合掌した後、オレは帆波が作ってくれた弁当のおかずを口に運ぶ。やはり帆波の料理は美味い。それに帆波の料理なんて夏休みに入ってから食べていない。久しぶりの帆波の料理だ。

帆波「どう？」

八幡「ああ、美味いぞ」

帆波「ホント？良かった〜。口に合わなかったらどうしようと思っ
たよ」

八幡「口に合うに決まってるだろ」

帆波「嬉しい」

いや、ホント味付けもちょうど良い。それにオレの好物も入っている。どうやら帆波はオレの事をわかっているらしい。そりゃ、あんだけオレのために弁当を作ってくれるんだからな。ん？これってもしかして……

帆波「？どうしたの八幡？」

八幡「え、あ、いや〜、今思えばこれってさ」

帆波「？」

八幡「オレ、帆波に胃袋掴まれているような…」

帆波「へ？」

そう、今思えばオレの胃袋は帆波に掴まれているような気がする。そうでなかったらこんなにも帆波の料理が恋しくならないだろ。

帆波「にやはは、そっか。もう、私は八幡の胃袋掴んでるんだ」

八幡「多分な」

帆波「ふーん、じゃあ八幡はもう私の料理無しじゃ無理だね」

八幡「いや、そこまで言うかね」

いくら帆波に胃袋を掴まれているとはいえ、帆波の料理以外も食べるよ。例えば小町の料理とかも食べるよ。

帆波「それじゃ…はい、あーん」

八幡「…っ」

そう言って卵焼きを差し出してくる帆波。まさかそれをしてくるとは思ってなかった。そういえば前したのもデートの時だったな。

帆波「ほら、八幡。あーん」

八幡「く…あ、あーん」

恥ずかしいけど、いつまでも食べない訳にはいかないのでオレは帆波から差し出された卵焼きを食べる。

帆波「どう？」

八幡「うん、美味しいよ」

帆波「ふふっ、そっか」

なんだろう…これは多分餌付けじゃないだろうか。

八幡・帆波「「ごちそうさま（でした）」」

帆波「じゃあこれロッカーに戻してくるね」

八幡「おう、じゃあここで待ってるわ」

帆波「わかった」

そう言って帆波はロッカーに弁当箱を戻しに行った。それよりも自分から自分の胃袋掴まれているとか言うもんじゃないな。黙つとけば良かったかな。いや、いつしかはバレてしまうかもしれないな。

「ねえねえ、ちよつと君」

八幡「はい？」

なんだか呼ばれたような気もしたので声のした方を見ると、そこには水着を着た大学生の女性2人がいた。

八幡「…自分ですか？」

女1「そうそう君君」

八幡「なんですか？」

女2「ねえ、私達と一緒に遊ばない？」

八幡「はい？」

女2「だから一緒に遊ばない？って言ったの。君1人なんでしょ」

八幡「いいえ、連れがいますので」

女1「そんな見栄を張ってかわいい」

女2「だから一緒に遊ぼうよ。その後はゆっくり、ね」

何が、ね、だよ。というかまさかこれに遭遇するとは思って無かったな。実際に遭遇すると怖いな。でも、どうすっかな…

八幡 side out

帆波 side

今日は八幡とプールに来ている。かおりや千佳や雪乃は来ていない。デートである。2人でプールに行くなんて初めて。ちよつと緊張しちゃったけど大丈夫。お弁当も美味しそうに食べてくれた。それに私はもう八幡の胃袋を掴んでいるみたいだしね。知らない間に私は八幡の胃袋を掴んでいた。それを聞いただけで嬉しさが込み上げてきた。好きな人の胃袋を掴めたんだもん。お母さんにも言われたよ。いつも弁当作ってるのならいつしか胃袋を掴むんじゃないかって言われたけど、まさか本当に掴めてるなんて思わなかった。それにスライダーの時も抱きしめられた時の八幡はなんだかたくましかった。その間すごくドキドキしたけど多分バレてないよね。そんな事を思いながら私はお弁当箱をロッカーにしまう。

帆波「これでよしと。早く八幡の所へ戻らないと」

少し、考え事してたら遅くなっちゃった。いつまでも八幡を待たせる訳にはいかない。そして私は更衣室から八幡の所へ行くと八幡の

近くに女性2人がいた。あれって…。

八幡「あのマジでそういうの困るんです」

女1「え〜？いいじゃん！ウチらと遊ぼうよ〜」

女2「ね〜？どうせ今一人でしょ？」

八幡「いや、こんな所に一人でこれるほど心臓に毛生えてないから」

女1「あつはは、君おもしろ〜い」

八幡「はあ…」

あ、あれって…もしかして逆ナン!?まさかする人がいるなんて。なんで八幡に逆ナン?確かに八幡はかっこいいのは認めるけど、八幡は絶対に渡さないんだから!でも、どうやって助けよう。よし、こうなったらあれしかないね。

帆波 side out

八幡 side

はあ…しつこいなこの人たちも。早く諦めてくれないかな。

女1「もう〜、いい加減一緒に遊ぼうよ」

八幡「いや、だから連れがいるって」

女2「どうせ男でしょ?だったら一緒に来なよ〜!」

ダメだ。全然引いてくれない。一体どうすれば……。

帆波「八幡!」

八幡「っ!」

この声は帆波!?そう思い声のした方をオレと女性2人も振り向く。

帆波が小走りで戻ってきていた。

帆波「ごめん!遅くなっちゃった」

八幡「いや、大丈夫だ。あ、オレの連れは彼女なんです」

女1「うっそ!普通に可愛いじゃん!」

おい!普通とはなんだ!普通とは!帆波はめっちゃくちゃ可愛いんだぞ!

女2「仕方ないから。せつかくいい男だと思ったのに。ざーんねん。じゃまったね〜」

そう言って女性2人はようやく去っていった。

八幡「ふう…助かったわ帆波。サンキュ」

帆波「ううん大したことないよ。それにしてもびっくりしたよ。戻ってきたら八幡が逆ナンされてるんだもん」

八幡「いや、まさかオレもされるとは思ってたなくてびっくりしたわ」

帆波「それを見た時、私八幡を渡したくないって思ってたさ」

八幡「お、おう」

え？何？まさか妬いてらっしやるのですか帆波さん。

帆波「だから守れて良かったよ」

八幡「そ、そつか。というかオレは帆波の傍から離れるつもりはないからな」

帆波「にやはは、ありがとう八幡」

八幡「おう」

帆波「よし、じゃあ気を取り直して遊ぼう！」

八幡「ああ、そうだな」

その後は持ってきた浮き輪を膨らまし、流れるプールに浮かべその上に帆波が乗りオレがそれを押すようにして泳いだ。

帆波「はあく、楽ちん楽ちん」

八幡「どこぞのお姫様かよ」

帆波「え、そんなつもりは無いけど、もし私がお姫様なら八幡は王子様だね」

八幡「なっ！／＼／＼」

帆波「にやはは、八幡顔赤いよ」

八幡「誰のせいだと思ってるんだよ」

帆波「照れてる照れてる。照れてる八幡かわいい」

八幡「だから男にかわいい言うな」

そんな会話をしながら泳ぎ、またスライダーをすべりプールを満喫したオレ達は帰るため着替えた後、行きと同じで電車に乗り最寄り駅に着いたあと、オレは帆波を家まで送った。

帆波「送ってくれてありがとう」

八幡「どういたしまして」

帆波「今日は楽しかったね」

八幡「ああ」

帆波「今度はかおり達も誘って行きたいね」

八幡「そうだな」

帆波「うん、約束だよ」

八幡「おう、わかった。じゃあまたな」

帆波「うん、またね」

オレは帆波が家に入るところまで見送った後、自分の家へと帰った。

第21話

八幡 side

はあ……もう夏休みも終わりか。長かったような短かったような夏休みももう終わりに近づいている。こんなに早く終わるものだった？後2ヶ月足りないような。そうだと数え間違いじゃないかもしれない。そう思い数えてみたが、何も間違っていないかった。ちくしゅう。おかしい：帆波達と色んな事して遊んだ記憶があるのにもう夏休みが終わりだとは。いやはや恐ろしいものだ。でもオレがそんな事している間に両親は仕事をしている。いや、ホント毎日お疲れ様ですわ。かなり通勤続きで母ちゃんと親父の体が心配になってくるな。というよりも働きすぎるだろ。上の方の職に就いているせいかな責任を押し付けられたりと苦労が絶えないのかね。オレも働きたく無くなってきたな。いや、でもなく……将来は働かないと生きていけないしな。帆波だけに働かせる訳にはいかねえ……って何考えてんだオレは!!なんでオレは帆波と結婚する前提で考えてんだよ!おかしいだろ!まったたく……でも帆波と結婚……か。仕事から帰ってきて、玄関のドアを開けると帆波が出迎えてくる。そして一緒にご飯を食べて、一緒にテレビを見る。なんだこれ?めっちゃくちや楽しいそうじゃない?って、そうじゃなくて!何本気で考えてんだよオレは!

八幡「はあ……何やってんだろうな……オレ」

小町「なにやってんの?お兄ちゃん」

そんな事していると小町が上からこちらを見ていた。いや、ホントなにやってんだろうな。

八幡「別に、ちよつと考え事をしていただけだ」

小町「カレンダーを見ながら?」

八幡「あ、うん」

小町「ふーん。あ、そうだお兄ちゃん。お兄ちゃんはどうするの?」

八幡「何がだ?主語を言え」

小町「今度、花火大会があるじゃん?そんな時に帆波お姉ちゃんと一緒に行くの?」

八幡「あー」

そういえばそんなのがあったな。花火大会か：そうだな。その花火大会に帆波を誘ってみるか。ほとんど遊びに行く時は帆波から誘われて行ってるからな。偶にはオレから誘ってみるか。そう思いテーブルに置いてあった携帯を手に取り、画面を操作して連絡先から帆波の連絡先を選び、電話をかける。2、3コールした後、帆波の声が聞こえてくる。

帆波『もしもし？どうしたの？八幡』

八幡「もしもし、帆波。今大丈夫か？」

帆波『うん、大丈夫だけど、どうしたの？』

八幡「いや、今度花火大会があるだろ？それ一緒に行かねえか？」

帆波『まさかあの八幡から誘ってくるなんて、明日大雨でも降るんじゃない：』

八幡「ひでえなおい。そんな事言うんならもう行かねえぞ」

帆波『あー、ごめんごめん。冗談だよ冗談。八幡と一緒に花火大会行きたい！』

八幡「オレも冗談だ。オレも帆波と一緒に花火大会行きたいしな」

帆波『もう、そういうことならそう言ってよ』

八幡「初めに言ってきたのは帆波だろ？」

帆波『そうだけど。もう！いじわる！』

八幡「すまんすまん」

帆波『うん許す』

八幡「そうか。じゃ当日は駅集合でいいか？」

帆波『うん、いいよ』

八幡「わかった。じゃ当日」

帆波『うん、またね』

八幡「ああ」

そう言って通話を終了する。

フウ：…なんとか誘えることができた。というかこんなにも緊張するだね。

小町「良かったね」

八幡「ああ」

小町「あ、そうだ。花火大会に行つた時お土産もよろしくね」

八幡「あれ？小町は行かねえのか？」

小町「当たり前じゃん。小町受験生だよ？お祭りに行く余裕があるなら、勉強してるよ」

八幡「まさかお前の口からそんな事を聞くとは思わなかったぞ」

まさか小町の口から勉強の事を聞くとは思つてもなかった。

小町「あ、ひっどーい！小町だつて勉強するよ！」

八幡「ははっ、すまんすまん。まあ、勉強を頑張っている小町の為にお土産買ってやるよ」

小町「うん、よろしくね」

そう言つて小町はリビングから出ていった。まあ、小町も勉強を頑張っている事だしそれぐらいしてやられるか。

八幡が帆波を花火大会に誘っている時。ある1人の少女が家の自分の部屋で計画を企んでいた。

もうすぐしたら花火大会がある。そこでヒツキーの家まで行つて誘う。連絡先を知らないから直接家まで行かないとダメだけど。でも、それでヒツキーと一緒に花火大会に行く。ヒツキーは行く相手がいないからあたしが誘えば絶対に来てくれるし。そして一緒に屋台を回ったり、色んな事を話したりして過ごす。そして最後に一緒に花火を見て、そしてそこでヒツキーに告白する。ヒツキーもあたしの事好きだと思ふから、絶対に成功するし。そしてヒツキーと恋人同士になつたら、一之瀬さん達とはもう関わらないようにしてもらおう。だっていつも近くについて鬱陶しいだもん。そうなればもうヒツキーはあたしの物。もう、誰も近づけさせないし、触らせもしない。ヒツキーはあたしだけのものなんだから！待つてねヒツキー。もうすぐで一之瀬さん達の呪縛から解放してあげるね。だからその時まで辛抱してね。

でも結衣は知らない。もう手遅れだということに。

また違うところでは2人の少女が電話で話していた。

かおり『ねえねえ千佳』

千佳『何？かおり』

かおり『もうすぐ花火大会だね』

千佳『確かにそうだね』

かおり『その花火大会さ。多分帆波と八幡は2人で行くよね』

千佳『そうじゃない？前だって2人でプール行ってたしね』

かおり『だよね。だからさ、私と一緒に花火大会に行かない？』

千佳『うん、いいよ』

かおり『ほんと？ありがとう千佳。あ、そうだ雪乃も誘う？』

千佳『いいね！』

かおり『よし、じゃあ早速誘ってみるよ』

千佳『うん、わかった』

と楽しそうに一緒に花火大会に行く約束をするかおりと千佳であつた。

今日は待ちに待った花火大会当日。

オレは待ち合わせ場所である最寄り駅に来ている。柄にもなく楽しみで待ち合わせ時間よりも前に来ている。

八幡「ちよつと早く来すぎたか」

そう小さく呟きながら周りを見渡す。そこにはまだ帆波の姿は無かった。やっぱり早く来すぎたようだ。帆波が来るまで待つか。そう思い柱にもたれかかりながら携帯をいじる。待っていると少し人が多くなっている気がしたので周りをみると、浴衣を着た人達がいる。女子同士の友達やカップルなどが駅の方へ入っていく。どうやらあの人達も花火大会に行くのであろう。そんな事を思いながら待っていると声をかけられる。その声の主はよく聞く声だった。

帆波「おまたせ八幡」

そう、オレの彼女である一之瀬帆波だ。

八幡「いや、待つてない…ぞ」

声のした方を振り向くと赤色の浴衣に身を包んだ帆波がいた。それを見たオレは一瞬言葉を失う。

帆波「どう…かな？似合ってる？」

帆波はそう言って浴衣の裾を握りながらその場でくるっと一回転して、浴衣全体を見せてくる。

八幡「お、おう…に、似合ってるぞ。すげえかわいいぞ」

帆波「うん！ありがとう八幡」

そう言って満面の笑みをオレに向けてくる。それを見たオレはドキツとしてしまい、思わず視線を逸らしてしまう。くっそ、マジでかわいなおい。

帆波「ふふっ、何照れてるの？」

八幡「うっせ」

帆波「ふふっ。それじゃあ花火大会に行こっか」

八幡「そうだな」

そんな会話しながら電車に乗って花火大会会場がある駅に向かう。電車の中ではマナーを守り喋らず目的地である駅まで向かう。

帆波「きやつ」

短い悲鳴とともにカツツと下駄が鳴り、肩にふわつと甘い香りが鼻をつく。履き慣れない下駄のせいもあるのだろう。バランスを崩した帆波はオレの方へ倒れ込んできた。自然とそれを受け止める。

八幡「つと」

帆波「あ、ありがとう」

八幡「おう、気にするな。混んでくるしな。それより大丈夫か？」
帆波「うん、大丈夫だよ。八幡が受け止めてくれたから」

良かったケガが無くて。そして降り立った駅前には人で溢れかえり、ざわざわとした喧騒に満ちている。そびえ立つ千葉ポートタワーはその鏡のような壁面で、下界を照らし返し、数倍にも輝きを増した夕日が、開幕を待ち望む人々の期待をさらに盛り上げていくようだ。誰しもが笑いさざめき、きらきらとした喜びの視線を交わす。道々には

多くのたこ焼きやお好み焼きと言った定番を始めとした出店が立ち、近所のコンビニやら酒屋やらも軒先に商品を並べ、レストランは花火が見えると触れ込んで盛んにお客を呼び込んでいる。日本の夏だ。遺伝子レベルで刻まれているのか、ワクワクしている。千葉市民花火大会は今まさに開幕せんとしている。

駅前から花火大会会場までの道のりは近い。公演全体が駅に隣接しているといってもいい。だが、大勢の人でごった返しているせいで容易には進めない。普段は閑散としており、だだっ広い印象しか受けない広場が、遠目にも人波で埋まっているのがわかった。人いきれの中で、海からの風が心地よく吹き抜けていく。時計を確認すればまだ18時過ぎ。確か開始は19時半とかだったはずだ。

八幡「まだ時間あるな。その間どうする？」

帆波「うーん、そうだな。色んな屋台を回ったりとか、後は小町ちゃん」と瑞希の為に何か買ったりとか

八幡「まあ、それしか無いか。それにしても人多いな」

帆波「そうだね。でも、それは仕方ないんじゃない？」

八幡「そうだな」

帆波「でもこんな人が多いと逸れちゃうかもしれないから、はい」と手をオレの方に差し出してくる。あー、なるほどね。

八幡「お、おう」

少し緊張しながらも帆波の手を握る。帆波の柔らかい手の感触が伝わってくる。

帆波「これで逸れないね」

八幡「そ、そうだな」

その後オレは小町からの買い物リスト確認する。

小町買い物リスト

焼きそば 400円

わたあめ 500円

ラムネ 300円

たこ焼き 500円

花火を見た思い出プライスレス

「なんだこれは？最後のやつもあれだな……。妹がドヤ顔でこれを打ったと思うと、お兄ちゃんちよつと恥ずかしいわ。そんなオレの表情を見た帆波が気になったのかオレが見ていた携帯の画面を見る。するとあははと苦笑いになる帆波。やめて！こつちがもつと恥ずかしくなつちやう。まあ小町も小町なりに気を使ったのだろう。」

八幡「まあ、とりあえず順番に買ってやるか」

帆波「うん、そうだね」

でも、小町の気の抜けるようなメールのせいか、それとも祭りの陽気に当てられたのか、帆波は楽しげに鼻歌交じりで歩く。人の流れは広場へと続いている。いくつもの出店が軒を連ね、そのいずれもが大盛況だった。味はそれなりとわかってはいるのに、裸電球の灯りに照らされ、いざ目の前に並べられると存外外食をそそられる。さて、まずはわたあめだな。わたあめの屋台は機械をぶんぶんいわせながら、甘い香りを周囲に漂わせてふわふわとした白い糸を絡め取ってはまとめ上げていく。それから袋に詰められ、軒先に吊るされていた。どれもアニメキャラクターやヒーローがプリントされた東映にお金が入ってそうな感じの袋だな。

帆波「あ、これだね。小町の買い物リストの1つの」

八幡「ああ、そうだな。すみませんこれお願いします」

適当に選んで買うか。どれを選んでも中身は同じだしな。そう思いオレは手前にあつたピンクの袋をさして、500円払う。小町にあげるんだし、女兒向けアニメとかの袋を選んだ。店にある袋はプリキ○アとかアイ○ツとかジュエルペツなんかなどがプリントされていた。その後もラムネ、たこ焼きと買っていく。

八幡 side out

そんな八幡と帆波が楽しそうに会話をしながら買い物を楽しませていく中、1人の少女がいた。

もう！なんでヒツキーは家にいないんだし！せつかくあたしが誘って上げてるのになんでいないんだし！しかも家にいた小町もなんだか怒っているような感じだったし。なんであんなに怒ってるんだし。あたしが何したって言うんだし！あーもう！なんでこんなに探してるのにヒツキーはいないんだし！早く見つけて一緒に花火大会を回って、花火を見ている時に告白する予定なのに。早くしないと花火が始まってしまう。ホントヒツキーはどこにいるんだし！

———
そんなある時、違う場所では……

かおり「やっぱ人多いね」

千佳「だね。雪乃ちゃん大丈夫？」

雪乃「ええ、大丈夫よありがとう」

かおり「もし、無理そうなら言ってね」

雪乃「ええ」

浴衣を着た友達3人は楽しげに店を回っていた。

———
八幡 side

東京湾によくやく日が落ち、中天を藍の闇が満たす。月は高々と昇り、打ち上がってくる花火を楽しみにしているようだった。屋台の連なっている道から続く、メイン会場となる広場は既に人で溢れかえっている。隙間なく引き詰められたビニールシート、始まる前から杯をかわす人々、遠く子供の泣き声がこだまし、かと思えば近くでは怒号が飛び交っている。さて、オレー人ならどこぞに腰掛けるのだが、今は違う。帆布が一緒だからそうはいかない。浴衣で地面に直座りというのもいかない。なのでオレは小さいビニールシートを持ってきているのだ。

帆布「ホント混んでるね」

八幡「そうだな。ビニールシート持ってきたから、どっか座れるところ探そうぜ」

帆布「そうだね」

その後色々探し回り、空いているスペースを見つけたのでそこにビ

ニールシートを引き座る。

八幡「空いていて良かったな」

帆波「ホントだね」

そんな会話をしながら空を見上げる。星はそこまで見えないが、何個かキラキラと光っている星と綺麗な月が見えた。そして他愛もない会話しながら花火が始まるのを待つ。

そして今の時刻は19時40分、定刻より10分押しで花火大会の開幕を告げるアナウンスが流れた。ぱちぱちと拍手が起こり、どこかでお調子者の指笛も聞こえてくる。自慢げに指笛を吹くやつのは普段おとなしくせにこういときだけ何故か騒ぐ奴が多いイメージ。まあ、そんなことよりも帆波と一緒に花火を見るか。空に、一輪の光り輝く大輪の花が咲いた。その後、続けて何発も花火が上がる。花火の明かりが、暗い丘を照らす。

帆波「わぁ…綺麗」

八幡「ああ、だな」

こういう時は君の方が綺麗とか言う人もいるが、そんな言う勇氣はまだ無いぞオレは。そんな時だった。帆波がオレの服の袖を引っ張ってくるくる。そちらを見れば若干顔が赤いようにも見える。いや、これは花火の明かりでそう見えるのかもしれない。すると帆波は顔を俯きながら何回か深呼吸した後、再度顔を上げてオレのを見ると。

帆波「ねえ…八幡…キス…しよ」

八幡「…………へ？」

あまりにも急な事でマヌケな声が出てしまう。

八幡「い、いきなりどうした？キスしよだなんて」

帆波「私達さ、付き合って2年以上経っても、そういう事してないでしょ？だから、さ…………しない？」

そう言って少し首を傾げる。

八幡「良いのか？」

帆波「私がしたいと思ったから言ったの。…………八幡はいや？」

八幡「んわけねえだろ。オレも…その…帆波としたいと、思ってる」

帆波「!?!」

やべえ…緊張し過ぎて鼓動がすごいことになっている。顔も熱くなつていくのが分かる。多分、オレも顔が赤くなっているのだろうか。自分で確かめる術はない。

帆波「じゃあ…しよつか」

そう言つて帆波は自分の顔をオレの顔に近づけてくる。オレも鼓動がうるさい中、帆波の顔に自分の顔を近づける。けど何故だろうやけに時間が長いようにも感じる。そして夜空に大きな火花が散る。花火は、夜空を満開の花畑のように彩る。錦冠が、流れ星のように夜空に降り注ぐ。そして大輪の花が咲く夜空の下で、見つめ合ったまま、オレ達の影は、繋がった。

帆波「ん…」

八幡「ん」

帆波の柔らかい唇の感触が伝わる。どれくらい時間が経ったかわからない中、お互いの唇は離れる。

帆波「にやはは、しちゃったね」

八幡「ああ…そうだな」

帆波「私初めてだったんだ。八幡は？」

八幡「オレも初めてだったよ」

帆波「ふふつ、そっか。また八幡の初めて貰っちゃった」

だからそういう事言うのはやめてください。他の人が聞いたら誤解されちゃうだろ。

帆波「ねえ…八幡」

再び呼ばれて帆波の方を視線を向ける。

帆波「もう1回…しよ」

その言葉を聞いたオレは黙ったまま、再び帆波と唇を重ねる。さつきよりも長い時間の口づけを交わす。そしてお互い息が続かなくなつたオレ達は唇を離す。

帆波「もう…長いよ…」

八幡「…悪い」

帆波「ううん…嬉しい」

八幡「お、おう…そうか」

帆波「あ、照れてる。顔赤い八幡」

八幡「それを言うなら帆波もだろう」

帆波「にやはは、そうかもね」

八幡「ふっ」

帆波「にやはは」

その後、オレ達は小さく笑う。そして帆波はオレの肩に頭をのせて、身を寄せてくる。オレはそれを受け入れオレも帆波に身を寄せる。横から甘い香りが匂う。そして身を寄せあつた後、手を繋ぎ、花を見るためお互い空を上げる。

一方その頃1人の少女は

あーもう！ヒッキーは一体どこにいるのさ！もう花火は始まっているっていうのに見つからない！早くヒッキーを見つけて、告白して恋人にならないといけないのに！あーもう！ホントどこにいるのさ！

その後も探し回るがこの少女と八幡が鉢合わせすることは無かった。

そしてまた一方その頃。3人の少女達は

千佳「綺麗だね」

かおり「そうだね」

雪乃「そうね」

千佳「あの2人も花火見てるのかな？」

雪乃「多分そうじゃないかしら」

かおり「イチヤイチャしながら見てるのかな？」

千佳「はあ…やっぱりかおりはかおりね」

雪乃「ふふっ、そうね」

かおり「あ、2人ともひっどーい」

千佳・雪乃「「ふふっ」
かおり「もう〜！」

3人は冗談を言い合いながら花火を見ていた。

現在時刻は午後9時。花火も終わり早めに会場を後にした。同じ考えを持った者が多かったようで駅はそれなりに混雑していた。花火大会の影響が若干の遅れでホームへ電車が入ってきた。乗り込むと、ぎりぎり座れない程度の混みぐあいでおれと帆波は扉の前に立った。でも今は帆波の顔が直視できない。だって彼女と初めてキスをしたんだ。やばい、思い出ただけで恥ずかしい。チラッと帆波を見ると帆波も若干赤いようにも見える。

帆波「ねえ、八幡」

すると帆波の口が開いた。

八幡「どうした？」

帆波「楽しかったね」

八幡「…ああ、そうだな」

確かに楽しかった。やはり好きな人と行く祭りは格別に楽しく感じるものなのか。それはオレにも分からない。けど、楽しかった。それだけの事実が知ってるだけで良いと思う。

帆波「今日はさ2人だけで来たけど、今度はさかおり、千佳、雪乃ちゃんも誘って、みんなで行こっか」

八幡「そうだな。今度は全員誘ってみるか」

帆波「うん」

今回は帆波と一緒に来たけど、かおり達と一緒に行けばもっと楽しくなるのかもしれない。

その後、最寄り駅につき電車から降り、オレは帆波を家まで送る事にした。帰っている途中で帆波がオレの手を握ってくる。オレはびっくりしたけど、それを振り払わずに受け入れる。そして無言のまま帆波の家まで送った。

そして帆波の家の前に着く。

帆波「送ってくれてありがとう」

八幡「気にするな。こんな夜道を一人で歩かせる訳には行かねえだろ」

帆波「あれ？随分素直に言うんだね」

八幡「オレはいつだって素直だ」

帆波「そっか」

八幡「ああ」

帆波「…もう夏休みも終わりだね」

帆波がそうつぶやく。

八幡「そうだな」

帆波「この夏休み色々あったね」

八幡「ああ」

帆波「千葉村のボランティア活動、プール、かおり達と一緒に宿題をしたりしたね」

八幡「そうだな」

確かに色々あったな。宿題に関してはかおりが悪戦苦闘していた。それで泣きながら（嘘）オレらに助けを求めて来た。それを見たオレらはやれやれと思いつながらかおりの宿題を終わらす手伝いをしたしな。まあ、なんとか終わらす事ができてかおりも喜んでいたが、千佳の提案で助けたお礼にオレらに何か奢ることになった。かおりも少し渋っていたが、助けられたのは事実なのはかわらなかつたので、結局奢ることになった。

帆波「二学期もまた一緒に思い出作ろうね」

八幡「ああ」

帆波「じゃあまた明日ね八幡」

そう言つて帆波は顔を近づけ、唇を重ねてくる。再びあの、柔らかな感触が伝わってくる。そしてオレはあまりにも急な出来事だったので反応が遅れた。

八幡「…ほ、帆波!？」

帆波「ふふつ、これはおやすみのキスだよ。…なくんてね!じゃあまたね八幡。送ってくれてありがとう!」

そう言つた帆波はササツと家の中へ入つていった。そしてオレはそれを見送つた後、帰路に着いた。

第22話

八幡side

長かったような短かったような楽しい夏休みは終了し、二学期が始まる。そしてその後テストが行われた。まあ、どこの学校でもある事だよな。そのテストは普通にやったけど、かおりが苦戦したらしい。帆波や雪乃のおかげで学力が上がっているとはいえ苦戦したらしい。でもこればかりはかおり自身の問題だしな。分からない所があればオレ達が教えれば良いしな。まあ、そんな事よりも季節は秋になろうとしている。学生で秋といえばと聞かれたら文化祭。もうそういう時期なのかと思ってしまう。てなわけでウチのクラスでは文化祭の役割分担決めが行われた。先日のLHRでは課題までしか決めきれていなかった。この時間、より具体的な話し合いが進められる。

そして役割決めが始まったのだが誰も実行委員をやるうとしなかった。まあ、そりゃあそうだろうなめんどくさい事は誰もしたくないだろうな。そして一向に決まらないため最終手段としてクジ引きで決めることになった。ジャンケンではなくクジ引きですか。これは運が必要となるな。そして男女別れてクジ引きをする。まずは男子からクジを引いていく。ほとんどが白紙だが1枚だけ丸が書かれておりそれを引いた人が実行委員になるという仕組みだ。そしてオレを含めた男子達がどんどんクジを引く。できればオレの前の人達の誰かが引いてくれてら良いのにと思っていたのだが、全然一向に引いてくれない。ほとんどの奴らが白紙を引いていきどんどんオレの番が近づいてくる。あれ？これなんかやばくね？そんな事思っているとどうとうオレの番になってしまった。意をけしてクジを引き、そして折りたたまれた紙を広げる。そしてそこには大きな丸が書かれていた。

八幡「げ」

思わずそんな声が出てしまう。どうやらオレは文化祭文実委員選ばれたようだ。

平塚「では男子の文化祭実行委員は比企谷で決まりだな」

八幡「はい」

そして黒板にオレの名前が書き出される。まあ、でも決まってしまった以上仕方ない。オレの運が無かったのだろう。やりたくないし、働きたくないけど仕方ない。その後、女子達のくじ引きが始まる。一体誰がオレと実行委員になるのやら。まあ、やりたくない奴らばかりだろうな。そう思いながらも女子のくじ引きがどんどん進んでいく。そんな時一人の女子の声が聞こえた。

「あ…」

聞き覚えのある声だったので目を開けて前を見ると、そこにはオレの友達千佳だった。まさか千佳がくじ引きで実行委員に選ばれたようだ。

平塚「ということで女子は仲町に決定した。今日から実行委員会があるから、2人とも頼むぞ」

千佳「はい」

八幡「…うす」

平塚「では解散」

その声で皆めいめに立ち上がり教室を後にした。そんな中、千佳オレの所に近づいてくる。

千佳「八幡君、一緒に頑張ろうね」

八幡「あ、ああ…そうだな」

千佳「元氣ないね」

八幡「そりやな。自分の運の無さを恨むわ」

千佳「あははは…」

そんな時かおりがオレと千佳の元に近づいてくる。

かおり「おっす、2人とも」

八幡「おう」

かおり「まさか2人が実行委員になっちゃうとはね」

千佳「決まったことだし仕方ないよ」

八幡「だな」

かおり「でも大変だね今日から実行委員会があるなんて」

八幡「そうだな」

かおり「じゃあ今日は一緒に帰れなさそうだね」

八幡「そうかもな」

かおり「まあ、仕方ないよね。じゃあ今日は帰るよ。じゃあ2人も頑張つてね」

八幡「…ああ」

千佳「うん」

そう言つてかおりは自分の荷物を持って教室から出ていった。さてそろそろ会議室に行かねえとな。

八幡「じゃあオレ達も行くか」

千佳「うん、そうだね」

そんな会話をしながらオレと千佳は委員会のミーティングが行われる会議室へと移動を開始した。会議室へと向かう人通りはちらほらとまばらだ。なかには男女連れだつて雑談混じりに行く奴らもいる。オレと千佳も雑談混じりをしてると会議室着く。会議室は通常の教室2つ分ほどの広さがあり、椅子や机もなかなか立派なものが用意されている。普段は職員会議なんかに使われているらしい。そして会議室に入ると半分集まっている中、オレと千佳がよく知る人物が2人いた。どうやらアイツらも実行委員になつたらしい。でもなんで女子2人なんだ？普通は男女1人ずつのはずなのになんで女子2人なんだ？そんな事を思いながら2人が座っている席の近くまで行き、声をかける。

八幡「よお」

帆波「え？八幡？千佳？」

2人のうち1人はオレの彼女、一之瀬帆波である。そんな帆波は心底意外そうな表情をする。

雪乃「あら、ホントね。まさかあなたが参加するなんて、どういふ風の吹き回しかしら？」

八幡「オレも参加したくて参加した訳じゃねえよ。くじ引きで決まってしまったんだよ」

千佳「私も」

雪乃「なるほどね」

帆波「まあ、そうだねよね。八幡が自分から進んで参加する訳ないよね」

八幡「まあ、そういうことだ。それじゃあオレ達も座るか」

千佳「そうだね」

そう言つてオレと千佳は帆波と少し離れた場所に座る。その後も開始時刻に近づくとつれて、1人、また1人と人が増えていく。ドアが開くたび、みんなの視線はドアに向かうが、知り合いでないことを確認すると、すぐに視線は離れていく。あの視線、嫌なんだよな…。そんなことよりも他の奴ら喋りすぎてざわめきへと変わつていく。そんな中、オレと千佳は小さいながらも他愛もない話をする。そんなお喋りが開催されている中、時計の針はもう間もなく開始時刻になるうかといえところ。どやどやがやがやした会話とともに、また会議室のドアが開く。プリントを抱え、連帯感のある数人の、生徒達。続いて体育教師の厚木と平塚先生だった。そして数人の生徒達は会議室の前方に集まると、1人の女子生徒の顔を見る。すると、そのほんわか系の女生徒はうんと頷きを返した。それを合図に1年生と思しき2人の生徒が書類を各人に配布し始めた。それぞれに行き渡つたところを確認すると、女生徒はすつと立ち上がる。

「それでは、文化祭実行委員会を始めます」

肩まであるミディアムヘアは前髪がピンで留められ、つるりとした綺麗なおでこがきらり手首に嵌められたカラフルなヘアゴムが可愛らしさを感じさせる。まあ、帆波には敵わないけどな。その女生徒は優しげに細められた瞳で、にこやかに皆を見渡し、なんだかほんわかした号令をかけた。すると、みんなそれぞれ居住まいを直す。

城廻「えつと、生徒会長の城廻めぐりです。皆さんのご協力で今年もつつがなく文化祭が開催できるのが嬉しいです。…え、えつと、…み、みんなで頑張ろう！おー！」

城廻先輩が最後やつつけども思える簡単な挨拶を終えると、すかさず生徒会メンバーがぱちぱちと拍手をする。それに釣られるようにして会議室中拍手が起きた。それにうんうんとほんわか頷き城廻先

輩。

城廻「ありがとうございます。それじゃあさつそく実行委員長の選出に移りましょう」

すると、居合わせたメンバーがちよつとざわつく。まあ、そうなのオレもてつきり生徒会長が実行委員長もやるもんだと思つてた。すると、城廻先輩は少し苦笑いする。

城廻「知っている人も多いと思うけど、例年、文化祭実行委員長は2年生がやることになってるんだ。私はほら、もう3年生だから」
はあ、なるほどね。まあ、3年の秋口のこういうことやつてられないもんな。受験とかあるだろうし。

城廻「それじゃあ誰か立候補いますか？」

とは言うものの、手が挙がらない。そりゃあ誰もやりたくないだろうと思つていたその時。

「はい。私、実行委員長やりたいですー！」

そう言つて手を挙げていた人物は、八幡の彼女である一之瀬帆波だった。

あ、居たわ。帆波はこういうのに積極的に取り組むから、実行委員長にもなるわな。

城廻「ホント!?ありがとうございます!じゃあ自己紹介お願いしてもいいかな」

帆波「はい、わかりました」

そう答えた帆波は立ち上がり、その場で一礼してから自己紹介を始める。

帆波「2年J組の一之瀬帆波です。こういうイベントで人前に立つのは初めてですけど、楽しい文化祭にするために頑張りたいと思います。よろしく願います」

帆波の言葉に委員会のメンバーは暖かい拍手を送る。それに続くようにして他の人も拍手が打たれる。さすが帆波だな。帆波なら難なくこなせそうだがあんまり無茶はして欲しくはない。それで体調を崩してしまつたら、文化祭を楽しめなくなってしまう。それだけは嫌だな。そして帆波は一礼をして席に着く。実行委員長が決まつた

事が嬉しかったのか、城廻先輩は書記からペンを奪って、「実行委員：一之瀬」と前にあつたホワイトボードに書き出す。書記にペいとペンを投げ返すと、城廻先輩はスカートをひるがえしながらくるっとターンして振り返る。

城廻「さ、じゃああとは各役割を決めます。議事録に簡単な説明をつけておいたから読んでください。あと5分くらいで希望を取りますね」

言われた通り、オレは配布された議事録に目を通す。宣伝広報、有志統制、物品管理、保健衛生、会計監査、記録雑務…、なんか仰々しいな。とはいえ、高校生の文化祭、そこまで大変なこともあるまい。ざっと議事録に目を通す。

宣伝広報。まあ説明書き読むまでもないわな。なんかコンビニにポスター貼りに行ったりするやつだろ。絵を描いたそのうえ貼って貰えるように交渉しないといかなさそう。哄笑される未来しかないからパスだな。

有志統制。有志団体、要はバンドやつたりダンスやつたりする連中のお相手。無理だ。どう考えてもトップカーストの相手をしなきゃいけない。融資団体相手ならやったんだが。

物品管理。各クラスで使う机の貸し出しとか機材の運搬管理か。運搬とか無理でしょ、超疲れる。だからスルーだな。

保健衛生。ああ、これあれだ、食品系の申請とか取り纏めないといけねえやつだ。よし辞退だな。

会計監査。はいはい、お金関係の取り扱いね。いや、なんか問題起きたら責任取れないし、困るよな。だから固辞。

となると残るのは記録雑務しかないな。そう結論づけて、んつと軽く伸びをした。ついでに周囲を見渡してみると、だいたいどの人も結論は出たのか、ぼーつとしてたり携帯を弄ったりしていた。横にいた千佳も決まったのか椅子の背もたれに体を預けていた。

八幡「決まったか？」

千佳「まあね。八幡君は？」

八幡「決まったぞ。というか消去法してたら1つしか残らなかった

からそれにした」

千佳「そつか。それにしても帆波が実行委員長になるとはね」

八幡「確かに。でも半分は予想通りだけだな」

千佳「だね」

ふと帆波の方を見ると、帆波は雪乃と雑談していた。どうやら雪乃も決めたらしい。あ、そういえば部活はどうなるのだろうか。ここには奉仕部5人のうち4人が実行委員になっている。ということはかおりだけとなってしまう。部長である雪乃が実行委員になってしまつては部活は休みになってしまうだらう。

城廻「そろそろいいかなー？」

城廻先輩の声は意外に聞き取りやすい。ほんわかというかふんわりというか、わんにやかばつぱゆんぱつぱしているが、そのせいか意識の端に引っかけやすい。怒鳴りつけたりがなり立てる声の立て方とは違い、皆が自然と穏やかに先輩の方へ顔を向ける。

城廻「みんななんとなく決めたかな。それじゃ、一之瀬さん。ここからよろしくね」

帆波「はい、わかりました」

そう返事した帆波は立ち上がりホワイトボードの前へと座る。すると全員から視線を向けられるが、堂々としている。やはりこういうのは慣れているだろうな。

帆波「それでは各部署の配属決めをしたいと思います。まずは宣伝広報です。やりたい人」

その声に挙手する人はいない。特に一年生なんかは具体的にどの部署がどんな感じの仕事なのかなんて説明されないとわからないかもしれないし、当たり前っちゃ当たり前か。

帆波「宣伝広報だよ。宣伝はいろんなところに行けるよ。テレビとかラジオとか」

と帆波が補足の説明をするとちらほらと手が挙がり、人数と氏名が確認されると、次の役職決めへと移行していく。

帆波「次は有志統制」

有志は文化祭の花形のためか結構な勢いで手が挙がった。明らか

に想定されている人数よりも多い。

帆波「んー、ちよつと多過ぎですね。後ろの方でじゃんけんして貰えますか？」

生徒会役員の人が挙手したやつら全員を後ろに集め、決まったメンバーをメモに書いていく。その後もほとんど手際よく配属決めが進んでいく。ちなみにオレは記録雑務にきちんとおさまりました。それにオレだけではなく千佳や雪乃も記録雑務となった。なんだ2人も同じなんだね。その後、各担当部な別れて顔合わせをした。そしてそれぞれクラスと氏名だけ言う自己紹介を終えると、皆さんお待ちかね、担当部の部長を決めるじゃんけんである。負けたヤツがすると、というどうにも後ろ向きなじゃんけんできっきの有志部を決めた時はまるで意味合いが違う。そして自分達の方では3年生の先輩が担当部長に決まると、即時解散となった。そしてオレ達も帰ろうと思っただが、帆波は城廻先輩と平塚先生と一緒にいた。多分だが今後の話でもしているよだろう。そう思い会議室を後にする。

会議室を後にしてオレは玄関で本を読みながら帆波が来るのを待っている。帆波には待っているとメールを送った。かおりは既に帰っていて、千佳と雪乃はこれから用事があるということで先に帰って行った。ということまで待っているのはオレだけである。そして待つこと数分後、廊下を誰かが走る足音が聞こえてくる。音のした方を見ると帆波が走ってきた。急いで走ってきたのか少し息が上がっていた。

帆波「はあ、はあ、はあ…おまたせ…八幡」

八幡「いや全然待つてないぞ。それとそんなに急がなくても大丈夫だぞ」

帆波「うん、そうなんだけど。やっぱり八幡を待たせてたから急いで行かなきゃと思つて」

八幡「そうか。ありがとうな。じゃあ帰るか」

帆波「うん」

オレと帆波は一緒に昇降口を出る。その後、他愛もない会話をしながら歩く。

八幡「それにしてもまさか帆波が実行委員長になるとは」

帆波「意外だった？」

八幡「いや、予想通りというか」

帆波「えー、うそ〜」

八幡「いや、ホントだ。千佳も言ってたぞ」

帆波「そっか」

八幡「でも、実行委員長ってなんだか大変そうだな」

帆波「うん、そうかもしれない。でも一回やってみたかったんだよね」

八幡「そうか。まあ、頑張ってたな」

帆波「そりゃあ頑張るけど、八幡も頑張るんだよ」

八幡「わかってるよ。決まったもんはしょうがない。やれるだけやるよ」

帆波「うん。でも無理したらダメだよ」

八幡「帆波もな」

帆波「うん、わかってるよ。だから大丈夫」

八幡「そうか」

帆波がそう言うのなら大丈夫なのだろう。それでも心配してしまふ。ヤダオレって帆波に対して過保護になってきてない？あまり度が過ぎるのもダメだ。こういう時こそ帆波を信じなくちゃダメだよな。それしかオレにできることはない。

今日はもう遅かったので帆波を家まで送った。

帆波「送ってくれてありがとう八幡」

八幡「どういたしまして」

帆波「じゃあ八幡。一緒に楽しい文化祭にしようね。そして楽しい思い出作ろうね」

八幡「ああ」

帆波「じゃあまた明日ね」

八幡「ああ、また明日な」
オレは帆波が家に入るのを見届けた後、帰路についた。

第23話

八幡side

文化祭まで一月を切った校舎の中は慌ただしい。本日をもって、文化祭準備の為の教室残留が解禁される。他のクラスではめいめいに段ボールを運んできたり、絵の具を用意したり、気が早い奴らは差し入れと嘯いてお菓子だ飲み物だと落ち込んで騒ぎ始めている。そしてここ2のFも文化祭に向けて準備が進められていた。

八幡「なん…だと…!!?」

そしてオレは黒板に書かれている文字を見て驚愕する。

ミュージカル：星の王子さま

王子さま：葉山

ぼく：比企谷

海老名「説明が必要かね？」

固まったままのオレと葉山の背後に現れたのは、葉山達と同じグループで、このミュージカルの監督、演出、脚本担当の海老名妃菜である。

八幡「あのさ、オレ文実だから無理だ」

海老名「え!?!でも、葉山×ヒキタニは薄い本ならマストバイだよ!?
ていうかマストゲイだよ!」

八幡「は?」

何言ってるのこの人?

海老名「やさぐれた感じの飛行士を王子さまが純新無垢な温かい言葉で巧みに攻める、それがこの作品の魅力じゃない!」

そんな作品だけ?フランスの人達怒るぞ。

八幡「オレは文実だから無理だ。他を当たれ」

葉山「そ、そうだな。ヒキタ：比企谷は文実やつてもらってるわけだし、演劇だと稽古とかも必要になるからあんまり現実的じゃないよ」

ほう…まさかあの葉山からフオローを貰うとはな。でも、ナイスだぞ葉山。

海老名「そっか……」

葉山「そう、だからさ1度、全体的に考え直したほうがいいんじゃないか、……王子さま役とか」

んにやろく、それが狙いか！そして数分悩んだ後、黒板に書かれた文字を消して、再度キャストイングする。その結果が……

王子さま：戸塚

ぼく：葉山

海老名「やさぐれ感はちよつと減るけどまあこんなところかな……」

葉山「俺は、結局出なきやいけないんだな……」

海老名「お、そのやさぐれてる感じ、いいね〜」

がくりと肩を落とす葉山にグツジョブとばかりに親指を立てる海老名さん。ざまあねえな葉山！フツハハハハ！けど当の本人である彩加はキョトンとしている。

彩加「これ、すごく難しそうだけど……、ぼくでいいの？」

八幡「まあ、いいんじゃないやねえ？やってみればいいと思うぞ」

かおり「そうそう、やってみれば？」

千佳「私は合ってると思うよ」

彩加「そっか、分からないところだらけだからちやんと調べないと……」

八幡「いやこの海老名さんが書いたのは大分脚色されてるから、勉強するなら原作読んだ方がいいと思うぞ。なんなら貸そうか？」

彩加「ホント!?ありがとう八幡!」

ぱあつと花咲くような笑顔を向けてくれる彩加。これは帆波と違った癒さだな。そんな事を思っていると彩加はキャスト打ち合わせに呼ばれる。

彩加「じゃあ行ってくるね八幡、折本さん、仲町さん」

八幡「おう」

かおり「いってら〜」

千佳「頑張ってるね」

そうやってオレらは彩加を見送る。さてとオレはどうしようかね。委員会までまだ少し時間はあるしな。

千佳「委員会までまだ時間あるけど、どうする?」

八幡「そだな。1度部室にでも行くかね。これからしばらく部活に出られないだろうしな」

千佳「そうだね。私も行くのかな」

かおり「じゃ、私も」

八幡「いいのか?サボタージュして」

かおり「いいの、私もクラスの事で出られないからそれを伝えよう
と思ってる」

八幡「なるほどな」

かおりもクラスの出し物の手伝いで出られないしな。オレと帆波と千佳と雪乃は文実。かおりはクラスの出し物の手伝いだから誰も部活には出られないらしい。

教室を出て廊下に出ると他のクラスからも賑やかな声が聞こえてくる。どこから聞こえてるのか分からないが、バンドの練習をしている音なども聞こえてくる。でもそんな賑やかな声は特別棟に来れば聞こえてはこなく静かだった。そして部室に到着し、扉を開けるとそこには帆波と雪乃がいた。

八幡「うす」

かおり「おいつす!」

千佳「こんにちは」

帆波「やつほー3人共」

雪乃「こんにちは」

そう挨拶を交しいつもの席に座る。

かおり「ねえ、文化祭の準備期間中の部活はどうするの?」

八幡「多分中止だろうな」

雪乃「そうね。私と帆波さん、それに千佳さんに八幡君は文実だから来れないわね」

かおり「え?千佳と八幡は知ってたけど、まさか帆波と雪乃まで文実だったの?」

帆波「そうなんだ」

かおり「帆波はなんかわかる気がするけど、まさか雪乃まで文実とはね。なんだか意外だな」

雪乃「そうかしら？ 私としては八幡君が実行委員なのが意外だったけれど」

帆波「あ、それ私も思った〜」

八幡「いや、だからあれはくじ引きで当たってしまったんだよ」

かおり「ま、仕方ないよね」

そうだな。こればかりは何も言えない。

八幡「じゃあ、文化祭が終わるまで中止と言うことで良いのか？」

雪乃「ええ、それでいいわ」

八幡「わかった」

帆波「あ、そろそろ時間だね。会議室に行こっか」

雪乃「ええ、そうね」

八幡「だな」

かおり「私も教室に戻る」

それぞれカバンを背負い部室を出て、オレと帆波と千佳と雪乃は会議室へ向かい、かおりは自分の教室へと戻っていく。はあ：仕事するの嫌だけど、帆波との文化祭を過ごすために頑張りますかね。

それから数日、何事もなく順調に進んでいた。帆波の的確な指示や統率もあつて作業はスムーズに進んでいる。それにオレが所属している記録雑務の作業はオレと千佳が捌いている。それで少し遅れている仕事とかあれば手伝いをするという感じが続いている。後、ついでに副委員長も決まった。副委員長になったのは雪乃だ。帆波が雪乃にフォローして欲しいと頼まれ引き受けたという感じだ。帆波曰く委員長という立場は初めてで不安だから、頼りになる人をお願いしたらしい。雪乃はオレに頼めばいいのでは？と言ったけど、帆波は『確かに八幡には隣にいて欲しい気持ちはあるけど、私も成長する為

には1度離れて作業した方が良いと』と言った。そんな真剣な帆波を見て雪乃はそのお願いを聞いたらしい。

そして何度目かの定例ミーティングを迎える。定刻通りの午後4時。会議室に集まった文実メンバーを見渡して、帆波が号令をかける。

帆波「それでは定例ミーティングを始めます」

よろしくお願いします、それぞれ唱和し一礼する。まずは各部署ごとの報告事項からだ。

帆波「では宣伝広報、お願いします」

担当部長が現在の進捗状況を報告すべく起立する。

「提示予定の7割を消化し、ポスター制作についても、だいたい半分終わっています」

帆波「少し遅れ気味ですね。まずは掲示物から終わらせてください。あとポスター協力の店舗への交渉を速めにスタートしてください」

「はい」

そういうと宣伝広報担当の人がメモをとる。

帆波「では次に有志統制、お願いします」

「はい。有志参加団体は現在10団体です」

帆波「地域賞のおかげで増えていますが、地域との繋がりという姿勢をしてるから参加団体の減少は避けたいところです。あとはステージの割り振り、集客の見込みや開演時のスタッフ内訳をタイムテーブルの一覧にまとめて提出してください」

「わかりました」

そう言って着席する有志統制担当の人。

帆波「では次、記録雑務お願いします」

「特にないです」

記録担当はごく簡潔に述べた。実際、記録雑務の仕事は文化祭当日の記録班が最大の仕事だから、今の段階では仕事内容は少ない。だから他の部署の手伝いなどしかない。それにしても帆波はすごいな。どンドン捌いていく。これも帆波と雪乃の立ち回りのおかげだろう

な。2人で打ち合わせしたり、各部署の代表と話しているのを見かけたことがある。

この調子なら無事に文化祭を開催できるだろう。だが最後まで油断はしない方が良さだろう。

帆波「これで定例ミーティングは終わります。明日もよろしくお願ひします。お疲れ様でした」

号令がかかると文実メンバーが口々にお疲れお疲れと言いつつ席を離れていく。参った参ったや、疲れた疲れたや、超仕事したわとか聞こえてくる。

そんな中オレと千佳は帆波と雪乃の元へ向かう。

八幡「おつかれさん」

千佳「お疲れ〜」

帆波「あ、八幡、千佳、お疲れ様」

雪乃「お疲れ様」

千佳「それにしても2人はすごいね。どんどん捌いていくし」

帆波「そうかな?」

八幡「オレもすごいと思うぞ」

雪乃「私も同じ意見よ。さっきのミーティングもいい感じに進めてたじゃない」

帆波「そう? 私は雪乃ちゃんが隣でフォローしてくれるから、安心して作業できるんだよ」

雪乃「そう…ありがとう。フォローできているか不安だったけれど、そう言つて貰えると嬉しいわ」

帆波「うん、だからよろしくね雪乃ちゃん」

雪乃「ええ」

帆波「もちろん八幡と千佳もね」

八幡「おう、任せろ」

千佳「うん」

その後帰宅の用意をして会議室を出て、帰路に着いた。

そして帆波と一緒に帰っている途中

帆波「ふう…」

そう小さな一息が聞こえる。

八幡「大丈夫か？」

オレはそんな彼女の体調を心配し声をかける。

帆波「うん、大丈夫だよ。ありがとう」

そう言つてニコツと笑顔を見せてくる。

八幡「それなら良いんだがな。あんま無理するなよ。無理して倒れたら大変だからな」

帆波「うん、ありがとう」

八幡「だからオレにできる事があればなんでも言つてくれよ」

帆波「そう？……じゃあ1つ頼んでも良い？」

八幡「おう、良いぞ？何すればいい？資料の作成か？確認か？整理か？」

帆波「ううん、違う」

八幡「じゃあ、なんだ？」

帆波「えつと……ハグして欲しいの」

八幡「え？ハグ？」

オレの予想外の事を言われて少し驚く。オレはてつきり文実に関する手伝いだと思つてた。だけど帆波の口から聞こえてきたのはハグだった。

八幡「な、なんでハグなんだ？」

帆波「えつとね。この前テレビで見たんだけど、ハグをするとね疲れやストレスなどがとれるらしいの」

八幡「そう…なのか？」

帆波「うん…」

知らなかったな。まさかハグをするだけで疲れたやストレスが取れるなんてな。ん？待てよ？ハグをすると疲れたなどが取れるという事は、相手は誰でも良いのか？今はオレが近くにいますが、もし違う奴がいるとどうなるんだ？

帆波「安心して八幡。私がハグする相手はかおりに千佳、雪乃ちや

ん。そして最後に八幡だけだから」

八幡「心読むなよ」

ホントこの子エスパーかなんかかよ。

帆波「八幡がわかりやすいだけだよ」

八幡「さいですか」

帆波「うん。……でも最大の理由は八幡とハグしたいからだよ」

八幡「そ、そうか」

急に言われると恥ずかしいな。

帆波「だから……んっ」

そう言って帆波はオレに向かって両手を広げる。オレはそんな帆波に近づき、抱きしめる。

帆波「はふう……」

八幡「おふう……」

初めてハグした時と同じで思わず声が漏れる。あの時よりもお互い身長は伸びたけど、オレの方が一回り大きい。そしてあの時と同じで柔らかく、小さかった。それに髪からはシャンプーなのかいい匂いしてくる。

帆波「ふふっ、テレビが言ってた事は本当みたいだね。ハグをすると疲れやストレスがとれるっていうのは」

八幡「そ、そうか」

帆波「でもさ、好きな人とするからかな？より一層疲れとかとれるよ」

そう言いながら、帆波はオレの背に回した腕に更に力を入れる。この前はオレが帆波に言われて力を入れたけど、今回は帆波自ら力を入れて来ている。

八幡「あの……帆波さん？いつまでこうしていればよろしいですかね？」

帆波「うーん、ずっと」

八幡「え？」

今なんて言った？ずっと？

帆波「と言いたいけど流石に家に帰らなきゃいけないからやめとく

よ」

良かった……。確かにオレもずっとこうしていたいと思っただけ、流石に帆波もやめてくれた。

帆波「よしっ、疲れもとれたし、充電もできたしもう十分だよ」
そう言いながらハグをやめて離れる。

八幡「充電って、お前は機械かなんかかよ」

帆波「もー！そういうことじゃないよー！」

リスみたいに頬を膨らませる。そんな顔を見てオレはかわいいと思っただ。

帆波「ねえ、八幡」

八幡「なんだ？」

帆波「また、こうして疲れた時にハグしてくれる？」

そう言いながら聞いてくる。そんな帆波にオレはこう答えた。

八幡「疲れた時じゃなくてもいつでも良いぞ。オレは」

帆波「っ！……そ、そっか。なら、またお願いしようかな」

八幡「ああ」

でも、帆波の疲れやストレスなどがとれて良かった。でないといつか倒れてしまうのではないかと思ってしまう。だからできるだけ助けたい。そう思った。

帆波「じゃあ、帰ろっか」

八幡「ああ」

そしてオレは帆波と横並びになり歩き出す。すると帆波は自分の手をオレの手を握る……いや、握るといふより指を絡ませてくる。所謂恋人繋ぎというものだ。オレはあまりに急だったので身体がビクツとなってしまう。それで帆波もびっくりしてこちらを見てくる。

帆波「いやだった？」

と上目遣いでこちらを見てくる。

八幡「ち、ちげえよ。急だったからちよつとびっくりしただけだ。だから嫌じゃねえよ」

そう言っただけでオレは絡められた手に少し力を入れる。

帆波「そっか……良かった」

そう言うと安心したような表情になる帆波。

八幡「ほら、家まで送るから帰るぞ」

帆波「うん、ありがとう八幡」

そして手に温もりを感じながら帆波を家まで送った後、帰路に着いた。

第24話

八幡side

今日も文実の仕事の為、千佳と共に会議室へ向かう。定例ミーティングはないものの、仕事はある。そして千佳と会話をしながら向かう。そして会議室まで行くと、入り口で数人が中の様子を窺っている。何かあったのだろうか。

千佳「何かあったのかな？」

八幡「さあ？」

そんな会話をしながら会議室へ入るとそこには、何だか見覚えのある人がいた。

雪乃「姉さん何しに来たの？」

陽乃「何って有志団体に参加しようと思ってるね。OGとして。ねえ？良いでしょ」

雪乃「そう。まあ、いいんじゃないかしら」

陽乃「ほんと？ありがとう雪乃ちゃん。あれ？雪乃ちゃんって委員長じゃないの？」

雪乃「ええ、そうよ」

陽乃「じゃあ誰が委員長？」

帆波「あ、委員長は私です」

近くにいた帆波はサツと立ち上がり雪ノ下さんに自己紹介する。

陽乃「あー、君は確か……」一之瀬帆波ちゃんだったかな？」

どうやら覚えてたみたいだ。

帆波「はい、そうです」

陽乃「ふうん。……うん、一之瀬ちゃんなら任せられるかもしれないね」

帆波「ありがとうございますー！」

雪ノ下さんはどうやら本当に帆波の事頼りになると思っているようだ。その事に帆波も喜んでいるみたいだ。

陽乃「楽しい文化祭にしてよ？期待してるからね、一之瀬委員長

♪」

帆波「はい！」

あの人凄すぎだろ。一言で人に自信を与えてしまう圧倒的カリスマ。でも、アレはあの人にしかできない事なんだろうな。オレには到底無理だな。けど、帆波なら陽乃程ではないができるかもしれないな。そう思いながら会議室へと入る。すると、雪ノ下さんはオレと千佳に気づいた。

陽乃「あれ？比企谷君、と確か仲町ちゃんだっけ？」

千佳「あ、はい。そうです」

陽乃「そっか。あ、じゃあちよつと電話してくるね」

雪乃「ええ、わかったわ」

帆波「わかりました」

そう言つて雪ノ下さんは携帯片手に電話をし始める。

その後、電話を終えた雪ノ下さんは有志団体の申請書類を受け取り記入している。けれど、あれだけ目立ったのか、他の文実の奴らも雪ノ下さんの方に視線を移している奴らもいた。オレはオレで仕事をやる。けれど他の奴らもいつまでもそうしてはいられないと思つたのか、仕事し始める。帆波も雪乃もテキパキと仕事をこなしていく。

そしてそれから日がどんどん進んでいく。文化祭に向けて活気づくごとに仕事量は増えていくが、それを帆波と雪乃が均等に分けていく。忙しいが、最悪の事態にはなっていない。けど、やはり仕事は次々とやってくる。今もコンコンと会議室のドアノックされる。

帆波「どうぞー」

そのノックに帆波が答える。すると「失礼します」と一声かけて人影が入ってくる。その人物はオレと千佳とかおりと同じクラスでトップカーストの葉山隼人だった。

葉山「有志の申込書類、提出に来ただけけど…」

帆波「あ、それなら右奥だよ」

葉山「ありがとう」

と爽やかスマイルで答え、申し込みに向かった。申し込みのところ

には女子がいて、その子に話しかけるとその女子は若干頬を染めていた。いいねえ、モテモテだねえ。

そして数日後。文化祭のスローガンを決める会議が始まったのだがこれがまた難航していた。あるスローガンでは『面白い！面白すぎる！』潮風の音が聞こえます。総武高校文化祭』

なんだこれ。いや、ダメだろこれは。だってこれ十万石饅頭だし、それ埼玉だし、千葉的にはちよつと受け入れがたい。あるスローガンでは『ON E F O R A L L』板書される。だがそれも断念。そしてあれやこれやと案が出る。それでも決まらなかったのも、会議は終了した。そして翌日スローガンが決まった。活性化した会議は激論を重ね、長時間に及ぶ討論結果、最後はみんな頭が働かず、フラフラになりながらもなんとか1つの案に纏める事ができた。今年のスローガンは『千葉の名物、踊りと祭り！同じアホなら踊らにやsing a song！』に決まった。思ったけど、それでいいのか？でも、これが委員会メンバーはまだ話し合っている。

帆波「では、決定したスローガンの差し替えをお願いします」

帆波の指示のもと、文化祭実行委員会がさらに忙しくなる。ポスターの再制作や予算の計算やら、貼り直す時に画鋏の回収。回収するのはいいが、あれは数を数えているらしく、数が合わないとかダメらしい。やはりどこの部署も忙しい。もちろんオレと千佳が配属されている記録雑務も忙しい。仕事がどんどん積まれていく。それをどんどん消化していくが、また積まれていく。文実ってこんなに忙しかつたんだな。来年は文実にならないように気をつけねえとな。そんな事を思いながら仕事を終わらせていく。

暗闇の中、生徒たちのざわめきが響く。一つ一つの声はきつと意味のあるものなのだろうが、それが無数に集まると意味をなさない。

張り巡らされた暗幕は隙間ができないよう、周到に目張りされている。誰かの携帯電話や非常口の明かり程度の頼りない光源ではせい

ぜい掌程度までしか照らせない。

真つ暗で、何もはつきりとしらない。だから、今この瞬間、闇の中では誰もが1つになっている。すると生徒たちの声の一つ、また1つと消えていく。

そして手もとの時計は九時五七分を示していた。そろそろ時間だ。オレはインカムのスイッチを押し、発報した。押してからマイクが声を拾うまで若干ラグがあるので、二秒ほど待つてから話し始める。

八幡「開演3分前、開演3分前」

数秒と待たず、耳に嵌めたイヤホンにザツとノイズが走る。

雪乃「雪ノ下です。各員に通達。オンタイムで進行します。問題があれば即時発報を」

落ち着いた声音が話し終えると、ブツツと通話が切れる。それから立て続けにノイズが走った。

『——照明、問題なし』

『——こちらP A、問題ないです』

『——楽屋裏、キャストさん準備やや押しです。けど、出番までには間に合いそうです』

いくつもの部署から連絡が入る。正直把握しきれないが、雪乃のこゝだからその全てを把握出来ている事だろう。と言うか問題があればって言うてんのに、問題無いなら無駄な発報は控えろよ。リア充は本当こう言うの好きね。それよりも記録雑務はその日に多くの仕事分割り振られる。オープニングセレモニー、エンディングセレモニーでの舞台まわりの雑用やらもその範疇だ。そして各所からの情報は司令塔である雪乃に総合されていく。

雪乃『——了解。ではキュー出しまで各自待機』

オレは時計とにらめっこする。開演まで一分を切ると、体育館は静かの海と化した。誰もが囁くことを忘れ、同じ時を生きている。インカムのボタンを押し。

八幡「——十秒前」

指はボタンから離さない。

八幡「九」

眼は時計に釘づけだ。

八幡「八」

息を吸うのをやめる。

八幡「七」

合間合間に息を吐く。

八幡「六」

息を継ぐ僅かな瞬間。

『五秒前』

誰かがカウントを奪った。

『四』

もう随分と聞き慣れた、透き通るような声。

『三』

そしてカウントダウンの声が消える。ただ、誰かの指が『二』を刻んでるはずだ。二階のPA室をなんとなしに見上げてみると、雪乃と目が合った。目が合うと雪乃は頷いてきたので、オレも頷き返す。この場の誰もが心の中で『一』を数えたはずだ。

瞬間、ステージ上で目が眩むほどの光が爆ぜる。

城廻「お前ら、文化してるかー!?」

「うおおおおおおお!!」

ステージに突如現れためぐり先輩の叫びに、観客席から怒号が返される。

城廻「千葉の名物、踊りとー!?」

「祭りいいいいい!」

そのスローガン、浸透してるのかよ……。

城廻「同じ阿呆なら、踊らにやー!?」

「シンガツソーラー!」

城廻先輩の謎のコール&レスポンスで生徒たちは一気に熱狂する。そしてステージに現れたのはダンス部とチアリーディング部の皆さん。それにつられたのか、生徒たちは冗談混じりに踊ってみたり、手を大きく振り上げたりと盛り上がっている。……うわー、バカだなー。うちの学校。なんだよ文化してるかって。意味わかんねえよ。

まあ、そんなことよりも仕事仕事。

『こちら、P.A。間もなく曲あけまーす』

P.Aから連絡が入る。

雪乃『了解。一之瀬委員長。スタンバイします』

いつもなら名前で呼ぶがこう言う時は苗字呼びが正しいだろうな。そしてそのキュー出しは司会をつとめる城廻先輩にも伝わっているのだろう。ダンスチームが下手袖へはけて、上手袖にいた城廻先輩が呼び込む。

城廻「では、続いて文化祭実行委員長よりご挨拶です」

ステージ中央へと歩く帆波の表情は若干硬い。そりやそうだろうな千人を越す人々の視線が一斉に注がれてるんだから。そして帆波はその場で数回深呼吸をした時だった、オレと目が合う。そしてオレは口パクで「がんばれ」と伝える。それを見た帆波は小さく頷き、ニコツと笑う。それにより緊張が解けたのか、冷静に挨拶を済ませた。

オープニングセレモニーが終わると、いよいよ文化祭も本番だ。文化祭は2日間行われるが、一般公開は2日目のみ。1日目は校内のみとなる。それに文実の仕事もそこまで多いわけではない。精々が見回り程度。一応クラスの方へ行こうと思ったのだが、かおりと千佳に「帆波の所に行って、一緒に回ってこい」と言われて、追い出された。まあ、確かに去年は帆波やかおり、千佳、雪乃と回ったからな。今年は2人で回るのも悪くないかもな。

「ヒツキーー！」

そんな事思っていると、後ろから声をかけられる。この声の主が誰なのかわかってはいるが、正直関わりたくない。なのでオレはその声の主を無視することにした。だってあの事であれ以来何も言われてないし、それに嫌いだしな。そう思いオレは帆波の所へ急いで向かおうとすると……

結衣「ちよつと！なんで無視するし！」

と大声で言われて、腕を掴まれる。今度はちゃんと身構えていたの

で大丈夫だったが、正直めんどくさい。周りの奴らもオレと由比ヶ浜を見ているから、早くここを立ち去って帆波の所へ行きたい。

八幡「……なんだよ。由比ヶ浜」

オレは腕を掴んでいる由比ヶ浜に返事をする。

結衣「ヒツキー今からどこ行くの？仕事は？」

八幡「……仕事はない。あつても見回り程度ぐらいだが、それがどうしたんだ？」

結衣「だ、だったらさ！あたしと一緒に回らない？」

由比ヶ浜は何やらモジモジしながら言ってくる。というかなんて言った？一緒に回らないだ？ふざけてるのかこいつ？あの事で何もしていないのに、どんな神経でオレを誘っているのだろうか。といひかなんでオレを誘おうと思っただらうか。

八幡「無理だ」

オレは即答するように答える。

結衣「なんでだし！」

またもや大声で言う由比ヶ浜。うるさいよ。

八幡「なんでつて、行く所があるからだ」

結衣「行くとこつてどこだし！」

八幡「なんで言わなくちやいけねんだ」

結衣「教えてくれてもいいじゃん！」

八幡「お前に教える理由はない。というか早く離せ」
そう言つてオレは由比ヶ浜の腕を振りほどく。

結衣「あつ……」

八幡「じゃあな」

結衣「ちよつと待ってて！」

八幡「んだよ。まだあんのか？」

早く帆波と会いたい。

結衣「あたしと一緒に回ろうよ」

八幡「だから無理だつて言つてんだろ」

結衣「なんでだし！」

八幡「オレと一緒に回る奴がいるから」

結衣「じゃあ、あたしも一緒に回ればいいじゃん！そんなことも分かんないとかヒツキーマジキモい！」

またそれか。お前それを言うの好きだよな。

八幡「キモイなら一緒に回ろうとするなよ」

結衣「えっ……」

八幡「だってそうだろう。最初会った時も、今もオレの事キモイって言ってだろう。なに？お前はキモイ奴と一緒に回るのが好きなの？」

結衣「そ、そうじゃないけど……」

八幡「というかオレはそいつと2人で回りたいたいんだ！お前みたいな他人と回りたくはない」

結衣「そ、そんな……」

八幡「話は終わりか？じゃあな」

オレはそう言って由比ヶ浜に背を向けてこの場を立ち去る。くっそ由比ヶ浜のせいでちよっと目立ってしまったじゃねえか。それに無駄な時間を使ってしまった。帰りたいと思ったが、そうするとかおりと千佳に追い出されるし、それにまた由比ヶ浜に絡まれるかもしれないしな。それなら一刻も早く帆波の所へ行こう。そう思いJ組へと向う。そしてJ組の教室の前につくと同時に教室から帆波が出てきた。

帆波「あれ？八幡？」

八幡「よお」

どうやら帆波はその場にオレがいる事に驚いているようだ。

帆波「どうしたの？」

八幡「かおりと千佳に追い出された」

帆波「えー！何それ!?どういうこと？」

八幡「やる事ないんだったら帆波と回ってこいと言われてな」

帆波「あ、そうなんだ」

八幡「ああ、だから一緒に回ってくれるか？」

帆波「もちろん！それに私も八幡の所に行こうと思ってたから」

八幡「お、おう。そうか」

帆波「うん！去年はかおり達と一緒にだったけど、今年は八幡と2人で回りたいと思ってたから」

八幡「そっか。じゃあ行くか」

帆波「うん」

帆波はオレの隣に来たと同時に歩き出す。けど回ると言っても行き先が決まってるわけでもなく、だからと言って互いに目的地を定めることも無くフラフラと適当に歩き出した。周りは文化祭とあつてそこらじゅう盛り上がっている。喫茶店やお化け屋敷などいった店が並んでいた。それらを見ながら歩いていると1人の女子生徒がメイド服姿で呼び込みをしていた。へえ、メイド喫茶ね。本当にやるクラスあつたんだな。アニメやラノベなのでやるのを読んだり見たりしたけど、それを現実でやる所、今日初めて見たわ。そんな事を思っていると腕を引き寄せられた。横を見ると帆波が頬を膨らませていた。

八幡「ほ、帆波？」

帆波「さつきからメイド服を着た子見てるけど、そんなにメイド服好きなの？」

八幡「い、いや、そうじゃなくて……」

帆波「そ、それなら私が……着てあげるよ……」

八幡「は？」

思いもよらない言葉が聞こえた。

帆波「だ、だからメイド服ならいつでも私が着てあげるって言ってるの！」

八幡「いや、だから違うって。見てたのは本当にメイド服喫茶してるクラスが珍しかっただけで、メイド服が好きで見てた訳じゃない」

帆波「え？そうなの？」

八幡「ああ」

帆波「そうだったんだ」

ホッ、良かった。なんとか誤解は解けた。

帆波「でも本当に好きじゃないの？」

八幡「なっ！」

まさかの追求！まだこれ続くの？ていうかメイド服だけで会話してない？

帆波「ねえ？どうなの？」

八幡「くっ……」

帆波「正直に言っちゃいなよ。メイド服、好き？嫌い？」

八幡「ぐっ……き、嫌いではない」

帆波「ふーん、そうなんだ。八幡はメイド服好きなんだ」

ニヤニヤしながら言ってくる帆波。

八幡「そこまで言ってねえだろ」

いや、もうホントやめてください。そういう解釈するのやめてください。メイド服だけでどんだけ話すんだよ。もうやめてください帆波さん。

八幡「そ、そんな事よりも早く行くぞ。どこ回る？」

オレはまた追求されるのを阻止するために露骨に話を逸らす。

帆波「そうだな。あ、折角だし八幡のクラスの演劇見に行こう。かおり達にも挨拶したいし」

八幡「わかった。じゃあ行くか」

帆波「うん！」

というわけで、目的地は二年F組の教室へと決まったので、オレと帆波は教室へと向かった。というか何故腕を組んだままなの？

暗闇の中、星の王子様の公演第一回が始まる。見たところ、席は全て埋まり満員御礼のようだ。といってもいるのはほぼ全員女子の中に男子はオレだけ。不振な目で見られないように帆波が近くにいたのでそこは助かった。というかここにいる女子って全員葉山目当てか？

そんな中、ちょうど王子様がキツネを誘うシーンだった。オレはこのシーン好きだ。

彩加「僕と一緒に遊ぼうよ。僕は今すごく悲しいんだ……」

顔を俯かせ、寂しげに台詞を言う彩加。いい、ぐつとくる。ちなみに海老名さんが書いたシナリオ第1稿では「やらないか？」になっていたらしい。ホント何考えてんだあの人は……。

王子さまとキツネは対話を重ねていく。そしてお互いがお互いを飼う慣らすのだ。それでも別れが訪れる。最後にキツネは王子様に1つ秘密を教える。星の王子様の中でも有名なシーンだ。

大切なものは、目に見えない。

キツネと別れて後、王子さまはまたいろいろな場所を巡り、舞台は再び砂漠へと戻る。「ぼく」と王子さまは砂漠の井戸を探しに行くのだ。

彩加「砂漠が綺麗なのはどこかに井戸を1つ隠しているからだよ」
彩加の言ったセリフから観客席から感嘆の声が漏れた。こちらも『星の王子さま』で代表的な一節だ。知っている人も多いと思う。やがて、会話を重ね、時間を重ね、心も重ねた「ぼく」と王子さまにも別れの時がやってくる。ちなみに海老名シナリオ第1稿ではさらに唇と身体も重ねることになっていた。もうホントあの人は……。

葉山「王子さま……。ぼくは君の笑う声が、好きだ……」

葉山の台詞に女性たちが色めき立つ。やっぱ葉山目当てか？

葉山「ぼくたちはずっと一緒だ……」

これまた葉山の台詞にふーっと満たされたようなため息が観客席に充満する。そして、ついに別れのシーンがやってきた。へびに噛まれ、音もなく倒れる王子さま。儂げで消え入りそうな彩加の演技に客席が息を呑むのがわかる。舞台は暗転する。一筋のスポットライトが葉山に当たった。「ぼく」のモノローグでラストシーンが締めくくられる。すると、客席からは万雷の拍手が鳴り響いた。

F組の演劇を観終わった後、帆波が一言言った。

帆波「なんか凄かったね」

八幡「ああ」

登場人物は全員男。主役二人の友情を描いた筈なのに、それ以外の何か邪な思惑が見え隠れしているのは脚本が海老名さん故致し方なしと言うほかない。

かおり「お、帆波」

帆波「あ、かおり」

かおり「やつほく。演劇見に来てくれたんだ」

千佳「どうだった？」

帆波「うん。すごく良かったよ」

内容を無視してしまえばかなり上出来だったと言えるだろう。

かおり「ホント良かった！」

千佳「本当にね」

かおり「それにしても2人はやっぱり文化祭デート？」

帆波「一応見回りって事になってるよ。それにデートは八幡から誘われたから」

千佳「へく、やるねく！」

そう言っただかおりと千佳はニヤニヤしながらオレと帆波の方を見ている。正直ウザイ。

かおり「ならさく、手を繋がないとダメだね」

千佳「そうそう、デートなんだし」

なに？手を繋がないとダメだと？何故そこまでしないとダメなんだ。しかもここ学校の中だぞ。それに……

帆波「うーん、手は繋いでないけど、腕は組んだよ」

かおり「おお！これは中々大胆ですなあ」

千佳「だねく」

なんだこいつらは。なんかキャラおかしくねえか？それにかおりの喋り方がなんだかおばさんみたいになってる。それとウザイ。

かおり「まあ、話は後にして、デートの続きに行ってきたらどう？」

千佳「そうそう」

また、ニヤニヤし始めたぞこの2人。

帆波「それもそうだね。いつまでもここにいられないし。じゃあ行

こっか八幡」

そう言つてスルツと腕を組んで、引つ張つていく。

八幡「お、おい、帆波」

帆波「ほら、早く行くよ。見回りもしないとダメなんだから」

そう言われてオレは帆波に教室の外へと連れて行かれた。

教室の外へと連れ出されたオレは帆波に腕を組まれながら、見回りの仕事する。何かトラブルや問題行動を起こしているクラスがないか、周囲に注意しながら進む。すると何やら甘い匂いが鼻をついた。

帆波「なんだろこの匂い」

八幡「そうだな。あ、あそこからみたいだな」

帆波「え？あ、ホントだ」

オレの指さした方向にはとあるクラスの喫茶店があった。多分ここから甘い匂いがしたのだろう。

帆波「ねえ、ちよつと寄つてみよう」

八幡「え？見回りはどうするんだよ」

帆波「それも大事だけど、私達も文化祭楽しむ権利はあるんだから、ちよつとぐらい寄つても大丈夫だよ。それに他の人達も見回りしてるんだからいいじゃん」

八幡「おい、それでいいのか委員長」

帆波「むつ、別にいいじゃん。ね？」

そう言つて帆波はこてんつと首を傾げだ。ちよつとそういうのズルいと思いますよ帆波さん。

八幡「まあ、そうだな。オレらも楽しみたいしな。それに腹ごしらえしとかなないとダメだしな」

帆波「もお、素直じゃないんだから。じゃあ早く行こつ」

八幡「ああ」

というわけでオレと帆波は喫茶店の中へと入る。するとすぐに中にいた店員（生徒）がやつてくる。

「いらつしやいませ。2名様ですね。こちらになります」

そう言われて奥の席へと案内される。

「こちらメニューになります。お決まりになりましたらお呼びください」

そう言って席を離れていく女子生徒。オレと帆波は渡されたメニューをみる。

帆波「どれにする?」

八幡「そうだな…」

メニューはそこまで多くはないが、それなりにある。ホットケーキやらサンドイッチやら喫茶店によくあるメニューが揃っていた。

帆波「ね、八幡決まった?」

八幡「ああ、帆波は?」

帆波「うん、決まったよ」

八幡「そうか、じゃあ呼びますか」

帆波「うん、そうだね。すみませくん注文お願いします」

「はい、ご注文を伺います」

八幡「えっと、コーヒー一つ」

「コーヒーがお一つ」

そう言ってメモをする生徒。

帆波「私はオレンジジュースとこのカップル専用あまあま☆ホットケーキ♡をお願いします!」

満面の笑みでそう言う帆波。その注文を取る生徒は何やらニヤニヤして、なんだか暖かい目になっているような、なっていないような。気のせいだよな。

「ご注文繰り返ささせていただきます。コーヒーが一つ、オレンジジュースが一つ、そしてカップル専用あまあま☆ホットケーキでよろしかってですか?」

帆波「はい!」

「かしこまりました。では失礼します」

そう言って一礼して立ち去っていく生徒。それよりも……

八幡「おい、帆波」

帆波「ん?なに?」

八幡「なに?じゃあねえよ。なんだ今の注文。それになんだあの

ホットケーキは」

帆波「え？ああ、カップル専用あまあま☆ホットケーキ♡の事？」

八幡「ああ、それだよそれ。なんつー名前のホットケーキだよ。それになんでそれを頼んだんだよ」

帆波「え？いいじゃん私達恋人なんだら」

八幡「そうだけど……まあ、いつか」

オレも少し腹減ったしちょうどいい。そして待つこと数分、注文した品が届く。オレ達が注文した品を届けた生徒は席を離れていく。

帆波「うわあ、美味しそう」

ホントに美味しそうだが、このホットケーキハチミツに生クリームものっている。これは名前通りあまあまだな。胸焼けしねえかな？そんな事を思っていると帆波がフォークでホットケーキを一口サイズに切り分け、それをフォークで刺してそれをオレの方に差し出してくる。

帆波「八幡はい、あーん」

やはりそういうことだろうな。それに帆波の顔若干赤くなっている。

八幡「ま、待って帆波。それはさすがにここではダメだ」

帆波「い、いいから早くしてよ。は、恥ずかしいんだから！」

八幡「恥ずかしいのなら、やるなよ」

帆波「うっ…は、早くう……」

そ、そう言われてもな。オレだって恥ずかしい。でもそんな事思っている場合じゃない。周りの視線が集まってきている。くっそ……。そしてオレは差し出されたホットケーキを食べる。めちやくちや柔らかいし、めちやくちや甘い。やはり名前の通りこのホットケーキめちやくちや甘い。

帆波「どう？」

八幡「うん、うまい。後甘い」

帆波「にやははは、だよ。見たらわかるよ」

ホント甘すぎるわ。

帆波「じゃあ次は八幡が食べさせてよ」

八幡「は？なんでだよ」

帆波「だってフォーク1つしかないもん」

八幡「なんでだよ。じゃあ帆波が自分で食べればいいだろう」

帆波「私は八幡に食べさせて欲しいの、はい」

帆波はそう言つてフォークを差し出してくる。これはやらないといけない状況になってはないか。それにさつき帆波恥ずかしいとか言つてたのになんでやらせんだよ。それに周りの視線が集まつてきている。やはりやらないとダメらしい。……えーいままよ！

八幡「わかつたよ」

フォークを受け取り、ホットケーキを切り取り、それを帆波に差し出す。くっそ……恥ずかしいけどやるしかない。

八幡「ほ、ほれ、あーん／＼」

帆波「あーん」

帆波はそう言いながら差し出されたホットケーキを食べる。

帆波「うん、確かに甘いね」

八幡「まつたくな」

オレはそう言つて頼んでいたコーヒーを口にする。このコーヒーはあまり甘くなくて良かった。このホットケーキが甘いからこのコーヒーがあつて良かった。

帆波「じゃあ次は私ね」

そう言つて置いてあつたフォークを手に取り、またホットケーキを差し出してくる。

帆波「はい、あーん」

オレはまたもやし出し出されたホットケーキを食べる。でも恥ずかしいので黙つて食べる。

帆波「はい、あーん」

オレが食べ終わったと同時にまたホットケーキを差し出してくる。そしてオレはまたそれをホットケーキを食べる。そして次はオレが差し出し帆波が食べる。そしてまた帆波が差し出してくるのでそれを食べ、またオレが差し出しそれを帆波が食べるの繰り返しを何度かした後、会計を済ませたオレと帆波は見回りを再開させた。

第25話

八幡side

帆波と一緒に文化祭を行動した日から翌日の文化祭2日目。2日目である今日は一般公開日で、ご近所やら他校のお友達やら受験し志望やらの来客もたくさんやってくるのだ。土曜日なのでお休みの人も多く、結構な賑わいを見せていた。どこか内輪ノリでリハーサルめいた空気があった1日目とは違い、その分だけトラブルも多くなる。だが、文実フルメンバーで対応にあたるため、2日目の多い日でも安心。そんなわけで今日は一日中文実の方でお仕事である。近隣の中高生を中心に、家族連れやマダムたち、近所のご老人などの多種多様な客層がやってくる。そんな中オレの仕事は写真撮影である。適当に撮ってあれば良いかと思っていたのだが、そうはいかなかった。いざ、撮影を始めると「写真撮るのとか、やめてください」とか普通に言われるからだ。まあ、気持ちはわからんでもないがな。でもなこうして記録に残さないと、文化祭終了後に各生徒が望むものを購入したり、卒業アルバムに掲載されないのだ。そんな事を考えながら写真撮影をしていると、飛びかかってきたような衝撃を背中に受けた。

小町「お兄ちゃん！」

八幡「おお、小町。それに瑞希来てたんだな」

小町「うん、そうだよ。ね？」

瑞希「うん」

小町「帆波お姉ちゃんとかは？」

八幡「かおりは多分教室にいます。帆波と千佳と雪乃は文実の仕事をしていると思うぞ」

瑞希「お姉ちゃんと一緒に回らないの？」

八幡「それは昨日一緒に見回りました。というか今日はお互い仕事があるからな」

小町「お兄ちゃんが仕事!？」

八幡「ちよつと小町ちゃん？」

あまりにも驚きすぎでは？

小町「なーんてね。冗談冗談」

八幡「このやろう」

小町「ニヒヒ。まあ、それより小町と瑞希ちゃんは色々見て来ます！じゃあねお兄ちゃん！ ちゃんとお仕事するんだよ！」

八幡「へいへい。気をつけるよ」

小町「うん、わかった。じゃあ行こ瑞希ちゃん」

瑞希「うん。八幡お兄ちゃんまたね」

八幡「おう」

小町と瑞希は仲良く2人で歩いて行つた。さてと、仕事を再開するかと思つた時だった。オレの視界が塞がれ真っ暗になつたと思つた瞬間：

「だーれだ」

と聞き覚えのある声がオレの耳元で囁かれた。あのですね：オレ耳弱いんですよ。それにオレの背中に何やら2つの柔らかいもので当たってるんですよ。こんな事をするのはオレが知る限り1人だけである。

八幡「帆波だろ」

オレはそう言い塞いでいた手をどかして後ろを振り返つた。そこにはやはり予想通りの人物がいた。

帆波「せーかーい！」

我が彼女、一之瀬帆波がニッコリスマイルでそう言つて手をフリフリしていた。

帆波「どう？びつくりした？」

八幡「まあ、少しな」

帆波「えへへ、やったね」

八幡「…かわいい」

帆波「にや!?は、八幡!?!／／／」

あ、やっべ思わず思っている事を口にしてしまった。

八幡「…す、すまん」

帆波「う、ううん。だ、大丈夫だから／／／」

八幡「そっか」

帆波「うん。あ、そういえばメガネ大丈夫だった？メガネ越してやっちゃったけど」

八幡「ん？ああ大丈夫だ。伊達メガネだし気にするな」

帆波「ほんと？良かった。1回やってみたかったからさ」

八幡「そうか。んで、帆波は何してるんだ？仕事はどうした？サボタージュか？」

帆波「違うよ。人聞きの悪い事言わないでよ。今日も見回りをしているの」

八幡「それって副委員長の仕事じゃなかったけ？」

帆波「うん、そうなんだけど。それを交代しながらやってるの」

八幡「ほーん」

帆波「そういう八幡は何してるの？」

八幡「オレも仕事だ。写真撮影」

帆波「そっか、じゃあ一緒に見回りしよ」

八幡「いや、なんでだよ」

帆波「えっく、だってそれが仕事であるじゃん。それに一緒に見回りしたら楽しいし、八幡もそれで色んな所で写真撮影できるでしょ？1人だと怪しまれるし」

八幡「……前者はともかく後者は確かに言ってるな」

帆波「でしょ？」

八幡「…はあ、わかったよ。見回りに付き合うよ」

帆波「ホント？ありがとう！」

こうしてオレは帆波と一緒に見回りをしながら写真撮影をしている。帆波と一緒に行動する前よりも写真撮影は進んでいる。これもオレが1人でメガネをかける前だったら、すぐさま通報されているレベルである。そんなことを考えながら写真撮影を続ける。それにまさか今日も帆波と行動するとは思ってなかったな。まあ、でも嬉しいけどな。

そんな中、三年のフロアを回っていると何やら人集りが出来ているのを見つけた。列の整頓はしっかりなされているから一見問題無さそうだが、教室の中からはキャーキャーと悲鳴が聞こえる。

帆波「あ、あのクラス。申請書類とやっていること違う」

3年B組の壁には洞窟っぽい装飾が施され、インディ・ジョーンズっぽい書体で『トロツコロツコ』と書かれた看板がある。

八幡「そうなのか？」

帆波「うん、えつと…確か」

そう言っただけで帆波は文化祭のパンフレットを取り出して、オレにも見せてくる。

帆波「えつと…3B、3B…あ、あつた。ここ」

そう言っただけで指で指してくる。そこを見てると3年B組の展示内容を見てみると『ゆつくりと進むトロツコで、内部の装飾、ジオラマを見せる』というコンセプトらしい。が中から聞こえてくるのはキヤーカーという悲鳴。そして、ガタガタと激しい音。明らかにジェットコースターみたいな感じになっている。

帆波「ちよつと注意しないとね。行くよ八幡」

八幡「はいよ」

トコトコと歩いて3年B組の教室前にいる先輩に話しかける。

帆波「すみません。代表者の方はいらつしやいますか？申請内容と違うようですが」

すると言われた3年B組女子たちの顔色が変わる。

「ヤバイ！文実に見つかった！」

「どうするどうする!?」

「えつと、取り敢えず乗せちゃえ！」

帆波「え、ちよつと…！」

帆波はものすごいスピードで3年B組の女子先輩にトロツコに押し込まれようとしていた。すると帆波はオレに視線を送ってきた。帆波さんや、気持ちちは分かるけどそれは逆効果だ。

「そつちの子も文実!?」

「腕章してるから取り敢えずその子も乗せちゃえ！」

そう言っただけでオレを取り囲む賑わい男の先輩方。正直言っただけで綺麗なお姉さんを期待してなかったと言えは嘘になる。教室の中にずると引きずり込まれる。ちよつと！誰ですか、今オレのお尻触った人

は！そして抵抗虚しくトロツコの中へと押し込まれる。オレは最後に抵抗してなんとか帆波とぶつかることは避けられた。

「えー、本日はトロツコロツコにご乗車いただきありがとうございます。それでは神秘の地下世界を存分にお楽しみください」

何やら口上が入るや否や動き出す。

八幡「大丈夫か：帆波」

帆波「うん、なんとか大丈夫」

無事ならいいのだが、トロツコの中は、かなり狭い車内で身を寄せ合って座っているわけで、故に互いの顔が超至近距離にあるわけ。そのことを正しく認識した途端に顔に熱が集まってくる。こればかりは仕方がない。だって超かわいい帆波の顔が直ぐ近くにあるんだぞ。それに帆波はオレの腕にしがみついている体勢である。ていうか揺れすぎだろ、それに暗いな。これはまた恐怖感を感じざるを得ないだろう。それにれ人力で動かしてるんだよな。そう思うとめっちゃや怖え。怖いのは帆波も同じなようで、密着度がさつきよりも増している。やばいやばい、なにかもう柔らかい感触とかいい匂いとかで頭がクラクラして恐怖は一瞬で吹っ飛んでしまった。そしてなんとかトロツコはゴールにたどり着いた。完全に停止したのでオレと帆波はトロツコから降りる時、帆波が少し憔悴しているように見えたので、手を貸してやることにした。

「どうよーうちの『トロツコロツコ』！」

自慢気にそう言うってくるが、問題だらけだ。確かに帆波とくつついたのは良かったけど、それでも文実としては見過ごせない。

帆波「どうよもなにも申請内容とは違うのでは？」

「ちよつとだけねーフレキシブルな現場判断でね！」

それは悪ノリというだ……。この手の連中は無理に何か言っても聞き入れやしない。

八幡「どうする？楽しんでいる人もいるし、安全面に問題ないなら、いいんじゃないの？」

帆波「うーん…：そうだね……」

帆波はその場でしばし考える。

帆波「うん、そうだね。それでは追加で申請書類を出してください。それから皆さんに説明をお願いします」

「わかりました」

帆波「よろしくお願いします」

一礼してから帆波はその場を後にする。オレも一礼してから帆波のあとをついて行く。

八幡「大丈夫か帆波。どっか座れるところでも探すか？」

帆波「うん、そうだね。そうしよつか」

そしてフラフラ歩いて中庭のベンチへと辿り着いた。オレはお茶を2本買ってそのうち1本を帆波に差し出す。

帆波「ありがとう。幾らだった？」

八幡「これぐらいいいって。気にするな」

帆波「そう？ありがとう」

オレは帆波の隣に座ってお茶を飲む。ふう…さすがにあのアトラクションは疲れたな。その場でしばし無言のまま過ごす。すると、帆波がすつと立ち上がった。一体どうしたんだ？

帆波「ふう、休憩終わり」

八幡「もういいのか？」

帆波「おかげで楽になったよ」

八幡「そっか、なら良かった」

帆波「あ、それと八幡」

八幡「なんだ？」

帆波「私、一旦抜けるね」

八幡「どうかしたのか？」

帆波「うん、実はライブをするんだ」

八幡「え、何それ聞いてない」

初めて聞いたぞ。かおり達もそんな素振り見せなかったぞ。ホントいつからだよ。

帆波「そりや言っただけじゃなかったしね。メンバーは私とかおりと千佳と雪乃ちゃん。それに陽乃さんも手伝ってくれるんだ」

八幡「へえ〜」

雪ノ下さんまでも手伝ってくれるんだな。

帆波「そんな感じ。だからさ：見に来てくれないかな？」

そう言つて上目遣いで見てくる。ちよつとそれは卑怯ですよ。

八幡「言われなくても見に行く」

帆波「ホント!? ありがとう！じゃあ約束だよ！絶対に見に来てね」

八幡「ああ」

帆波「じゃあ私行くから」

八幡「おう」

帆波は小走りでこの場を去っていく。そしてオレは持っていたパ
ンフレットを見るとそれらしき演目があった。そういえば帆波も雪
乃のもライブをしている間は委員長も副委員長もいなくなつてしま
うが、まあそこは城廻先輩がいるから大丈夫だろう。

さてと、オレもそろそろ体育館の方へ行きますか。そう思い立ち上
がり歩き出す。

結衣「ヒツキー！」

ちつ……めんどうな奴に見つかったな。どうする？やはりここは
無視するのが一番だな。

結衣「ちよつ！無視すんなし！」

うるさい。周りもこつちに視線が集中しているだろうが。迷惑極
まりないな。さあて、どうすつか。無視してもいいんだが、またや
やこしいことになりそうだしな：はあ：どうしようかね。

八幡「……なんだ」

気だるげにそう答える。

結衣「え、えつと：これからどこに行くのかなつて」

八幡「それ、お前に言う必要がある？」

結衣「教えてくれたっていいじゃん!!」

八幡「うるさい。ちよつと声の大きさを抑えろ」

結衣「はあ!? 今はそんなの関係ないじゃん！」

はあ：やはりこいつと関わりたくないな。なのにあつちはウザイ
くらい関わってくる。一体どうしましょうかね。それよりも早く体
育館に行かねえとな。

八幡「オレはこれから予定があるんだが」

結衣「その予定って何？」

八幡「それこそお前に言う必要はない。お前には関係ない事だ。それになんでお前に教えなくちゃならんのだ？」

結衣「教えてくれたっていいじゃん！同じクラスメイトなんだから！」

八幡「お前ホントそればつかだよな。はあ…もういいや。じゃあオレは行かないといけないところがあるから」

結衣「じ、じゃああたしも一緒に「無理」いって、なんでだし！」
八幡「だからうるさいって言ってるだろう。それに昨日も言ったけどオレはお前と一緒に行動したくないんだ」

結衣「そ、そんな…」

そう言って由比ヶ浜は俯いてしまった。オレはその隙にこの場を離れて急いで体育館へ向かった。由比ヶ浜のせいで余計な時間食っちゃったからな。そしてなんとか間に合ったが、人が多いな。まあ、でもオレは後ろの方から舞台を見ることにした。すると今発表している人が終わり舞台を後にしていく。そして次に舞台上がってきたのは帆波達だ。服装は制服だが楽器を持って入場してくる。帆波はどうやらセンターみたいだ。

帆波『皆さんこんにちは！今日は私達の総武高校の文化祭に来てくれてありがとうー！今日は2曲歌いたいと思いますので、最後まで付き合ってくれたら嬉しいです！では、メンバーの紹介をしたいと思います！まず！まず私から、私は一之瀬帆波ですよろしくお願いします』

かおり『はーい、次は私。私は折本かおりです。頑張りますので応援よろしくです』

そう言ってウインクしながら敬礼をする。

千佳『次は私。私は仲町千佳です。最後まで楽しみたいと思います。よろしくお願いします』

雪乃『次に私。私は雪ノ下雪乃です。最後までよろしくお願いします』

陽乃『最後は私！私はさつき紹介した雪乃ちゃんのお姉ちゃん。雪

ノ下陽乃でーす！よろしくね！』

全員の紹介が終わると観客席から応援の声が上がられる。所々女子の声でかわいいとか、キヤーと言った声が聞こえてくる。

帆波『それでは盛り上がっていきましよう！まず1曲目は学園天国！』

カツカツカツと雪ノ下さんが合図をして演奏を始める。会場はとてつもない熱狂の渦に包まれている。立ち上がって手拍子をする者がいれば、座ったまま盛り上げる者など色々いた。かなり盛り上がっているようだ。観客達は飛び跳ねたり、どこからか持ってきたペンライトを振り回したりヘドバンしたり。もうやりたい放題だ。

1曲目が終わると盛大な拍手が舞い上がる。

帆波『ありがとうございます！でも後一曲だけ付き合ってください！二曲目に歌うのは皆さんもご存知小さな恋のうたです！行きます！』

そしてまたカツカツカツと雪ノ下さんが合図をして演奏を始める。2曲目でも1曲目と変わらない盛り上がりだな。それにしても気の所為だろうか。2曲目を歌い始めてからか、帆波がオレの方を見ているように見えた。

そしてその後帆波達の演奏が終わった後、オレは帆波達に会った。

帆波「あ、八幡。どうだった？」

八幡「おう、最高だったぞ」

帆波「ほんと!?ありがとうございます！練習したかいがあったよ」

陽乃「良かったね」

帆波「はい。陽乃さん手伝ってくれてありがとうございます」

陽乃「いいのいいの。私も後輩の手伝いができて嬉しいよ」

帆波「かおり達もありがとうね」

かおり「全然！私も楽しかったし」

千佳「私も楽しかったから」

雪乃「それを言うのなら私もよ」

帆波「ホントありがとうね」

八幡「それにしても雪乃。お前よく体力もったな」

雪乃「ええ、私もかなり驚いているわ」

体力がないと雪乃自身言っていたのにもつとはな思わなかった。それか徐々に体力がついたのか知らないけどな。

そしてその後、いくつかの演目があり、それが終わるとエンディングセレモニーが行われた。実行委員長である帆波から有志の地域賞や最優秀賞などが発表され、講評と締め言葉の言葉を舞台袖で聞きつつ、文化祭は恙無く幕を閉じた。

かおり「終わったー！」

千佳「だね」

雪乃「そうね」

帆波「でも楽しかったなあ」

八幡「ああ、そうだな」

由比ヶ浜が関わってきたのを除けば楽しい文化祭だった。

帆波「ねえねえ、皆は後夜祭どうする？行く？」

雪乃「私は行かないわ」

八幡「オレも行かねえかな。というか行ったら絶対に由比ヶ浜がいるから嫌なんだよな」

かおり「あー、なるほどね」

八幡「それに帆波達のライブ見に行こうとしたら捕まっちゃって

な

千佳「え？それほんと？」

八幡「ああ」

雪乃「大変ね」

八幡「まったくくだ。まあ、でも拒絶しといたから大丈夫だけどな」

帆波「そっか、なら良かった」

千佳「あ、じゃあさ。私達だけで後夜祭するのどう？」

かおり「あ、それアグリー！」

帆波「確かに良いね！雪乃ちゃんもどうする？」

雪乃「それなら私も参加するわ」

帆波「ホント？やったー！もちろん八幡来るよね」

八幡「当たり前だろ」

帆波「よし、じゃあLET'S GO!!」

かおり・千佳「GOー!!」

雪乃「ふふっ」

八幡「フツ」

第26話

文化祭が終わり数日が経ったある休日

八幡は今日は休日なので今も寝ている。スヤスヤと気持ちよさそうに寝ている。そんな寝ている八幡の部屋に忍び寄る1人の影があった。八幡を起こさないようにゆっくりと部屋のドアを開ける人物。ストロベリーブロンドヘアの女子。そう、八幡の彼女である一之瀬帆波であった。帆波は部屋に入った後、ゆっくりと八幡に近づいて、八幡を起こすため身体を揺らしていた。

帆波「八幡、起きて」

八幡「んん…」

だけど、八幡はまだ起きようとしなかった。

帆波「もおー、八幡。早く起きて」

帆波はさつきよりも揺らす力を強めて八幡を起こそうとする。

八幡「ん…んん？」

なんだか身体をゆらされているので、ゆっくりと瞼を開ける。そこにはストロベリーブロンドヘアの女の子。オレの彼女である。

八幡「帆波…？」

帆波「おはよう八幡」

八幡「お、おう。でもなんでいるんだ？」

帆波「お・は・よ・う」

八幡「お、おはよう」

帆波「もお、休みの日だからって寝すぎだよ」

八幡「お、おう。それよりもなんでいるの？」

帆波「小町ちゃんに頼まれたの」

八幡「ほーん。で、その小町は？」

帆波「小町ちゃんは、瑞希と一緒に友達の家遊びに行ってるよ。」

それと月曜日まで泊まりだって」

八幡「は？」

泊まりだと？なんだそれは。

八幡「初めて知ったな」

帆波「え？聞いてないの？」

八幡「ああ」

帆波「まったくもお……困った義妹だな……。まあ、要するに小町

ちゃんは友達の家で月曜日まで、泊まりに行ってるって訳」

八幡「そうか。まったく、あいつもそういう事言えよな」

帆波「うん、そうだよ。まあ、それより早く起きて顔洗ってきて。

ご飯できてるから」

八幡「そうか。悪いな」

帆波「ううん、私がやりたくてやっているだけだから」

八幡「そうか」

オレはベッドから降りる。

八幡「えーっと。帆波」

帆波「ん？なに？」

帆波はコテンと首を傾げる。うん、かわいい。じゃなくてだな！

八幡「着替えるから出てくれないか？」

帆波「え？あ、う、うん。ごめん」

そう言っつて帆波は部屋を急いで出ていった。さてと、早く着替えて行くか。

着替えも終わり、顔も洗い終わったのでリビングに向かう。入ると帆波が朝食の準備をしていた。

帆波「あ、来たね。ほら、早く食べてね」

八幡「おう、悪いな」

帆波「もう、こういう時はありがたいんだよ」

八幡「そうなのか？」

帆波「そうだよ」

なるほどな。ん？でも小町も確かこういう時に言う言葉を言ったな。えーつと……あ、そうだ。

八幡「ありがとうな帆波。愛してるぞ」

帆波「ふにや!?!／／は、はちみゃん!にや、にやに急に言ってるの!?!／／」

さてと、せっかく作ってくれた朝飯を食べるか。

八幡「いただきます」

帆波「ちよっ!は、八幡!」

八幡「ん?どした？」

帆波「あ……ううん。なんでもない」

八幡「?そうか」

一体どうしたんだろうな帆波の奴。なんだか顔が赤いような気がするけど。気のせいかな?そんな事を考えながら味噌汁をすする。

帆波「あ、味噌汁の味どうかな?薄くない?」

八幡「ん?ああ、大丈夫だ。丁度良いぞ」

帆波「ほんとう?良かったあ。そっか、八幡はその濃さが良いんだね。覚えとくよ」

八幡「お、おう」

やべえな。オレの好みの味も知られてしまった。本当にオレは既に帆波に胃袋を掴まれたらしい。

八幡「ごちそうさま」

帆波「お粗末でした」

ふう：うまかった。そう思っていると帆波がオレが使っていた茶碗などを持っていく。

八幡「おい帆波。洗うのはオレがやるって」

帆波「ううん、大丈夫だよ。私がやりたいだけだから。だから、八幡はゆつくりしてて」

八幡「そうか？じゃあ、そうさせてもらおうかな」

帆波「うん」

洗い物は帆波に任せてオレはソファに座ってテレビを見ることにした。帆波はなんだか楽しそうに鼻歌交じりに洗い物をしている。

帆波（ふふつ、なんだかこうしていると私と八幡って、夫婦みたいだなく。つて！私何考えてるんだろう?!いくらこの状況が夫婦みたいだからって、何考えてるんだろう。でも…八幡と結婚か…ふふつ。想像しただけなのに楽しくて、心がポカポカするなあ。結婚した後はしばらくは2人の時間を楽しみたいな。将来住むところはマンションかな、それとも一軒家もいいな。でも、あんまり贅沢も言えないよね。でも、ゆくゆくは、私達のこ、子供もできるし。もしそうになったら、私も働きながら八幡を支えないとね。うん）

八幡「なんか結婚したみたいだな」ボソツ

帆波（っ!?!は、八幡?!声小さかったけど私には聞こえた。まさか八幡まで同じ事を考えてただなんて。う、嬉しいけど…うーっ、顔がなんだか熱くなってきたよ。どうしよう）

ほんと、この光景は結婚したみたいな感じだな。なんて事を考えながらテレビを見ていると、洗い物を終えた帆波が近づいてくる。ん？

なんだか顔が赤いようにも見える。

八幡「どうした帆波？なんか顔が赤いけど、大丈夫か？」

帆波「えっ!? あ、ううん。大丈夫だよ」

八幡「そうか。無理するなよ」

帆波「うん、ありがとう。……ねえ、隣良い？」

八幡「良いぞ。というか次からは許可とか取らなくても良いから」

帆波「…うん」

帆波はオレの横にスッと座った。座るのは良いけどなかなか近い。というかピツタリとくつついている。まあ、でももう慣れてきたな。あ、そういえば。

八幡「なあ、あそこにある荷物なんだ？」

帆波「あ、あれは私の荷物だよ」

八幡「帆波の？なんでだ？」

帆波「え？なんでって、そりゃ私も月曜日までここに泊まるんだよ」

八幡「はい？」

帆波「あれ？もしかして小町ちゃんから聞いてないの？」

八幡「ああ」

帆波「んもう…またか」

八幡「帰ってきたらお仕置だな」

帆波「そうだね。はあ…：まったくもう。本当に困った義妹だよ」

八幡「なんか…すまん」

帆波「ううん、大丈夫だよ」

八幡「そうか。…というかこの話、帆波の母ちゃん知ってるのか？」

帆波「うん、知ってるよ。この事話したらお母さん、すぐに許可を出してくれたよ」

八幡「そうか」

帆波「うん」

そうか許可を出してくれたんだな。…ん？でもよく考えてみれば帆波家は月曜日まで帆波の母ちゃんだけになるよな。それでも許可を出してくれたんだ。

八幡「なあ、帆波」

帆波「なに？」

八幡「どつか出かけないか？」

帆波「八幡自ら出かけようなんて言うとは」

八幡「あのな…で？どうだ？」

帆波「うん、行こつか」

お互い準備をしてから、家を出た。目的も決めてなく、そこら辺を歩こうと思っただが、無難にショッピングモールに向かうことにした。そこなら何かしらあるかもしれないしな。

ショッピングモールに着いた後は、適当に回ろうという話になった。後、オレと帆波は手を繋いでいる。恋人繋ぎの状態で歩き回っている。まあ、そんなことはどうでもいいか。そんな事を考えながら、帆波と話している内に途中にあつた雑貨屋に立ち寄った。そこで色々を見て回っていると、肩をちよんちよんと叩かれたので振り返って見るとそこには、ピンク色の猫耳をつけた帆波の姿があつた。

帆波「どうかにや？似合っているかにや？」

手を猫のようにしてポーズをとっている。しかも語尾に何故かにやをつけている。

八幡「…」

オレはその光景を見て固まってしまった。

帆波「あ、あの…八幡。な、なにか言つて欲しいんだけど」

八幡「お、おう。その…似合ってる。…かわいい」

帆波「っ！そ、そつか…：にやはは／／」

八幡「っ／／」

お互い向き合いながら顔を赤くしている光景があつた。そして帆波は顔を赤くしながらも猫耳カチューシャを元の棚に戻した後、八幡の手を引いて店を後にした。店を出て、しばらくした後、帆波は口を開いた。

帆波「うう、恥ずかしかつた」

八幡「恥ずかしいならやるなよ」

帆波「だ、だつて、つけてみたかつたんだもん。そ、それに八幡

にかわいいって言ってもらえて、その…嬉しかったから／＼／

八幡「なっ！／＼あ、あのなあ…」

帆波「だって…本当の事だもん／＼」

八幡「うっ…そ、そうか…」

帆波「そ、それに、もし八幡さえよければ、ま、またつけてみよう…かな…なんて」

八幡「なっ…それはまた別の機会に…な」

帆波「う、うん。そうだね」

もう、この話は終わりだ。でも…惜しいことしたな。帆波の猫耳姿を写真でも撮っとけば良かったな。だってあんなかわいい帆波を見れたんだからな。まあ、今更言ってもしやあないしな。

そして、次にやってきたのはゲームセンターだ。モール内を回っていると視界に入り、帆波が行きたいと言ったので来ている。というか久しぶりかもしれないなゲームセンターに来るのは。

八幡「で？何するんだ？」

帆波「うーん、そうだな…あつ、あれやってみたい」

そこにあっただのは太鼓の達人であった。ほう…あれをやってみた
いのか。

八幡「はいよ」

帆波「私、これやるの初めてなんだ」

八幡「そうなのか」

帆波「うん。でね、この前買い物してた時にね、ゲームセンターで私と同じくらいの学生達が楽しそうにやってるのを見て、私もやってみたくなったんだ」

八幡「そうか」

帆波「うん。だから八幡も一緒にやってくれろ？」

八幡「ああ、いいぞ。2人でもできるしな」

帆波「ホント!?やった!じゃあ早速やろう」

八幡「わかったわかった」

帆波は俺の腕を取って、太鼓の達人の機械まで引っ張って行く。相当やりたかったのだろう。早速、お金を入れて始める。帆波に適当に曲を選んでもらい始める。初めてなのはいいけど、帆波の奴意外と上手いな。コンボが途切れてない。俺も負けてられないな。そう思いさらに集中して太鼓を叩いた。

だが、中盤でミスをしてしまいコンボが途切れてしまった。それが気になってしまいこの後も数回ミスしてしまった。それが原因なのか帆波に負けてしまった。

八幡「まけ……た……だと」

帆波「やつくたあゝ!!」

帆波は初めてやって俺に勝てたのが嬉しかったらしく、その場でジャンプした後、大きくガッツポーズをしていた。うん、かわいい。でもね、帆波さんや。あんまり大きくジャンプしないでください。どこがとは言わないけど、大きく揺れるからやめてください。周りの人に見られてしまいます。特に男達に見られるからやめてね。

その後も何回かやった。結果は1勝1敗1引き分けの引き分けで終わった。あまり、こればかりやっていると他の人が出来ないのはい所で終わることにした。

八幡「次はなにやりたいんだ？」

帆波「うーん、悩むな」

八幡「そう焦らなくてもいいぜ。ゆっくりでいいぞ」

帆波「えっと……じゃあ……あ、あれなんかどう？」

八幡「ん？…え？」

帆波が指す方向にあったのはプリクラだった。

八幡「マジですか帆波さん」

帆波「ま、マジですよ／＼」

顔を見ると帆波の顔は赤くなっていた。

帆波「い、嫌？／＼」

っ！だからさあ〜……。上目遣いはダメだつて。まあ、言つてないから仕方ないか。

八幡「い、嫌じゃないけど……その普通に恥ずかしいっつーか／＼／」
帆波「わ、私も恥ずかしいよ／＼／」

八幡「だつたら……」

帆波「でも、は、八幡とやってみたいと……思つてき／＼／」

八幡「っ」

帆波「だ、だからさ……ダメ？／＼／」

そんな顔されたらなあ……。という事で俺は帆波と一緒にプリクラの中へと入っていく。

八幡「俺、何にも分からねえんだけど」

帆波「大丈夫だよ。数回だけど瑞希と一緒にやった事あるから」

八幡「そうか。じゃあ頼むわ」

帆波「わかった」

数回やっているとはいえ、慣れた手つきで操作していく帆波。どうやら設定が終わつたらしく、音声が出てくる。

『それじゃあ指示に従つてポーズをとってみてね！』

八幡「？ポーズ？」

帆波「えーつと、モード選択があつてね。モードは2つあつて、そのうち1つのモードでカップルモードを選んだんだ」

お、おう……マジっすか。それで、そのポーズをこの機械に決められるって事かよ。

帆波「ち、ちなみにし、指示に従わないとシャッターが切れないよ（大ウソ）」

八幡「は？マジかよ!？」

さ、最近のプリクラつてそういうのが導入してんのかよ。色々と厄介だなおい。そんな事考えていると、ポーズの指示を出してくる。

『じゃあまずは、彼が彼女を後ろから抱きしめて♡』

は？う、後ろから抱きしめるといふ事は、いわゆるバックハグみたいなやつか？

帆波「ほ、ほら。八幡早く」

八幡「お、おう。行くぞ…」

指示通りに俺は帆波を後ろから抱きしめる。背は俺の方が高いので、顔の近くに帆波の頭がある。だからなのか、いい匂いがすごい。そんな事を考えているとシャツターが切られる音が聞こえた。どうやら撮れたみたいだ。というかこれだけで、もう少し疲れたぞ。

帆波「ま、まだ数枚あるから」

八幡「おふう…」

そしてその後も数枚撮った。指示も色んなの出された。2人でハートを作れとか、変顔にしろとか出された。いや、ホント意味わからん。でも、帆波の変顔はおもしろかった。思わず吹き出してしまいそうになったわ。俺は帆波を見ていて、出来なかつたけどな。

帆波「つ、次で最後だつてさ／＼」

八幡「やつとか」

いやあ…長かった。時間にしてみれば数分なのに、体感は一時間ぐらいに感じる。

帆波「あ、最後は自由にしていって」

八幡「ほーん」

帆波「えつと…じゃあ最後は…ちよつと八幡こつち向いてくれる？」

八幡「?どうしんむっ!」

俺は言われた通り、帆波の方を振り向いた瞬間、俺の唇が何か柔らかい物で防がれた。

パシャ!

それと同時にシャッター音が鳴った。でも、そんな事よりも俺は今の状況に困惑している。だって…俺は今帆波にキスされているのだから。困惑していると帆波が離れる。帆波の顔は真っ赤になっていた。多分、俺もだろうな。

八幡「ほ、帆波?／＼」

帆波「ご、ごめんね。きゅ、急に…／＼」

八幡「い、いや、でもなんで急にこんな事を」

帆波「えつと……したかった……から。し、しちやった」

八幡「急にするなよ。びっくりするだろ」

帆波「ご、ごめん。で、でも、時間がなくて」

八幡「だからって……」

帆波「うう……ごめん」

うーん、ちよつと言いきすぎたかな？そう思い俺は帆波の頭に手をのせる。

八幡「まあ、今度からは気をつけてくれよ」

帆波「え？……許してくれるの？」

八幡「ああ。だから、次からは言ってくれよ。そうしたら、やるかもしれない」

帆波「もー。……うん、わかった。次からはちゃんと言うね。だから

らごめん八幡」

八幡「ああ」

そんな会話をしていると、ラクガキをする時間がなくなってしまうた。

帆波「あつ」

八幡「なんか……悪い」

帆波「ううん、いいよ。私が急にやっちゃったのが悪いし」

八幡「そうか？」

帆波「うん」

そこまで言うのならいいのだろう。そう思いながら外に出て、できた写真を取り2人で分ける。

帆波「捨てないでね」

八幡「当たり前だ。捨てるわけないだろ」

帆波「うん」

その後、レーシングゲーム、そしてエアホッケーをして遊んだ。

帆波「はあく、楽しかった」

八幡「ああ、そうだな」

結構思いつきり遊んだな。ふと、時計を見るともう昼時だったの
で、帆波と一緒に適当なファミレスに入り昼食をとることにした。頼
んだ品がきて食べていたのだが、突然帆波が……

帆波「はい、八幡。あーん」

八幡「あーむ」

帆波が今自分が食べている物を俺に食べさせてきたので、俺はそれ
を受け取る。

帆波「どう？おいしい？」

八幡「ああ、おいしいよ」

帆波「良かった。じゃあ……次は八幡が食べさせて」

八幡「はいよ。あーん」

帆波「あーん」

次は俺が帆波に食べさせていた。帆波はおいしそうに食べている。
そんな姿もかわいいと思ってしまう。でもあれだな。前まではこん
な事をするのを恥ずかしがっていたのに、普通にできてしまってい
る。もうあれか？慣れてしまったのだろうか。

昼食を食べ終わりファミレスを出て、再びモール内を歩き回る。

八幡「そういえば帆波。泊まるのは良いけど、帆波用の茶碗とか箸
とかないだろ？だから、帆波用に今から買いに行かないか？」

帆波「私用に？」

八幡「ああ、そうだ」

帆波「でも、どうして？」

八幡「いや……また泊まりに来るのなら、あった方が良いと思っ
てな」
帆波「うーん……確かにそうだね。うん、じゃあ買いに行こっか」

八幡「ああ」

というわけで食器売り場にやって来ました。茶碗やコップなど色
んな食器が売られている。まあ、当たり前だよな。

八幡「結構色んな食器が揃っているんだな」

帆波「そうだね」

八幡「で？どれにするんだ？」

帆波「うーん、そうだね」

八幡「ゆつくりで良いからな」

帆波「うん、わかった」

その後、帆波は数分の間店内を歩き回り、色んな食器を見ている。帆波は何やら考えながら選んでいる。そこまで考え込むものなのか？そしてさらに数分後、どうやら決めたようだ。

帆波「よしっ、これにしよう」

八幡「決まったか？」

帆波「うん、これにするよ」

帆波はそう言いながら両手で持った茶碗を見せてくる。色はピンクのような色をしているが……

八幡「なんか見た事あるような……」

帆波「でしょ！これ、八幡が使っているお茶碗と同じなの」

八幡「言われてみれば……確かに」

俺が家で使っている茶碗と同じように見える。まさか……

八幡「まさか帆波。これを探していたのか？」

帆波「うん、そうだよ。だって、せつかくだったらお揃いの方がいいじゃん」

八幡「っ！そ、そうか」

いや、あのね。ホント、そういう事急に言うのやめてね。確かに俺も帆波とお揃いの物とか欲しいけどね。

帆波「でも……本当は苗字をお揃いにしたいけど」

八幡「っ!？」

あのさあ……本当にさ……もう勘弁してよ。そういう事を急に言うのはさ。俺は片手で顔を隠しながらそう思った。でもまあ、確かにいつかはお揃いにしたいな。

帆波用の茶碗と箸、そしてコップを購入する事ができた。茶碗などを割れないように気をつけながら、一旦家に置きに帰った後、俺と帆波は晩飯の材料を買いに近くのスーパーへと向かった。

帆波「早く買い物しようか」

八幡「そうだな」

俺がカートを押してその隣に帆波が並んで歩いている状態で、店内をまわる。

帆波「晩ご飯どうする？」

八幡「ん？あー、そうだな。俺1人なら適当に済ますんだがな」

帆波「もう、そんな事していると体に悪いよ。ちゃんと栄養管理はしないとダメだよ」

八幡「まあ、そうなんだけどやっぱり1人だとそうなってしまいうんだよな」

帆波「もう。でもこの2日間は私がいるから、栄養管理はぼっちりだね」

八幡「ああ、そうかもな」

帆波「さてと、八幡は何食べたい？」

八幡「ん？そうだな…ハンバーグ…かな」

帆波「うん！わかった！じゃあ早速材料揃えに行こっか」

八幡「ああ」

2人で回りながら必要な材料揃えて、会計も済ませた後、店を出て家に帰った。

帆波「よしっ、じゃあ早速作るね」

八幡「手伝おうか？」

帆波「ほんと？じゃあお願いしようかな」

八幡「おう、任せろ」

帆波「ふふっ、それじゃあ…」

料理なんて久しぶりにするけど、帆波に教えてもらいながら一緒にハンバーグ作りをした。玉ねぎ切るとなんか涙が出てきそうになっ

たし、人参とか分厚くならないように切るのとか、久しぶりだったから難しかったが帆波のおかげで上手くできた。

八幡・帆波「「ごちそうさま（でした）」

あれから時間が経ち、今晚飯を食べ終わった直後だ。

帆波「美味しかったね」

八幡「ああ、そうだな」

帆波「さてと、片付けるね」

八幡「じゃあ、俺は風呂入れてくるわ」

帆波「うん、お願い」

風呂の栓を締めて、お湯はりをして後は風呂が沸くのを待つのみだな。リビングに戻ると帆波はまだ洗い物をしていた。

八幡「なんか手伝おうか？」

帆波「ううん、大丈夫。だから八幡はゆっくりしてて」

八幡「そうか？」

帆波「うん」

八幡「わかった」

俺は言葉に甘えて、ソファに座りながらテレビを見ていた。する

と、洗い物を終えた帆波が俺の隣に座り込んだ。

帆波「何見てるの？」

八幡「ん？いや、別に適当にチャンネルを回しているだけだが」

帆波「そうなんだ」

八幡「なんにもねえな」

帆波「そうだね」

八幡「はあ…」

まあ、ニュースでも見とくか、そう思いニュースをやっているチャンネルへと変える。

帆波「…ねえ、八幡」

八幡「ん？」

振り向くと帆波は自分の太ももら辺をポンポンと叩いていた。

帆波「膝枕してあげようか」

八幡「いいのか？」

帆波「うん、いいよ」

八幡「じゃあ、お邪魔します」

帆波「はい、どうぞ」

俺はゆっくりと頭を帆波の太ももへとおろす。すると帆波の柔らかい太ももの感触が伝わってくる。おお、これは中々すごいな。

帆波「どう？」

八幡「ああ、柔らかい」

帆波「そう？」

八幡「ああ。それより足大丈夫か？」

帆波「うん、大丈夫だよ。ありがとう」

八幡「そっか」

帆波は片手をそつと俺の頭にのせた後、ゆっくり撫ではじめた。親以外に撫でられるなんてな。

帆波「ふふつ、八幡の髪の毛ちよつと硬いね」

八幡「そうか？まあ、多分親父に似て硬いのかもしいないな」

帆波「へえ、お義父さん譲りなんだ」

八幡「ああ」

そんな会話をしながらも帆波は俺の頭を撫で続けている。膝枕をされながらだが、俺と帆波は見つめあっている状態でもある。こっからでもわかる。帆波の髪はサラサラでキレイそうだな。それに唇も柔らかそうだな。いや、柔らかそうじゃなくて、柔らかいんだよな。そんな事を考えていると、頭を撫でている手が止まった。どうしたんだ？そう思いながら帆波を見ると、帆波の顔が徐々に近づいてくる。そして俺は帆波が何をするのかすぐに悟った。そして帆波の顔がすぐそこまで近づいた時、帆波は目をつぶったので、俺も目をつぶった。そしてすぐに唇に柔らかい感触が伝わってくる。けど、その感触はすぐに離れる。

帆波「ごめんね。したくなっちゃって」

八幡「別にいいが、ちよつとびっくりしたけどな」

帆波「ごめん。……ねえ、もう一回良い？」

八幡「っ……あ、ああ」

正直、俺もまだしたかったから嬉しい。そしてまた唇が重なる。さつきよりも少し長い時間重なる。テレビをつけているのに、そのテレビの音声は2人には聞こえていないようだ。

帆波「ふふっ、八幡の唇柔らかい」

八幡「帆波の唇も柔らかいぞ」

帆波「ほんと？」

八幡「ああ」

帆波「そっか。じゃあもう一回いくね」

そして帆波は俺の言葉を聞く前に唇を重ねてくる。そして離れたと思ったら、すぐに重ねてくる。そしてまた離れては重ねて、また離れて重ねるの繰り返しだ。そして俺は唇が離れた後、すぐに口を開く。

八幡「ぶはっ、ちよ、ちよっ!?!ほ、帆波!?!今日はどうしたんだよ!?!」

帆波「べ、別にいつも通りだよ」

八幡「い、いや、いつもとちよつと違っんむっ!?!」

違うと言いきうようになった時、帆波に唇をふさがれた。突然の事で俺はかなり驚いている。

八幡「んんっ!？」

そんな中、俺の口内に何か入ってきた。それが何かはすぐにわかった。それは帆波の舌だ。そんな事を考えていると帆波の舌は動き出し俺の舌と絡めてきた。

八幡「ぷはっ、ほ、帆波!?!ちよつと待ってって!」

帆波「ごめん待てない」

八幡「ほ、ほなっ」

そしてまた唇が重なるうとした時だった。ピピッと電子音が聞こえてきた。どうやら風呂が湧いたみたいだ。

帆波「お風呂沸いたみたいだね」

八幡「そ、そうだな」

助かったという気持ちもあるが、惜しいという気持ちが少なからずあった。

帆波「じゃ、じゃあ八幡先に入ってきたら?」

八幡「い、いや、帆波からでいいぞ」

帆波「ううん、大丈夫。ちよつと用意するのに時間が必要だから、八幡が先に入ってきて」

八幡「そ、そうか?わかった。じゃあ先に入らせてもらうわ」

帆波「うん」

俺は起き上がり風呂に入る為にリビングから出た。それにしても今日の帆波はどうしたんだ?ちよつとグイグイ来てたな。あんなに激しいキスを……っ!あつぶね、これ以上考えるのはやめよう。さっさと風呂に入ろう。

一方帆波は

ふう……ちよつとグイグイ行き過ぎたかな?でも、これぐらいしいいと進展しないよね。けれど、慌てちゃダメだよ。

今日は長い1日になりそうだしね。

八幡「ふう、上がったぞ帆波」
帆波「わかった。じゃあ入ってくるね」

帆波「お風呂いただいたよ」

八幡「おう…っ」

帆波「どうしたの？」

八幡「い、いや…なんでもねえよ」

い、言えねえよ。風呂上がりの帆波の姿が良いだなんて。それに
ちよつと色っぽいしよ。

その後、寝る時間までまだ時間があつたので、2人でテレビを見て
過ごした。

八幡「さて、そろそろ寝るか」

帆波「う、うん。そうだね」

テレビを消してリビングの電気も消して、2階へと上がり、自分の部屋へ入ろうとすると、帆波に呼び止められた。

帆波「ねえ、八幡」

八幡「ん？」

帆波「えつとね：ちよつと話したんだけど、いいかな？」

八幡「あ、ああ別にいいけど。なら、下に降りるか？」

帆波「ううん、八幡の部屋が良いんだけど、良いかな？」

八幡「俺の部屋？まあ、良いけど」

一体どうしたんだ？今日はなんか本当に変な気がするけど。

俺の部屋に入り、ベッドに並ぶようにして座る。

八幡「で？どうしたんだ帆波？」

帆波「うん、あのね」

帆波はスつと俺と向かい合うようにして、俺の顔を見てくる。

帆波「八幡、好きだよ。優しくて、かっこよくて、時々かわいい一面もあって、そんな八幡が好き、大好きだよ」

八幡「きゅ、急にどうしたんだよ」

帆波「急にも何も：好きだから気持ち传达了かったから。最近そういう事、言っでなかつたから」

そうか帆波は自分の気持ちを正直に言ってくれたんだ。俺も言わないといけないよな。

八幡「俺も：俺も帆波の事が好きだ。笑顔がかわいくて、誰にでも優しくて、俺の事をいつも思ってくれて、そんな帆波が大好きだ」

帆波「うん、ありがとう。嬉しい」

八幡「俺も：そのありがとな。あの時俺と出会ってくれて」

帆波「うん、あとね」

八幡「うん？」

帆波「えつとね。八幡になら私の初めてあげられる。全部、八幡に捧げられる」

八幡「帆波…それって…」

帆波「うん…八幡の思ってる事であってるよ」

八幡「俺でいいのか？」

帆波「当たり前だよ。八幡に貰って欲しいの。というか八幡にしかあげないよ。だから、私の初めて貰って欲しいの。その代わり八幡の初めて私にちょうだい」

八幡「…わかった。俺の初めて帆波にやる。だから帆波の初めては貰う」

帆波「うん。…優しくしてね八幡」

八幡「…ああ」

そうやって俺は帆波と唇を重ねて、帆波をベッドに押し倒した。

第27話

外はもう朝になり、起きる人は起きて、寝てる人はまだ寝ている。そして、今ベッドの中にいる2人のうち1人が目を覚ました。

八幡「ん…」

ゆっくりと瞼を開く。少しボヤけているがだんだん見えるようになってきた。そして完全に見えるようになった時、目の前には俺の手を握り、服を着ていない帆波の姿があった。それを見て俺は昨晚の事を思い出した。

そういえば俺卒業したんだなつと。昨日の事を思い出して俺は顔が熱くなってるのがわかった。そんな熱を頭を降って振り払った。まあ、色々聞きたいのはあるだろうけど、1つ言えるのは帆波が可愛かったつと言っておこう。そう思いながら空いている手で帆波の頭を優しくゆっくりと撫でる。撫でていると帆波がゆっくりと瞼を開けた。そして俺を見ると、顔を赤らめながら口を開いた。

帆波「お…おはよう八幡」

八幡「お、おう。おはよう」

俺まで同じ事を言ってしまったな。

八幡「体大丈夫か？」

帆波「うん、大丈夫だよ。だって八幡が優しくしてくれたから」

八幡「つ…いや、あの…そういう事言われるとマジで恥ずかしいからやめてくれ」

マジで恥ずかしい。そう言う事言われて、更に思い出してくる。すげえ恥ずかしい事言ったような気がする。

帆波「昨日なんてあんな事言ってくれた癖に。私、あの時すごい胸がキーンキーンして、嬉しかったよ」

八幡「だからやめて。ねえ、帆波さんやめて」

帆波「やくだく、やめないよ。ふふっ」

帆波は悪戯を楽しむような表情をする。それはまるで小悪魔のよ

うにも見えてくる。これはこれで可愛くて良いのだが、俺の精神を奪っていく。と、とりあえずこの場を何とかしねえとな。

八幡「と、とりあえずシャワーでも浴びてこいよ。昨日風呂に入っただとは言え、汗かいただろ？」

帆波「一緒に浴びる？」

八幡「いや、なんでだよ」

帆波「一緒に浴びた方が楽だと思うけど」

八幡「そ、そうかもしれないけど…けど」

帆波「もう…昨日お互いあんなに見たんだから良いでしょう。それにこんな事言わせる気？」

八幡「な、なにをだ？」

帆波「むう…私が八幡と一緒に浴びたいの」

帆波は少し頬を赤らめながら、俺の目を見て言ってくる。それを見て俺はドキツとしてしまう。それに多分一緒にシャワーを浴びたら、シャワーだけでは済まなくなってしまうかもしれない。

帆波「ねっ、一緒に…浴びよう」

そう言っただけで帆波はどんどん近づいてくる。やめてくれ…このままだと俺の理性が……

帆波「我慢しなくてもいいよ。私は全て受け止めるから。だから…ねっ？」

帆波にそう言われた瞬間、何か切れる音がした。そして俺が帆波を抱っことで風呂場まで運んだ。そして一緒にシャワーを浴びた。やはりと言うべきか、シャワーだけで済むはずがなかった。

シャワーを終えた後、俺と帆波は朝食を食べることにした。あれだから簡単に出来る物で済ませることにした。と言ってもメニューはトーストとコーヒーなどで済ませることとなった。

八幡「…なんかごめんね帆波」

帆波「ううん、大丈夫だよ。私もノリに乗っちゃったから」

八幡「そうか」

帆波「うん」

帆波がそういうのなら、もうこれ以上言うのはやめておこう。でないと規制がかかってしまう可能性がある。

朝食を食べ終わった後、片付けをした後、プリキュアを見ようとしたが、時間が過ぎてしまったようだ。リアルタイムで見える事はできなかった。仕方ない、でも録画しているから大丈夫だ。でも、正直言うとリアルタイムで見たかった。何故なら今日から新しいプリキュアが始まるのにリアルタイムで見れないのは残念だ。ということで俺は帆波と一緒にプリキュアを見ることにした。

帆波「プリキュアを見るのいつぶりだろう」

八幡「そうなのか？」

帆波「うん、久しぶりに見るよ。それに新しく始まるのなら、途中から見るより良いかもしれないね」

八幡「ああ、確かにそうかもな」

確かに途中から見たら理解するのに時間がかかる。けれど1話から見た方がわかりやすいだろうな。

ふう：良かった。新しいプリキュアマジで良かった。事前に知っていたけれど、主人公がピンクキュアじゃなくて青キュアなのは驚いたな。それでも良かった。

八幡「どうだった帆波。久しぶりのプリキュアは？」

帆波「うん、すつごく良かったよ」

八幡「それは良かった。まあ、でも帆波はどう思う？この歳になつてしたかも男の俺が、プリキュアを見ている事どう思う？」

帆波「え？別に良いと思うよ私は。だってなにを見ようとそれは人

それぞれでしょ？男の子向けのアニメを女の子が見ていいように、男の子が女兒向けのアニメを見ても良いんじゃないかなって、私は思うよ」

八幡「…そうか」

帆波「それにそんな事で八幡の事、簡単に嫌いになったりし、離れたりしないから。だから安心して」

八幡「…そっか」

そっか、それなら良かった。世の中にはそれだけで嫌いになったりする人がいるからかなり不安だった。けれど、言つて良かったと思う。こうして帆波が俺に本音を言ってくれたから。

八幡「ありがとう帆波」

帆波「うん」

そして、俺達は自然と手を絡めながら握りピッタリと、くつつくくらしい近づく。近づいた後、帆波の頭が俺の肩へと乗っかる。シャワーを浴びた後なので、シャンプーの香りが鼻につく。いつも家で使っているシャンプーなのに何故か心地良くていい匂いだ。もつと嗅ぎたいと思ひ俺の鼻は帆波の髪に近づき匂いを嗅いだ。すると帆波の体が一瞬ビクツとなる。

帆波「は、八幡？どうしたの？」

八幡「いや、帆波の匂いを嗅いでいるだけだけど」

帆波「え？もしかして臭う？」

八幡「そうだな。臭うってもとても心地良くて安心する匂いだから、もつと嗅ぎたくなつてしまつてな」

帆波「そうなんだ」

八幡「もしかして嫌だったか？」

帆波「ううん、嫌じゃないよ。ちよつとびっくりしたけど大丈夫だよ。私も八幡の匂い安心すると思つてたし」

八幡「お、おう。そうか」

そうか。帆波も俺と同じ思ひだつたんだな。そんな事を思つていると、帆波が顔を上げる。それにより、俺達は見つめ合う形になる。そして、俺達は自然と重なり合つた。唇に柔らかくて、暖かい感触が

伝わってくる。どれくらいの間が経ったのか分からない。数秒、数分、又は数時間経ったのか分からないが離れる。まだ、唇にはさつきまでの熱が残っているように感じた。

帆波「ねえ……もう1回」

それを聞いた俺は答えるべく、ゆつくりと再び帆波の唇に重ねた。すると、口内に帆波の舌が侵入してきた。昨日の行為した時と同じくらしいの濃厚なキスをしていた。お互いの舌が絡み合って、熱い唾液も混じり合う。

帆波「んっ……あむ……れろっ……んむ……」

八幡「んむ……れろっ……はむ……」

さつきの優しく触れ合うだけのキスよりも、強く、深く、彼女と繋がっている。帆波は激しく舌を使って絡めてくる。俺もそれに負けないように絡める。ぴちゃぴちゃと水のような音が部屋に響く。握っていた手も更に強く握られ、俺の空いている片方の手は帆波の腰の後ろへと回り、抱き寄せていた。帆波の片方の手は俺の胸に添えていた。

八幡「ぶはっ」

帆波「はっ」

一呼吸を置く為、一旦彼女の唇から離れる。離れると、自身と彼女を繋ぐ透明な架け橋が見えてしまう。何秒、何分、繋がっていたのだろう。分からないが、俺と帆波が繋がっていたこの時間は、とても長く感じた。その所為なのか、お互い肩で息をしていた。やつぱりキスって息が続かない。それでも、帆波の気持ち伝わってくる。

帆波「はち……まん……」

目がトロンとしており、さつきと打って変わって呂律が回っていないみたいだ。多分、俺も呂律が回っていないと思う。

帆波「ねっ、もう1回……もう1回しよ」

八幡「ちよっ……待て帆波。まだ息が整ってない」

帆波「嫌……待たない……」

八幡「ちよっ……まっ」

息を整える時間さえくれない帆波。再び唇を重ねようと顔を近づけてくる。だんだんと顔が近くなっていく。そしてお互いの距離がゼロになろうとした

……その時

「ナー」

ソファの下から鳴き声が聞こえた。突然の鳴き声に俺と帆波の体はビクツと飛び跳ねた。俺と帆波はゆつくりと鳴き声のした方を振り向く。そこにいたのは家で飼っている愛猫のカマクラが座っている姿があった。

帆波「か、カマクラ……ちゃん……？」

八幡「どうし……あつ」

一瞬どうしたのだろうと思ったが、すぐにわかった。何故カマクラがここにいて、鳴いたのか。それは…

八幡「悪い…カマクラのご飯まだだったな」

カマクラ「ナー」

帆波「そう…なんだ。そりや怒つちやうよね。あつ、そろそろ洗濯物終わっていると思うし、干してくるね」

八幡「お、おう。じゃあ俺はカマクラにご飯上げとくわ」

帆波「そ、そうだね。お願い」

八幡「ああ」

帆波は洗濯物を干しに行く為、俺から離れてリビングから出ていく。俺はカマクラのメシの用意をする為、棚からカマクラの餌を取り出し容器に入れ、カマクラの前に差し出す。

八幡「悪いな。忘れてしまっていたわ」

カマクラは「ナー」と鳴いた後、餌に食らいついていた。どうやら、相当腹が減るくらい放ったらかしにしていたようだ。本当にすまんなカマクラ。だから、今日は少し豪華な飯にしといたから許してくれ。な？

それよりもさっきのはやばかった。あのままだとマジでヤバかった。もしかしたら、もう1回戦をする羽目になるところだった。カマクラ止めてくれてありがとうな。でも、少し残念な気持ちもある。けれど、やはり止めてくれなかつたら理性が持たなかつたであろう。はあ…やばい、なんだか顔が熱い。帆波が戻ってくるまでこの熱、冷めるかな。

一方帆波は…

あ、危なかつた。昨日、行為をしたからか歯止めが聞かなくなっているかもしれない。八幡とのキスにはまってしまった。だって、あんなに愛をくれるんだもん。幸せすぎてもう言葉が出てこなかつた。八幡も八幡であんなに積極的になるんだもん、カマクラちゃんが止め

てくれなかったら、もう1回する事になってたかもしれない。……でも、ちよつと惜しい気持ちも少なからずある。うう、顔が熱いよ。……と、とりあえず早く洗濯物を干さないと。干している間にこの熱、冷めたら良いけど……大丈夫かな。

帆波はそう思いながら洗濯物を干しにベランダへと向かった。帆波の頬は少し赤くなりながらも洗濯物を干していた。

2人が再びリビングで会う頃には、2人の顔の熱は冷めた状態であろう事ができた。

帆波「あれ？八幡何しようとしてるの？」

八幡「ん？……ああ、ちよつと最近耳掃除をしてなかったからな。だから、耳掃除をしようと思ってな」

帆波「そうなんだ」

八幡の手には耳掻きが握られていた。

帆波「ね、八幡」

八幡「なんだ？」

帆波「私が耳掃除してあげるよ」

八幡「え？あ、いや、自分でできるからいいって」

帆波「むう」

帆波は何やら不満があるのか頬を少し膨らませていた。何あれくつそかわいい。

帆波「私がしたいの。だから……貸して。ね？」

八幡「……わかったよ」

俺は持っていた耳掻きを帆波に手渡す。耳掻きを受け取った帆波はソファへと移動し座った後、ぽんぽんと自分の太ももを軽く叩きな

がら口を開く。

帆波「ほら、きて」

俺は帆波の元へより、横になりながら帆波の太ももに頭を乗せる。昨日も膝枕をしてもらったけど、やはり柔らかい。

帆波「力抜いてね」

八幡「お、おう」

帆波の太ももを堪能していると、そう告げられる。言われた通り力を抜く。俺が力を抜いた事がわかったのか、帆波がゆつくりと耳搔きを入れてくる。

八幡「意外とうまいもんだな」

帆波「うん、瑞希にやった事があるから」

八幡「そうだったのか…あつ」

帆波「あ、ごめん大丈夫？」

八幡「いや、大丈夫だ」

帆波「そう？良かった。あ、もしかして耳弱い？」

八幡「うるせえ」

いや、確かにちよつと弱いかもしれないな。それにしても親以外に耳掃除されるのは初めてだな。

帆波「確かにちよつと汚れているみたいだね。もう、ダメだよ。ちやんと掃除しないと」

八幡「わかってているんだが、忘れてしまっただよな」

帆波「もう…あつ、もしかして私にして欲しかったりして」

八幡「たまたまだ」

帆波「はい、そういう事しておくよ」
絶対にわかってないだろ。

帆波「はい、こつちの耳は終わり。じゃあ次は反対の耳をこつちに向けて」

八幡「はいよ」

反対の耳を向けて力を抜く。そして、さつきと同様力を抜いた事をわかると耳搔きを入れてくる。

帆波「こつちもちよつと汚れてるね。もう、これなら定期的に私が

してあげよつか？」

八幡「それは……偶になら頼もうかな」

帆波「ふふっ、わかったよ」

けど結構、気持ちいい。毎回はちよつと俺が無理だから、偶に帆波にお願いしようかな。

帆波「はい、綺麗になったよ」

八幡「サンキュ……！」

耳掃除も終わったので起き上がろうとした時、帆波に弱い力だがそれを阻止された。一体、どうしたんだと言うとした時、唇が柔らかい物にふさがれた。

八幡「ぷはっ……ほ、帆波？」

俺は帆波に声をかけるが何やら様子が変わった。しかも何故か舌なめずりをしている。

帆波「ごめん八幡。……さっきの熱、冷めたと思ったら、また熱くなってきたみたい」

八幡「は？」

さっきの熱。それは多分、さっきの時間までキスしていた熱なのだろうか。けれど、どうして熱が戻ってきたのだろうか。ただ、耳掻きをしてくれただけなのに。そんな事を思っていると再び唇を重ねてくる。

帆波「ごめん、もう我慢できない」

八幡「ちよっ！待ってて帆波!？」

帆波「やだ待たない」

八幡「ちよっ！本当に待って」

帆波「大丈夫。今度は私が食べてあげるから」

八幡「いや、そういう問題じゃ……」

なんだよ食べてあげるからって。めっちゃくちや満面の笑みで言われちゃったよ。かわいいなくそ！

帆波「あ、あっちの心配してる？だったら大丈夫だよ。まだ避妊道具あるから」

確かにそっちの心配もしてるけど!!というか明日、学校あるんだよ

!?そこんとこわかって言ってる!?

帆波「大丈夫ちやんと起こしてあげるから」

八幡「心を読むな」

帆波「八幡がわかりやすいだけだよ」

そう言つて帆波はどんどんと近づいてくる。

八幡「ちよつ、ほ、帆波!」

帆波「いただきまーす」

八幡「あ、ああ……アツ……!」

第28話

2日続けて愛し合った。正直腰が少し痛い。帆波も同じなのに、それなのに朝ごはんを作ってくれた。いや、ホントありがとな帆波。

帆波「準備できた？」

八幡「ああ」

帆波「じゃあ行こっか」

八幡「そうだな」

一緒に家を出て学校に向かう。

帆波「そういえば、そろそろ体育祭だね」

八幡「ああ、そうだな。はあ…嫌だなあ…参加したくねえよ。なあ、参加しなくても良いよな」

帆波「ダメだよ。来なかつたら私が迎えに行くからね」

八幡「ええ…そんな。ていうか参加する事に意義があるのなら、参加しないことに意義があつてもいいじゃねえか」

帆波「もお…また変な事言つて」

八幡「参加したくねえんだよ。昔からあんまい思い出ないし。あ、帆波達に出会う前だからな」

帆波達と出会う前は色々あつた。自分が走るの速いからって言つて、周りが遅い奴を責める山川。体育祭だからからって異常にテンション高くなる三松。女子にモテようとする男子達。本当に色々あつたな。

帆波「そうかもしれないけど」

八幡「なあ、帆波一緒にサボらね？」

帆波「ん、ちよつと魅力的な意見だけどダメ」

八幡「うっ…ダメなのか」

帆波「中学みたいに一緒に体育祭、参加したいな」

帆波は俺の手をとりぎゅつと握り言ってくる。

八幡「はあ…仕方ないな。帆波がそういうのなら頑張ってみるわ」

帆波「うん！」

帆波はにっこりと笑顔をを見せてくる。それを見ると体育祭をより頑張ってみようと思った。あ、そういえば体育祭でふと思い出した。

八幡「なあ、帆波」

帆波「ん？なに？」

八幡「あー、えつと…今日体育ってあるのか？」

帆波「今日？無かったと思うけどどうしたの？」

八幡「いや、その…昨日、一昨日につけてしまったら？…赤いマーク」

帆波「あつ…そうだね」

八幡「だから、もし体育あったら他の人に見られるだろう？だから、ちよつとな」

帆波「…確かに見られるのはちよつと恥ずかしいよね。でも大丈夫だよ」

八幡「そっか、なら良かった」

帆波「そういう八幡の方は？」

八幡「こつちも無かったような気がする。もしあつても見られないように気をつけるわ」

帆波「き、気をつけてね。絶対に」

八幡「わかってているよ。でも、それを言うなら帆波もな」

帆波「えっ!?!私も!?!」

八幡「当たり前だろ。いつどこで見えてしまう可能性もあるんだからな」

帆波「そ、そうだよ。気をつけないと」

俺と帆波の服の下には赤いマークが沢山ついている。それは2人で愛し合った時についたマークだ。そんなマークを見られるのはいくら俺でも恥ずかしい。それにかおりに見られると多分、からかってくるだろうなあいつなら。それに平塚先生に知られたらちよつとめんどくさい事になるだろうしな。そんな事を思いながらかおりと千佳と合流してから学校へ向かった。

かおり「ねえ、帆波」

帆波「ん？何、かおり？」

かおり「なんか、帆波。雰囲気変わった？」

帆波「え、そう？」

千佳「確かになんか変わったような気がするね」

帆波「え？ほんとに？えっ、どういう感じで変わったの？」

かおり「ん〜、どういう感じって言われてもなあ〜。どう言えбай
いんだろう」

千佳「そうだね。ちよつと考えさせられるな」

帆波「えっ？ちよつと気になるんだけど!?ねえ、教えてよー!」

かおり「まあ、1つ言えることがあるとすれば、あれだよ千佳」

千佳「あれだね」

帆波「え？何？」

かおり「それはねえ〜」

帆波「そ、それは…」

千佳「それはねえ〜」

帆波「それは…」

かおり・千佳「前より更にかわいくなつた…かな」

帆波「ふえ?……えええええー!!!」

八幡「うおっ!?!ど、どうしたんだ？」

3人が話している中、八幡は少し離れたところにいた。女子達で少し話すからちよつと離れていてねって、言われたからだ。それで離れた所から歩いていると帆波が突然叫んだのだ。

かおり「えーつとね。帆波が「ちよつと待てー!」もう、何さ帆波」

帆波「な、なんでも無いよ!本当になあ〜くんにも無いからね!ねっ

!わかった!」

八幡「お、おう。わかった」

帆波「ちよ、ちよつとかおり!千佳!こっちに来て!」

かおり「ちよつ帆波!」

千佳「わわっ、急に引つ張らないでー」

帆波「いいから」

帆波は少し顔を赤くしながらかおりと千佳を引つ張って行った。何やら慌てているようだ。

帆波「ちよつと、さっきのどういう事なの？」

かおり「え？かわいくなつたって事？」

帆波「そう！それだよ！どういう事なの？」

千佳「えく、かわいくなつたからかわいくなつたって、言っただけだけど？」

帆波「ど、どういう事なの」

かおり「え？そのままの意味だけど」

帆波「ううう……か、かわいくなつたってどういう事なの……」

かおり「いや、よくわかんないんだけど。今日、帆波を見た瞬間そう思っただけだけど」

千佳「私もそう思ったよ」

帆波「そ、そうなんだ……」

かおり「あ、そういえば八幡もなんか雰囲気変わったよね」

千佳「あ、そういえばそうだよね」

帆波「ふえ!?は、八幡が!？」

かおり「うん、なんか男らしくなつたっていうか、なんとというか……そんな感じ?」

帆波「お、男らしくなつた?」

千佳「うん、そうだね」

帆波「そ、そうなんだ」

帆波はこの時思った。

帆波（ま、まさか……八幡と初めてを捧げあつたからかな? いや、でもそんな事で雰囲気が変わるの? いやいや、絶対そんな事ないよね。よね!?)

かおり「あ、そういえば帆波。八幡の家に泊まってたんだよね。その時になにかあつた?」

帆波「な、ななな何も無いよ!!!」

千佳「何慌てちやってるの？」

帆波「な、何も慌ててませんよ!? 本当だよ!」

かおり「なんか怪しい…」

帆波「な、何も怪しくないよ! うん、ないない!」

かおり「うーん、本当かな？」

帆波「ほ、本当だよ」

かおり「へえ、本当に」

千佳「怪しい…」

帆波「ちよつ、ちよつと2人とも近いよ…」

かおりと千佳は帆波にどんどん近づいていく。そう、じりじりと近づいていく。なんだか、カツアゲのような感じに見えてしまう。それを見ていた八幡は何やってんだ? と思っていた。

かおり「ねえ、ねえ、帆波。ほら、教えなよ。あれ?」

千佳「どうしたのかおり?」

かおり「なんか、帆波の首辺りに赤い跡が見えるんだけど」

千佳「え? ほんとに?」

そう言つて千佳は帆波の方へ視線を向けるが、帆波はすぐさま自分の首元を隠して見えなくする。

千佳「あつ、隠した!」

かおり「帆波、隠さないで見せて」

帆波「絶対にイヤ」

千佳「ええ、気になるなあ」

かおり「ほらほら、見せなよ」

帆波「ちよつ、ちよつとやめてよ」

かおりと千佳は帆波の首元に見えた赤い跡を見ようとするも、帆波は手でガードをして見せなくしていた。だが、かおりと千佳が帆波の手をどかさそうとすると…

かおり「うおわっ!」

千佳「きゃっ!」

八幡「いい加減にしろ2人共」

後ろにいた八幡が2人を帆波から引き剥がしたのだ。

かおり「あつ、ちよつと八幡何するのさ」

八幡「何をするもなにもお前らを帆波から引き剥がしただけだ」

かおり「なんでそんな事するのよ」

八幡「あのな、帆波が嫌がっているだろ。あんまりやりすぎると、嫌われるぞ」

と言つても八幡は帆波の首元のことについて、少し焦つたので2人を引き剥がしたのだ。

かおり「確かにやりすぎたかな。ちよつと気になるけど、仕方ないね。ごめんね帆波」

千佳「私もごめんね」

帆波「もう…次から気をつけてね」

かおり・千佳「はい」

2人は返事するが本当にわかつているのだろうか。

はあ…危ない危ない。危うくかおり達にバレるところだった。帆波がバレそうだったから、俺もバレてしまうかもしれない。気をつけないといけないな。

それからなんとかバレないように学校につくことかどができた。いや、もうやばかったわ。ちよつとバレそうな場面があつたがなんとかバレなかったよ。でもな、帆波とは別のクラスだ。向こうでは大丈夫なのだろうか。体育がないとは言えバレないとは言えない。帆波の事は心配だが、自分の事も心配しなきゃな。

そして、体育祭が近いのかクラスの雰囲気がちよつと変だ。特に男子がだがな。それに気のせいかな…由比ヶ浜がなんかこつちを見ているようにも見える。まあ、無視すればいいだけの話だ。

かおり「なんか男子変だよな」

千佳「あはは…だね」

かおり「体育祭が近いからじゃない」

八幡「かもな」

千佳「あー、もうそんな時期かあ……」

八幡「あー、本当に嫌だよな」

千佳「うん……嫌だよねクラス対抗リレー」

八幡「あの謎のプレッシャーな」

思い出すあの時の感覚が蘇る。つい同意の言葉が漏れ出す。それにうんうんと頷く千佳とかおり。

千佳「私、あんま足速くないからきつかったなー」

八幡「そうそう、いるんだよなー、クラスメイトが抜かれると舌打ちしてマジギレするサッカー部の永山」

かおり「まさかの個人名!? しかも私達が知っている人だ!」

千佳「永山君か……確かにキレてたな……」

かおり「うん、めっちゃキレてた」

八幡「しかもうるさい」

かおり「うん、だね」

千佳「それにちよつと嫌われているって知ってるのかな」

八幡「そうなのか?」

千佳「主に女子にだけどね」

八幡「あーそういう」

かおり「そういうこと」

なるほど。まあ、あんなけウザかったら、嫌われるだろう。

かおり「それに、永山はどうやら帆波の事狙ってた見たいだし」

八幡「は?」

千佳「うわ、今のガチトーンじゃん」

かおり「ちよつとびつくりしちやつた」

八幡「え? マジで? マジで永山の奴、帆波を狙ってたのか?」

かおり「うん、マジだよ」

千佳「すつごいあからさまだったから、帆波にもバレてたよ」

八幡「そ、そうか」

千佳「あ、でも安心して、帆波は永山君の事は好きじゃないから」

かおり「そうそう」

八幡「お、おう。そうか」

千佳「帆波が好きなのは八幡君だけだから」

八幡「お、おう」

かおり「あれれ？もしかして照れてるう〜？」

八幡「うぎ」

かおり「ちよつと直球すぎ！」

八幡「…すまん、つい」

かおり「つい!?すごい辛辣！ウケる！」

千佳「ウケないよ」

八幡「ウケねえよ」

かおり「息ぴったりだね。ウケる！」

八幡「お前、もうそれ言いたいだけだろ」

かおり「そんな事ないよ」

八幡「本当かよ」

それからなんやかんや話していると、先生がきたので話は終わりS
HRが始まる。小学校で言う朝の会だろうか。

そして時間は過ぎ昼休みである。いつもの場所で帆波が作ってくれた弁当を帆波達と一緒に食べている。いつも通りなのであまり変わらない。だけど、今日は違うみたいだ。その理由は……

結衣「あ…ヒツキー……」

そんな声が聞こえた。それはもう聞き覚えのある声だ。あまり関わりたくない声の主である。聞こえたけど、俺達はチラッと見ただけですぐさま無視をする。

結衣「ちよつと無視すんなし！」

ちつ、なんでそこで更に話しかけてくるんだよ。無視してんだからお前も無視してスルーすれば良かっただろ。はあ…まったく。

八幡「あ？なんだよ？」

少しイラつきを混じえながら発言する。帆波達もちよつと迷惑そうな顔をしながら由比ヶ浜を見る。すると由比ヶ浜は少しだけビ

クツと身体を震えていた。

結衣「えつと……ここで何してるの？一之瀬さん達と一緒に」

八幡「はあ……見れば分かるだろ。昼飯食ってんだよ」

めんどくさかったが素直に言うことにした。何故言ったかと言うと、また言わなかったらどうせまた、『教えてくれても良いじゃん』とか言いそうだったし、更に絡まれるのが面倒だからだ。

結衣「え？ここで？なんで？教室で食べれば良いじゃん」

八幡「俺らが何処で食おと俺らの勝手だろ」

結衣「そ、それはそうだけど……」

八幡「だったら良いだろ」

結衣「でも……」

由比ヶ浜は何やらモジモジと指を転がせている。一体何がしたいんだよこいつは。さっさと要件言えよ。そういうのがイライラするんだよ。あらヤダ、俺ったら浅倉威みたいになってない？良いよなあ浅倉威。王蛇ってカツコイイし結構好きだぞ。それは置いといて。さてと、由比ヶ浜をどうすかだ。

八幡「まだ、なにか用か？」

結衣「え、あ、いや……」

はあ……本当にイライラさせる。そろそろキレそうになった時だった。

「結衣」

結衣「あ、優美子。なんでここに？」

三浦「あーしも飲み物買いにきただけだし」

結衣「あ、そうなんだ」

三浦「ていうかまだ買ってなかったん？あ……」

どうやら三浦は俺らに気づいたみたいだ。

三浦「ヒキオ達じゃん。まさかここで食べてるの？」

八幡「まあ、そうだけど」

三浦「ふーん、そ。ほら、結衣さっさと飲み物買って戻るよ」

結衣「え、でも」

三浦「ヒキオ達はお飯食べてるんだし、邪魔してないで戻るし」

そう言つて三浦は由比ヶ浜を連れ出してくれた。ホント助かったわ。こうして由比ヶ浜は飲み物を買つて三浦にクラスに連れ戻されましたとき。

千佳「やつと行つたね」

かおり「だね」

千佳「どうか由比ヶ浜さん、私達の事無視してたような気がするんだけど」

帆波「なんかそんな感じだったよね」

八幡「そうなのか」

千佳「うーん、なんかそんな感じしただけ」

ほーん、俺はそんなの分からなかったが、やはり女子特有の雰囲気というのがあるのだろうか。まあ、そんなのは置いといて中断していた昼飯を食べることにした。

余談だが俺と帆波についた赤いマークはなんとかバレずに1日を終えることができました。あ、それと帆波の荷物は俺が帆波の家まで送りました。

だけど家で小町に赤いマークを見られてしまったとき。

瑞希「あれ？お姉ちゃん、なんか首に赤い跡があるよ？

帆波「ふえ!？」

帆波は妹の瑞希に言われて慌てて首に手をあてる。

瑞希「もしかして蚊に刺されちゃった？」

帆波「え?…:あ、ああ、うん。た、多分そうかな?知らないうちに刺されちゃったのかな?」

瑞希「そうなんだ。あ、ムヒ持ってくるね」

帆波「ありがとう瑞希」

帆波（あ、危なかった〜!危うくキスマークってバレるところだった。瑞希はなんとか誤魔化せたけど、お母さんは誤魔化せるかな?うう…:不安だよ〜）

帆波は頑張ったが速攻バレましたとき。